
魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

ハーヴェイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

【Nコード】

N3202V

【作者名】

ハーヴェイ

【あらすじ】

女神のミスで死亡して転生者になり、能力をもらって少し変わったネギま世界へ行くことになりました。さまざまな能力や前世のネタを駆使して面白おかしく生きていこうと決めた転生者はどのような物語を紡いでいくのだろう…

これは、「魔法先生ネギま！ 魔法と転生と友達と・・・」のリメイク版です。

プロローグ（前書き）

リメイク開始！！

プロローグ

そこは何もない空間で辺り一面真っ白だった。

—— 自分は確か病院で死んだはずだけど：

そんな事を思いながらボケ々としながら辺りを見回してみるとそこには機械的なデザインの人が立っていた。

「そろそろ起きてくれんない：」

そんな声が聞こえてきた

あたりを見回してみる。

—— ここどこ？

目の前に

機械でできた甲冑

ブースターをつけた剣のようなもの
小ぶりの盾を持った・・・

—— なんでノエル？

なぜかそこには、メダロット n a v i の隠し機体である V A L 型メ
ダロットのノエルがそこにいた。

—— だが、本物のメダロットならこんなに大きいわけがない。――

—— 本来、メダロットは全長 1 m 程である。

だが、目の前のノエル（仮）は150当たりあった。

「いや、この姿は趣味だから…」

趣味っておい…

—— てゆうか、あんた誰？

もしかして、まんま戦乙女とかいうオチなのかな？

ヴァルキュリア

「違うわよ、どっちかっていうと女神ね」

女神と来たか…

—— 女神様もメダロットやるんだなあ…

と、思っていると…

「いや、まじめに聞いてくれない？」

サーセンwww

—— で原因は何？

「いやゝ寿命の書類をミスしちゃってさ病死する人の書類とあんたの書類を間違えちゃたんだよ」

—— はあ、中学上がってから一気に体が悪くなったけどそのあたりから…

「その通り」

——— でそのミスを解消するために、二次小説とかであったような転生をするの？

一応、聞いておこう

「それもあるし、ほかの神々もやってたからね、メダロットだけじゃ飽きてきたし・・・」

——— お前、それでいいのか？

「いいのよ」

はあ、

——— で、なんか能力とかもらえるの？

テンプレ道理ならもらえそうだけど・・・

「あげられるわよ、ほしい能力は何、エクス約束された絶対勝利の剣？、基本能力チート、斬魄刀もあるわね、それとも直死の魔眼、まあデバイスだろうがなんだろうが大抵の奴なら用意できるけど・・・」

色々あるな・・・

——— ゲーム以外の能力もありかな？

「ええ、ゲームだけじゃなくてアニメや小説、漫画からも可能よ」

じゃあ・・・

—— 能力は、練磨チートとf a t e／e x t r aの赤セイバー
キャス狐の技と術、後、装備と宝具ね。後は東方の霊夢の感と物造
りのスキルと黄金律をBくらいと頭脳がほしいな

このくらいかな。

「その反動として初期能力は一般並みにしておくよ。でも、珍しい
わね。ほかの転生者は投影や王の財宝とかの宝具や仮面ライダーと
かの能力を4、5個よこせとか言ってくるんだけどなあ？」

—— あんまり多いと使わなくなるかもしれないし、このくらい
でちょうどいいのよ

「それだどつまんないな」

じゃあどうしろと

「そうだ、フリゲで見つけたあれをつけよう」

神様もインターネットやるんだ。

何をつけるつもりなのかしら？てゆうか、付けるような能力あるの
かな？

・
・
・

包丁さんのうわさで出る万能包丁さんの包丁、あるいは、ムーン
ライトオワタの魔王リリアの力くらいしか思いつかない：

「ジョジョの奇妙な旅の七人目のスタンド使いがおもしろくてね、あなたにスタンドを授けようと思うの。」

何それ？

でもスタンドか。

——— ありがたくらうけどいったい何をつけるの、星の白銀？
スタープラチナ

「いや、あなただけのスタンドをつけるわ。その方が面白そうだし、転生したての頃は発現しないけど、そのうち覚醒するから。あつ覚醒したときにそのスタンドの能力を教えてあげるから。後、転生する世界案だけど…」

すっかり忘れてたZE☆

——— そういえば、何の世界に転生するの？

「あなたには魔法先生ネギまに行ってもらいます」

あれか…それなりに好きだったな赤松ワールド
でもあれ死亡フラグ満載なんだよな

「少し、世界をいじってあるからそこんところろしく」

いじった？何したこの女神。

「その内わかるわよ。原作ブレイクもOKよ。それじゃあ……上からくるぞ気をつけろ……!!」

——…!!

そういつて視線を上の方に向けるが何もなく…

下に穴が開いた。

「ごっめーん☆下だった!!」

おいしいiiiiiiii…!!!!

「さてさて、これからはどんな物語を紡いでいくのかな・・・」

そう言い放ち、私の視界はブラックアウトした。

「生ま・・・は・・・カ、今・・・女・・・だ」

そんな声が聞こえてきたが、

「あ・・・ナ・・・も子・・・恵ま・・・とは・・・いの」

どうやら私は無事に転生したらしい。

さて、私の親はどんな人なのだろうな・・・

「名は私がつけよう。この子の名はハクカじゃ、ハクカ・スプリングフィールド」

What?

スプリングフィールド？てことは・・・

「おんぎゃーーーーー！！！！（主人公組かーーーーー！！！！）」

病室にハクカの絶叫が響き渡った。

プロローグ（後書き）

ところどころおかしい点があると思いますが、基本的な流れは同じだと思います。

プロローグ？

ハクカ・スプリングフィールド

それが今の私である。

現在は3歳で容姿は金髪のショートでオッドアイである。…どうしてこうなったorz

ちなみに今は原作通りウェールズのネカネ姉さんの所に預けられ、そこで暮らしていた。

しかし、村のみんなは妙な視線で私を見ている。それも何か恐れているような…

私の母である「災厄の魔女」の面影があるからであろう。

それに、兄であるネギは幼いにもかかわらずかなりの魔力を持っているから、私にも期待していたらしいが、カケラ程しかない魔力に落胆の色を隠せないようだ。

そんな感じで、あたしは「落ちこぼれ」、「英雄の搾りカス」と認識されたらしい。

——…ガキになに期待してんだかあの狂信者どもは

と、考えていると…

「どーしたの、ハクカ？」

「えっなにが？」

「いや、なんか怖い顔してたから、何かあったの？相談に乗るよ。」

私の兄であるネギ・スプリングフィールドは、原作と違ってあまり父さん、父さんと言わなくなっていた。幼馴染のアンナさんから

もよくしてもらっている。

「いや、もし未来に兄さんがハゲたらいやだな〜と思っただけよ」

「ハゲないよ!? ずっとふさふさだからね!？」

「大丈夫ですよ、ネギ兄様。そうならないように育毛剤を作っ
てあげますから」

「ハゲること前提なの!? ねえ!!!」

と、こんな感じでボケたり簡単な鍛錬（ランニングや素振り）を
したりと割と楽しい日々を過ごしていた。

そんなある日のことである。

——— なんか嫌な予感がする ———

悪魔襲撃の日までまだまだ時間があるはずなのに…

「ネカネ姉さん、ちょっと散歩に行ってくるね」

あたりを警戒しておくことにしよう。

「わかったわ、夕飯までには帰ってきなさいよ」

そういつて町の方へと出かけて行った。

——— さて、いったい何が起こったのかな ———

町に行つて適当にぶらついていたら、妙な気配を感じた。殺気見たいな気配である。

人気のない路地裏に誘導されたみたいだ。

「で、なんか用？」

来た道の先からローブをまとった細身の男が現れた。

「お前のような落ちこぼれがいると英雄の息子の名が穢れるんでな、正義のために死んでもらうぞ」

そう言い放ち、杖を構えてきた。

どうやら正義（笑）の魔法使いのようだ。

「正義が人殺ししても良いわけ？」

無駄だと思うけど聞いておこう。

「貴様の存在は災いを呼ぶからな、早いうちに駆除しておいたほうがいいだろう！！」

「戯言はやめろよ、どうせどっかから依頼されて金のためにやっているんだろ…」

「よくわかったな、お前を殺せばそれなりの金を用意してくれるらしいぜ」

つまりは、元老院あたりか。

「正義が聞いてあきれね…」

「ほざきやがれ、氷の精霊、26頭、集い来りて、敵を切り裂け、魔法の射手・連弾、26矢！！」

「つく」

とっさに障壁を張り飛来してくる氷属性の魔法の矢を何とか防ぐことができた。

だが…

「おいおい、何安心してんだ。おれ一人だけだと思ったか？」

ハクカの視線が前方の魔法の矢に集中していたため背後から現れた小太りの男に気づくことが出来なかった。

「死ねや糞ガキ、魔法の射手・炎の矢・3矢」

くそ、間に合わない！！

障壁の展開も間に合わず、直撃してしまった。

「ぐあっ！！？」

放たれた魔法の矢が右足と左肩に当たってしまい、肉の焼けるようなおいと激痛に襲われた。

歯を食いしばり、痛みに耐える。

「へへへ、後はとどめを刺すだけだな」

男たちは下種な笑みを浮かべ、勝利を確信した。

「死体を残すなよ、こいつには行方不明になってもらうからな」

「んじゃ、転移の方は任せたぞ」

小太りの男がトドメを刺そうと近づいてきた。

こんなところで死ぬのか？

まだ、3年くらいしか生きていないのに？

ふざけるな！！！！

私は生きる。そのために、目の前の敵を殺す！！

「死んでたまるかあああああ！！！！」

そう叫び、頭に浮かんだ言葉を唱えていく

「其の物は、人に非ず、物に非ず、その身は、主の剣であり、盾である。わが、背後に立つ者は人形なり」
スタンドひとかた

その声に応えるかのように、目の前に金の髪、緑の目に赤いドレスを着た少女が現れ、右手にある赤い剣で小太りの男の片腕を切り裂く。

男の腕が宙に舞い、ポトリと地面に落ちた。

「ぎゃあああああああああああ！！！！俺の腕がああああああ！！！！」

スタンドは切り落とされた部位を抑える男に近づき

『黙れ、下郎！！！！』

紅い剣を振り下ろし、その首を断ち切る。

そして、もう一人の敵に狙いを定める。

・
・
・

細身の男はいきなりの出来事に理解できずにいた。

自分よりはるかに弱い存在に同僚を殺された。相手は、ただのガキ
と思ったが奇妙な魔法を使う悪魔なのか？

自分は正義の魔法使いだ！！正義が負けるはずがない！！

「せつ正義が負けるはずがないんだああ！！」

そう叫ぶ男の胸に同僚を切り裂いた紅い剣が胸に突き刺さり絶命した。

） S I D E ハクカ ）

初めて人を殺した。でも、今はそんな事にかまっていられない：

細身の男が死体処理のため使うはずだった強制転移が暴走してしまった。

このままではどこかに飛ばされてしまうようだ。とりあえずいくつかの選択肢を思いつくが：

- 1・パーフェクトなハクカ様はなんとかして範囲外まで逃げる
- 2・誰かが助けてくれる。
- 3・ムリ☆現実是非情である。

1、足打ち抜かれてるし、スタンドで何とかしようにも操作に慣れていないし、王家の魔力でもない限り不可能。

2は、人除けの結界が張ってあるため、助けは見込めない。
ということとは：

答えは3、答えは3、答えは3

こんなことなら遠慮なしにチートステータスをもらっとけばよかった。

たな．．．
もつとネギをいじり倒したかったな：

血を流しすぎて、薄れる意識の中そんなことを考えていた。辺りが白い光に包まれていった。

そして、ハクカ・スプリングフィールドはウェールズの地から姿を消した。

＼ SIDE 秋葉原 亜土夢 ．

今日は久しぶりに休暇を取ることができたので孫と一緒に買い物に出ていた。

普段はあまりかまってやれないから今日一日は目いっぱい遊んでやろう。

「おじちゃん、こっちこっち！！」

孫の笑顔はまるで太陽のようだ。大きくなったらきっと美人になるんだろうなあ：

．．．今、親ばかといったやつちよつと来い。

そんなこんなで、夕方になっていった。

「今日は楽しかったよおじーちゃん」

「ああ、ごめんな苗いつも一人にできてしまった…」

両親に先立たれ、一人にできてしまったさみしい思いをさせてしまっているのに…

「大丈夫、友達もいるし、それにへべレケのおじちゃんも遊んでくれてるからさみしくないよ。」

へべレケ…あとでOHANASHIする必要があるようだな。

「あれ、おじーちゃん今何か光らなかった？」

「すまん、見てなかった。どの辺が光ったのだ？」

「その路地裏あたりなんだけど…ちょっと見てくる!!」

そういつて苗は走っていった。路地裏をのぞいたと思ったらあわてて戻ってきた。

「おじーちゃん!! 大変、女の子が血を流して倒れてるの!!!」
「なに!？」

そこには、年端もない少女が怪我をしていた。

肩を何かで撃ち抜かれ、足も負傷していた。急いで救急車を呼び、応急処置を施した。

「君、大丈夫か!!」

買ったものの中にあつた包帯などで止血をしておいた。

「・・・う・・・」

「大丈夫だからね、もうすぐ救急車が来るから」

苗が少女の手を握り励ましていると救急車が来た。

「苗、おじいちゃんは、この子と一緒に病院に行くが苗はどうする？」

「一緒に行く!!」

頑張れよ、お嬢ちゃん…

プロローグ？（後書き）

一応言っておきますが、秋葉原 亜土夢はメダロット博士のことで、苗はメダロット博士の孫であるナエさんです。

次回は、今後についてです。

プロローグ？（前書き）

今回でプロローグは終了です。

プロローグ？

目が覚めるとなんか女神がいた真っ白空間で寝転がっていた。
えーと・・・たしか私は正義（笑）の魔法使いに襲撃にあって殺害
してどっかに飛ばされて：

「はい、さっさと起きてねー」

その言葉をとりあえず体を起こした。

あれ？女神さん、身体がブロッソメールに見えるんですが：

「いやーイメチェンって奴よ、いつまでも同じ格好だと飽きるから
ね」

そうですか・・・ところでなんでまたここに？私はまた死んだんで
すか？

「大丈夫、生きてるわよ」

じゃあなんでここにいるの？

「あなた、スタンドが覚醒したじゃない、だからその能力の説明と
か色々な話をしないとね」

あれスタンドなんだ：
ていうか：

「すっごい中二な呪文だったわね」

言わないで無我夢中だったんだから。
ていうかあれ、あなたが仕込んだんでしょ…

「よくわかったわね、死にかけたら緊急覚醒するように設定したんだ。ついでに呪文もね。スタンドの方はあなた自身の能力よ。私はただ覚醒を促しただけ。呪文の方は、スタンドの呼び名がないからこうすればいいかな〜って思って作ったんだ」

さいですか。

で、どんなスタンドなの？名前は能力とか聞いて決めるわ。

「一言で表すなら着せ替え人形ね、その着ている服でジョブを決める…なりきりダンジョンみたいなのよ。ちなみに、出てきたときには「紅の暴君」っていう服なの。能力はまんま赤セイバーね。で、人間サイズで出てきたけど普通の人形サイズで出すことも可能よ。小さい分複数の人形を出すことができて、それぞれ違う服を着せることが可能よ。その分、弱くなるわ。っとこんな感じよ。後、自分の技能を移すこともできるから。スタンドの制御はあなた次第ね」

なるほど、汎用性の高い能力だね。でもそれって億安の兄が使ってたスタンドに似ていない？

「気にしない、気にしない。あっちは現代兵器や物理系の攻撃だけでこっちはそれに加えて魔法による補助や敵の弱体化も可能なの。で…名前は決まったかな？」

着せ替え人形…複数…軍団…

決まった。このスタンドの名前は、

一人形の軍団（ドール、ズ・レギオン）

「…いいんじゃない。そんな感じでも、あらゆる戦場に適応できる人型の軍団」

ほかの服とかはどうすれば？

「基本はイメージして着せたり、作ったものを素体に着せて、ならしていけば登録されるってな感じだから」

ok把握

「それじゃあ起こすから。右手にお玉を！左手にフライパンを！横たわりし者に正義の鉄槌を！！」

おい、ちょっと待て。その技は…

「秘技！！死者の目覚め——！！！！！！」

ガン！ガン！ガン！ガン！ガン！

・
・
・

「ウギャー！！！」

はっ！？ここはどこ？私はムスカ大S…じゃなくてハクカ…最後の「カ」しかあってねえよ。

あの女神は…もう少し優しく起こしてくれよな…

「知らない天井だ」

目を覚めると、見覚えのない病室のようなところだった。
今の状態をチェックしてみよう。

ここはどこ？……どっかの病院、窓から見た景色は、ビルやコンビニなどが日本語で書かれているあたり日本の可能性が高い。

なんでここにいるか？……正義（笑）の魔法使いの転移魔法の暴走でどこかに転送したみたいだ。

怪我とかはどうなっている？……魔法ではなく、普通に縫ってある。

今の格好は？……包帯グルグル巻きにされているミイラ男みたいな格好だ。あっ！この場合はミイラ女か…

と、考えていると、

「目が覚めたかね？」

部屋のドアからデコから後退気味の黒髪に丸メガネと白衣の人がいた。

隣には、同じく黒髪で幼い少女というか幼女がいた。

「苗、先生を呼んできてくれ」

「わかった」

そういつてナエとよばれた少女は出て行った。

「さて、君は何者かな？」

雰囲気が変わった。

穏やかな雰囲気からピリピリしたような空気になった。

「魔法：君の怪我はこの言葉に関係があるのではないか？」

その質問に驚きながら首を縦に振った。

「やはりか…」

「あなたも関係者なんですか？」

「元：な、今は科学者だよ」

そう話していた内に、さっきの少女と医者らしき人が来た。

「連れてきたよ」

「おおご苦労様。ああそうだ、これからこのこと大事な話があるから、少し待合室で待っていてくれないか？」

「わかった！」

そういつて苗と呼ばれた少女は出て行った。

「ちなみに、こやつも関係者だ」

「おい、秋葉原やっかい事はパスじゃぞ」

そういつて、医者のような人は顔をしかめた。

「とりあえず、名前とか、ここに飛んだ理由とかを聞いておこうか。」

「わかりました」

「名前はハクカと申します。苗字のほうは、勘弁してください。そのせいで襲われたんで…ここに飛ばされた理由ですが、簡単に言っ
てしまえば汚点の解消ですね。」

「汚点だと？」

「はい、一応、魔法使いとしてはそれなりの知名度がある家柄なんです。しかし、私は魔力がまったくといいほどないんです。そのため、周りからは落ちこぼれ扱いでしたよ」

「やはり、腐っておるな。魔法使いの連中は…」

「ああ、こんなガキになに期待してるんだか理解できんな」

そう言ってくれるとうれしいな。ほかがこんな一般常識のある考えを持つてくれれば…

「続けます。わたしには兄がいるんですが、その兄は、魔力が桁外れに多いのでそれに比べられたんでしょう。兄との関係は良好でした。周りの期待を受けた兄なんです、そのそばにいる落ちこぼれを疎ましく思ったのでしょうか…襲撃を受けてあのさまですよ」

「こうゆう時は両親が守るべきではないのか？」

「表に出られない事情があって、二人とも蒸発しました」

母親が『災厄の魔女』だしね、これがそばにいたら即排除に向かうだろうな…

「襲撃者はもう殺しました。たぶん私も死亡扱いか、行方不明扱いでしょうね」

あの屑どもを雇ったのは元老院がだろうし、ほぼ確定だろう。

「なら、これからどうする？」

「今後の事は決まってませんね：」

黄金律があるから生活は何とかなるけど、日本だと関東魔法協会があるからな：派手な行動をすれば即御用だろうし、年齢詐称薬も手に入れなきゃバイトもできないからな：

「住むところもないのなら、家に来るか」

そう、秋葉原と呼ばれた人が言った。

「えーと、本気で言ってるんですか？」

「ああ、こんな子供を放り出すのは気が引けるからな」

「何格好つけてるんだ秋葉原、どうせ、ナエちゃんをさみしくさせたくないからこの娘っこを利用するんじゃない。この爺バカが」

「爺バカじゃないから、ただ苗がかわいすぎるだけなんだよ、このロリコンが！！！」

「だめじゃねーか：」

これはあれだな、【喧嘩するほど仲がいい】ってやつだろ。

ほほえましいやり取りに思わず笑みがこぼれる。

「あはははははは、仲がいいんだねあなたたち」

「よくないわ、てゆうかそっちが素の口調か」

「ええ、そして、その申し出を受けていいかい？」

「もちろんだとも」

「そっちが利用するならこっちも利用させてもらうよ」

「うむ、そういえば苗字はどうする？」

スプリングフィールドを名乗るわけにはいかないし：

「あんたと同じでいいよ」

「わかった。戸籍の方は頼んだぞ、へべレケ」

「仕方ないのう。小娘、名前はどうする？」

「漢字にするよ、文字は、白い花って書いて白花でお願いするね」

そうして新しい生活が始まった。

プロローグ？（後書き）

次回からは小学生時代のことなどを書いていこうと思います。

第1話 騒がしかなひなた旅館（前書き）

なんかカオスになったかも…

第1話 騒がしかなひなた旅館

「白花く朝だよ」

そういつて、妹を起こす作業が私の朝の日課。
低血圧らしく、この子は朝は苦手のようね。

「おはようナエ姉：Zzz」

「ほら、早く起きて、顔洗ってきなさい。早くしないと朝ご飯抜くよ」

「それだけは勘弁してナエ姉え、朝を抜くとマジできついんだから」

そういつて、飛び起きて洗面所の方へと向かった。

「そういえばさ、今日の朝ごはんはなんなの？」

「サケの切り身に味噌汁、後サラダってところよ」

「それじゃ食卓に乗り込めー^^」

そういつて食卓の方へと走っていった。

ご飯は逃げないんだからもう少し落ち着けばいいのに…

・
・
・

「御馳走様でした」

「はいお粗末さまでした」

朝食を終えて学校へ行く準備をしていると、

「シロちゃんくナエちゃんく一緒に学校に行こー」

「ちーちゃん、少し待ってくれい」

私は準備できたが、白花ちゃんはまだ準備ができていなくてドタバタしていた。

「おはよう、千雨ちゃん」

「うん、おはよう苗ちゃん」

3分くらいしたら、白花ちゃんが来た。

「ごめん、おそくなって…」

「いやそんなに待ってないし、それじゃ行こうか」

ちなみにおじいちゃんは研究所で徹夜らしい。

・
・
・

秋葉原家に来て学校に通い始めて大体3か月がたちました。その間、物造りスキルを使いダオライマの魔法球を作り上げた。外見はNaviのクラスターに似せて作り、内装は和風の道場ブロックやリゾートブロックに研究ブロックを上層に造り、下層に平原や砂漠、雪山、火山などが存在しており、野生の生物も多々存在している。一日1時間設定にしてあり、鍛錬はそこでやっている。師事する人は神鳴流であるが今は体力づくりをやっている。魔法の訓練にスタンドの制御は魔法球の中で訓練している。

苗姉さんには低血圧と言って、疲労をごまかしに使っている。ホントダヨ、ネボスケジャナイヨ…

後になって気付いたが、秋葉原ってメダロット博士の苗字じゃん。そういえばあの女神「いじった世界」って言っていたな。ということとは、メダロット系も出すのかな？

後、原作キャラである長谷川千雨と友達になれた。シロちゃんと呼ばれるようになった。私は千雨のことをちゅちゃんと読んでいるがな。

今はこの学校に通っているけど、引越したりするのかな？

「おいつす!! 白花」

「おはよう白花ちゃん」

そんなことを考えていたらクラスの友達の間 黒炎と白壁 白間に
行き会った。

最初に見たときは驚いたよ…だってメダロット4の四天王の人が普通にいるんだもの。

「おはようさん。お二人ともそれとコクエン…声が小さい!! もう一丁…」

「「おいしいいいいつす!!!!!!」」

「仲いいね二人とも…そのネタはどこで見たの？」

「この間やってたド○フでやってたんだ。ビデオにとってあるから今度遊びに来た時に見してやんよ」

面白いよねド○フ。

この二人はなんていうかコクエンは暴走しているけどハクマがみんなのブレーキみたいな感じなんだよな…

「あつ白花おはよー!!」

「おはよう、白花」

「おはようキノコ、シュリ」

活発そうな方の女の子は原作ではリバイブを率いた舞茸 キノコに、そのキノコと犬猿の仲である赤金 朱里。

「そういえば今日は理科のテストが返ってくるんだよねエ…今度こそ…」

「あら？キノコ、私より低い点を取るのが嫌なのでは？」

「と言いつつも、二人とも引き分けが多いんだよ…それに喧嘩するほど…」

「何か言った!?!」

イエ、ナンデモアリマセン。

「ふん!そんなこと言っているけどあんたはどうなのよこのファツザコンがあ!!」

「誰がファザコンだごら——!!!!」

うわゝ朝っぱらから乱闘の予感…

「お前ら朝っぱらから何やってんだ?」

声のする方を見ると闇雲 ミズチが呆れたような表情でやってきた。

「どうでもいいが、このまま喧嘩してたら学校に間に合わなくなると思うが…」

「う、確かに…仕方ないわね。勝負はお預けよシュリ!!」

「命拾いしましたねキノコ!!」

5人の中でミズチもストップパー役ってな感じなんだよね。こんな登校風景が日常茶飯事なんです。

「ハイじゃあ、日直、今日は…白花ちゃん、号令をおねがい」
「起立、着席、礼」

ドタガタガタドガシャン!!

あれ、どうしたんだみんな一斉に崩れ落ちて？

「は、白花ちゃん…起立、礼、着席でしょう」

やべ、タマオ先生が泣きそうになってる。

「すみません先生…昨日見たド○フのネタの方が浮かんでしま
って…」

「お、お前なあ…」

ごめんねミズチ、だっふんだ!!
色々あって、テストが返ってきました。

「さあ、シュリ！一体何点よ!!」

「同時に見せるわよキノコ!! 今度こそ私の勝ち星を挙げてやるわ
!!」

いやーテストや体育の測定系の時は毎回こんな感じになるんだよな。
面白いけど…

「グ、58点か…なあ、白花。今度はどっちが勝つと思う？キノコ
に10円」

「また、同点だと思うよコクエン。ちなみに私は86点」

「よし、98点。ハクちゃんって何気に上位をキープしているよね。
私はシュリちゃんに50円」

「君たち、賭け事はやめようよ…」

「同点に100円…」

「ミズチ君まで!？」

この混沌としたクラスでハクマが唯一の良心なんだろう…

「どうだ…92点!!」

「これなら…92点!!」

また 同 点 か …

これでお互いテストは32回中7勝7敗18分けになったな…
同点のが多いってすごくない?

「つく、またか…」

「今日こそはと思ったのに…」

悔しそうにしている二人だけど私はやるべきことをしないと…

「はい残念でした、二人とも」

「チックショーーーー!!」

「あちゃー外れたか」

私とミズチが勝ったみたいだな…まあ、本当に金をかけているわけ
じゃないけどね。給食のおかずくらいだよ掛けているのは…

そんなこんなで学校が終わって下校中…

「そういえば、この後は何する?」

千雨ちゃんが話題を振ってきたが：

「特にすることがないね」

そう悩んでいると、第3者が介入してきた。

「オース、なにやってるんや？」

「こんにちはハクちゃん、千雨ちゃん、ナエちゃん」

後ろを振り返ると元気が有り余っているような褐色の少女とおとなしそうな黒髪の少女がいた。

「あっカオラにしるぶさんこんにちは」

私たちはこんにちはとあいさつを返した。

この二人はラブひなに登場した。紅い月になると容姿が変わるの王女と将来とある先輩に恋をする少女である。

「これから何をしようか相談してたところなんです」

「ほんなら家に来てみるかいな？」

家っていうと……

「ひなた荘のことですか？」

「そや、そこなら暇をつぶせそうな物もそれなりにあるで？」

「二人はどうする？」

「じゃあそこでもいいじゃないの？」

「では、お邪魔させていただきます」

「決まりやな、ほないこか」

そういつて、私たちはひなた荘へと向かった。

「とうちゃく」

「じゃあ私は着替えてくるね。カオラも着替えてきなよ」

ほくいといって部屋に向かっていった。

「少し待っててね！」

私たちはロビーで待つことにした。

ロビーに行くと黒髪のポニーテールをした私の師匠がいた。

「おや？お前たち」

「ちくす、シッショーこんにちは」

「こんにちは、素子さん」

私の剣の師匠（予定）である京都神鳴流剣士の青山 素子さんである。

「なんか白花が発したのがすごい不穏な感じだったけど…」

「気にしたら負けですよ師匠」

紙忍者なんていなかった！！

「今日はどうした？稽古の日じゃないはずだが…」

「カオラたちから遊びの誘いがあったんで来ました」

「肝心の二人はどう「おまたせ」！！」来たようだな」

そこには私服姿の二人がいた。

「それじゃあ失礼しますね」

「ああ、ゆっくりしていいってね」

そういつて、その場を後にした。

「白花がく捕まえて、白花がく画面端、バースト読んで！まだ入る。白花がく近づいて、白花が決めたー！！！！」

とある歯車な格ゲーで小足から余裕の人を再現してみた（笑）。

「あ、ありえんわく全然手が出せず負けてもうた。こうなったらこのぷ○ぷよファイバーで勝負やー！！」

「なんのおちくちゃんパス！！」

「落ちゲーなら任せろー（バリバリ）」

「やっちゃって！！」

一部抜粋

1P…カオラ『郷土の重みを知れー！！』『くらいやがれ！』『ほざきやがれ！』『私は摂政だぞ！』『ほざきやがれ』『お茶くれ！お茶！！』『お茶を！！』『思い知れ！』『思い知れ！』『思い知れ！』『思い知れ！』『思い知れ！』『思い知れ！』『ちょ！ちょ！超！超必殺！飛鳥文化アタックウー！！』『あっ！よけられた』

2P…千雨『速攻魔法発動、狂戦士の魂！！』『さあ、いくぜ！』『ドロー！モンスターカード！』『ドロー！モンスターカード！』『ドロー！モンスターカード！』『ドロー！モンスターカード！』『ドロー！モンスターカード！』

形…

「私もみていいかな」

「ええよ、ガラクタかもしれんし」

ほい、と一枚渡されたが間違いない、これは六角貨幣石つまりメダルであると確信した。

メダロット博士、六角貨幣石、これだけの素材があるのなら、月のマザーも存在してそうだな…
そんなことを考えていたら…

「シロちゃん？どうしたのぼうっとして…」

千雨の声に現実に戻る。

「んっ珍しい石だなんて思ってたね」

「ほんとにね、きれいに六角形になってるんだもの…あ、この石は葉っぱみたいな模様がある」

「欲しいならあげるで」

「いいんですか？」

私は思わず聞き返してしまった。

「そんなかし、その石のこと何かわかったら教えてや!!」

その辺はしっかりしてるな…

「わかったよ、何かわかったら連絡するねカオラ」

そんなこんなで時間が過ぎていって夕方になった。

「暗くなり始めたし、そろそろ帰るね」

「そやな、また今度遊ぼうや」

「では、また会いましょう。」

「さよなら」

「また来てくださいね」

「またねー」

「楽しかったですよ。」

「ありがとうございました」

千雨とも別れて帰路に着くと

「その石が気になるの白花？」

「うん、何かを感じるような気がするんだよな。まあ、後でゆっくり調べますか」

「なんだか楽しそうね、あっそうだ、今日のご飯は何にするの？」

「本日のメニューは、カレーでございませう」

「おじいちゃんも今日は帰ってくるし、久しぶりにみんなで食べられるね」

うんと答えて家に着く。

これからやることは多い、メダルのことです。いろいろしなくちゃな…

第1話 騒がしかなひなた旅館（後書き）

今回は小学校での日常やメダルの発見などを書きました。

次回から、メダル組はしゃべることが出来ます。体はありませんがね。

メダロット5（漫画版）のオメダ状態です。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・（前書き）

メダルが出来ました！。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・

最近はまだネットで魔法球内に作った転移符と攻撃用のお札と回復用のお札を販売してみた。従来の転移符より安価でそれなりの性能を誇っているらしく、結構人気の品となっていた。

ちなみにこれは、キャス狐の「呪相・炎天」や「氷天」の劣化品であり、本来の威力のお札は広域殲滅魔法（燃える天空など）並みの威力を持っており、販売している札はだいたい「奈落の焰」や「闇の吹雪」の威力を持っている。

転移符は神からもらった知識で作った。恐るべしキャス狐の力。それで、通帳が見たこともない数字になっていたので一瞬夢かなと思った。黄金律恐るべし…

先日いただいた六角貨幣石をおじいちゃんの所で解析したところ、やはりメダルだった。

で、そのあと、人工知能を作り上げて対話ができるように、USBメモリを改造してメダルをはめ込めることで対話ができるようにして1年がたった。

キン グ ク リ ム ゾ ン

現在、3枚のメダルを作り上げたのだが…

『お嬢、早く起きてください』

そう、鋭い女性の声で起こそうとしていると、

『わあ、これが寝坊助というやつですね』

おっとりした少女の声で起こそうとしているメダルたちである。
ちなみに名前は上から

トモエ

ナビコ

もう一枚作成中だが、まだ完成してないので省略

「あら？またこの子たちに起こしてもらったのかしら？」

「うんまあ：一応起きれるようになってきたよ。」

『そのセリフは、私たちから起こされないようになってから言うてください。』

『確かに、私たちが起こさないときは寝坊確定ですからね：』

メダルに叱咤される主人ってなんかシュールな光景だと思う。

「わかった、わかったそれより、さっさとご飯食べて出かけようね」

「『『あなたが一番遅れてるのよ。（ます（です』』」

三人（？）でツツコむな。てゆうか息ぴったりだなおい

「それは、長年起こしつづけてきたからね、なんとなく合うのよ。」

『私たちもなぜか合うような感じがするんです。』

『マスターのこれに関しては共通の認識があるからではないですか？』

ぐへえ…い、いかん、何か話題を変えなければ。

「そ、そういえばカオラに報告したらさ、「どうせならロボットの脳にしてみたらええんとちゃう」って意気込んでいたよ。」

『さらに、おじい様やへべレケ博士も乗り気でしたし、これなら近いうちに体ができるかもしれませんね。』

よし、話題をそらすことに成功だ。
と、そんな時呼び鈴が鳴った。

「こんにちはーシロちゃん、ナエちゃん遊びに来たよー」
「どうぞー」 「上っていいよ千雨ちゃん」
「お邪魔します。」

『いらっしやいませ千雨様。』 『いらっしやーい千雨ちゃん』

ちなみに、千雨はこの2体のことを知っている。

初めて見たときは「お、お、お化けー」と言ってへたり込んでいたが、事情を説明したらなんか納得いったみたいだ。

その理由が「シロちゃんが関わってるなら仕方ないね。」ということだが、ほかの人がやっていたらどうなんだと聞いてみたが、

「ひなた荘の住民以外はあり得ないと思うけど…」 確かに、あそこは最近雷やら爆発やらが起きていてたびたび消防車を通るのをよく見かける。

ついでに言えば、ナビコの名付け親で、ナビコはよくなっている。

「しかし、よくできているよね。この子たち」

「作り物でも、意識を持っているならそれは人と同じ魂を持っていると思うんだけど。」

「ああ、九十九神みたいな感じ？」

「そうそれ。」

『そのような風に言われるとうれしいですな。』

「その喜ぶ感情とかは、作られたからではなく自然に出てくるものだと思うのだけれどね」

ナエ姉さんいいこと言うな…

「そういえばさ、シロちゃん神鳴流を本格的に習い始めたんだって？」

どこからその情報を…

「私が話しちゃった。」

ナエ姉さん…まいつか

「習っているっていうか盗んでいるの方が正しいかもしれないな。」

「盗む？」

「よく言うじゃないか。技術は盗むものってさ」

「ああ、そういう意味か…でもそうゆうのって結構きついんじゃないの？素子さんのメニューなら私も大丈夫だけど…」

「大丈夫大丈夫、鶴子さんがこなければ何とか生き残れるし」

「生き残るって、結構危なくない…」

神鳴流の方は、それなりに使えるようになった。

「その分だと、浦島さんはすごいよね、女子とはいえ、リンチされ

たり、斬鉄閃を食らってもぴんぴんしてるし、ああいうのを不死身
っていうのかな？」

「それはないと思うけど…」

そんなこんなで夕方になったが：

「今日はありがとね。」

「いやこっちも楽しかったよ。」

「またいつでも来てくださいね。」

そういっていると、千雨の表情が少し沈んだがした。

「うん……また…ね」

「どうしたの、千雨元気がなさげだけど？」

「え！？いや、なんでもないんだ…」

「嘘だね。大体千雨が嘘つくとすぐわかりやすいんだもの。」

表情とか、挙動不審になっているようにね：

「うん、かなわらないなシロちゃんには…」

顔をあげて静かに話し始めた。

「実は親の転勤で引っ越すことになったの。」

……！

「ちなみに、どこなの。」

「麻帆良ってところなんだ。もしかしたらもう会えないんじゃない
かと思うとつらくてね、だから今日お別れを言おうかと思って…」

そういつて、顔が下に落ちていくにつれて涙ぐんできた：

「残念だけどさ、そんなネガネガしたことは受け付けないよ。たとえ離れていても私たちは友達だよ。」

「私もね、たとえ離れていても二度と会えないわけじゃない。もし辛くなったら連絡の一つも入れてくれればうれしいかな。」

「う、グス、あ、ありがとう、二人とも」

「泣くな泣くな私は笑っている千雨の方が好きだぞ。」

その言葉に千雨は笑ってくれた。

「うん、ありがとう。それじゃあね」

「見送りには絶対行くからね。」

そして、千雨が帰った後、

『マスター相談があります。』

「どうした、ナビコ…」

『実は……』

「おkこりゃ徹夜だな…さてとこっちもやっときますか」

そういつて私は電話を手を取った。

・
・
・
・

引越し当日

「今日は見送りありがとうね。ナエ、それに先生も」

「うん、でもやっぱりさみしくなるね。」

「向こうに行っても体には気を付けるのよ!」

タマオ先生は泣きそうな顔でそういつてくれた。やっぱりこの人はいい先生だな…

「そういえば、シロちゃんは? また寝坊?」

「なんか徹夜で作っていたけど…」

「でも千雨ちゃんよかったの? クラスの人たちに知らせなくても…」

「いいんです。タマオ先生。みんながいると別れがつらくなるので…」

クラスの人たちには内緒にしてあり、この事は千雨が引越した後わかる事だったが…

「おいコラ! 千雨! 黙って転校するなんて水くせえぞ!」

「コクエン!? それにみんな…」

そこにはコクエン、ハクマ、キノコ、シュリ、ミズチがいた。

「昨日、白花ちゃんからみんなに電話があつてねそれで千雨ちゃんが転校するって聞いたんだよ」

シロちゃん…あの子は全くこっちの都合なんてお構いなしね…

「まったくあんたは… 私たちも友達でしょうに… 見送り位させてちようだいよ」

「あら、珍しく気が合いますねキノコ。黙っていくなんて私たちが

信頼されていないみたいじゃないですか…」

確かにこの二人が気が合うとか明日は嵐かな…

「まったく…変に遠慮するもんじゃないぜ」

「ハハハ…ごめん皆それとありがと」

そんなこんなで話し込んでるうちに、準備ができたみたいだ。

「おい、呼んだ張本人はまだ来ねえのか？」

「来ないなんてさみしいね。」

「来るだろ。あのバカは、どうせ寝坊でもしたんじゃないか？」

「きつと来るよあの子は約束はきちんと守」「ごめん遅くなっちゃった。」ほらね。」

全力疾走したせいか、肩で息をしている白花の姿があった。

「おせえぞ白花!!」

「だいぶ遅かったけど、また寝坊かなシロちゃん。」

「その通りよ白花ちゃん。こういう事に遅刻しちゃダメでしょ!」

周りからきつちり叱られてんなシロちゃん…

千雨はいたずらっぽく笑っていた。

「ち、調整をしてたら遅くなっちゃて、ごめん、マジごめん。」

調整？

「何の調整してたの？」

コレっと言って白花はUSBメモリを差し出した。

「引っ越すちゅちゃんにプレゼントにね…本人も望んでいるし。」

それは、ナビコのメダルが入ったメモリであった。

「いいの？ナビコは私と来ても。」

『自分で考えた結果、千雨ちゃんと一緒にいたいからマスター、いえ、元マスターにお願いしまして。』

「マスター設定を変えたりして大変だったよ。おかげで徹夜しちゃって。もう…」

「ふふ、ありがとうシロちゃん。」

「もし、PCを買ったならつなげるといいよ。セキュリティとかの管理能力もすごいんだから。」

車のクラクションの音が鳴っていたのでそろそろ出るらしい。

「じゃあ、そろそろいかないとね。」

「さよならは言わないよ。だから…」

「うん、じゃあ…」

「「また会いましょう親友。」」

・
・
・

私は去っていった車が走り去ったほうをいつまでも見つめていた。

学校で初めての友達と一緒に遊びまわった親友：

「でも、よかったの？」

「なにが？」

「白花なら、もっとすごいの渡しそうだったんだけど…」

「わかっていないね、あれは普通のよりかなり強化されてるから、ウイルスとか迷惑メールとかを一括管理することが出来るまで強化したんだから。それに、あの子なら千雨を一人にいないだろうしね。」

さみしくないとさえ言うようになるが、そんな遠くないうちに会えそうな気がする。そしたら、ナビコのパーツとかも考えておくべきだな。

そんなことを思いながら、帰路についた白花たちであった。

第2話 新たな出会い、そして親友の別れ・・・（後書き）

そうだ、京都に行こう・・・そんなわけで次回は、京都でちよつとした修行です。

第3話 神鳴流の乱（前書き）

予告通りに京都へGO

第3話 神鳴流の乱

「海が見たい、人を愛したい、怪獣にも心はあるのさ！レミ○アのカリスマ懺悔室何故消した」「バカやってるんじゃないやへん」「アベシッ！！」

はい、京都駅前でそんなことをやっていたらゴスツと開幕の一発をもらいました。秋葉原 白花です。

今回は、鶴子さんが「そや、京都に行こか白花」てな感じで連れられて神鳴流の道場で稽古をするために来ました。

「とりあえず、道場の方は昼過ぎ辺りに顔を出すからそれまで観光でもしてきいや」

と言って、鶴子さんは地図を渡してどこかへ行ってしまった。とりあえず清水寺にでも行ってみますかな…

え？金？十万くらいあれば十分でしょう…

「此処が有名な I can fly スポットか…絶景、絶景」

下の竹の柵は飛び降りた人を確実に刺すために用意したのかな？まあ文化遺産から飛び降りるバカはそういないでしょう。

しばらくして、清水寺を後にし、昼飯を早めに食べておこうと思いガイドマップを片手におすすめな飲食店を探していると…

「少し剣術がうまいからって調子に乗ってんじゃねえよ！この忌子が！！！」

その声がした方を見ると、路地裏で金髪の少女一人に対して、高校生くらいの男子2、3人当たりが囲んでいるのが見えた。しかも、人払いの結界まで用意しており、関係者が一般人を襲っているようにしか見えない図になっていた。関係者で剣術という事は神鳴流か？こんな下種も存在しているんだな。とりあえず助けますかな。

「おらどうしと「らんらんるー」ぐへえ！」

「ドナ○ドはいじめっ子を見るとつい飛び蹴りしちゃうんだ！」

おお、つい手が出ちゃった…いやこの場合足が出ちゃったかな…

「何や、おまえは部外者は引っ込んでd「そんなにディアナが好きかい！」誰だよ！ディアナってええええええ！」

取り巻きの雑魚Aがなんか喚いているがそんな奴にはシャイニングフィンガーをプレゼント。

「たd「ジェノサイドブレイバー！！」セリフくらい言わせろよー！」

取り巻きBには何か言う前に若本風の波動砲をプレゼント。

「畜生、こんなことしてタダで済むと思ってんのk「全人類のデストロオいい！！」シンクノソラー」

主犯が復活したので紅い波動砲を打ち込んでやった。そんなこんなで全滅させてやったら、覚えてろよと三下のセリフを吐き捨ててどこかへ逃げ去っていった。残された少女は何が起きたのかわからないといった表情をしていた。

「大丈夫？変なことされなかった？」

「あ、…はい」

その問いに少女は頷いた。少女は金髪で白い和服を羽織っていた。

「そっか。連れの人はい r 「ぐぎゅるゝ」 腹減っているのか…」
「う……」

少女は顔を赤くして、腹を抑える。

「お嬢ちゃん？昼ごはんはお姉ちゃんがおごっちゃうる！」

「…ええんか？」

「その代わり、どこかい店はない？ガイドマップじゃなくて地元の人がおすすめる店のがいいし…」

こういうのに載っているのは混んでる可能性が多いし

「…蕎麦でええならあるで」

「じゃあそこで食べよう。私は秋葉原 白花よろしくね」

「うちは月詠っていうんやよろしくな」

マジで？

・
・
・

案内された店は年季が入った雰囲気があり、客もそこそこいるといった感じだった。

私たちはズゾゾと蕎麦をすすっていると、月詠の箸の動きがぎこちなかった。

「腕、怪我したの？」

「ちょっと痛めただけや心配ないで」

そう言っているが箸をつかもうとしているが落としてしまっている。
このままじゃあ、不便だろうと思い、自分の分の蕎麦を手早く食べる。

「月詠ちゃん、こっちにいらっしゃい」

「…？」

そういつて、自分の方に来た月詠を膝の上に座らせる。

「ち、ちよつと!？」

「けが人おとなしくしてなさいね。はい、あーん」

月詠の分の蕎麦を取ってあげて食べさせようとする。

「う、あ、あーん／＼／＼」

恥ずかしいのか、少し顔が赤い。ヤベ、鼻から紅い物が…何かに目覚めそう。

「ん、むぐ、ありがとう／＼／＼」

「どういたしまして」

この可愛い生き物お持ち帰りしていいかな？
そんなことを考えていたら食べ終わったので、道場の方へ向かおう
としたら月詠もその道場に行っているらしくお札に案内してくれる
みたいだ。地図を見るよりこっちの方が楽でいいしね。

「そういえば、白お姉ちゃんは何の用で来たんや？」

ちなみにこの呼び名は「お姉ちゃんって呼んでええか？」と言われ
て速攻でいいよと答えたためである。

「こわーい師匠がこっちの道場で稽古をやるってことで来たんだよ。」

鶴子さんの練習メニューは厳しいからな…一番きつかったのは4時間耐久実戦形式の試合だったな。その4時間は地獄になったんだよな…

・
・
・

「ついで！」

「おおくなかないところじゃん…」

そこは関西呪術教会が管理している山の一角に造られた古風な道場だった。

「失礼ですが。どちら様でしょう。」

細身で巫女服を着た門番の人が声をかけてきた。

「青山鶴子さんの紹介できました。秋葉原白花です。」

「少々お待ちを…」

そう言って懷からケータイを出し連絡を取って確認をしたようだ。
魔法使いや陰陽師って機械系に疎いようなイメージ持ってたけど
そうでもないみたいだな。

「確認が取れました。それにしてもすごい師匠をお持ちですね…」
「そう思うなら変わってください」

門番の人が苦笑している。やはり鶴子さんの指導は鬼畜なんだな…

「それじゃあうちは道場の方へ行ってくるな」

「ありがとね。月詠」

そういつて月詠は道場の方へ行っていた。
少しこのあたりの地形を見てから道場に行くとしますか…

「あ、ようやくと来たようやな」

道場に入ってみると道場の奥で茶をすすっている鶴子さんと師範代らしき厳ついおっさんがいた。

「時間は余裕を持ってきましたが…迷惑でしたか？」

ちなみに今は12…45分あたり

「いや、問題あらへんよ。白花、こっちが師範の木原や。師範こっちがうちの妹の弟子の秋葉原 白花や」

そう言ったら、木原と言われたおっさんは顔をしかめた。

「ふん、関東の者が神鳴流を学ばせるなんざ青山も落ちぶれたものやのお」

あれ？いきなりケンカ売られちゃった。なにこいつマジウザい。

ぶちのめしたくなってきたよ。もしかして、関西至上主義ってやつかな？　というかこいつ過激派だろ、麻帆良を襲撃している。

「嫌やわ、木原はんたらケンカ売ってるんとちゃいますか？」

鶴子さん、茶碗にヒビが…それにすごい怒気ですね。

「あいにく、わしの家には貴様のような出来損ないの妹のような奴は存在せえへんからのお」

さらに挑発するとは、こいつただの自殺希望者か？　それとも実力の
あるバカか？

この野郎…コンクリに詰めて海に捨てたいな…

「まあ、どうでもええやろ。白花、今日の稽古は今日ここにいる道場の門下生と師範代すべて100名を相手しい。ついでにこの木原もや」

無茶なことキター（泣）

まあ、相手の強さにもよりますけど…

「はっ！？　本気かいなそんなことが出来るはず無いやろ！！」

「おや、こんな小娘一人に百人も相手するなら楽勝でしょう？　それ・と・も門下生が全滅させられるのが怖いんですかあ？」

「なっ！？　貴様のような小娘に負けるほど弱くないわボケ！！　その言葉に後悔すんなや」

挑発してみると相手は顔を真っ赤にして怒鳴り散らして出て行った。

「おやおや、奴さん沸点が低いようですな。この程度で切れるとは

たかが知れますよ」

「まあ、木原自身実力が無くて落ちぶれた奴なんよ。一応陰陽術も使えるんやけどそっちもあんま使えんらしいけど狡賢い奴でこの道場もほとんど奴の私物のようなものや」

策士系の奴か：そういうのは前線に引きずり込んでフルボッコか
がいいけど：

「白花、師匠命令や：遠慮はいらん。ぶっ潰しいや！」

「了解！皆殺しですね！」

「いや、殺さなければどこまでもええで半殺しまでOKや！」

よし！やる気出てきた！！

・
・
・

「さすがに百人は多いな」

おっ月詠もいるじゃん月詠って今はどうなんだろう：どっちにしても
楽しめそうだな。

ちなみに私の得物は刃を潰した刀と弓です。弓は背中にあります。

「白お姉ちゃん：

「よっす月詠。ここの奴ら全員と稽古することになったから。全力
で来てね！」

そう言ったら月詠は三日月の笑みをして、二振りの刀を抜刀した。
この頃からあったんだな、狂気。

「ならうちも全力でいくで！簡単に壊れんといて！手足ぶった切

って達磨にせずたに引き裂いたるよ!!!」

その言葉を発した瞬間目の前に来て右手の刀を振り落した。
それを避けて一太刀入れようとしたけど左手の刀で阻まれる

「なるほど…やるね」

「まだやで!にとくれんげきゝざんゝがんゝけゝん!」

のんびりした声とは裏腹に重く鋭い斬撃が襲い掛かる。

「なんのお!!!斬岩脚・天!!!」

それを紙一重で避けて月詠の腹部にサマーサルトキックを叩き込む。
それにより月詠の体は宙に浮き、そこへ白花が追撃のグラウンド（ゲ
フンゲフン、斬空閃を横一閃に放った。

「これくらいで決まると思ったんかゝ白お姉さまゝ」

月詠は刀を十字にかまえて防御の姿勢を取る。

何故お姉さまになっているし…だけどこれで終わりじゃないんだよね…

「斬空閃・重ね十字!!!」

先ほど飛ばした斬空閃より速い衝撃を縦に放ち、着弾時に合わさる
ようになって、月詠の防御ごと突き抜いた。

「痛、さすが白お姉ちゃん強いね…」

倒れた状態で狂気が薄れていくのがわかる。

戦闘になると狂気に染まるってな感じか…

「月詠くそれに振り回されるんじゃないかって受け入れてみれば？それを含めて月詠なんだから」

「せやけどそんな事したら周りを傷つけてしまうやないか…」

「大丈夫さ。月詠ならできるって。根拠はないけど…」

「せやったらうちが引き取ったる」

道場の方で観戦していた鶴子さんが動いた。

「これだけの才をこんな所でつぶすなんでもったいないしな」

やったね月詠！地獄の片道切符をゲットしたよ…

さて、残り99人。あっあの師範入れて100人か…

「まさか、あの忌子がやられるとは…」

「だが、相手は消耗しているんだ俺達でも勝てるだろう！」

樂觀的だねェ此処の奴らの錬度はたかが知れるよ…

「話し込んでていいのかな？集気法！」

そう言い放ち私は辺りに漂う気を集め回復していく。

「な！？霧散した気を吸収しているだど！？」

「くっ！？かかれ！一気に攻め落とすんだ！」

うおおおおー！！と後ろの方で控えていた有象無象が突っ込んできました。

「くらえ！斬空閃！」

「斬岩剣！！！」

瞬動を使って接近してきた特攻組と後方で斬空閃を放つ援護組で襲ってきた。

それを後ろに飛んで気で強化した足で一気に駆け抜けると同時に切りつける。

「お前らに足りないものそれはああ…情熱思想理念頭脳気品優雅さ勤勉さ！」

そしてエなによりもオーーーーー速さが足りない！！！」

言い終わり刀を鞘に納めた頃には襲い掛かってきた者たちはみんな倒された。

「これぞ我流奥義 閃走・幻夜…」

注…イメージ的にはBASARA3の石田のゲージ技です。

これで大体20人は落ちた。残りの奴は後ろの方で動かない。

「オラオラ！縮こまってんじゃあねえよ！！斬魔弓・反響でもこれって斬じゃないよね？」

そういつて白花は背中にある弓と気が籠った矢を構え固まっている集団の上空を射る。

「はっ！どこを狙ってやがんだ！」

次の瞬間、矢が弾けたと思ったら大量の光の矢が雨のように降り注ぐ。

「ぎゃあああああ」

「ありえねえええ」

「あはははは！どうしたのかあ？まだ終わりじゃないよ？雷鳴剣！
」

そういつて瞬動を使って距離を詰めて帯電した刀で切りつける。

「畜生、なんやこいつは！？化け物か！？」

「こんな奴に勝てるわけがねえ逃げn「まそっぷ！！」なんだそり
ゃー！！」

雷鳴剣をたたきつけたら落雷のようになり、当たった個所を中心に
吹き飛んだ。これって雷光剣じゃね？

そんな感じで切りまくっていたら…いつの間にかあと4人になってい
たZE☆

しかもよく見たら月詠をいじめてた三下どもだった。

「うわーこいつら弱すぎだろ。アヒヤヒヤヒヤ！！」

「畜生、関東のもんに此処までやられるとはなあ」

「師範どうしますか？」

「あわてるなやつも消耗s「集気法で回復余裕でした」ぐう…」

そして、4人がいる方へとゆっくり歩み寄る。

「ひっ！く、来るな！！グボァ！！」

慈悲もなく切り捨て…

「た、頼む助けウギャー!!」

三日月の笑みとともに刈り取る…

「畜生、斬岩け「斬岩脚」ギャアア!!」

獲物が無くなるまで食い殺すことをやめない。

「ちい、役立たずどもが…」

残った獲物はただ一人…

「手前が最後だ…」

そう言い放ち手にある刀に気と魔力を混ぜる。

「武装感卦!」

次の瞬間、刀は黄金の光を放つ光剣となった。

「つく!動くなやこの娘がどうなってもええんか?」

近くにいた月詠をにっとなが何の意味もなかった。あまりの事に混乱しているから忘れていたのだろう…自分が使っている剣術は切るモノを選ぶことが出来ることを…

「これで終わりだ…」

手の中にある刀の光が増し巨大な光の剣となる。

「ま、待てこいつがd「素子師匠直伝神鳴流決戦奥義!!極大・雷光剣・星薙ぎの太刀いいいい!!!!」ああああああアああ…」

それを薙ぎ払い、師範を消し飛ばし、月詠には怪我一つない状態で救い出した。

「これがお前が否定した師匠の技だ…」

・
・
・

「やりすぎた…」

「やりすぎやな…」

「綺麗になりましたね白お姉ちゃん…」

いやゝ月詠以外を攻撃対象にしてやったから
ここの道場を半壊にしちゃったんだZE☆
やべっこれ弁償しなきゃかな…

「まあ、この責任は全部木原はんが被ってもらうとしましょ」

「うわゝえげつないっすね鶴子さん…」

「あのゝうちは…」

「月詠は鶴子さんの元で修行じゃないかな…」

きついけど効果は抜群なんだよね…

加減もできて、逝っちまう一歩手前で返されるから性質が悪い…

「それじゃあ、白花はもう帰らんな月詠はえゝと此処に電話して
うちの名前を出せば寝泊まりできるはずや…」

そういつて鶴子さんは月詠にメモを渡した。

「ありがとうございます鶴子さん。白おねえちゃん…また、会えるやろうか…」

「会えるでしょ。まあ、再開はもう少し先になるかもしれないけどね」

月詠は寂しそうな表情だった。けれど、すぐに笑顔になり…

「だったら、今度会ったときはまた試合をしましょか。白おねえちゃん」

「よし、来るなら来い。そう簡単にはやられないぞ」

「せやったら、きついメニューを考えんとな」

あ、鶴子さんのこの笑顔が出たという事は地獄のような修行が待っているんだろうな月詠は…

「月詠、先に言っておくけど鶴子さんの修行はめっちゃきついから…死ぬなよ!!」

「頑張れとかそういう言葉よりも先に命の心配って…」

まあ、死にはしないだろうけど逃げ出そうとするとまた普通と違った怖さを味わえるんだよな…

「それじゃあ、月詠。身体に気を付けるんだよ」

「白おねえちゃんも元気だね」

そういつて私たちはボロボロになった道場を後にした。

帰りがてらにお土産を買って家に変えた。京都といえぱやっぱり八橋でしょう。

第3話 神鳴流の乱（後書き）

八橋おいしいよね

今回の技は若本やメイガスの剣などが元ネタです。
どうせなら半人半霊の技にすればよかったかな…

第4話 卒業、そして麻帆良へGO（前書き）

最近、新しい話でも作ろうかなと思う今日この頃…
でもそんなことしたらこっちの更新速度が遅くなるしな…どうする
べ

第4話 卒業、そして麻帆良へGO

それは小6の冬のことだった…

「白花、ナエ卒業したら引越すぞ」

いきなり何言ってるすかお爺ちゃん…

「説明プリーズ」

「そうですよ、いきなり引越すぞなんて…理由とかも行ってくださいよお爺様…」

「おおすまんすまん実はな…」

爺ちゃん説明中

「つまりは、お爺ちゃんの悪友である麻帆良の学園長が、「こっちで教師やってくれ」ってな感じでお願ひしてきて、麻帆良の技術も見ておきたいから行くことにしたってな感じでいいんだね？」

「説明乙」

ナエ姉もネタを言うようになったな…

「それで二人はどうする？寮がある中学に行くか、麻帆良に行くかどうかがいいかのお？」

まあ、あっちには千雨もいるし私も麻帆良の技術を見ておきたいしね。

「私はいいよ。ナエ姉は？」

「二人とも行くんでしょ？だったら私も行くわ。仲間外れは嫌よ？」

そんなつもりはないんだがな…

「まあ、家族全員で行くことでいいんじゃないやね。それじゃあ、向こうに連絡しておくぞい。」

「私たち以外はだれか行くの？」

「ああ、ヘベレケも付いてくるらしいぞい」

原作じゃあギャルにもてるために世界征服をたくらんだ人だけど
女子校にいった大丈夫なのか？一般人を襲うようなことになったら
…フフフフ（黒笑）

「白花、その笑い怖いわよ…」

サーセン

・
・
・
色々あって卒業式、月日がたつのは早い物ですね。

「ふうそれにしても白花は卒業したら引越すんだってな。この辺が静かになるぜ…」

「確かにね…このクラスの騒動の2割は白花ちゃん関わっているからね…」

異議あり！！その情報は偽りである！！！！

「いや合ってるよ…白花が誘導して騒動起こしまくってんじゃないん…
・」

「特に私とキノコのトトカルチェなんかやってたらしいわね…」

それはいつもの事だよ。まったく1年の終わりに集計して勝敗を競ってたけど、結局卒業まで引き分けにしちゃったよこの二人…。勝率は1勝1敗1分けという結果になっていた。まったく仲がいいのか悪いのやら…

「やっぱり納得いかないわよね。6年の結果が引き分けなんて…」
「だったら最後に何か競いますかキノコ？」

何か競うねエ…そうだ。確かポケットの中に…あった！

「じゃあ、これで決める？」

そういつて1円を取り出す。

「それじゃあ…表？裏？」

「私は表よ！！これで勝ち星を挙げてやるわ！！」

「なら私は裏ね…これで決着ですわよキノコ！！」

そして私はコインを弾き、手のひらに取ろうとしたらなぜか鼻がむずむずして…

「ハックシヨイ！」

その性でコインが床に落ちてしまったが信じられないことが起きた。

「んな！！ウソだろ！！」

「これは珍しいね…」

「ある意味奇跡だな…」

男性陣が騒いでいる理由は落ちたコインは床の隙間に挟まり、立っている状態になった。これじゃあ裏でも表でもなく中間じゃん…この結果は…

「ドローゲーム」

「こんなことってあり得るの？」

「普通はあり得ないと思いますが…」

あれか神様はお互いこれから競い合って行け！！って暗示なのかな？

「まったくお前といると退屈しないな」

ミズチ、それは私が原因だということのか？

「あそこでクシャミなんてしなければこんな事には成らなかっただろうな」

「おれは悪くねエ！！！！」

某親善大使みたいな事をしてたらタマオ先生がやってきた。

「はいはい、みんな席についてー最後のHRを始めますよー」

そして配布物が配り終わり、先生の別れの言葉が始まった。

「先生、初めて受け持つクラスだから最初の方は緊張したりしてたけど、時間がたつにつれて慣れていくものよね。一部の生徒なんか友人感覚で来る人もいるしね」

クラスにいた全員が私の方を見た。
こっちみんな…

「それで途中で転校しちゃった子もいるけど、みんな卒業できて先生うれしいです。これから、中学に上がって苦勞することもあるけど困ったならだれかに相談しなさい。それが友達でも親でも先生でも…

それで先生が・・うう”ん言いたいのは、友達や親を・・グズッ大切に・・クツしなさいねあなたたち。それじゃあみんな卒業おめでとう！！」

先生泣くなよ…こっちまでもらい泣きしそうじゃないか…グズッ
タマオ先生…この6年間ありがとうございました。

・
・
・

「ん？ 白花か…」

「あっシッシヨ―」

素子さん

「麻帆良に行くんだってな…あそこはいろいろとあれだから気をつけろ」

確かに正義（笑）の魔法使いの巣窟だしね…

「師匠から教わった技があります。それで大丈夫だと思います」

「そうか…まあ、私から言えることは「日々精進」ってところかな。鍛錬を怠るなよ白花」

「わかってますよ。師匠も新しい恋をがんばってください」

その言葉を発したら素子さんは顔を真っ赤にしていた。

「なっ!?!何を言っているんだお前は!?!」

「成瀬川さんに浦島さんお似合いだって近所で有名ですよ（嘘）」と
ところで師匠、浦島さんに好意を持っていらしてましたが、付き合っ
ていることが分かった時の心境はいかがでした? NDK? NDK?

しかし、その時私はテンションが上がっていて忘れていた: 普段は
優しい人ほど、キレた時、とんでもない事をするという事を:

「はくくか、ちよつつつとKEIKOが必要だね」

やべっやりすぎた:

「あゝ師匠すいません。調子に乗りすぎました。それじゃあ私は引
つ越しの準備が有るんで失礼します」

「白花ちゃん、引つ越しの準備ならやっておくからゆっくり稽古し
ていけば?」

ちよ!?!ナエ姉退路を断たないで!!

ガシッ!!

あれ、なんでそんな禍々しい気を出しているんですか? っていうか
その刀「ひな」じゃないですか!?! あっ!?! ちよ!?! おまつ襟首掴ま
ないでください。引きずらないでください。

「何すぐ終わる...ふふふふふふふふふふ」

あっこれは＼（＾Ｏ＾）／

アッ――――！！！！

「確かこういう時はムチャシヤガッテだったかな」

いやゝ死ぬかと思ったよまさか極大・雷光剣・星薙ぎの太刀までしてくるとは…

そんなこんなで引っ越しの準備もあらかた終わったし、後はみんなにあいさつを済ませますかな…

「白花、向こうに行っても俺たちのこと忘れんなよ！！」

「大丈夫でしょコクエン君。白花ちゃんは普段はふざけているけど、友人は大切にする人だし…」

「忘れないよふたりとも…私がそんな薄情な人間だと思ってるの？」

この二人には結構世話になったなゝコクエンとはなんか波長が合う感じでよく遊んだし、ハクマはなんだかんだで私たちのいたずらに乗ってくるし…

「あんた達と一緒にいて楽しかったよ！」

「同感ですわね。」

「二人の喧嘩には毎回楽しませてもらったよ。でも、これから程々にしときなさい」

いつも競い合っている二人はなんだかうらやましいと思う事が多

かった。全力でぶつかりあえるライバルみたいなのに憧れたりしたんだよね…

「まあ…その…元気でな」

「ミズチも健康には気を付けろよ、じゃないとまたリョウコさんに看病させられるからねエ」

「姉貴のことを出すな…あれは恥ずかしかったんだから…」

以前、ミズチが風邪で休んだ時、見舞いに行ったらお姉さんである闇雲　リョウコさんが付きつきり看病をしているのを見かけた。それでからかったりしたなあ…珍しく慌てふためくミズチを見れたからねエ…二人とも普段はツンな態度だから新鮮な光景だったな…

「白花ちゃんナエちゃん、向こうでさみしくなったら先生相談に乗るからね!!」

「そのときは連絡させていただきます」

「ご厚意に感謝しますよ先生」

タマオ先生、これからも教員生活頑張ってください。

「準備ができたかのう?二人とも…」

「それじゃあ、みんな…また会いましょう」

「みんな元気でね!!」

私は車の窓から乗り出してみんなが見えなくなるまで手を振っていた。

・

・
・
「それでおじい様、学園長はどのような人物なんですか？」
「まあ、自分のために面白おかしくさせるような奴じゃな」

策士タイプだからねあの妖怪は…

「あんま関わりたくないな私は…」

「よくそんな人と仲良くなれましたね…」

「あ奴は友人ではなく悪友じゃよナエ。そういえばあ奴に金貸したまんまだな…あとで徴収するか」

おいおい、大丈夫かよ…面倒なことにならなきゃいいけど。後お爺ちゃんきっちり徴収しておけよ。

数時間後…

「やっとついたね」

あれから数時間座りっぱなしの状態で少し疲れたな…

そう思いながら私は背もたれから体を起こし、車の外に出て伸びをする。

「それで着きましたら何をするんですか？」

「向こうが指定の場所に迎えをよこしてくれたみたいじゃからそこに行くでしょう」

しかし、ここの指定した場所ってもう女子中学校の中じゃないか？

「此処の学園長って変態なの？それとも逆光源氏でもしようとしているの？」

「女子中の中に学園長室があるなんてどうかと思いますね…」

「やべっ否定できんわい」

えーと話題を変えよう…

待ち合わせ場所になんかダンディなオジサマが煙草を吸いながら佇んでいた。

多分、あれが迎えの人なんだろう…

向こうも気づいたみたいでこちらの方へと近づいてきた。

「失礼、あなた方が学園長が言っていた新しく来る教師と編入してくる生徒ですか？」

「此処の学園長が近衛近衛門なら間違っていないがのう…」

だんていな案内人は苦笑しそのまま続けた。

「間違いありません。僕はここの女子中学校で英語の教師をしている高畑・T・タカミチって言います。では、学園長の所へ案内します」

そういつて高畑教諭は校舎の方へ向かい案内を開始した。

校内の窓から見える世界樹こと「神木・蟠桃」はやはり大きかった。

「それにしてもでかい木ですね」

「あれは生徒たちから世界樹って呼ばれているんだ。ド○クエが元ネタだろうけどね。言っておくけどタイジュの国はないからね」

タイジュの国って高畑教諭もやってるのかなド○クエ

しかも、モンスターズの方…

「パーティはなんですか？」

「にじくじやくにダークドレアム、後はスライムかな…マダンテ覚えてる」

やり込んでいるな高畑教諭…

「着いたよ此処が学園長室だ」

そういつて目の前には学園長室と書かれた扉の前に来た。

高畑教諭はどうぞっと身を引いた。

そして扉を開けたら…

「おお、よくk「すいません、間違えました」フォッ!？」

ぬらりひょんなんていなかった。

「高畑教諭、あそこに人はいませんでした」

「いや、あれは一応人間なんだよ…信じられないけど」

部下からもこんなこと言われてるぜぬらりひょん…

「学園長失礼します」

「高畑君さっきの言葉はどういう意味かの…」

何のことでしょうととぼける高畑教諭

この事に関してはみんな疑っているんだろうな…人間か妖怪か…

「相変わらず変な頭をしておるの近衛門」

「秋葉原お主もか!!」

仲がいいなこの二人…

「それでこのぬらりひょんが学園長なんですか？高畑教諭」

「ホント、ぬらりひょんですね…頭とか…」

「こんな頭だけど一応人間だよ…多分」

「みんなひどくね？わし泣いちゃいそう…」

「泣かないでください学園長。気持ち悪いですから」

「フオローになっておらんぞい…」

「する気なんてありませんから」

この人外はいいたいいつまでネタを引っ張るつもりだ？

「もう、いいわい…とりあえず二人はこの第2学年に入ってもら
うぞい。住居じゃが学生寮の方を手配しておく。秋葉原は教員寮の
方へ入ってくれ。明日にクラスの方を連絡するから職員室によって
もらうからの」

「わかりました。ぬらりひょん」

「お世話になります。ぬらりひょん先生」

なんかナエ姉もノリが良くなってきたなあ…昔なら咎めている
ところだが、いい傾向かな（笑）

なんかぬらりひょんがうつむいているが問題ないな…

「それじゃあわしらはその寮の方へ行くんでな。また会おう近衛門」

「失礼しました」

そういつて私たちは学園長室を後にした。

・
・
・

まったくみんなはワシのことをぬらりひょん、ぬらりひょんと言っているがわしはれっきとした人間じゃ！！妖怪じゃないぞい。

「学園長、あの人たちは関係者なのですか？」

高畑君までワシのことをぬらりひょんと思っておったとは…給料減らそうかのお…

「あ奴は元関係者といったところじゃ。じゃからあの娘たちは魔法のことは知らないはずじゃ」

「そうですか」

（しかし、あの白花と言う娘は似ておるわい、あの「災厄の魔女」に…これは偶然かの？しかし、魔力はそんなになかったしまあ大丈夫じゃろう…）

そんな事を考えている妖怪であった。

しかし、その甘い考えを彼女は打ち砕く様な出来事が起こることをまだ知らなかった…

第4話 卒業、そして麻帆良へGO（後書き）

大抵の作品はやっているぬらりひょんいじりでした。

次回から麻帆良篇です。注：中1から始まります。

第5話 第一印象が大事って誰もが言ってるよね!!

さて、私は女子中等部の1-Aに入ることになった。ナエ姉とは別のクラスだ。それにしても、自己紹介とかマジデ緊張するんだよね（笑）。

それに、最初が大事だ。しっかりやっていこう。

・
・
・
・

あゝくそ、みんななんで非常識を認識できないんだ？私がおかしいのか、非常識はあいつらだけで十分なのに町全体が非常識とかどうよ？今日も現実逃避のためにネットのブログを更新する。

うん、いい出来だ。

『マスター最高です。ハアハア』

親友からもらった。人工知能のナビコが最近変に…いや、変態になり始めた気がする。

「ふふふ、ネット界のNO.1の確保は大変だな…」

『あっマスター不法侵入しようとしているくそつたれがいますが…』

「潰しておけ、ばれないように」

『Yes, My Master』

そんな感じが私の日常である。

中学に上がり、クラスは1－Aになったがバカ騒ぎは収まることを知らなかった。

——まったく、なんでこんなにはしゃいでいられるかねエ：

そんなことを考えて、自分の席に向かった。

「みんな、ニュース、大ニュースよ！！！！」

麻帆良のパパラッチこと朝倉 和美が来てはしゃいでいる。

——こいつが騒ぐと碌なことが起こらねエからな：

関わらない様にしておう。そう考えて自分の席でi p o dを起動し、音楽を聴くことにした。

コノメニウー

「なんと、このクラスに編入生が来るらしいよ！！！！」

おおうと騒ぐクラスのみんな。一応、音量を低く設定していたので聞こえたが：

——どうせその編入生もこの非常識を認識できないだろうな：

そして、H Rの時間がきて

「みんなおはよう」

出張の多い担任の高畑先生が来た。教師よりも出張の方が大事なの

かね…この人は…

「先生、編入生が来るって本当ですか？」

鳴滝姉妹が質問してくると…

「情報が早いね、朝倉君経由かな？その話は本当だよ。うちのクラスと1-Cに一人ずつ転校してくるんだ」

どんな子だろう、よし、トラップの設置は…とざわついてきた。

「残念だけでもうそこにいるから罠の設置はさせないよ」

え…ってお前らこういうイベントがあれば仕掛ける気なのかよ…

「それじゃあ入っていいよ。」

高畑先生がそう言うのと…

「わたくし…古代のロマンにズヴォリンスキイ」

どこかで聞いたことのある声がドアの外から聞こえてきた。

「ああ…穴があったら…」

まさか……

「掘りたいっ！」

ズバンッとドアを開けたのは私の親友である秋葉原 白花であった。

「レディース アンド ジェントルメン！」

なんだか知らないがいやにハイテンションになっており…

「さあ 本日お聞かせするのはわたくしの華麗なる半生」

私以外の生徒…いつも無表情なザジまで（。D。）。ポカーンといった顔になっていた。

「貧しい生い立ちで幕を開ける 涙、涙の物語でございまアす♪」

とりあえず、私は席を立ち、

「ハラショーハラショー張り切ってまいりましょうさあ腕を組み足のS「いい加減にしろ！！」ウボアー！！」

親友の顔面にドロップキックをぶちかました。

ぬおくと顔面を抑えて唸っているがそれを無視して席に戻った。

「…長谷川君？」

「あっどうぞ続けてください」

「いやいま「気にしないでください。」むう」

気にしたら負けなんだよ先生。

「あゝはい、このたび、この学園に通うことになった。秋葉原 白花です。よろしくお願ひします」

何事もなかったのよう自己紹介しているが……まあいっか。

その後、息を吹き返したかのように、騒ぎ出した。

「それじゃあみんなにか白花さんに対して質問はあるかな？」

「そんな時は麻帆良のパパラッチであるこの朝倉和美にお任せを」

朝倉の質問攻めが始まった。

「さっきの歌みたいのはなんなんですか？」

「サウンドホ○ズンの人生は入れ子人形です」

「趣味は？」

「機械いじりと剣術です」

「身長、血液型は？」

「身長は159、血液型はAB」

「それじゃあついでにスリーサイズも…」

「79、54、76」

朝倉が少し驚いた顔になっていた。

「まっまさか答えてくれるとは…」

「減るもんじゃないしね」

「それじゃあ私から最後の質問なんだけど…」

「なんだい？」

「千雨ちゃんとは知り合いなの？」

やはりその質問が来たか…

「まあ、一緒に暑い夜を過ごした仲です」

つぶー！！ななな；

おいこら早乙女今度の夏コミのネタキタ——（。△。）——

——！！！！じゃねえよ！！！！

「何言ってるんだお前！！！平然とそんな嘘つくくんじゃねえよ！！！」

「えゝでも一緒に裸の付き合いした中じゃないか」

「小学生のころでひなた荘の温泉に入った時くらいの話だろうが！
！」

「気にするな、たいした問題じゃないさ」

「お前ちよっとO☆H A☆N A☆S Iする必要があるそうだな…」

はあ、やっぱりこいつは非常識の塊だ：

あゝやっぱ千雨をからかうのは楽しいわゝ。
そして、次の人は：

「私からも質問いいかな？」

えゝと早乙女 ハルナさんが質問してきた。

「今度のコミケに二人のことネタにしていいいかな」

「いい」「了承しようとしてんじゃねエ！！」「まそつぶー！！」

ぐへえ、しかたない。

「すいませんがやめてください。主に私のダメージ的な意味で…」
「う…まあ仕方ないか」

まあいいや次、古菲さん

「剣術をやっているって言っていたアルナ…」
「ええ、まだまだ未熟ですが…」

まさか…

「勝負アル!!」

「だが断る!!!!」

「何故アルカ!!」

「めんどくさいから!!次どうぞ」

はい次、超 鈴音さん。

「未来人はいると思うか？」

「居たら面白そうですね。それに未来人はロマンです。主にロボットとか、ロボットとか、ロボットとか…」

大事なことなので3回言いました。

なんか嬉しそうな顔をして席に座った超さんだったが…

次、葉加瀬 聡美さん

「ロボットは好きですか？」

「大好きですよ。ロボット」

現在制作中だがな…

「なら、今度麻帆良のロボット研究会に顔を出してみてはいかがですか？」

「ぜひ、行かせてもらいます」

これは、今後が楽しみだ。

そんなこんなで質問タイムが終了した。

「それじゃあ席はエヴァンジェリンさんの隣の席で…」
「わかりました」

席の位置は、最後列の左側（教壇から見て）

「よろしくお願いしますね。エヴァンジェリンさん」
「ふん…」

ツンツンしてるなあエヴァンジェリンさん。
て言うかサラに似ている気がするけど気のせいかな？
まあいっか。

「それじゃあ授業を始めるよ」

「高畑先生、教科書ないんですけど」

「あっそうか、エヴァンジェリン君、見せてやってくれ」

「はあ、わかったよ…ほらこっちに席を寄せろ」
「すいませんね…」

そんなこんなで放課後

「あゝやっとなつたよ」

「白花、ちょっと話したいんだがいいか？」

千雨からくるとは：

「うん、いいよどこで話す？」

「世界樹前あたりでいいんじゃないね？」

「んじゃ、案内はお願いね」

そういつて世界樹の前へ行った。

「ちょっと聞いていいか？」

いいよと応えておく。

「いろいろ言いたいけど、先に久しぶりって言うておくよ」

「千雨もなんか変わったね。性格とかネットとか」

チェックは欠かしてませんよ『ちうの部屋』

「ばれてるか：まあお前にばれてても驚かないがな。性格の方は、
ここが非常識すぎてこうなったてな感じかな：」

「大変だったんだね」

「一人じゃなかったからここまで耐えれたんだよな：」

そういえば：

「ナビコは元気かな？」

「ああ、でも最近変に、いや、変態になってきてな…」

変態かよ…

「そっちのトモエはどうなんだ？私の予想じゃああまり変わってなさそうだけど…」

そうでもないんだよな…

「最近さ、トモエの小言が多いんだよなあ…」

「なんだいつも通りか…」

「なにそれ、いつも私が小言を言われているってことかよ」

「違うのか？」

そこで疑問文って私って信用無いな…

「この分だと1-Cの編入生ってのは」

「ナエ姉だよ。ちなみにおじい様は大学の方で教師をしてるよ。後、ヘベレケ博士も来てるから」

「なんか全員集合みたいな感じだな」

ぬらりひょんが招いたんだけどね…

「そういえば、パーツの方はどうなったんだ？」

「もう結構できてきているからできたならそっちに届けるよ」

ナビコは原作と同じデザインだけど、性能は違うけどメダチェンジはするよ。

「そういえば、住むところはどこなんだ？もしかして寮か？」
「うん、ナエ姉と同じ部屋で寮に住むことになったんだ」
「へえ、あたしも寮だから気軽に来るといいよ」
「おk」

カーナーラーズー

「カルマか。いい曲じゃん」

「だろ。もしもし、いいんちょ？なに、ああ、うん、いま一緒にいるよ。わかった」

「いいんちょさん？何か用だったの？」

「私っていうか、お前に用だな」

「わたしに？」

「とにかく、教室に戻るぞ」

「了解。」

・
・
・
・

そして、教室に戻って見たらクラッカーの破裂音が響き渡った。

「「「「1－Aへようこそ！！、白花ちゃん！！」」」」

どうやらクラスみんなが歓迎会の用意をしてくれたみたいだ。

「ほら、主役は真ん中に行かないとな…」

千雨がそう言って手を引いて、中央の席に案内した。

（よくこの短時間で用意できたな…）

そこには、菓子類のものや飲み物、そして中華系の料理があった。

「それじゃあ、白花ちゃん何か一言どう？」

とりあえず、あいさつとかもしておいた方がいいだろ…

「えーと、私のために歓迎会を開いていただきありがとうございます。何分こんなバカ騒ぎに参加するのは久しぶりなので、えーと、その、」

丁寧語で言うのはなれないし…

「あーもう！！とりあえず、バカ騒ぎはするけど、はめ外さない程度に騒いでいこうや」

イエーーーーー！！イ！！

そんな感じで歓迎会が始まって、飲み食いしていると…

「ちょっといいアルか？」

「あっ私もいいカナ？」

W中華娘 が あらわれた。

「何か用かな？」

「sy「勝負はしませんよ」ぬう、じゃあ剣術をやるといつていたが…実力はどの程度アルか？」

そういえば、ほとんど師匠の相手しかしてなかったから、どのくら

い強くなったのかな…

「ほとんど師匠の相手をしていたので、どれだけあるかわかりませんね。小さいころは千雨と一緒に稽古してたけど…」

その言葉に、古菲の目がキラリと光った気がした。

「つまり、長谷川も同じくらいの実力はあるということかな？」

「さあ？どうなんだろうね…」

「ちよっと失礼するアル」

古菲が千雨の方へ向かっていった。

「意外だったナ、長谷川さんはそんなに強いのか？」

今度は、未来の火星人が話しかけてきた。

「いや、最後にいっしょに稽古したのは数年前だし、今はどの程度まで言っているかさっぱりだよ。えーと、超ちようさん」

チャオ
チャオリンシェン
「超ダヨ。超・鈴音」

顔を引きつりながらそう言った。

「で、いったい何の用ですか？」

「ふむ、ハカセからもお誘いがあるが、ロボ研にきたら、遊びに来るといいヨ」

「明日にでも行ってみたいですネ」

「いいヨ、大歓迎ネ」

そして、時間が過ぎていき…

「そろそろお開きにしましょうか。明日の授業に支障がないうちに」
腰まである金髪の人、雪広 あやかさんが言い出し、片付けて、解散した。

「そういえば、白花ちゃんって今はどこに住んでるの？」

神楽坂 明日菜さんが聞いてきた。

再来年のあたりからいろいろ苦労するんだろうな…

「姉と一緒に寮に住むことになっているから」
「あゝうちらとなんか寮に引っ越してくる人がいるってお爺ちゃん
いってたな」

まじでありえないよな…

この近衛 木乃香さんあの学園長ぬらりひょんの孫娘なんだぜ…

「たぶんそれですね。それにしても…」

「近衛さんって学園長の孫娘なんですよね…」

「そやで。似てへんやろ」

「いや、女性は普通でも男性の方はあれなんですかね？」

「いや、お爺ちゃんだけがああなんよ」

遺伝子の突然変異じゃなくてよかった。

「ほんと、あの頭はどうなっているんかねエ…」

「まさか本当に、妖怪なのかな？」

「んな訳ないやろアスナ。それならうちも妖怪になってまうやん。」

「あっそうだった、ごめんねこのか」

仲いいなこの二人：

「まあ、そんな感じで寮にいますからよろしくお願いしますね。」

「わかったわ、何か聞きたいことがあったら何でも言ってね。」

「逆にアスナが質問しそうな気もするけどな。」

バカレツドだしねエ：

・
・
・
・

「ただいまー」

寮の部屋にはすでにナエ姉がいた。

「お帰りなさい、晩御飯は…」

「ああ：クラスの歓迎会ってんでもう食べてきちゃった」

「ふふふ：実はうちのクラスも歓迎会をやってね。そこで食べてきちゃったから」

「あれ？そうなんだ」

その後は、教科書の整理などをしたり荷物の整理をしていた。

「そういえば、うちのクラスに千雨がいたんよ」

「そうだったのよかったじゃない」

「性格は少し変わってたけどねwww」

「それは見てみたいわね。それと明日は寝坊しないでね。編入早々遅刻なんていやよ？」

「よし、トモエ任せた」

『たまには自分で起きてください』

ほんと、生意気になっちゃって…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ(前書き)

新しいゲームにはまってしまっていて遅くなってしまうました。
申し訳ありません

それではどうぞ…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ

さて、本日は休日なので先日お誘いにあった。ロボット研究会に行ってみることにした。さてさていったいどういふものがあるのか楽しみだ。一応、ティンペットは男型と女型が用意してある。メダル？まだできてないんだ。ロボット研究会に行くときは女型ティンペット一機持っていくか。ついでに魔法球も：

・
・
・
・

で、ここどこだ？

麻帆良大学部、超の研究室に行こうとしたのだが：やばい迷ったどうしよう：

「おや、白花じゃないか？どうしたんだこんな所で」

そこにいるのは、龍宮 真名さんじゃないか：

とても中学生とは思えな（ゴリ ああやめて、銃口を眉間に向けないで：

「今、失礼なこと考えてなかったかい：

いえいえ、滅相もございません（汗）。

「ここに来たということは、超の研究所に用があるのかな？」

そうなんだけど、迷っちゃってさ：

「ふむ、私も超に用があるから一緒に行くかい？」

ご一緒させていただきます真名さん。ところでその銃は…

「マナでいいよ。後これはエアガンだ」

エアガンなら仕方ないな。

・
・
・

「遅かったじゃないカ。もしかして道に迷ったカ？ あっ龍宮さん銃弾のデータありがとうヨ」

まさにその通りだよこの野郎。

「ま…まあ、ここは広いからナ、慣れないと迷うこともあるヨ」

慰めどうも…

「さて、秋葉原博士たちが作った。メダロットだったカナ？ それはどうゆう物なんだ？」

少女説明中…

「なるほど、しかしこのサイズだと人工知能を入れるのに苦労するんじゃないカ？」

「そこらへんはもうクリアしてあるよ」

「なに？ いったい何を使ったネ」

これ、と言って首飾りにしていたUSBメモリを見せた。

「見た目は普通のUSBメモリみたいですね…」

「まあ、これ自体は市販のものを改造した程度のものだよ」

中身が違っただけなんだよね…

「まさかこれが人工知能じゃないですよね…」

「いや…これはただの入れ物みたいなもので、中身が人工知能だから」

そういつてメモリをいじり、中にあったメダルを見せる。

「これは？」

「六角貨幣石…単細胞の化石でそれを加工したものだよ。この容量がすごくてね、人工知能を入れるのにちょうどいい素材だったから作ったんだ」

メダルをメモリに戻して、トモエに話すようにした。

『初めまして、超鈴音、葉加瀬聡美、龍宮真名』

「うお！？ビックリしたネ」

「会話も可能とは…知能は人間レベルに行っていますか…これなら…ブツブツ」

「こちらの名前は聞いていたからか…」

『その通りです。私はトモエと申します。以後お見知りおきを…』

バカ丁寧にするなあトモエは…

『初対面ですし、礼儀正しくしておこうかと思ひまして…』

「ふむ…主人と違っていい子のようにだナ」

ひでえぞ超、私は礼儀正しくないってか？

「自己紹介の時点でもうアレですからね…」

あれ？あの紹介滑ったかな…掴みOKみたいだったけど…

「あれ？そういえば長谷川さんも同じようなものを持っていたような」

「そういえばもっていたネ。あれは？」

千雨普段からつけているのかな？

「あれは千雨が麻帆良に行くときに渡したもののなんだ」

「なるほど、だからか…」

そんなこんなで話していたらお爺ちゃんが研究室に来た。

「おう、やっているようじゃのう」

「あ、秋葉原先生どうもネ」

「そういえばお爺ちゃん大学部だったね」

「お爺ちゃん？白花さんって秋葉原先生の子供だったんですか？」

葉加瀬がなんか驚いているけど…まあ、似たようなものだけだね

「子供じゃなくて孫だね。まあ、私は養子だけど」

「それで、どこまで説明したのかの？」

「メダルのことまでって所ですね」

次はティンペットの事だね。

「ならば、次はこのメダルの体になる『ティンペット』の説明をするかでしょう。白花、ティンペットはあるか？」

「持ってきてあるよっと」

そういつてカバンから白と赤で彩られた女型ティンペットを取り出す。

「これがメダロットの身体になる『ティンペット』じゃ」

「ちなみにこれは女性型で男性型もあるんだ」

研究者の二人は興味深いと言わんばかりにティンペットをじっくり見ている。

「『ティンペット』…直訳すると『ブリキの友達』か」

「その通りだよ真名。このティンペットにパーツとメダルを合わせてできるのがメダルロボット略してメダロットだ!!」

「そのまんまですね…」

シンプルの方がわかりやすいだろう葉加瀬。

「人間でいうならティンペットが骨組みでパーツが肉体、そしてメダルが頭脳の役割をするのじゃよ」

「それじゃあティンペットの動力とかの説明するね」

そういつてまず神経の役割を持つケーブルの説明を始めた。

「まずこのケーブルはマッスルケーブルと言って本体の神経となり、電気信号で収縮する素材として使われることにより、様々なパーツへの対応と柔軟な動きを実現することが可能……なはず!!」

「はずってまだ試してないのか？」

「いや、パーツの方が遅れていてねロボ研にはパーツ作成を依頼するかもしれないからその時はよろしく」

「任せてください！ロボ系のパーツならT-A-N-K-a3のパーツの予備などもありますし！なんなら説明が終わったらすぐにでもやりましょう!!」

うおう！？予想以上にやる気出ているな葉加瀬…新しいロボット技術を学べることにテンションが上がったか？

「その時はよろしく頼むよ。次にパーツの説明だけど…お爺ちゃんよろしく」

「ほいほい。あゝパーツなんじゃがこれは頭部、右腕、左腕、脚部の4つに分けておる。機能的には外殻や筋肉の役割をしておる。外殻の素材はNFP R装甲を使用しており、これは熱や接触を感じ取る感覚神経を有する装甲であり、より人間らしい行動を可能…なはずじゃ」

「またですか…」

「データが少なくて断言はできないのじゃよ。続けるぞい、筋肉にはさっき話したマッスルケーブルが使用されており、装甲にはナノマシンが織り込まれており、パーツが損傷しても大体1時間くらいで修復される。」

そういえば漫画版でロクシヨウがレッドマタドールにボロボロにされたときにセラフシステムが発動して、全快になった後一刀両断してたな…

「動力なんじやが、ソーラーシステムに加えて、メダロット自身の動作によるエネルギー充填のオートマチックジェネレーターを併用し、半永久的に駆動する事が可能じゃ」

「なあ、白花。メダロットをエネルギー切れにする方法はないのか？」

「なんでそんなことを聞くんだろう…まあ、知っておいて損はないしね。」

「エネルギー切れにするなら日が差さない部屋でメダロットが動けない状態にしておけばエネルギー切れになると思いけど…何故そんなことを聞くし…」

「なんとなくだな…」

「さいでつか。まあ、傭兵ってのは情報もきちんとしておくものなんだろうね。」

「とまあこんな感じかの…」

「ふむ…ナノマシンの技術を使えばうちのロボットたちも強化できるかもしれないネ」

「あれ？これって茶々丸改造フラグ？」

「そういえば、茶々丸さんってここで生まれたんですよ？動力は何なんですか？」

「ぜんまいだよ」

「ぜんまい？あのキリキリ回す？」

「普通に考えたらぜんまいで動くってすごくね？」

「そのぜんまいだヨ、完成当初は外部電源だったんだが、今は魔力を含めたぜんまいが動力だヨ」

おいおい、魔力って…

「あのさ超、私たちは関係者じゃないんだけど…」

「あれ？秋葉原先生が元関係者って聞いたから白花も関係者だと思っただがナ」

「あんなの（自称正義）と一緒に働くとかマジ勘弁だわ」

働きたくないでござる！！

「それはすまなかったヨ、今度店に来たらおごるからそれで許してくれないカ？」

「許します！」『マスターその時はきちんとナエ様に連絡してくださいね』

わかってるよトモエ…私はそんなに信用無いかな

『念のためです』

さいですか…

「それじゃあ話も済んだことですし、パーツの調整を始めましょう！さあ始めましょう！！すぐはじめましょう！！！！」

葉加瀬エ…なんかもう待ちきれないって感じっすね…

「それじゃあ、このSAM型メダロット『トモエゴゼン』とNAV型『ナビ・コミュニン』の調整の手伝いをお願いするよ」

「任せるネ!!」

「ヒヤッハー!!」

葉加瀬がモヒカンになっちゃった…

カカツと調整完了

結局、あの後から葉加瀬はテンション青天井のままにして調整をした。

途中、目からビームをとかやっぱりロケットパンチをとか言って改造しようとしたところを近くにあった田中アームでぶっ叩いて気絶させた。

「さてと…トモエ。これがあなたの体になるからね」

『ではどうぞ』

「それじゃあ、メダルを入れて…と」

頭部のセンサーに光がともり、そしてトモエの稼働が開始した。

「どうかのトモエ？」

「センサー、可動部その他もろもろ問題ありません」

「それじゃあ軽く動き回ってみて」

了解と言って部屋を2・3周歩かせてみたが、特に異常は見受けら

れなかった。

「よし、記念すべき1体目が完成だ!!」

「ナビ・コミュニケーションは?」

「この後千雨に渡してメダルを入れて完成だから式体目だね」

身体を得て、千雨に襲いかからないか心配だけど…何とかするか!
! たぶん!!

「そろそろ日が暮れてきたから早く帰った方がいいヨ。ここの桜通りにはこわい吸血鬼がいるからナ」

ああ、エヴァンジェリンの事か…

満月で桜通りに行くと和えるって奴だったかな

「わあったよ。それじゃあ、またね!!」

そういつて私は研究室を後にした。

・
・
・

「超、よかったのか? 彼女は計画の障害になるかもしれんぞ?」

秋葉原先生も帰った後、私たちは計画について話していた。

「確かにあの人の技術は脅威になりかねません…計画を確実にしたいなら不干渉を約束させるか協力させるかのどれかをすると思ってました」

メダロットやナノマシンの技術、これを使われるとやっかいなこと

になりそうだが…

「彼女とは正々堂々と戦いたいネ。これは私の我儘…そう、ただの我儘ヨ」

そう言い放つ超の表情はプレゼントを待つ子供のような笑みだった。

・
・
・

白花 in 大浴場

寮の大浴場って広すぎね？そう思うくらいあるんだよね此処…

「ふいゝ極楽、極楽」

「親父臭いぞ白花」

「これはいいですねゝ」

「そうですねゝ特にマスターの裸体とか、裸体とか、裸体とか」

誰かこの変態メダロットを黙らせておけ。

しかし、なんでナビコとトモエが風呂にいたって？回想入りまゝす。

ゝ 回想 ゝ

千雨の部屋に行き、ナビコを起動してみるとあら不思議…起動して数秒で千雨にルパンダイブをかますという奇行に出たが、難なく撃退した千雨であった。

「そろそろ風呂に入るか…」

その一言を聞いたナビコは：

「マスターの裸体に興味あります！！」

「いや、お前一応機械だろ」

「防水加工余裕でした」

てな感じで一緒に入ることになったが…あの純粹だったころのナビコはどこへ行った：

〽 回想終了 〽

「まったくいきなり飛び込んでくるとか…勘弁してくれよ」

「マスターが素敵すぎるからいけないんですよ」

向こうがいちゃついているけど、私たちはゆっくりつかっているとしますかね

…ふう

「こういうのもいいですね。お嬢」

そ〜だね〜あ”あ”〜良き湯かな〜

どっかの腐り神のごとくところけきっていると入口の方から声が聞こえてきた。

「いや〜今日は引いた引いた」

「人を？」

「んな訳ないやろ！！なんやうちは車とか運転しないし、自転車より電車や！！」

「ごめんごめん。ジョークだってば」

「ん？あそこにいるのは転校生と長谷川と…人形？」

そこには同じクラスの佐々木まき絵、和泉亜子、大河内アキラ、明石裕奈が入ってきた。

「おいすー秋葉原さん」

「どもー明石さん」

湯船でとろけきっていると4人も湯船に浸かってきた。

「此処のお風呂広いでしょ」

「広すぎじゃね？下手な銭湯よりも広いじゃん」

「まあね、一度に100人近く入ったりするからこんなに大きいんだって」

一度に100人…多いな

「そーえば、そっちの蕩けきっているのと、長谷川さんに襲いかかろうとしているのは何や？」

ん？トモエとナビコの事か…ていうかナビコ少し自重しろや・・・

「ああ…あれは…」

メダロットについて説明中…

「へえーメダロットねエ…」

「トモエですーよろしくおねがいします」

メダロットってのぼせるのかな…このまま入れたままにしてみるか…
ガスッ！！

ん？何の音だ？

「あはは！蕩けきってるなこの子」

「うりゝなでなで」

「ぬへえゝ」

トモエ…変な声出すくらい蕩けきっているな…

「大丈夫か？長谷川」

大河内さんの声ができる方を見ると漫画で出てくる様なたんこぶ
ができており、水死体のように仰向けにぷかぷかと浮かんでいるナビ
コと拳が少し赤い大河内さんがいた。

どうやらさっきの音は千雨に襲いかかっていたところをげんこつ
の一発でもお見舞いしたのかもしれない。

「ああ、大河内か…ありがとう」

「どういたしまして、でも長谷川もあの子も本気で襲われているわ
けじゃないんだな」

「まあ…あれだ。子犬がじゃれついているようなレベルだしな」

向こうは向こうで談笑しているみたいだ。

それにしても一撃で頭部パーツを破壊したのかよ大河内さんの殴る
行動拳^{ハンマー}

そろそろ髪も洗うとしようかな…

「ヤベ…シャンプー切れてら」

どうすっぺ：仕方ない周りから借りるか…
そう思い、隣にいた和泉さんにシャンプー分けてくれないかとお願いすることにした。

「和泉さんシャンプー分けてくれない？」
「切らしちゃったん？ならええよ」

ありがたいと礼を言い一押し分けてもらうことが出来た。

「いやゝ内から持ってきた分だけでまだ大丈夫かと思ったけどそんなことはなかったよ」
「きちんと残りがどれくらいあるか把握しておいた方がええよ」
「そうするわ」

そんなこんなで洗い終わって湯船に戻ろうとすると：

「なあ：秋葉原さんちよつと聞いてええかな」
「ん？なんぞ？」

私、和泉さんに何かしちゃったかな？

「その傷はどうしたん？」

ああ、正義（笑）の魔法使いに打ち抜かれた傷か…
そういえば和泉さんは背中中の傷にトラウマみたいなのがあったな…

「昔、いろいろあって撃たれた。それだけ」
「撃たれたって：物騒やな」
「ただ運が悪かっただけさ」

本当は意図的に狙われてたけどまあ、運が悪かったで済みますか。

「えっと…その傷が疎ましいと思ったことってある？」

「特にないかな。別にあってもなくても同じだし」

事実だ。そんな傷よりも鶴子さんの修行でできた傷のが多いし…まあ、その傷は治せたけど、なぜか治せないんだよね…魔法の矢で打ち抜かれた所

「その傷も含めて私だからね。いつまでも傷が疎ましいと思ってる
と人生損な感じだと思うんだ。暗い事より、楽しいことを」

「傷を含めて私…か」

「そりゃ気になることもあったさ。でも、傷のある私も受け入れてくれる人がいるから私は大丈夫なんだ。和泉さんにもいるんじゃない？
い？悩みを聞いてくれる友人が」

「確かにそうやけど…」

私の場合は千雨やナエ姉、それにひなた荘の人たちが支えでもあったな…

「なら相談すればいいんだよ。それで申し訳ない気持ちだったら向
こうの相談にも乗ってやればいいんじゃない？」

「そんなもんでええんやろか？」

「いいんだよ。一人で悩んで答えが出なかったらほかの人を頼れば
いいのさ」

「そっか…ありがとな相談に乗ってくれて」

悩みを打ち明けてすっきりしたのかその笑顔は晴れやかだった。

「どういたしまして和泉さん」

「亜子でええよ秋葉原さん」

「それじゃあ私も白花でいいよ」

そしてまた湯船に浸かり、少しして大浴場を後にした。

・
・
・

部屋に戻って軽くくつろいだ後、詰め替え用のシャンプーを買いに行くことにした。

「ナエ姉、トモエ。ちょっとコンビニに行ってくる」

「あら？ どうして？」

「シャンプーが切れたから詰め替えの奴を買いに行くそうです」

「待ちなさい白花、麻帆良はなんか吸血鬼が出るとかで物騒だから竹刀でも持っていきなさい」

そういつてナエ姉はベッドの上に置いてあった竹刀を袋ごとこちらに投げ渡してきた。

「ありがと、それじゃあ行ってきます」

そういつて私は部屋を後にした。

・
・
・

道中桜通り近辺を通っていたが今日は新月。

桜通りの吸血鬼は満月の夜に出るっていうし大丈夫だろう

「……！！……！！」

ん？なんか声が聞こえるような…

「…貴…！！…し・た…！！」

「…悪…いが！！正…き…るが・」

どうやら声は森の方から聞こえるな…

とりあえず行ってみるか。面倒事だと思うが変人に襲われていたのなら目覚め悪いし

「ハハハ！！打ち取ったぞ正義の魔法使いである我らが悪の魔法使い…闇の福音を！！」

男性の叫び声が聞こえとっさに気の陰に身を隠す。

幼女一人に…ん？あれはエヴァンジェリンさん？と茶々丸さんか…それに対して向こうは杖を持った男が十数名か…多分魔法使いだろうな…

「つく！！魔法薬が尽きたところを狙ったか…魔力や道具が少なくなつたところを襲うとは大した正義だな」

確かエヴァンジェリンって満月以外は魔法役を使用して少ない魔力を補っていたんだよね。それが尽きたところを襲うとか卑怯臭いな…

「黙れ！！貴様に正義を語る筋合いはない！！」

お前らの方が語る筋合いはねえよ…

「闇の福音を倒したとなればおれたちは一躍有名人だぜこりゃ」

「クク、泣いて許しを請い、我々に従うのなら許してやってもらいますぞ？」

最低な奴らだなこいつら、奴らのうちの一人が白い木の杭を持って
いるが：たぶん不死殺しの杭なんだろうな：

「貴様のような下種にこの闇の福音が屈服するものか！！この薄汚
い豚どもが！！」

おゝさすがは『誇り高き悪』正義（笑）とは大違いだな：

さてと、できれば私の正体をばらしたくないが：魔法や気を使わな
いで倒すとなると面倒：まてよ？だったらスタンドを使えばいいん
じゃないか！そうと決まったら陣術師を配置して結界を作れば：

「この吸血鬼風情が！！正義の裁きを受けるがいい！！！」

そういつて男はエヴァンジェリンに杭を突き立てたが、それは刺さ
ることはなかった

魔法使いたちもエヴァンジェリン達さえも予想しなかった乱入者の
手によって打ち砕かれていた。

「なんd「失せろ屑がつ！！」ぐぶいあ！！」

乱入者の竹刀が男の喉を突きそれにより手から離れた杭を砕く

「つく！？何者だ！！貴様は！！」

「貴様らに応える名前はない：よ！！！」

そういつて近場にいた一人の顎を横一線に振りぬいた。

「あいにくさ、犯罪者十ペド趣味の奴らに名前教える勇氣もないんでさっさとくたばってくださいますか？」

顎を抑えてのた打ち回っている男の顔面を踏みつけながら白花は言い放つ：

「オラオラ！踏まれて感じてるのか？このドM野郎が！！」

ガスッ！ガスッ！ガスッ！ガスッ！

「つぐ、があ、やめっ、ひい」

「貴様：われわれ正義の魔法使いに何たる行為を：さては貴様、闇の福音の仲間か！！」

—— 自分で正義とかないわゝ
そんな事を思いながらまだ踏み続ける：

ガスッ！ガスッ！ゴシャ！

「たっ助け、止め、……」

ついに男は何も言わなくなってしまった。

「あれ？もう気絶しちまったのかよ：根性ねえな」

白花は魔法使いたちの方へ振り向き、竹刀を構える

「さて、覚悟はいいか？ゴミムシどもが…」

「つく…舐めるな悪の分際で！！光の精霊11柱、集い来りて、敵

を打て！魔法の矢11矢！！」

魔法使いの杖先から光が集まり、矢のようになって白花に向かってくる。

「あぶねっ変態シールド！！」

「ぎゃああああああ！！！！」

白花はさっきまで踏み続けていた男を持ち上げた手にして魔法の矢を防いだ。

「な！？卑怯な！！」

「勝てばいいんだよ！さっきお前らがやったみたいにな！！」

「ぐはあ！！！」

—— 因果応報だったかな？ こういうの…

そんな事を思いながらまた一人叩き伏せた。

予想外の出来事に混乱していた魔法使いたちだが、落ち着きを取り戻し始めた。

「こいつただの一般人じゃないぞ！！障壁を張れ！！」

「オラあ！！！」

ガキンッ

顔を狙った一振りは見えない壁に弾かれてしまった。

「形勢逆転だな…死ぬ！！魔法の矢、氷の矢13矢！！」

「W変態シールド！！」

「「ぎゃあああああ!!」」

またしても飛来してくる魔法の矢を倒れていた男を持ち上げ、盾にして防ぐことが出来た。

その後は、白花が攻撃をするも障壁に阻まれ、徐々に押されていた…

——配置も済んで後は結界を完成させるだけだが…さすがに使わないと無理そうだな…

「エヴァンジェリン!!これから起こることを他言無用で頼めるかい?」

「逆転の手でもあるのか?」

その言葉に白花は即答した。

「ある!!無ければこんなこと言わないよ!!」

「なら、私と茶々丸の安全が条件だ」

「了解!!それじゃあ…レギオン!!!!」

次の瞬間白花の周辺に剣と盾、そして槍を持ち、背中に翼のようなブースターを付けた人形が計4体ほど現れた。

「セイバー、ランサー構えろ!!」

ジャギッ

人形たちは手に持った得物を構え魔法使いたちの方へと向けた。

「攻撃開始!!」

号令が出された瞬間人形は魔法使いたちの懐に入っていた。

「グフ…」

「ウギヤアア」

人形たちの攻撃は障壁ごとぶち抜いており術者ごと切り捨て、貫いた。

「なんだ！？こいつらは！」

「繰り主だ！繰り主を狙え！！」

そんな声が聞こえてきて魔法使いたちは白花に集中攻撃を仕掛けるために詠唱を始めた：

「来たれ雷精、風精、雷を纏いて、吹きすさべ！南洋の嵐！雷の暴風！！！」

「ものみな焼き尽くす浄化の炎！破壊の王にして再生の微よ！わが手に宿りて敵を食らえ！！紅き焰！！」

様々な呪文が白花たちに殺到する、しかし：

「何のために盾があると思ってるのあんたら？」

白花の周辺に居た盾兵の盾が白色のビームシールドのようになり、魔法をすべて防ぎ切った。

「お：詠唱完了か。それじゃあ：精霊結界展開！！」

その言葉が響いたとき、あたりに幕のようなものが出来た。

「結界だと？こんなもので勝った気でいる気か！！魔法の矢27矢！！！！」

魔法使いの一人が魔法の矢を放とうとするが先ほどのように魔法が出る気配はない：

「んな！？どうなっている！！」

「駄目だ…障壁も…ギア！！」

「貴様あ！！いったい何をした！！！」

結界が張られて、魔法の使用が出来なくなり、障壁ももろくなったことにわからなくて慌てふためいている姿を楽しそうに見ていた白花は再び竹刀で攻撃し始めた。

「さていったい何をしたんだろう…ね！！」

そういいながら辺りの敵を倒していき、十数人いた魔法使いも5人程度になってしまった。

「手前から終わりだ…エクシードチャージ！！」

攻勢に出ていた人形たちは武器の柄をひねるとそれに応じるかのように剣は赤い輝きを、槍は蒼い焰が柄から噴出している。

「まっ待て！正義にこんなことをしてタダで…」

「もう遅えよ！！」

ズガアアアーン！！

轟音を立てながら突っ込んでいき魔法使いたちを粉碎して人形たち

を消した。

「JACK POTってか…」

死屍累々

そんな言葉が似合うような光景になった森の一角で白花はエヴァと茶々丸を背負いその場を後にした。

・
・
・

「おっおい：あんまり揺らすな。落ちる」

「我慢してよく二人背負うのきついんだから」

エヴァンジェリンが何か聞いたそうだけど今は茶々丸を工学部に運ぶことが先だ。

「それじゃあもう少し飛ばすね」

「な！？ちよつと待：ギャアア！落ちる」

ヤベ：なんかエヴァンジェリンの反応面白いな

お届け物です

茶々丸を工学部に預けた後エヴァを家に送ることにした。

「助けてくれたことを感謝する。ありがとう」

「どういたしまして：それじゃあ私は帰るね」

そういつてエヴァの家のログハウスを後にしようとしたが呼び止められた。

「待て…今夜はもう遅いうちに泊まっていくがいい」
「いいの？それじゃあお言葉に甘えるところかな」

エヴァンジェリンって案外義理堅いな…そうだ泊まるとなればナエ姉に連絡入れておかないと…

「エヴァンジェリンさん電話借りるけどいい？」

「構わんぞ、そこにあるから使ってくれ。後私はエヴァでいいよ」

「ありがと。じゃあ私も白花でいいからねエヴァ」

エヴァが脇の方を指さし、そこにあつた電話を使いことにした。携帯？部屋だよ…

そう思いながらワイヤレスタイプの電話の受話器を取った。

トゥルルルルルル…

『はい秋葉原ですが』

「あっナエ姉…白花だけどさ」

『あら？どうしたの』

「実は…カクカクシカジカで泊まることにしたから」

『わかったわ。それじゃああまり迷惑かけないでね』

「わかってる。じゃあね」

P i …

「それじゃあ明日あたりに聞いてもいいか？」

「構わないよ。で…何処で寝ればいいの？」

「そうだな…一緒に寝てやろうか？」

なんかいたずらを思いついたような笑みをしているけど…

「別にいいよ減るもんじゃないし」

「んな!？」

あれ？エヴァの顔が真っ赤だけど…何か変なこと言ったっけ？
そう思いながら寝室に行きエヴァと寝ることにした

「それじゃあお休み」

「ん…ああ…お休み」

ふああ…あ…明日は説明ないとか…めんどくさ
エヴァの体暖かいな…ZZZZZ…

第6話 趣味に走った結果がこれだよ（後書き）

エヴァがデレに入っているのはどっかの赤毛の鳥頭に重ねているからです。

次にキャラ設定を入れるのでレギオンの事はそこでどうぞ

キャラ設定（前書き）

予告通りのキャラ設定です。

パーツについてはもう一度キャラ設定を出すつもりなのでその時に
出します。

キャラ設定

名前 秋葉原 白花（ハクカ・スプリングフィールド）

性別 女

身長 159

体重 死にたいのかな？カナ？

宝具 招き舞う黄金劇場、水天日光天照八野鎮石
アエストウス・ドムス・アウレア すいてんにっこうあまてらすやのしずめいし

得物 隕鉄の鞆、玉藻鎮石、ルーンの包帯
レグナムエカエゾチムナ

SKILL

道具作成

神からもらったスキルの一つ、このスキルの応用で錬金術がしよう
でき調合次第ではかなりの物になる。このスキルのおかげで、造る
のは困難なものでも人が作れるものはほとんど作れるようになって
いる。

天才の頭脳

ありとあらゆる学問を理解することができる。

限界突破

鍛えれば鍛えた分だけ強くなれる。しかし鍛えなければまったく意
味がない。

黄金律

神からもらったスキルの一つ、金に困らないぐらい財貨と縁がある人生を送れる。

皇帝特権

本人が主張することで本来持ちえないスキルを短時間だけ獲得することができる。赤セイバーの能力

要は、がんばれがんばれでできる絶対できるがんばれもつと（ry

直感

神からもらったスキルの一つ、未来予知にも似た勘の良さである。騒動の原因や危険な場所、敵の行動を先読みすることができる。（ただし、感覚的でなんとなく感じてしまう。）

神鳴流＋我流

青山素子を師として、学んだ京都神鳴流。広く浅くと学んだため、本家大元には劣るし我流が混じっている。しかし、発想次第では、神鳴流に存在しない技を使えるので、上位ランクを倒すこともできるかもしれない。使用する得物は拳、剣、弓（秘剣 風塵乱舞の応用）

魔力制御

生まれついて魔力が少ないため、少ない魔力での魔力酷使が可能にすることができる。

簡易レート

魔法の射手1本⇨魔法の射手100本

並列思考

同時に複数のことを考えることを可能とする技術。詠唱中の行動や同時無詠唱をこなすことができるようになる。

魂息吹

空気中の魔力を吸収し消費した分を補うことができる。キャス狐のスキルの一つ

術式融合

特定の魔法を融合させるスキル。感卦法の要領でやっていけばよし。

例 治療×魔法障壁（全面型）Ⅱハートレスサークル

魔法適正

攻撃より防御の傾向が高く、魔力と気は量はそこそこだがその制御はかなりの物である。全ての属性を使いこなせるが、一点突破の適正には勝てないような感じである。上級呪文などはまだ覚えていないので、ひたすら初期の呪文を練習した。そのおかげで、初期の呪文はほとんどが一人前である。そして、防御、回復、補助に関しては（初期の呪文は）玄人クラスである。攻撃に関しては威力が低い代わりに数で勝負するといった戦法である。

始動キー エステウス・レグナス・アエストウス

現在の使用魔法

魔法の射手・治療・眠りの霧・魔法障壁・戦いの歌・戒めの矢・感卦法・武装感卦法

extraの技

花散る天幕、喝采は万雷の如く（バリテーヌ・ブラウセルン）、童ロサ・イクトウス
女謳う花の帝政）、燃え盛る聖者の泉、傷を拭う聖者の泉、時を縫ラウス・セント・クラウディウス
う聖者の泉、三度、洛陽を迎えても（インウイクトウス・スピリトトレ・フォンターネ・テンブステイス、
ウース）、

呪相・氷天、炎天、密天、呪法・吸精、呪層・黒天洞、呪層界・怨

天祝奉、常世咲き裂く大殺界

ヒガンバナセツショウセキ

現在のスタンドの使用可能ジョブ

上海、剣士、銃士、盾兵、弓兵、槍兵、陣術士、衛生兵、紅の暴君

術技

エクシードチャージ

武器に仕込まれた機関部を燃焼させ攻撃力を高める。さらに魔力を送ることで強化可能。

精霊結界

陣術士が4体で作り出せる結界。効果は魔法に使うような精霊の召集妨害（つまりは魔法の使用不能にする）、魔法物質の脆くさせる事も可能。（魔法障壁など）

本作の主人公であり、転生者。神の寿命関係の書類ミスにより病死した少女。さまざまな能力をもらって、ネギま世界に転生。スプリングフィールド家に生まれたが、正義（笑）の魔法使いに不意打ちに会い、重傷を負い強制転移させられ、公式には行方不明扱い。日本に転移させられ、そこで秋葉原親子に拾われ養子として受け入れられた。ひなた荘との交流もあり、たまにその温泉に行ったりしていた。

自分自身を守る力を身につけたいと思い、青山素子に弟子入りをし、神鳴流を収める。そして、友人であるカオラ・スウから六角貨幣石を受け取り、メダルを作り上げる。そして、卒業後、麻帆良に行き、1-Aに編入。趣味は機械いじり

メダル組

名前 トモエ

属性 速度

性格 スピード

所持熟練度 なぐる・ねらいうち・おうえん

メダフォース なし

白花が最初に作り上げたメダル。名前のモデルは巴御前。
性格は、真面目な感じではあるが、ボケるときはボケる。白花の呼び方は「お嬢」。

名前 ナビコ

属性 防御

性格 プロテクト

所持熟練度 まもる・なおす・せっち

メダフォース なし

白花が作り上げたメダル。現在は、長谷川 千雨をマスターとして
いる。

性格はおっとりした性格であるが、いろいろあつて変態化した。

第7話 金髪少女は何を思う：

昨夜は、侵入者の報告がありそいつらを撃退したまではよかった：

数が多く魔法薬をほとんど使いきってしまったのが運の尽きだったのかもな。そいつらは雇われの傭兵で私たちを消耗させる事が目的だったようだ。

そのせいで、撃退した後、気が緩んでしまい背後からの不意打ちを避けきれず、従者とともに負傷してしまった。

こちらは動けない状態になってしまい、奴らの要求を突っぱねて不死殺しの杭を使われそうになった時にこの学校に編入してきた白花と言う娘に助けられた。

一般人が裏の人間に勝てるわけがない、そう思い逃げるように言ったが、そいつは私を殺そうとした男の喉を竹刀の柄で突き、続けてもう一人踏みまくって倒してしまった。

魔法使いたちの攻撃を倒れている奴を持ち上げ盾にするなどのことをしていたが：奴らが冷静になったのか障壁を張り、魔法を使うが瞬動を使いよけていく。しかし、決定打の欠けた状態での戦闘は向こうが押しているようになった。その時、あいつはこれから起こることを口外しないでほしいと言ってきた。

おそらくこいつも魔法使いなのだろう：

私は茶々丸と私の身の安全を条件に口外しないことを約束した。しかし、そいつは私の予想と違い、そいつは人形を召喚し、戦闘を開始した。それは人形の形をした何かだった。魔力や気を使っておらず、それで召喚したとなると魔法使いではなく異能の持ち主なの

かもしれない。

そして、魔法使いどもを全滅させると茶々丸と私をおぶり、家に送ってもらった。

途中工学部で茶々丸を預けた。超たちはボディを交換すればすぐ終わるが、調整などもあるので預かっておく、と言っていた。

とりあえず、能力の説明や私のことなどを話しておこうかと思っただけ、もう遅いので家に泊めることにした。

普段の私ならさっさと追い出しているかもしれないのに、こいつを見ているとなんだか懐かしい感じがする。あの勝気な笑みや気に入らない奴はぶっ飛ばす！といった態度。私の初恋であり、すでに死んでしまったサウザンドマスターに似ているからかもしれない。そう思ったら未練がましいなどおもしろい少し苛立った。それでからかうために一緒に寝るか？といって慌てふためく姿を見ようとしたがあっさり了承してきた。理由を聞いたら減るもんじゃないんだと…こいつはどこか抜けている。そして一緒に寝ることにした。

ん、暖かい。こういうのも悪くはないな…

「知らない天井だ」

「お前は何を言っているんだ…」

そういえばエヴァの家に泊まったんだった。

さくやは おたのしみでしたね。

「今変なことを考えてなかったか？」

考えてませんよ。

「まあいい。お前にはいろいろ聞きたいことがあるから朝食を食べたら聞かせてもらおうぞ」

りょーかい。

・
・
・

「御馳走様でした」

「お粗末様」

意外なことに和食だった。洋食を食べているようなイメージがあったんだがな。

「さて、説明をしてもらおうかな」

「できれば、第3者に見られないような所は無い？」

「ならばこっちに来い」

そういつて私たちは家の地下に行った。

そこにあった魔法球の前に立ち、魔法球に入り、海辺の方にある家に入る。

「此処なら盗聴されることもないだろう。」

そうだけど念のため陣術師で阻害結界を作っておこう。

「その魔法でもない力はいったいなんなんだ？」

結界を作った後、引っ込めてスタンドについて説明した。
少女説明中…

「なるほどな…スタンド、パワーを持った像か。」

「守護霊的なものでもあるんだよ。スタンドは生命エネルギーだから魔力を使って無いんだよ。」

「だが、お前のスタンドは複数いたようだが？」

「私のは少し特殊でね。出せる数に上限があつてそれを超えなければ出せるよ。でも数が少なければ少ないほど強くなるの。」

そういつて【紅の暴君】を出す。

「これが今使える中で一番パワーがあるのだよ。」

『セイバーだ。よろしく頼むぞエヴァ』

「自我を持っているのか？」

「セイバーは特別だからね。」

「なるほどな…ということはお前のスタンドの能力は装備で戦闘タイプを変えることができるということか…」

鋭いね…大体は当たっているよ

「装備というか服だね。着せ替え人形みたいなものだよ。」

「なら、もっと増やせるということか。」

当たり前。暇な時や必要な時に造るつもりなんだよね

「まあね、少しずつ増やしていくと思うから。」

今の所は予定はないけど：

「次はエヴァの番だよ。」

「わかった。それじゃあ私のことを説明するか。」

幼J「誰が幼女だ！！！」少女説明中：

「真祖の吸血鬼か…」

「恐ろしいか？この不死の吸血鬼が…」

「全然。敵対しているわけでもないし、エヴァはエヴァでしょ。」

こうして話しているエヴァが人じゃないとか言ったとしても「それがどうした？」って感じだしね：

「そうか…そうだな。」

「それに、本当に恐ろしいのは狂信者だと思うんだ…」
「何？」

あいつら正義正義言ってるけどやってる事は外道だしな：

偶像のために人を殺したり、記憶操作の魔法をうまく使えば強姦してもばれやしないし：

下手な悪役より性質が悪い。

「実は私は魔法使いの家系でね。当時私には魔力が全然ないような状態だったの。」

「今は封印でもしているのか？」

「正解、家が良いとこだったのか、周りからは非難を受けていたんだよね。でも、家族は普通に接してくれた。それだけでもよかった

んだ。」

「……………」

「だけど周りはそれを許さなかった。私には兄がいるんだけど、兄は私と違って魔力がかなりあったんだ。で私みたいな存在は必要ないってことで私を排除しに来たんだ。自称正義の魔法使いがね。」

「なに？」

「そこで死にかけてスタンドが発現して、自称正義の魔法使いを殺した。そのあとは強制転移の魔法が暴走して日本に来て今に至ると……」

「そうか……なあ、白花一つ聞いていいか？」

どうぞ。

「貴様は何を思ってその魔法使いを殺した？」

実にシンプルな答えだよ。

「死にたくないから殺した。殺さなければ殺されていた状況だったから……」

「正義の魔法使いどもなら激怒しそうな内容だな。」

現実を見ないバカどもだしね……

殺してはいけないから死んでくれてな感じだな。

「私は臆病だから『力』を隠して関わらないようにしているんだよ。これが交渉した理由。」

「約束は守る。条件も満たしてくれたしな。」

ありがとう、エヴァ

「それはそうと貴様は魔法が使えるのか？」

「独学で初期呪文しか使えないし、魔力は少ないけど制御の方は結構自信あるよ。」

それが取り柄だし：

「そういえば剣術も使えるのだったな」

「京都神鳴流っていう所なんだ」

鶴子さんは鬼畜で素子さんは切れると阿修羅。

「ずいぶんやっているんだな。」

「手札は多い方がいいしね。」

エヴァがなんか企んでいそうな笑みを浮かべている。模擬戦フラグ立ったかな？

「ふむ、それなら一度手合わせをしてみるか？」

マジで来たよ。でも自分の実力を知るいい機会だし：

「わかった、どこでやる？」

「その広場だ。」

そういつて広場の方へ向かう。

呪符とかも転送しておくか：

「では、こっちは従者を使わせてもらおうぞ！」

そういつてチャチャゼロを召喚した。

「オ、ナンダゴ主人コロシアイカ？」

「一応模擬だが、半殺し程度にしろよ。」

容赦ねえなエヴァ…；

「ケケケケ、テメエモツイテネエナ。セイゼイ楽シマセテクレヨ？」

「おk、だったらこっちは道具類もまんべんなく使うとするよ！」

そういつて呪符を取り出し魔法媒体のために造ったルーン文字を刻んだ包帯を腕に巻く。そして【紅の暴君】を召喚する。

「用意はいいか？」

「いつでも…」

向こうも準備ができたみたいだ。

「いくぞ！！吸血鬼！！」

「貴様の力を見せてみる！！」

「切り刻ムゼー！！」

『行くぞ、マスター！！』

戦闘開始！！

エヴァたちは各個撃破を狙ってきたのかセイバーにチャチャゼロ、白花にエヴァが付いた状態になった。

「オラオラ!! 簡単ニヤラレルナヨ!!」

両手のナイフで攻めるチャチャゼロに対して：

『甘い!!』

それを捌き、隙を見つけて一撃を放つセイバー。

チャチャゼロはナイフの腹で受けるが、そのまま後方に飛ばされる。

「ナカナカヤルジャネエカ!!」

体勢を立て直して攻めることを再開する。

『お主もな!!』

ガキンツと剣を打ち合いを続ける二人であった。

「斬空掌!!」

白花の手から衝撃波が飛び、エヴァに襲いかかる。

「氷盾!!」

しかし、それは氷の盾によって阻まれる。

「今度はこっちの番だ!! リク・ラクラ・ラックライラック 来れ

氷精、闇の精、闇に従い吹雪け、常世の氷雪　行くぞ…闇の吹雪！
！！」

強力な力の放流が向かってくるが…

「障壁展開！」

白花の前に現れた障壁で受け切った。

「ずいぶんと硬いな…」

「これくらいないと師匠に殺されてますから…あはははは…」

どこか遠い目で語る白花だった。

「ふ、ならばこれはどうだ？断罪の剣！！」

エヴァは瞬動で接近し切りかかる。

しかし、白花はそれを気をまとった腕で受け止める。

「なんの、斬岩脚！！」

それをはじいて、かかと落としを放つ。

それを避けたエヴァだが、斬岩脚が当たった地面は砕け散った。

「気の扱いもかなりの物のようだな…」

「私はどっちかというと攻撃より防御の方が得意なんだよ！！」

そしてまた攻防が展開される。

「炎天よ奔れ！！」

放たれた呪符から爆炎が奔る。

「ぐっ呪符の威力はすさまじいな。」

「威力は呪符で補う戦法だからね!!魔法の射手、炎の矢189矢!!」

「魔法の射手、氷の矢189矢!!」

魔法の射手の打ち合いになったが、白花の方が打ち負け、前方に障壁を出した。

「そこだな…」

いつの間にか後ろに回り込んだエヴァに断罪の剣を叩きこまれた。

「ぐっ…」

前方の攻撃に集中していたためか後方の注意を怠ってしまい、まともを受けてしまった。

「貴様は強い、攻撃力は無くとも防御力、制御力は一級品の物だ。しかし、貴様には実戦経験が圧倒的に足りない。」

「その通りだよ。エヴァ…」

ふらつく足で何とか立つ白花だが、満身創痍であった。

「安心しろ、次の一撃で終わらせてやる。」

そういつて呪文を唱えようとする。

「終わってたまるかよ!!」

白花も呪文を唱える。

「ならば抗って見せよ!! リク・ラクラ・ラックライラック、契約に従い、我に従え、氷の女王、来たれ、とこしえのやみ! えいえんのひょうが!!」

辺りに冷気が立ち込める。

「とっておきを見せてやるよ!! エストウス・レグナス・アエストウス、来たれ風精、雷精、水精、氷精、火精、土精、木精、光の精、闇の精、幾多の精霊よ、我手に集い、眼前の敵を打ち滅ぼさん!!」

白花の手の中にさまざまな色の光が集まり虹色の光を放つの槍となる。

「終わりだ、こおるせかい!!!!」

「穿て、万魔の槍!!!!」

白花の周りは凍っていくが、すべてが凍る前に虹色の槍をエヴァに放つ。

エヴァは障壁を作るがそれを貫通してエヴァに突き刺さり、爆発した。

「つぐ…ここまで威力があるとはな。」

あの魔法を受けて下半身が吹っ飛んでしまったようだ。

白花はこおるせかいで凍ったようだな。

しかし、こいつは面白い。まだまだ荒削りなところもあったが久々に楽しい戦いであった。

経験を積みませれば化けるだろうな。

「オー御主人勝ツタカ。」

「チャチャゼロか。そっちはどうだったんだ？」

後ろから声をかけてきた私の従者は片腕がなく、胸に風穴があいていた。

「ギリギリノトコロデマケチマツタよ。御主人ガ凍ラセタ後、アイツモ消エテ胸ニ刺サツテイタ剣モナクナツタカラ動クコトガデキタンダ。」

お前の方は負けたのか…

「ソレニシテモ御主人モハデニヤラレタナ。」

「ああ、そうだな。チャチャゼロ」

チャチャゼロは私の後ろにあるクレーターを見てそう言った。

あの魔法、全ての属性を束ねてそれを放つ技か…

まったく非常識な奴だよ…

・
・
・

気が付いたらソファアの上で寝ていた。

確かエヴァと戦闘になって負けたんだな。

あゝくそなんか悔しい…

「起きたか。」

そこにエヴァがやって来た。

「ピンピンしてますね。あれは考え付いた中でも最高の威力を持っていたのに、自信なくしますよ。」

「今ではこうしているが、障壁を貫通して下半身が吹き飛ばされたぞ。」

そこまで行ったのか：

「それはそうとあれは全属性の魔法の矢を融合させたものなのか？」

「そうですよ。ほかにも範囲型の障壁に回復魔法を付加することで、しょう壁内の味方を癒すことができます。魔法もあります。」

「お前はほんとに非常識だな。一歩間違えれば魔法が反発して暴走して死ぬぞ?」

「そのための制御ですよ。」

これが私の取り柄だし：

「まあ、いいか。ところでなぜ上級呪文を使わないのだ？」

「その辺の知識がありませんから：」

さすがに雷の暴風や奈落の焰あたりを覚えておきたいかな。

「なるほどな：なあ白花お前が良ければいくつかの魔法を教えてやろうか？」

え”エヴァがデレただと!?!これは受けるしかないな、受けないな

んてありえない。

「こちらとしては願ってもいいことですが…どうしてですか？」
「お前に興味を持ったのだよ。その少ない魔力でこの闇の福音をこ
こまで追い詰めるほどの人材をここで手放すのは惜しいからな。そ
れとなれない敬語は使わなくてもいいぞ。」

まさか、一回の模擬戦で興味をもたれるとはな…

「了解。よろしく頼むよエヴァ。」

「私は厳しいぞ、弱音を吐くようなら氷神の戦槌が飛んでくと思
え。」

「鶴子さんは斬岩剣の式の太刀を素子さんは斬空閃を飛ばしてきま
した。あははははは…はあ」

「そ、そうか…」

エヴァ、この世には理不尽な理由で攻撃されることもあるんだよ…

…（遠い目）

主に照れ隠しで…

第8話 事情説明メンドクサイ

その後は1日がたつまで現在使える魔法の確認や限界まで出せる数などを報告し、軽く魔法の練習をした。独学もいいが未熟なうちは誰かに教えられながら修行した方がいいのかもな：

「防御や回復の適正はあるとっていたがここまでとは：お前が後衛に置くにはもったいない気がするな」

「どゆ意味？」

「貴様の攻撃は威力は無くとも牽制に使えるし、あの術式融合も使えば攻撃力の無さも補える。さらに神鳴流での近接も可能だし、弓を使えるのなら後方からの攻撃も可能。はつきり言ってどの距離でも活躍できると思うぞ」

つまりはオールラウンダーってことか。

「自分では器用貧乏のような感じがあるんだけど：」

「お前は自分を過小評価している。まあ、うぬぼれないだけかもしれませんが、行き過ぎた謙遜は逆に失礼だぞ」

それもそうか。でもそこまで評価してくれるとは嬉しいねエ：

「じゃあ状況に応じた対応をできるようにしないとね」

「そうだな。じゃあ無詠唱で魔法の矢を5000本くらい言うてみるか」

「了解」

飛ばしていくなあ。まあできるけど：

そんなこんなで時間が来て外に出ました。

・ ・ ・
エヴァの家でぷよ○よをやっていると、電話の音が鳴り響いた。

「ほらエヴァ誰かから電話が来てるよ。だからこの勝負は無効で」
だが断る!!」ちくしょう…」

絶対やりこんでるよこの金髪幼女…

「っち、じじいか…なんだ?いま私は忙し「ゲームで?」おまえは
だまってろ。」

サーセンWW

「なに?ちょっと待て。白花、お前にだとき。」

そういつて受話器をこちらに渡してきた。

「なんですか?ぬらりひょん。いま私はどうやってぷよ○よでエヴァに勝つか考え中なのですよ?っていうかなんで私がここにいることを知っているんだ?」

覗き見でもしてたんだろうな昨夜のことも含めて…

『フオフオフオ、それはすまんかったのお。実は昨夜のことで話を聞いておきたいのじゃが…』

昨夜…ああ、あのクソペド野郎どものことかな。

「学園長、広域指導員の人たちにあんな屑でゴミ以下の犯罪者が発生しないようにきちんと警備をしてくださいよ。って言っただい。以上」

『フオ!? ちょっとま』

何か言いそうだったしもう話すこともなく、面倒だったので通話を切る。

さてと、受話器を返して再開と行こうかな。

「言うこと言って返したか…」

「それしか言う事無いし、さて、もう一戦やろうぜ!!」

格ゲーなら得意だけどあえてぷよ○よにするぜ!!

はじめようとするともた電話が鳴った。

「なんだまた白花か？」

そんな感じでまた受話器を受け取る。

「なんですか？」

『君が全滅させた人たちについて事情を聴きたいからエヴァと一緒に学園長室まで来てくれい。以上じゃ』

前置きを話していると切られると思ったのかな？ストレートに用件だけ言って切りやがった。こっちの都合も聞かないで…めんどくさ、部活でもないのになんで休日に学校に行かなきゃならんのだ？

「エヴァ、なんかエヴァと一緒に学園長室に来てくれだとか」

「今からか？面倒くさ…」

ほんとにね……はあ

でも、逝かないといろいろと面倒事を持ってきそうだし一応行っておくか…

・
・
・

「で、何の用ですか？ぬらりひょん」

若干苛立ちを含めた声で聞く。読心結界も張ってあるな…偽装思考を展開しておくか。

周りには、ガングロ先生や脱げ女などの魔法教師及び生徒たちがそれなりにいた。みんなこちらを探るような目で見ている。ウザったい…十中八九あの戦闘を覗いてやがったな…

「フオフオフオ、いきなりひどいのお」

当たり前だ。せっかくの休日にくだらなことでつぶされたんだからこれくらい我慢しやがれくそじじい。

「休日に呼び出しながら面倒なことこの上ないので…むしろ迷惑料払えって感じですね。ところでこちらの方々は広域警備員の方たちですか？」

一応聞いておきますか…文句を言いたいし。

「うむ、そうじゃよ。」

「あなた方はこの学園を警備している立場なのですよね？なのにあんな屑どもに気が付かないとかありえませんよ。もう少しきちんと警備してくださいね。」

まあ、あれたぶん身内だろうけどな（笑）
なんか一部、頭にきたのか顔が赤いし：

「で、昨夜の説明でしたね。」

「そのことなんじゃが：あれはウチの職員でのお：」

学校関係者が生徒を襲う：これをばらせば新聞に載るかもな：

「はあ！？職員が生徒を襲うとかどんだけだよ：救いようのないカスですね。とつととクビにした方がいいですよ。」

「むう：そのことについては謝罪しよう。」

微塵も謝罪をしているようには見えないなこの妖怪。きちんと頭下げろやks

「一応言っておきますが、そんな誠意のかけらも存在しない謝罪はしない方がいいですよ。相手をイラつかせるだけですから。」

妖怪が唸っているがどうでもいいな。

「話が進まないからさっさと要件言ってください学園長。」

とりあえず聞くだけ聞いておくかな協力する気は全くないけどね：

「う、うむでは初めに：君はいったい何者なのじゃ？」

一応、一般人（笑）だけだな：

「その質問の答えは1—Aの秋葉原　白花としか答えられませんね。」

裏ではいろいろやっているけどね。

「そういう意味ではなく、君は魔法使いなのかな？」

ストレートに聞いてくるな。

「科学という名の魔法なら使えますが？」

昔の人から見たら今の技術は魔法になるだろうしね。

「そうか：なら昨夜のあれはいったいなんなんだね？」

「普通の剣術ですが？」

「それではない。そのあと出した人型の何かじゃ。答えよ。」

「なぜわざわざそのようなことを答えなければならいんでしょう。しかもこれを知っているということは昨夜襲われているにもかかわらず警備員や警察に連絡しないところを見るとあなたもロリコンのペド野郎の一種なのですね。下種野郎。」

「フォッ！？　違うぞい！　この学園には魔法使いが存在しておるのじや。」

「病院に行った方がいいですよ。」

「頭がかわいそうな人じゃないわい！　実際に此処にいる生徒と教師はその関係者なのじゃよ。」

「病院が大儲けですね。」

病室が満室になったら緊急搬送されてきた人が大変だろうな：

「そのネタはもういいんじゃない、魔法は秘蔵されるものであるから知らんのも無理はないのじゃよ」

秘蔵（笑）認識阻害に頼らなきゃ満足に活動もできない奴らが何を言うんだか：

「で、昨夜の犯行は一部の関係者が暴走してあんなったわけだから…」

「それでも罪は罪です。きちんとクビにしてくださいね。ちなみに私がしたことは正当防衛なので問題ありません。私は反省も公開もしていません」

やりすぎ？いいえ、あれくらい過剰防衛にはなりません：多分。

「まあ、彼らはクビにして本国へ強制送還になっておるから問題ないじゃろ。それで、わしが聞きたいのは彼らを倒した力じゃ」

「？、魔法にはあんな力もあるんじゃないの？」

ワターシ、マホウナンテシーリマセーン。

「いや、あんな魔法は存在しないのじゃよ」

「じゃあわかりませんね。この力は生まれつきで実の所よくわからないんですよ。一応この力の呼び名はなんか守護霊みたいな感じですからスタンドって呼んでます」

生まれつきですよ？生まれる前に決まったんですけどね。

「スタンド：背後に立つ者という意味じゃな」

「ついでに言うておくと魔法のことは既にご存知ですよ」

みんなが驚いた表情になった。

「何故、魔法のことを知っておるのじゃ」

「それは、「それは私が教えたからだよ爺」 いっちゃっていいのエヴァ？」

思わぬ人物による介入に周囲はざわつく。

「何を考えているんだ！？エヴァンジェリン。魔法は秘蔵されるものなんだぞ！！」

なんだ急に絡んできたくくガングロ

「別に問題ないだろう？本人は自分に向けられた魔法を幾つも見ただから。当事者として説明してやるのが礼儀といったもんだろう」

そばには茶々丸もいましたけどね！だから向こう側にモロばれです。問題ないけど：

「そういう時は記憶を消せばいいだろう！！」

勝手に人の記憶をいじるとかマジデむかつくから止めてほしいんだよな。

「事前に何かするようなら覚悟しておくように言ってありましたから。死にかけをつぶすなんて簡単なことですよ？」

嘘です。私がエヴァに何かするわけじゃないじゃん！！後が怖い…そこ、ヘタレっていうな！！

「なんと、無茶なことをするんじゃない…」

「後から実力がわかって結構後悔しましたよ。」

「それにこいつはなかなか面白い『力』をもっているしなこいつの身柄は私が預かる。文句はないな？」

うわゝ全員黙っちゃったよ。さっすがエヴァンジェリン私にできないことを平然とやってのける。そこに痺れる！！憧れる！！

「まあ、この子のことはエヴァに任せるとして、夜の警備「お断りします。」フォ！？」

これ以上面倒事に巻き込まれたくないし…

「別に金に困っているわけでもないし、自分を守る程度の力があればそれでいいし、わざわざ命を張るとか馬鹿らしい事この上ない。」

「なっ！！あなたは力があるというのにその力を誰かを守るために使わないというのですか！！」

なんだウザったい脱げ女が…

「なんで力があれば誰かを守らなければいけないんだ？報酬も期待できず、感謝されることもないのに…」

「あたりまえでしょう！！魔法使いは「私は魔法使いじゃないよ。」黙りなさい！！世のために尽くす事そして正義なのですから。」

あの変態どももだけどマジで薬物をやってんじゃないかと思うくらいうぬぼれていやがるな…

「あいにく、私は自分のことで手いっぱいなんですね。見ず知らずの誰かを守るより、私の大切な人たちを守るくらいならそれでいいんだし。」

これだけは偽りのない本心だ。

千雨たちといつものような会話をすること、おじい様や超たちと研究のことに没頭すること、トモエたちの面倒をみる（みられる）こと、エヴァとの修行も楽しいしな。こんな日常を守ればそれでいいし。

「そんな低い志では立派な魔法使いになるなんて到底無理でしょうね。」

なんか脱げ女がドヤ顔で言ってるけど…まあ、他人の信念なんて価値観の違いからごみにもなるしね…っていうか私は立派な魔法使いそんなものになるつもりなんてないんだけどね。

「それに悪である闇の福音を助けるなんてどうかしてるんじゃないですか？」

あ” この糞ビッチいま何を言いやがった？

「彼女は封印されているとはいえ凶悪な吸血鬼なのですよ！！それを「黙れ」っぐ！？」

こいつは他人だけの判断で動くバカだけどこまで言われて黙ってられないな…こっちが礼儀正しい大人の対応してればつけあがりやがってよ！！

思わず脱げ女の胸ぐらをつかんだ。

「さすがの私でも友人をバカにされてはいいそうですか、なんて態度にはなれないんでね。」

私はエヴァのことをまだあまり知らない。

彼女がどれだけ苦しんで生きてきたかは私は知らない。
だけど、

「あんま舐めた真似してんじゃねえよ。屑が…潰すぞ。」

私は守りたいものを守るくらいのはしたいからこのくそつたれを許すわけにはいかない…

「なっ!?! あなたは闇の福音に味方をするというのですか!?!」

「私は私のためにエヴァンジェリン・A・K・マグダウエルを味方をする。ただそれだけだ」

そういつて手を放してやった。

それにしてもガンクロ先生は絡んでこないな? 自分の生徒がケンカ売っているからすると思ったんだけどな…そっちを見てみるとなんだか複雑そうな表情をしていた。なんでだろう?

「あなたは騙されているのです!!」

「結構、それなら私の見る目がなかったというだけだし。」

「二人ともそれくらいにしてくれんかのお。」

一触即発の空気の中ぬらりひよんの静止の声が聞こえた。

「白花君、警備はしなくともよいが、このままでは不完全燃焼であろう。」

「その通りだな。とりあえずそのバカをつぶさなければ気が済ま

ないな」

なんかキーキー言っているがどうでもいいな。

「実は白花君の力を見るために模擬戦をさせようと思っておったのだが…その高音君と戦ってみるかね？」

願ってもいない、死なない程度に相手をしてやるか…

「なっ！？学園長。生徒に戦えというのですか！？」

なんか常識的だな、ガングロ。原作と違って少し柔らかくなったな。麻帆良の正義抹殺リストから外しておくか。

「なにも殺しあえとは言わん。お互いに鬱憤を発散させることと白花君の能力を見ておきたいからのお。」

「しかし…問題ありませんわガンドルフィーニ先生私がこんな悪に負けるはずがありませんもの。」高音君…説得は無理みたいだな。しかし、無茶はするんじゃないぞ。」

悪…ねえ。いったい何を持って悪と決めつけているのだろう。正義の魔法使いは…

「では、今夜の10時に世界樹の広場前にて秋葉原 白花と高音・D・グッドマンの模擬戦をするぞい。なおこの模擬戦は従者のありでの戦闘でよい可能？」

「いいよ、そのくらいのハンデくらい付けてあげるさ。」

レギオンを出せばいいしね。

「首を洗って待っていなさい。」

「首だけ？ 洗うならきちんと全身洗わないと面倒だよ？」

「そういう意味ではありません！！」

さてと、私の友人を侮辱したことを後悔させてやるか…

第8話 事情説明メンドクサイ（後書き）

一部のキャラの性格を変えてみました。そのままだとなんかつまらないでしょう…

第9話 VS脱げ女

その後は、解散して工学部へ行き茶々丸を引き取った。ハカセ曰く前の身体より数段上に強化したらしくたとえ魔法の矢を十数発受けても大丈夫らしい。私たちのナノマシンを使うことで茶々丸たちも強化されたみたいだ。なお、茶々丸はこのことに関して、「だって私は4体目ですから…」それどこの綾波？

そんなことは置いといて、夜まではゆっくりしていくかな…ちなみに今はロボ仲間を紹介しようと寮へ向かっていった。

そんな時、今まで黙っていたエヴァが話しかけてきた。

「ところで白花…聞いていいか？」

「どうしたのエヴァ？」

「何故私の味方をするのだ？確かに私はお前を気に入っているしかし、そこまで肩入れする理由はなんだ？」

今まで理解者がいなかったからか…誰かが味方をしてくれるという状況に慣れていないのかな？

「言っただよ、私は守りたい人たちを守ればそれでいいって。その中にエヴァも入っているからかな」

「私はそんなに弱くはないぞ…」

「強い弱いの問題じゃないんだ。たとえその人が強くとも、弱くても私はその人の味方でいると私が勝手に決めたからね」

「っふ…本当に自分勝手な奴だなお前は…」

その通り、私は自分が大好きで自己中なのだから。

「秋葉原さまは「白花でいいよ」では、白花さんはずいぶんマスタ
ーと仲がよいのですね」

やっぱり他人から見ると仲がいいように見えるのか……それはうれしいことだな。

ただし、ツンデレは顔を真っ赤にしながら照れ隠しをしようと慌てふためいている。

「っな！？ ななな、何を言っているんだこのボケロボー！ 私と白
花はそんな仲がいいとかそうじゃなくて…」

「えっ私のことは遊びだったというの!?! あんなに暑い夜を共にしたのに!?!」

ツンデレはいじるもの。(キリッ

「なに誤解をさせるようなことを言っているんだお前は!!」

戦闘的な意味では熱い夜だったけどね……

「まあ、それはそれは今夜はお赤飯でよろしいですか？」

[illegible]

Oh
若本ボイスで聞こえてくる叫びだな。

「茶々丸さんツンデレは？」

「いじるものです。（キリッ）」

ガシツ

私たちは固い握手を交わした。

「これからよろしく願いますね」

「はい、マスターの可愛い姿は高画質で保存するのが私の使命ですから」

こうして、私は新たな戦友を獲得した。

「やだ…なにこれ…」

可愛い物は愛でよう同盟が結成された瞬間です。

・
・
・

そんなこんなで寮につきました。

「あっお嬢お帰りなさい」

「ただいまトモエ。あっこの人たちはお客さんだよ」

「エヴァンジェリン・AK・マグダウエルだよろしくな」

「絡繰 茶々丸です。以後よろしく願います」

「トモエと申します。白花ともどもよろしく願います」

それぞれが自己紹介をした後、みんなを私の部屋に案内した。

部屋に着く前に千雨たちにエンカウト

「ん、白花か…大丈夫だったのか？変態に襲われたって聞いたけど…」

私はその程度の相手に後れを取っているのか…

「まあ、逆にやりすぎて過剰防衛になって警察にお世話になりそうだけだな」

大丈夫だ、問題ない。

と、そんなやり取りをしてついでに話したいことがあると言って一緒に部屋に来ることになった。

そして、魔法のことなどを話しておいた。

「以上が魔法に関することだよ」

「はあ、くだらねえ〜…」

意外と冷静なんだね千雨は…

「むしろ、その魔法使いがいるから攻めてくるんなら関係者とかがいなくなればいいのに…」

「それで自分は町を守っている正義の使者とかまさに自演乙ですね」

それぞれの感想ありがとうございます。

「で、私のあれを覗き見されて呼び出されて、エヴァのことを侮辱されたから今夜模擬戦という名の処刑があるから」

もちろん向こうが処刑される側だけだね…

「お前は、自分のことはどうでもいいのに友人や家族のためなら容赦ないからな…向こうの奴もご愁傷様だな」

「ところで昼ごはんはどうしましたか？」

そういえば、長話されてまだ食って無かったな…

「まだ食べていないな…材料はまだある？」

「はい、それなりに残っております」

「じゃあ、私を作るから皆は待ってて」

何を作ろうかな…ご飯はあるし、みそ汁と鮭でも作るとするかな。

・
・
・

私を苦しめたのは麻帆良の魔法使いの認識阻害結界によるものだったらしい。魔法使いどもは、これを使うことで魔法を見られてもあ
る程度の修正が聞くようになるらしい。そのことを告げられた時は
静かながらも私は怒りを覚えた。こっちはそんなもの関係ないのに
巻き込みやがって…

「マスター大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ」

そんな中私のわずかな変化にきずいてくれたナビコ。

「大丈夫かな？ 軽くむかついたただけだから…」

麻帆良に来た当初誰も麻帆良の異常に気が付いていなくて、いじめ
られていたが、彼女がいたからこそここまで来れたのかもしれない…

「おい、長谷川「千雨でいいよ」そうか、なら私のこともエヴァで
いいぞ。それでだ…白花はいったいどういうやつなの？ 本人は自
分大好きの自己中だと言っているが私にはそうには思えないんだが
な」

「そう見えるが、あいつは自分勝手だよ。ただ、失うことに恐れて
いるだけなんだ」

そう、剣術を習う理由も自衛の手段を増やすためでなく、失いたくない。ただそれだけだったから。

「あいつは一人になることが嫌いなんだ。だから家族や友達を大切にしている。本人は利用しているみたいだと言っているけど、私たちは十分対価をもらっている。だから、悔やむことは無いのに何かと背負おうとするんだよ」

だから、私も強くなろうとした。あいつに無駄に背負わせないためにも：

「まあ、それが人間らしいことなんだろうな：他人を助けるという事は正義とか悪とか関係なく結局は自己満足でしかない。自覚している分どつかのアホどもよりましだな」

確かに、聞いただけじゃ正義だとか言っただけで罪を犯していることに気が付かないのが愚かなんだろうな。まったく魔女狩りじゃないんだからしっかりしろよな。

「真面目なマスターハアハア。メモリーに焼き付けておかないと」
「これはこれでなかなか良いですね：録画中」

「ん？」

「おや？」

後ろでナビコとエヴァの従者の茶々丸見つめあっているが：

「可愛い物は？」

「至高の存在です！！」

ガシッ

そういった後二人？（式体？）が固い握手を交わしたことにめまいが起こる。

「お互い、従者に苦勞かけさせられているな…」

エヴァンジェリンお前もなのか…

・
・
・

昼ご飯を食べた後、軽く体を動かして、ギルティ○アをみんなで対戦した。一部を除いて私が圧勝したが、その次でぷよ○よで勝負を挑まれ見事ボタンキューにされてしまった。畜生、みんな強すぎだコノヤロー！！

そんなこんなで夜になりました。

さて、いつもの包帯をして、今回は普通の木刀をいつでも転移できるようにして、戦闘準備完了。

「クククッあまり弱い者いじめはしてやるなよ？」

気が向いたらね…

「私は行けないけどさ、徹底的にやっちなえ」

もちろんそのつもりだよ。

「それにしても私が連れて行く意味はあるのですか？」

「今回はしっかり実戦形式の模擬を見ておけ。戦いをみるのも稽古のうちだ」

「了解」

そういつて私たちは世界樹の広場へと向かった。

「さて、覚悟はよろしいですか？」

「そんなことよりおうどん食べたい」

脱げ女がなんか言っているがどうでもいいな。
あれ、エヴァがなんか苦笑しているが：

「少しはまじめにやったらどうだ：」

真面目にやったら殺しちゃうじゃん。

「くっ今のうちですわよそんな態度でいられるのも：」

「「どうしてこうなった：」 or z×2

えーと、佐倉さんとナツメグさんだっけ？運が悪かったとしか言えないやごめんね。

「それでは、両者、準備はよろしいかな？」

「いつでもいいっすよ」

「こちらもよろしいですわ！！」

「「以下同文：」」

頑張れお二人さんそのうちいいことあるって今は倒させてもらうけ

ど…

「頑張ってくださいお嬢」

「では、はじめ!!」

それじゃあ処刑を始めますか…

・
・
・

「先手必勝ですわ!! 百の影槍!!」

高音の影から無数の槍が飛び出し、白花へと襲い掛かってくる。

「はいはい、ワロスワロス」

白花の周りに盾兵が召喚され、すべての影の槍を防ぐ。

「それが君の力なのかのお」

「そ、まだまだ出せるよ」

学園長の質問に答えている間に、魔法の射手や黒子、影の槍が殺到する。

「よそ見している場合ですか!!」

全てが着弾して土煙が上がり、白花の姿が見えなくなる…

「これだけやれば少しくらいは…」

「やりましたか？」

フラグ乙

「何かやったのかな？」

そこには傷一つない白花の姿があつた。

「っく、どれだけ固いのですか……」

「きちんと防げばこのくらいはねエ……」

焦る高音たちに対して白花は落ち着いて対処する。

「それにしてもあなたたちは弱すぎですね：強気な発言はもう少し実力をつけてからにしてほしいですね：m9（ハム）プギャー」

「なっなんですってええええええ——！！！！！」

プライドが高い高音はその言葉に怒りを覚え、突撃しようとしていると…

「お姉さま、これはきつと相手を揺さぶるための言葉です！！落ち着いてください！！」

従者の声に我に返り、落ち着こうとしている。

従者の方がしつかりしてね？

「その通り、指揮をするものは常に冷静であれ、そうじゃなきゃ勝てる勝負も勝てないしね。」

「つくわざわざ挑発をして、動揺させようとしたんですか……この卑怯者！ ！ ならばこっちも切り札を出させてもらいます」

高音の背後に仮面をつけた巨大な黒子が出現する。

「これが私の操影術、近接戦闘最強奥義、黒衣の夜想曲ですわ!!
これであなたの勝ち目はありませんわよ!!」

そういつて黒衣の夜想曲から大量の槍が飛んでくる。

「多すぎて防ぎきれないな」

そういつて白花は初めてその場から動いた。

「従者のお二人さんには悪いけど、そろそろ退場してもらおうよ」

そう言い放ち、白化を中心に障壁が展開し、白花の影から異様に長いマスケット銃を取り出した。

「エストウス・レグナム・アエストウス、耐えよマックス、勇気を
持て! 神を信じる者は行わん!」

その詠唱に何人かはこの詠唱がなんなのか分かったようだ。しかし、
それを歌っていることに理解はできていない。既存の魔法にはこの
詠唱は存在しないのだから。

「何なんですか! その妙な呪文は!!」

「完成する前に潰します!! メイプル・ネイプル・アラモード、も
のみな焼き尽くす浄化の炎! 破壊の王にして再生の微よ! わが手に
宿りて敵を食らえ!! 紅き焰!!」

「さっきの言葉道理なら狙いは私たち!? ラプ・チャプ・ラ・チャ
ップ・ラグプウル、全てを飲み込む大なる海よ!! 原初の始まり
にして荒ぶる意志なり! 我手に現れ、怨敵を飲み込まん! 蒼き水流
!!」

二つの魔法が襲い掛かるが、強化された障壁に阻まれ傷一つつくことは無かった。
詠唱は続く…

「いざ行かん！山にも谷にも喜びは溢れ、明日こそ、うれしき戦の日！森や牧場の獣ども、空を翔け行く鷲や鷹、勝利は我らがものなるぞ！我らがもの！我らがもの！そして、有象無象の区別なく私の弾頭は許しはしない…」

「やはりこれは…」

「高畑先生、これが何か知ってるんすか？」

シスター姿の美空が知っていそうな高畑先生に聞いてみる。

「ああ、これはカール・マリア・フォン・ウェーバーが作曲した…」

白花はマスケット銃の銃口を正面に向け引き金を引く。

「『魔弾の射手』」

ドンツと音がした瞬間、高密度に圧縮された弾丸状の魔力の塊が不規則な青い軌跡を運びながら二人に襲いかかり、障壁を貫通して両腕と両足を打ち抜いた。

「ああああああ、痛い痛い痛い痛い！！！」

「腕がああああ足がああああ！！！」

「面白そうだから使ってみたけど消費魔力も大きいし、そんなに長

く保てないし、詠唱も長いから要改良ってところかな…急所は外してあるから二人はリタイヤね。治療魔法が使える人は早く治療してね。急所を外してあるけど放置するとやばそうだから」

そういつて二人を観客の方へと転送する。

二人は治療魔法を受けて死ぬことは無くなった。

「さて、後はあんた一人だね」

獐猛な三日月の笑みで狩り人は獲物に話しかける。

一瞬で従者達がやられて茫然としていた彼女が自分の声を聴いたとたん、我に返る。

「しかし、この黒衣の夜想曲の前に物理攻撃なんて通用しませんよ!!」

魔弾の射手は魔法攻撃である。冷静になればわかることだが見たことのない魔法による予想外の事態に混乱しているようだ。

「そういえばさあ、あんたら自分たちはこの土地を守っている正義の魔法使いなんだよね？」

不意の問いかけに高音は当たり前だと答える。

「でもそれってあんたたちに原因があるんじゃないかい？」
「そんな訳ないじゃないですか!!」

否定するように叫ぶ高音：

白花は考えるように額に指をたたきながら言葉を発する。

「本当にそうかな？ここの襲われる理由はまず世界樹の存在、次に図書館島の魔道書そして、関東魔法協会の存在」

その言葉に学園長は顔色を変えた。

「何故、関東魔法協会が狙われる理由になるのかね？」

「その理由はあるたらの関西に対する対応だよ。大戦時、関西の呪術師を半場無理やり徴兵して、死んでいった人の家族に対して謝罪もせず放っておくだけ。それで復讐しようとするだろうね」

ちなみにこの知識はまほネットからきちんと調べました。

「それは、正義のために散っていったのだから仕方ないことで…」

「ならあんたは、自分の両親が無理やり連れて行かれ、そこで犬死しました。はいさよならって対応されたらどうでしょう？」

「そっそんなの許せるわけないですわ！！」

高音は白花のたとえに怒りの色を示す。

そんな事になったとしたら、その人を許せる気がしないと思ってしまった。

「あんたが言っているのはそう言う事なんだよ…次に図書館島だがこれは普通に別の場所に移せばいいだけだ。そして、世界樹はもともこの場にあるという事は日本の魔法使い、この場合は陰陽師や呪術師を率いる関西呪術協会が管理するものであると思うが？」

そこは今まで黙っていた学園長が答えてくれた。

「それは、この学園都市ができる頃わしたちが…」

学園長は言い訳を言うように呟いたが：

「土地を買いあさって奪い取ったというわけか…はたして何人強制的に退去させられたんだろうねエ…」

その言葉に学園長は凶星をさされ冷や汗をかく。どうやら何世帯かを強制的に退去させたらしい。

「まあ、そんなことはどうでもいいな。え〜と高音・ウホ・いい男さん「高音・D・グッドマンです！！なんですか！！その『やらないか？』的な名前は！！」サーセンwwww」

もちろんわざとです（笑）。

「あなたは人々を守るのが正義といいましたよね？」

白花は再度問いかけるように話しかける。

「あっ当り前ですわ…」

白花の問いに答えるもその声に少し前までの力強さはなかった。

「ではなぜ、何にも関係ない一般人を盾にしているのですか？」

「なっなんですって！？」

怒り交じりの声を上げる。

「おや？気づいていなかったのですか？何故、これだけ攻め込まれる要素が存在する麻帆良に何の関係もない一般人が生活しているか？いや生活させられているか？」

その問いの意味が解らないのか、その表情からは混乱してるように見える。

「この学園は魔法使いの本部でありながら一般人が生活しているつまり魔法の秘匿を盾に昼間攻め込めないようにしてあるのですよ？」

そう、”魔法は秘匿されるもの”それは、関西も同じことである。向こうは平安時代、魔都と呼ばれる京都を管理するためにできたので仕方ないがここは特に危険なものはなく、あるとすればそれは魔法使いたちが作り上げたものだけだ。

「違う…」

高音は事実を聞かされうつむいてしまい顔色は真っ青になってしまった。

信じていた…自分はこの学園の人たちを守っていると…しかし、真実はその守るべき人を盾にしている。なら、自分のしてきたことはいったいなんだったんだろう…

「そもそも悪と対になるのは善であって正義ではありません。正義と対になるのは別の形の正義です。その違いも判らず、他人の示された正義を盲目的に信じているなんて滑稽ですね」

それでも、白花は事実を突きつける。

「違います…」

否定をする、しかし、それは自分が行ってきた行為である。

「違います。あなたたちがやっていることはただの尻拭いなので
すから。それに、記憶を消す？ふざけんな！記憶はその人だけの財
産だ。それをそっちの都合で消すなんて傲慢すぎんだよ！！」

「私は……」

自分の信じてきた正義、それは一体なんだったのか：

「それに吸血鬼だから悪？なにも知らないくせに種族的に悪と決め
つけてんじゃねえよ！！十人十色、人間だって悪はいる！！主に昨
夜一人に対して、消耗した少女たちを十数人で襲いかかったごみ野
郎どもだな」

「私は正義……」

今の高音には現実を見ないことが精一杯でうわ言のように繰り返し
ている。

「それに、危険から守ると言っているが魔法使いの方が危険な存在
だろうが！！魔法という名の見えない拳銃を持ち歩き、罪を犯して
も記憶を消してなかったことにするといったことも可能だ。そして
いつから正義は免罪符になった？正義のためなら何でもしていいの
か？そんなこともわからない奴なら最低だな……」

かつて、正義の魔法使いに襲われ、それまでの自分を殺された、だ
からこそ言える言葉だった。

「違う…違う、違う違う違う違う違う違う違う違う違う違う違
うあああああああああ！！！！」

あまりの信じられない事に耐え切れず高音は絶叫し、白花に襲いか
かってくる。

！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！オラ！
！オラ！オラ！」

『無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！
！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！無駄！
！無駄！無駄！』

最後に拳を後方に引き溜めを作ってぶちかます。

「オラアアアア！！！！」

『無駄アアアア！！！！』

高音をとらえていた氷柱ごと殴り飛ばす。高音の状態は目が虚ろで
心身ともにボロボロであった。

そのあとは治療を施して一応肉体は全快にした。

偽りの正義は打ち壊され、その後、どうなっていくのか…そのこと
は誰も知らない。

第9話 VS脱げ女（後書き）

終焉の紅い月はアルクさんです。わかる人はわかるかもしれませんが魔弾の射手はHELLSINGのリップバーン中尉の弾丸です。

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌(前書き)

PV30000突破やりました!!

でもこの話はやりすぎた…

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌

僕の名はネギ・スプリングフィールド

父さんは英雄で尊敬できると思うけど父さんがいない今、妹のハクカの為にも僕はしっかりしていないと：

「お兄ー見てください。こんなに真っ赤なキノコが取れましたよ」
「どんなキノコなの？」

見せてもらったけどホントに真っ赤で一般的なキノコの形とは違って炎みたいに伸びているよこのキノコ：

どう見ても毒キノコですね本当にありがとうございます。

「さあネギ兄様、味見を…」

「いや！？これどこからどう見ても毒キノコでしょ！！ていうかなんで僕なの！？」

「何を言っています！実はおいしいキノコかもしれないじゃないですか！というわけで逝ってきなさい！！」

「逝きとうないでござる！！」

そういつて白花の手にあったキノコを奪い取り、森の方へ投げた。ちょうど投げた所にイノシシがいてキノコがイノシシの口に入った途端苦しそうにのた打ち回ったのちに動かなくなった：

「……」

「…弁解は？」

「ついカッとなって食べさせようとした。後悔はしていない」

「いや！？後悔はしてよホントに…食べてたら大変なことになってたんだよ！？」

「サーセンっした。そしてサラダバー！！」

そういつてハクカは家の方へと逃げて行った。後になってわかったことだがそのキノコはカエンダケという最恐の毒キノコだった。どうやら汁にも毒があるらしく、あの時ハクカが手袋をしていなかったらやばかった…僕もだけど

わずか3gで致死量って…え？生息地が全然違う？こまけえこたぁいいんだよ！！

そういつた平和？な日々を送っていたがそれは突然終わりを告げた。

その日、僕とアーニヤは外で遊んでいて、ハクカは散歩すると言ってどこかへ出かけていったが、日が暮れてもハクカが帰ってくることはなかった…

「ハクカ遅いね…」

「どうしたのかしら…」

その時家のドアが開いた…

「ハクカ！？」

「え？何？どうしたのネギ？」

家に来たのはアーニヤを含むココロウア家とスタンおじさんだった。

「どうも、おじさんたち…」

「やぁネギ君、ハクカちゃんがどうかしたの？」

「出かけて行ったきり帰ってこないんです…夕飯には帰ってくるって言ったのに…」

「こりゃもしかしたら…」

「探さないと…」

「ネギ!!」

僕は村の方へ飛び出し、ハクカを探し回った。いつもの裏山や湖などで名前を呼びながら走り回った。

スタンおじいさんやココロウアさんたちも探し回ってくれたがハクカが見つかることはなかった…

「ハクカ…お願いだから…帰ってきてよ…」

「大丈夫よ…ハクカはきっと帰ってくるから…」

目撃情報によればハクカを見かけたという情報はあったがその場所には2人の男性の死体と血で赤く染まったその日ハクカが着ていた衣服の断片だけだった。この情報からハクカは既に死亡したと言われているが、死体が見つかっていないため行方不明となった…

その事実が受け入れられなくて僕は家にこもってがむしやらに魔法や勉強に集中した…

そんなある日…

「ネギ…」

「なんだいアーニャ…僕は今忙しいの…だから出てって」

そう冷たく言い放つネギだがアーニャは出ていくことはなかった

「あんた…いつまで逃げているつもりなのよ」

「逃げてなんかないよ」

「ネギ、あんたはそうやって引きこもり続けて誰かを守れると思っているの？」

「……」

「ふざけないでよ…そんなんで誰かを守れるわけないでしょ!! あんたはハクカを守るって決めたんでしょ! ならこんな所で何引きこもっているのよ!!!」

「だけどハクカはもう死んじやったじゃないか!! 僕は守れなかった…ハクカのお兄ちゃんなのに…」

アーニヤは無言で僕の方へ向かって行った。

「ネギ」

「え？」

「歯を食い縛りなさい…この大馬鹿者が!!」

ゴシャッ!!

「ッ!!」

「馬鹿ネギ!! 何ハクカを死んだことにしてんのよ!!! まだ死体だっけ見つかっていないんだからどこかで生きているかもしれないじゃない!! きつとどこかで生きているわよ…きつと…」

「…だからってグーはないでしょグーは」

そうだ…まだ死んだと決まったわけじゃない…きつと生きているはずなんだ…

「ごめんアーニヤ…面倒かけちゃって」

「私に殴られる前に気づきなさいよ馬鹿…」

「そうだね…こんなお兄ちゃんじゃ恰好着かないよね……だったらせめてハクカもう一度会えたなら「立派になりましたね」って言わ

せてやらないとね…」

それは幼い少年の誓いだった。

ハクカがいなくなって数年がたった…

それから僕たちは今できることをした。

スタンおじいさんを師匠とした初期呪文や魔法の矢の訓練、後回復魔法の練習などをしていた。

たまに「お前たちはもうちょっと子供らしいことをしてみろい。休むのも遊ぶのも修行のうちじゃ」と言われてしまった。確かに、魔法ばかりやっていて一般常識を忘れてしまったら人生的に危ないな…

そのことをネカネ姉さんに話して何か遊べるようなことはないか？と聞いてみたら魔法で強化した状態家の倉庫の方へ行ってしまうすぐに戻ってきて、服を持ってきてくれた。なんかカメラも持って顔が赤くてハアハア言っているけどどうしたんだろ？

「ネカネ姉さんこれは？」

「なんかかわいいですね」

「これはとってもいい服よ…さあ、二人とも着て見なさい」

そういつて僕たちはその服を着てみたけど…

「これ女物じゃないかな…」

「あら、似合ってるじゃない。ネギ」

僕が来た服はなんだか赤い服に帽子にはちよつと怖い兎が付いてるし…それにこのゲートボールスティックは一体…

「うーん。ネギは〇イーちゃんに似合うわね…これに気づくとはさすが私!」

なんだろう：自画自賛しているネカネ姉さんを見ているとなんだか遠い存在になっていったる気がする

「どう？ ネギ……この服に合ってるかな／＼／」

アーニヤの服は白い服に儀礼用の杖を持っていた。なんだろう……管理局の白い悪魔……そんなフレーズが脳内によぎった。

「うん、とても似合っているよアーニヤまるで魔王みたいだ」

「そ…そうかな／＼／＼ネギも似合っているよ恰好」

「僕一応男んだけど…」

「二人ともこっち向いて……チーズ」

カシヤツ！！！！

もしかして写真撮られた？

「ネカネ姉さんそれ今すぐ消して!!」

「だが断る!! これは私のお宝なのだから!! というわけでサラダバーH A H A H A H A H A H A—!!」

そういつて家から飛び出していったネカネ姉さんだった。

こうなったら最近覚えた雷の暴風で……と思い杖を取り出したがアーニヤに後ろから押し倒されて追いかけることが出来なかった。

「駄目よネギ！ そんなことしたらネカネさんが黒こげになっちゃうじゃない」

「僕の黒歴史を抹消するんだ！だから退いてアーニャアア！！！！」

ちなみにアーニャとネカネの念話では

（ネカネさん焼き増しお願いします。それにしても、このネギも可愛いわ！このまま食べちゃおうかしら…）

（任せなさいアーニャ！さてこれで『ネギ君を見守ろう会』はさらに発展するでしょう。おっと鼻血が…）

敵はとても近くにいたのでした。

そして6歳の冬の頃…

「ネカネおねえちゃんが帰ってくるね」

「今度のお土産はどんなのかしら」

「できれば服じゃなくて食べ物がいいな…」

あれから何度か着せ替え人形にされてしまつて写真を撮られて、抵抗することをあきらめた…

ちなみに今も鉄槌の騎士の格好をしている。女装もなかなか…。ツは！？何を考えているんだ僕は…

「そういえばあんたスタンさんたちとその格好でゲートボールしてたわね」

「エーナンノコトデショーアーニャサン…ワタシソンナコトシラナイアルヨ」

ヤバイ！！この間ネカネ姉さんとその友人たちで馬場抜きをして負けてしまった罰ゲームとしてこの格好でゲートボールをしたことがばれちゃった！！

「ようこそ、コスプレの世界へ」

「僕は…多分普通です」

なんかもう…諦めたくなってきた…

「さて、そろそろ帰りましょう」

「うん、そうだね」

雪が降る夜

そこはいつもの村と違い、赤く染まっていた

村が燃えている…それに転々と黒い異形の姿もあった。

此処から見える村の人たちはみんな石化していた。

まるで悪夢のような世界だった。

「何よ…これ…」

「村が…」

僕たちは啞然としていたがすぐに立ち直った

「お父さんとお母さんは？」

「みんなを探さなくちゃ…」

そういつて僕たちは家の方へと走っていった…

辺りは炎で包まれており、道端には石化した人や異形の体の一部の
ようなものが散乱していた。

「なんで…こんな…」

「お姉ちゃん…スタンさん…」

『オイ！ココニモイキノコリガイタゾ』

『マダノコツテイタカ…』

お姉ちゃんやスタンさんを探しているうちに異形達に見つかってしまった。

『セイゼイ泣キ叫ビナガラ死ンデイッテクレ』

そういつて異形はその鋭利な爪で引き裂こうとした…
しかしそれが起こる事はなかった…

フードの男が割り込みその爪を素手でつかみ、握りつぶし…

『雷の斧！！』

雷属性の上級古代語魔法を受けた異形は塵のように還っていった。
ハイエンシエント

『ツク！？全員デカカレエエエエエエ！！』

異形が号令をするとフードの男の方へと向かって行った。

しかし、男は殴り飛ばし、蹴り飛ばし、そして『雷の暴風』で異形の軍勢を壊滅させた…

『ククッコノ力ノ差…コレデハドチラガ化ケ物カワカラナ…』

そんな言葉を残して異形の一人は還っていった

その光景に僕は恐怖を覚えた

——しかし、あの人は…まさか…

そう思って男の方へと駆け出したが、生き残っていた異形は口を開き光線を放ってきた。

「させんぞ!!」

「お姉ちゃん!! スタンさん!!」

「おう、坊主たち無事じゃったか…」

「ネギ!! その格好マジカワユス」

僕をかばってスタンさんは全身が石化し始めてしまって、ネカネ姉さんは足が石化碎けてしまった。

だけど、お姉ちゃん自重して…

「どうやら、この襲撃は村の誰かを恨んだ奴らの犯行かのお…というかネギよいつまでその格好なんじゃ…」

「聞かないでスタンさん…(泣)」

そのとき、異形と軟体生物は追撃を掛けようとした

「つく!?! もう少し弱っていればがこれが使えたのに…クソお!!」

どうする!?! このままじゃ殺される…考えろ

——逃げる?…無理だ…アーニヤたちを見捨てられない

——男に助けを求める?…この数十秒の間じゃあ無理だ!!

なら…

「戦うしかないよなア——！！！」

僕は叫び今使える最強呪文を唱え始めた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来たれ雷の精、薬莢を打ち出し、その鉄槌似て、叩き潰せ！！轟・天・神・雷 『雷神の鉄槌』！！！！」

周囲の魔力を杖の先端に集め魔力の塊を帯電させそれを一気に振り下ろし、敵を潰す魔法

ネカネおねえちゃんから見せてもらったこのコスプレの元になったキャラの必殺技とアーニャのコスプレの人の収束砲撃をヒントに造ったネタ魔法だったがそれは意外に使えて、集めた魔力が多かったせいか異形がいた場所はクレーターになっていた：

『ハッハッハ君ノヨウナ子供ニヤラレルトハ：マツタク人間トイウノハイツモ驚カサレルナ』

異形は何とか避けたみたいだが右半分が消し飛んでいた

「助かったぞネギ：六芒星と五芒星よ悪しき霊に封印を：封魔の瓶！！！」

スタンさんが放った瓶に傷ついた異形は吸い込まれていく：

『コレデハ還ルコトガ出来ナイカ：少女ヨ、ヨケレバ名ヲ聞イテモヨロシイカナ？』

吸い込まれながら余裕だなこの異形：

ていうか少女ってまあ、いつか：

「ネギ・スプリングフィールドだが今はこう名乗っておこう鉄槌の騎士ヴィータ様だ！！！」

『ナルホド：英雄ノ息子ダツタカ：ナラ私モ名乗ッテオコウ、私ノ名ハヴィルヘイム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン、シガナイ没落貴族ダヨ。デハイズレマタ戦オウデハナイカ鉄槌ノ騎士ヴィータヨ：シカシ、変ワツタ趣味ダナ：』

そういつてヘルマンさんは吸い込まれていった：

悪魔にまで言われちゃったよ：そりゃまあ僕もノリノリだったけどそれよりもスタンさんは：

「まったく誰に似たのやら：」

「これはネカネおねえちゃんの性だよ」

「はっはっは、違えねえ」

もう首の所まで石化が進んでしまっている：

「坊主、ネカネたちを連れて逃げな、この石化は強力でもう助からん：だから逃げな：ネカネたちを連れて：どんなことがあってもお前だけは守る：そのつもりが逆に守られるたあ情けねえな：ああ後、残った治癒術死を探しな：石化を止めんとネカネが危ないぞい：」

「ごめんなさいスタンさん今だけは我慢してください：必ず治して見せますよ、石化の治療方法を探して見せますよ！！！」

「その通りよ、私たちが何もしないなんてことはないんだから、絶対治療方法を探し出して見えますから：だから今は：ごめんなさい」

「すまんのお苦勞を掛けるわい：あと：：：ネギ：その格好は：：：どうにか：：せい：：：：」

最後の言葉がそれかよ…ははっ笑えねえっつのくそ…
そして僕たちは後ろにいたフードの男によって村のはずれの丘に連れて行かれた。

「すまない…来るのが遅すぎた」

「まったくだよ…ヒーロー気取るなら5分前行動でもしてよ父さん」
「えっ！？じゃあこの人は…」

アーニヤは戸惑っているが僕にはなんとなくわかる…この人が…僕の父さんだという事を…

「なるほどお前がネギか…ずいぶん生意気なこと言うようになったな…」

「あんたの性でしょ…育児放棄して…ハクカもどっかいっちゃったよ」

「確かに…親らしいことまったく出来なかったよ…済まない…ネカネの足の石化は止めておいた…あとは治癒術士に直してもらえ…それとお前もネカネの餌食になったか…」

「これはスプリングフィールド家の試練か何か？」

「いや違うが…まあいい。っち、もう時間がねえや…」

父さんの方を見ると体が透けてきていた。

「この杖をやる…俺の形見だ」

「貰えるもんは貰っておくさ…父さんもしまたあなたに会えたなら…ぶん殴っておくからね」

「おうおう、かかってきやがれてんだ。おれはいつでもお前の挑戦を受けるぜ」

「その時は覚悟しておいてね、」

「楽しみにしてるよ…ああネギ、もし日本に行くことがあるなら麻帆良ってところにいるエヴァンジェリンって奴の封印解いてくれ。3年の約束が10年近くになっちまったからよ…ああ、解呪方法は杖に書いてある呪文を唱えればOKだ」

別れ際にそれかよ…我が父君はいい加減だな…

「わかったよ…まったくいい加減な奴め」

「まったく…生意気な奴め親の顔が見てみたいわ…」

「鏡見ろ…」

「…ああそうだな、それと、ハクカだがあいつは生きてるだろうな…」

「ホントに！？ハクカは生きてるんでしょね…」

「その自信はどこから？」

「なんてったって俺の娘でもあるんだぜ？そう簡単に死ぬかよ」

確信のない言葉…だけど僕たちは信じているからね…彼女がどこかで生きているという事を…

「まあ、悪いなこんな親で…元気に育て、幸せになってくれくらいしかいえねえや」

「言われなくてもそうするさ…それじゃあまたね父さん」

「ああ、またなネギ…」

そういつて父さんは消えていった…まるで最初からそこにいなかったかのように…

残された僕たちはじっと待つことにした。

「やれやれね…これからの課題が多い事」

「石化の治療にハクカの探索、父さんをぶん殴るって所かな」

「最後はあんただけでしょ…」

「まあ、やれることをやっていこうかアーニャ…」

「そうね…がんばりましょうネギ」

「ところでいつまでその格好（鉄槌の騎士）」

「着替えられる時まで…」

台無しだ…

PV30000突破記念 ネギ・スプリングフィールドの変貌（後書き）

ネギ は 女装癖 を 獲得した。

いやゝなんとなく似合いそうだったから女装させてみました。
身長が低くて髪が赤かったからついやっちゃたんだ。

アーニャは普通です…多分

襲撃が遅かったのはハクカの失踪で騒ぎになったからです。

第10話 勝手な思い込みで距離を取るのはどうかと思うんだよね。

圧倒的な実力と正義の否定によって、模擬戦（という名の処刑）は白花の勝利で幕を閉じた。

「それじゃあもう帰ってもいいよね？明日は学校があるし…」

そういつてその場を後にした。

「どうだったトモエ？あれが魔法使いの戦い方だったけど…」

「どっちかというのであれば心理戦じゃないですか？」

そうかな？

「しかし、お嬢、あまり陰口はしないでください…」

「陰口って？」

「日常面でもそういつていましたよね…私は嫌ですよそんな事をするなんて向こうと同じ小物の様な存在ですよ…面向かってはつきり言えればいいでしょう」

小物…か、確かに、陰で言っているなんて小物のやることだな…何やってんだろ私…

「……ごめん。なんか正義正義言っている奴だとムカついてこうなっちゃうんだ」

「だったら治していきましよう…私も協力しますから…」

「ありがとうトモエ」

幼少の頃のトラウマみたいなものだけど、何とかしていこう…この

子たちの為にも…

そんな事を思っていたら何か殺気に似た気配を感じた。
ある意味予想通りの人物が呼び止めてきた。

「待ってください」

白花を呼び止めたのは桜咲 刹那であった。

「なんですか？ 私はもう眠いのでさっさと帰って惰眠をむさぼりたいのですが…」

「無礼を承知なのですが、私と勝負していただけないでしょうか？」

すでに戦うこと前提で気が抑えきれしていないじゃないか。

勝負しなきゃ通してくれないだろうな…でも

「だが、断る！！」

「んな！？」

自分の欲求に従う白花であった。

さっさと帰って休みたい。それが今白花が求めている欲求だから…

「ならば、無理にでも仕掛けさせてもらう！！斬岩剣！！」

そういつて、野太刀を抜刀して、気をまとった一撃で切りかかる。

「あぶねっ！！」

その一撃をヒラリと躲す。

「なんだよ、いきなり狂犬みたいなやつだな：」「うるさい！！斬空閃！！」おっと」

野太刀から放たれる衝撃波を避け、影から木刀を召喚する。

「仕方ないな：相手をしてやるよ！！トモエ、次は剣士戦だ！よく見ておけ」

「了解です。お嬢」

そういつて、木刀を構えた。対して刹那はその装備を嘲笑った。

「そんな気も通っていないもので私の剣を防ぐことはできんぞ！！」

そういつて、野太刀を縦に振り下すが：

「気が通っていない？お前の目はフジヤマか？あっ間違えた節穴だった」

ガキンツと音を立て、刹那の野太刀を切り払う。

「っな！？気はかよっていないはずなのに！？」

「かよっているよ？ただ薄く鋭く気を巡らせているからわからなかったかな？」

目を凝らしてよく見てみると木刀からはほんのり光が燈っておりそれは薄いが鋭い刃を構成していた。

「あいにく、私は気の量は少ないのでね。こうやって無駄をなくした結果がこの形になったのだよ」

そういつて今度は白花が攻勢に打って出た。

「うら、斬空閃・双牙!!」

式回連続で放たれる飛んでくる斬撃しかもそれは刹那の斬空閃よりも素早く鋭かった。

「つく!」

何とか避けた刹那だったが後ろにあった街路樹が木目を見れるくらいきれいにずれて、落ちた。

「こうなったら接近戦でないとダメか…」

そういつて、瞬動で距離を詰め近接戦闘を始めるが…

「君はもう少し武器の特性を考えようか…斬岩連斬!!」

白花は斬岩剣を振り下ろし、振り上げ、薙ぎ払いの流れで繰り出した。

刹那はその攻撃を防ぐも弾き飛ばされてしまう。

刹那の得物は野太刀、通常の太刀よりも大きい対妖怪退治用の物である。対して白花はお土産屋に売っているような木刀で対人戦闘に使える程度の物である。いくら気で体が強化されていても懐に入られれば野太刀はその威力を発揮することはできない。

「貴様はお嬢様の敵なのか?」

剣をふるいながら刹那は白花に問いかけた。

「?、だれそれ？」

もちろん白花はそんなことはなく、知ってはいるが面白そうだから知らないふりをした。

「とぼけるな!! 神鳴流を使い、符術を使うという事は西の回し者じゃないのか？」

「別に神明流は近所の姉さんに教えてもらっただけだし、符術は便利だから使っているだけだ…」

一応、ひなた荘は近所だったのでこのたとえば間違っていないはずだ…

「そんなバカみたいなことあるわけないだろう!!」

「そんなことよりさあ…あなたは木乃香の護衛なんだってね…」

「何故そのことを…」

注…二人は切りあいながら話しています。

「麻帆良の狙われる可能性で学園長の孫娘という立ち位置だからその近辺を調べて護衛が一人いるってとこまでわかってね。後は今あなたの言葉でこいつだなって思っただけ」

そこで一旦言葉を切った。

「でもさ、あんたがその護衛だとは思わなかったよ。護衛らしいことを全然してないんだから」

「なっ貴様!!!! 雷鳴剣!!!!」

そう言い放つと、怒りを乗せた雷撃が繰り出されるが、すべて避けられる。

「だってそうじゃないか。護衛というのはいつでも守れるように対象のそばで構えているはずだろ。それがこんな所で油を売っているなんて護衛失格じゃないのかい？」

「そんなことはない！私はきちんとお嬢様を守っているんだ！！」

「まさか、外敵を倒しているから護衛のつもりなの？笑えるね、木乃香から聞いた話では幼少時は仲が良かった幼馴染が今では嫌われているんじゃないかって言ってた、これは間違いなくお前さんだが、この時点ですでに護衛を名乗る資格はないんだよ。護衛が対象を傷つけるとか聞いたことないな。こんなんじゃないつかは誘拐されて、適当に利用されて気づいた時には死体で見つかっているっといった状況になるだろうな」

「そんなの私がさせない！！！！百烈桜華斬！！！！」

必死にその言葉を否定する刹那しながら円を書くように野太刀を振るうが、それが当たることは無かった。

「くそっ！！ちょこまかと！！」

「それが私の戦法だからね。隙を見つけて一撃を入れる」

白花の尋問が再開される。

「それに、あなたからは守るのは他者じゃなくて自分を守っているような感じがするんだよね」

「何故そんなことがわかる！！」

白花は当たり前のように答えた。

「『切ればわかる』つまりは戦いあっていればわかるって意味さ。
あんたの剣から感じられるのは敵を排除する意思と自らを縛る束縛
そして、何かを恐れている」
「・・・!!!!」

その言葉に刹那は真っ青になった。

「木乃香は刹那がどんな存在であろうと受け入れてくれるだろうな。
だけど、お前は勝手な思い込みで距離を取り、そして木乃香を傷つ
けていることにも気づいていない愚か者だ」

「・・・」

「それともお前は大切な親友のことも信じられないのか？」

「そんなことあらへん!!!!」

いつの間にか刹那は素の口調に戻っていた。

「なら、一つ賭けをしない？」

「賭けやと？」

そういつて一旦二人は動きを止める。

「私の一撃を耐えて見せなさい。この一撃はかなり効くよ…耐えき
ったなら秘密を言わないし、この場を引き下がる。だけど耐えきれ
なかったときはあなたは木乃香に自分の全てをぶちまけなさい」

「ええやろ…受けて立つわ!!!!」

その言葉を聞いた白花は木刀を腰のあたりに差し、居合の型を作る。

「抵抗してもいいけど…掟えられるかな？」

「いつでもきいや。四天結界独鈷鎖殻!!!」

そういつて刹那の方は独鉈を4本使って三角錐の結界を作る。

「これは神鳴流の式の太刀を取り入れた我流の奥義…」

そう言い放ち、木刀に手を添える。

シュッ！！と音がした。

刹那が気づいた時には木刀を振りぬいた白花が刹那の背後にいた。

「絶影…」

木刀をもとの位置に戻したとき、衝撃が襲い、それとともに結界は砕け散った。

結界は傷一つないにもかかわらず刹那には横一文字の痣があった。

「賭けは私の勝ち…っと言っても聞こえてないか…」

そして、あたりに静寂が戻る…

・
・
・

うわ…なんかこのセリフ中二病だな。

「さてと、マナ居るんでしょう。」

「よくわかったね。それでも気配は殺していたはずなんだけど…」

「そこは私のセンサーでどうにかしました。」

トモエの頭部はナビコ程じゃないけど結構見えるからね…わずかな

音で捉えられるだろう。

「それじゃあマナ、刹那借りるね。」

「わかった。けどいったい何をするつもりだい？」

そういつて私は刹那を背負い、笑みを浮かべる。

「なに、ちょっとした嫌がらせだよ。」

・
・
・

う、むう、私は…そうだ私は白花さんに挑んで、負けたのか…腹のあたりが痛い。

最後の一撃、あれは忒の太刀を取り入れたと言っていたがそこまで使えるのか彼女は…しかも全く見えなかった。

「ここは寮か？」

龍宮が運んでくれたのかな？
そこへ入り口のドアが開く。

「あっせつちゃん起きた〜。」

「お、お嬢様!？」

何故、ここにお嬢様が!？
ん？枕元に紙が…

『とりあえずここまで運んでおいた。木乃香には不審者と間違えて襲いかかってきた刹那に思いつきり木刀でぶっ叩いてKOしちゃったって言うておいたから。後はがんばれYO ぶちまけちまいなY

O。 b y 白花』

「先日、不審者が出たんはわかるんやけど、いきなりはどうかとおもうでせつちゃん。」

まあ、似たようなものだけどこれじゃあ私は狂犬みたいじゃないか…ん？裏にまだ何か？

『だってあんた狂犬みたいなものじゃん☆』

…なぜ考えていることがわかったし

「嫌かもしれんけど、我慢しといてや。」

何を言っているんですか？お嬢様。

「せつちゃんがうちの事、嫌いかもしれへんけど」「そんなことあらへん！！」「せつちゃん？」

「うちはこのちゃんの事、嫌いになったりせえへんよ！！！」

ああ、今になってわかった。

「うちは…うちは怖かったんや…このちゃんを傷付けてそれで、また一緒にいて傷つけてしまうんやと勝手に思い込んで…理由付けて、このちゃんを避けてしまったんや。」

彼女の言葉の意味を…確かに、これじゃあ護衛失格だな。

「それは、あの川でのこと？」

私は黙って頷いた。

「バカ…大馬鹿やせっちゃんは！！そんなのうちがあそこで遊ぼうと言って川に落ちてしまっただけでせっちゃんのせいじゃあらへんよ。」

私は信じていなかったんだ。親友と言っていたにもかかわらず、自分の秘密を知られるのが怖くて、また遠ざけられるのが怖くて。

「ごめんこのちゃん、ホントに…ごめん。」

私は、ただ謝ることしかできなかった。

「また、昔みたいに一緒にいてくれるん？」

「もちろんや！！今度こそこのちゃんを守って見せるんや。」

「でもせっちゃん。うちはせっちゃんが傷つくのは嫌やで、だからせっちゃんの関わっていることを教えてもらうで。」

！？なぜお嬢様がそのことを…

「おじいちゃんやお父様が何かに関わっていてそれを秘密にしているってことまではわかったんよ。それにせっちゃんが関係があるのかもって思ったからや。」

長、どうやらお嬢様に魔法と無縁な生活は無理のようです。

「わかりました。今は遅いので、一部の人と同伴で話させていただきます。」

ならば、私は守るだけだ。それが私ができることだから…

「それじゃあ、お嬢様。私は部屋に戻らせていただきます。」

そういつて、ベッド起き上がろうとすると…

「えい♪」

お嬢様に押し倒された。え、何この展開？

「駄目やでせつちゃん。もう真名にはここに泊まるって言うておいたんや。」

あれ？なんかお嬢様目が座っていませんか？

「それに、せつちゃんの成長も見ておきたいしな♪」

そういつて、お嬢様は私の服に手を突っ込む。

「え、っちょ、このちゃん？待ッアッーーーーー！！！！」

次の日、顔がツヤツヤな木乃香と異様にやつれた刹那の姿が目撃された。

第11話 仮契約、そして覚醒…

昨日は長い夜だった。まあ、ストレス解消にもなったからいいかな。休日明けの学校ってなんかだるいんだよねあ…

…っと、そんなこと考えていたら、後ろから木乃香と刹那が来た。ツヤツヤな木乃香、やつれた刹那…いったい何が…いや、ナニをやったのか…木乃香が攻めで刹那が受けか…今の状態で教室行ったら、ハルナにばれるんじゃないかねえの？
あれ？なんかこっち来たな。

「おはようございます。白花さん」

「おはよう白花」

どうせならかわかないと思います、いたずらな笑みを浮かべて…

「おはよう、お二人さん昨夜はお楽しみでしたね」

その瞬間、刹那はゆでだこのように真っ赤な顔になった。

「そ、そんな事よりも学校終わったら説明をお願いしますか？」

「いいよ、じゃあ、終わったら私の部屋に来てね」

うち、ごまかしやがったか。

魔法球の中で説明するかな…後、エヴァと龍宮を誘っておくか。

そんなこんなで教室に行ったら案の定ハルナに「二人から強烈なラブ臭がする!!」と言っており、アホ毛が頭をゲッダンしているかのように振っていた。

それは、センサーなのか？と本気で考える今日この頃…

放課後まで

キングクリムゾン

今日の授業は眠かった。英語の時、高畑先生がなんか奇妙な目で見ていたが気のせいだろう。以上

そして、寮に行き、私とナエ姉の部屋で木乃香に説明するために集まったメンバーは以下のとおりである。

エヴァンジェリン、千雨、マナ、後ロボチーム。

「じゃあ、さっそくだけど別荘に行くのでしょうか」

その言葉にエヴァは眉をひそめた。

「別荘？それなら私の家に行かないと無いぞ？」

刹那と木乃香は頭の上に？が出ているような気がする。
そういえば言って無かったな。

「私も魔法球持っているんだよ」

その言葉にエヴァは驚いたようだ。

「なに！？だが魔法球はかなり高価なものだぞ？いったいどうやって手に入れたんだ？」

千雨だけはまあ、白花だし、て表情をしていた。

「そこは一から作っちゃたんだ☆」

その言葉にエヴァは啞然としたが、無視しよう

「まあ、入ってみるといいよ。ナビ、ここにいる人たちの入る事を許可する」

『了解、ではエントランスに転送します』

その瞬間、部屋が光に包まれて白花たちは部屋から消えた。

「ようこそ、魔法球クラスターへ」

光が晴れ、目を開けるとそこは中央に円形の机があり、奥の方には先に続く道があり、横の方には幾つかドアがあり、その上には大きなモニターがある部屋に出た。

「おい、白花ここは魔法球の中なのか？」

みんなが珍しそうにあたりを見ている中、エヴァは私に聞いた来た。

「そうだよ。自作の魔法球だから市販のもののだいぶ違うかもしれないから。このクラスターは管理人格のナビが管理していて、ここから下のブロックがダンジョンで上の方は研究などに使うブロックがあるんだ。」

『ダンジョンの方は基本自由にさせており、実質私が管理しているのはブロック内ですね。』

そういえばこの前見に行ったら、老山龍みたいな馬鹿デカイ龍やリオレウスみたいな飛龍種がわんさかいた気がするな。MH化が進んでいるのかな？

そんなことを考えていたら、千雨が何か聞きたそうにしている…

「このナビってのはナビコと関係があるのか？」

「名前も似ていますし私の後に造られたのですよね？」

さすが、千雨そこに気が付くか。

「ナビはナビコのデータをもとに作り上げたからね、まあナビコの妹だと思えばいいよ」

その言葉に千雨は信じられないといった表情になった。

「嘘だ！！！！ありえん！！ナビコの妹がこんなまともな訳がない！！」

言いたいことはわかるが叫ぶな千雨。そして「俺の○がこんなに可愛いわけがない」みたいに言うな…

「ひどいですよマスター！！それじゃあ私がまともじゃないみたいじゃないですか」

……まとも？なのかな。まあ、どうでもいいか…

「それじゃあ木乃香説明するから。みんなも適当なところに座って」

少女魔法の存在について説明中：

「てな感じ、今の私の立ち位置はエヴァの庇護下にある異能使いだね」

「別に私の所にいなくても生きていけるだろお前は…」

こまけえことはいいんだよ。

生存率は上げられるならあげておきたいし：

「魔法に陰陽師かゝ思いつきりファンタジーな話やね」

木乃香は不思議そうな表情をしてつぶやいた。

「しかし今、白花さんが言ったことは全て真実です」

フォローありがとう刹那。

「それにこの学園、いやこの麻帆良という都市が関東魔法協会になっ
っているから」

その言葉に木乃香は驚いた。

「ちょっと待ちい、たしか関東魔法協会って関西から狙われている
んよね。そんなんじゃないか！」

いつものほんわかな表情が消え、まじめな雰囲気になった木乃香。
鋭いね、いや、これが普通の反応なのかもしれないな。

「そのことは、昨夜この学園の魔法使いたちに言っておいたよ。ま

あ、それでどうにかするとは思えないけどね」

処刑込みでだけどね…

「さて、木乃香。君は裏の存在を知った、ここで選択肢がある。一つは魔法の記憶を消して暮らしていくこと、そしてもう一つは魔法を学び身を守るすべを身に着ける。どっちを選ぶ？」

まあ、選択の余地はないんだけどね…選ばなくても向こうが関わるようにあの手この手で仕掛けてくるからなあ。

「うちは…魔法を学ぶことにするよ」

「一応理由を聞いておくよ」

「おじいちゃんがこの関東魔法協会の長をしているという事は、必然的にうちも狙われることになるのだから、うちには身を守る術が必要なんや」

ついでに言っておけば関西呪術教会の長の娘でもあるんだよね。そのことにはもう気が付いているだろうね。

「お嬢様、私は誰が敵になろうともお嬢様の味方です」

おお、刹那なかないいこと言うじゃないか。

「今の木乃香には身を守る術がないんだ。しっかり守ってやれよ刹那。後、私は傭兵だから依頼であれば守ってやるよ」

マナ、初回は安くしたやりなさいな。

「魔法に関してならアドバイスできる。わからなければ私たちに聞

くがいい」

おお、エヴァも協力的だな。ん？私『たち』？

「それって私も入ってるの？」

「なんだ、嫌なのか？」

嫌じゃないんだけど…

「私、教える立場になるのは初めてなんだよね…」

「……ま、まあ一緒に教えるから我慢しろ」

サーセン。

「そういえば刹那に木乃香、お前たちは仮契約した方がいいだろう」

「「仮契約？」」

ハモっていうとは、シンクロ率は高そうだな。
私もトモエとドール契約した方がいいかな…

「エヴァ、私にはドール契約の仕方教えて」

「わかった。どこか空いている部屋はあるか？」

『空き部屋ならその扉があるところが空いています』

メダロットに魔力供給したらどうなるのだろうか…

「あー仮契約ってなんや？」

さっきのまじめな雰囲気はなくなりいつも通りのほんわかとした感じの木乃香になっていた。

「そういえばまだ説明していなかったな。仮契約というのは簡単に言えば従者契約だな。主と従者を設定して、主は従者に魔力を送り強化したり、念話での連絡、従者の召喚ができる。一方、従者の方はアーティファクトという強力な魔法具を召喚し使用することができる等々だ」

「それならば私たちは契約した方が良いでしょうか」

木乃香が後衛で刹那が前衛をやると結構バランスいいかもな。

「だが、仮契約は専用の魔法陣を使うので今その道具が「有るよ。」なに？」

こんなこともあるのかとまほネットで購入しておいたんだよね。

「いつかはトモエと契約するかもしれないと思ったからまほネットで買いそろえておいたんだ。」

「それを今出せるか？」

エヴァはせかすように聞いてくる。

まあ、落ち着けエヴァそんなにせかさなくても出してあげるから：

「可能だよ。ナビ」

『了解。転送』

そういつてテーブルの上に光が集まり、魔法具が転送される。

「よし、これだ」

そういつてエヴァは卵のような形をしたものを取った。

「これを地面に割れば魔法陣が出てくる。その中でキスすれば契約完了だ」

おやおや、刹那の奴、朝みたいに顔が真っ赤になりやがった。
木乃香は笑ってるだけか：

「キキキキキ、キスですか！？」

「なんだ、ずいぶんと初心な反応じゃないか。ククク」

うわゝお、エヴァがすごい悪い笑みを浮かべてるわゝ。

「それじゃあ、二人だけの大切なお話もあるんだし、私とトモエは別室でヤッてくる。エヴァ、ドール契約は？」

「そっちは普通に魔法陣を張って、核となる場所に血をやればOKだ。魔法具は…これだ。」

そういつて、色違いの卵のような物を渡してきた。

つーこったメダルに血を塗ればOKみたいなものか。

「ウフフゝそれじゃあ、せっちゃん行こか」

そういつて刹那の襟を持ってずるずると引きずりながら部屋に向かった。

「マスター私たちはどうします？」

「せっかくの機会だから契約しておくか。そういえばエヴァ私には魔力はあるのか？」

千雨、ナビコ組も契約するようだ。ナビコが人間だったら本契約まで逝っちゃいそうだな。

「ああ、一級品とまではいかないがそれなりの量があるぞ。ほれ」

そういつて魔法具とナイフを千雨に渡した。

「サンキュ」

「終わってこっち来たら治療してあげる」

そういつて、それぞれが個室へと向かった。

そんなこんなで契約完了！！

「ウフフゝええ気持ち良かったわゝ」

木乃香の手には一枚のカードがあった。

木乃香さん、なんかそのセリフエロくね？

刹那は、黙ってうつむいているけど耳まで真っ赤だな。

「それで、そっちはどうだメダロット組？」

「今の所は問題ありません」

「トモエと同じ感じですね」

二人は特に変わった様子はなかった。

「それじゃあ魔力流してみるね」

そういつて私は魔力を流してみる。千雨と木乃香はまだできないらしく私だけが試す形になった。

「どう？ トモエなんか変わった？」

「……」

そう聞いてみるが返事がない。

「トモエ？」

嫌な予感がして、あわてて魔力供給を切ったが遅かった。

「■■■■■■■■■■————！！」

魔力とは違う力があふれ出ており、トモエの背中から昆虫の羽のような光が出てきた。

まさか、メダフォースか！？ けどこのままだとなんかやばそう！

「おい白花これはなんだ！！」

エヴァが突然のことに慌てふためいている。

「これはメダフォース。メダルの潜在的な力みたいなもの。多分魔力を流したことでメダフォースが発動したんだと思う」

それしか思いつかないしな

「止める方法は？」

「一応頭部にダメージを与えれば機能停止になるけど止まるかわからない」

そういつていつもの包帯を腕に巻きつける。

「わかんねえならとりあえず戦うぞ。白花、刀くれ！！」

「援護なら任せてください」

ナビに頼んで日本刀を転送し、千雨に渡す。

「弾薬費はそっち持ちで頼むよ！！」

どこから出したのか、ボルトアクション式のライフルと二挺の拳銃をとりだしたマナ。

「うちらはどうしたええんや？」

「刹那は木乃香を守って、エヴァはいつでも動けるようにしておいてくれ！！」

刹那は木乃香のそばに行き被害が出ないようにしておく。

みんな、それぞれの武器を構え、トモエを止めに入る。

「じゃあ止めに行きますかな！！」

「ガああああ！！！！」

「っち、硬いな、こいつかなり強化されていやがる…」
「マスター次弾来ます!!」

千雨はその場から飛び退いたが頬をかすり、その先の壁に弓矢が突き刺さった。

「生半端な攻撃は通じなくなっているな…」

幾多の弾丸を撃ち込むもかすり傷程度しかないと愚痴りながら拳銃のマガジンを交換する。

「氷の矢18矢!!」

エヴァは魔法の矢を打ち込むも効果はあまりない。

「おい、白花合わせろ!!」

「オツケー!!」

そういつて白花と千雨は刀を上段に構え、気で強化した刀を一気に振りぬく。

「「斬岩十文字!!」」

二人の攻撃は、床ごとトモエを切り裂いた。パーツはひび割れ動きは鈍くなり、ギリギリッと何かがこすれる音がした。パーツの隙間からは蒸気が噴出している。

ふと、千雨の方を見ると何かを考えるようにしていた。

「白花！水だ！あいつを冷やせ！！」

その言葉を聞いて、二人の魔法使いはすぐに詠唱を始める。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック、来たれ氷精、爆ぜよ風精
…」

「エストウス・レグナム・アエストウス、目醒め現れよ、浪立つる
水妖、水床に敵を沈めん…」

「氷瀑！！」「流水の縛り手！！」

氷瀑により、パーツが凍りつき、魔法でできた水がトモエを縛り上げて動きを止めた。

その時、パーツから湯気が立ち込め、熱疲労を起こし次々とひびが入っていった。

「キ・・アア・アア…」

プシューッと湯気を出しながらトモエは停止した。

「とりあえず、トモエは一度修理に出さないとな。マナ、弾薬費は後日だすわ」

わかったよと答えるマナ。その後方で木乃香は初めての実戦を目にし、得るものもあっただろうか…

「みんなはいつもこんな危ない目に合ってるんやな…」

木乃香は傷ついたみんなを見渡してぼつりとつぶやいた。

「誰もが何かのために戦うものだ。大切なもののため、対価をもらうため、戦う理由なんていくらでもある。近衛木乃香、お前はいつたい何のために戦う？」

その問いに一片の迷いもなく答えた。

「うちは、そんな大層な理由なんて持っておらん。でも、うちは守られるだけなんて嫌なんや。そのせいで傷つくというのならその傷をうちが治したる。大したことやないと思うけど、それがうちのできることやから…」

その答えにエヴァは満足したようだ。大切な者が傷つくのが嫌だからそれを癒すか：正義の為などとふざけた答えならぶん殴ってでも修正しようと思っていたが、これなら誤った道に行くことは無いだろうな。自分の行動に責任を取り、それをごまかさず、信念を持って行動する。一人では挫折するかもしれないが、こいつにはそばにいてくれる仲間もいる。

その優しい心があるならいずれは多くの人を救えるのかもしれない。

「よく言った。近衛木乃香お前の信念しかと受け止めた。この闇の福音がお前に魔法を伝授しよう。つといても私は回復の適正が低いから白花の方に行くだろうがな…」

苦笑するエヴァに最後の最後で閉まらんなあと笑う木乃香だったが、その瞳には決意の光が輝いていた。

第11話 仮契約、そして覚醒…（後書き）

三組が契約しました。メダフォースについては漫画版をうる覚えで参考にしました。漫画の方は、大抵の奴一撃で機能停止だったな…止め方も漫画版でしたね。（漫画版はスプリンクラーで停止。）一応刀には触れましたけど沸騰はしませんでした。

第12話 正義の意味

私の信じていた信念は借り物だったのか…今思えばこれは本国が唱えたものであり、私の信念でもなんでもない。私は立派な魔法使いという偶像を求めて一般的な普通の常識を忘れていたのだろう。正義といえばすべて許されると思ってしまふのはまさに愚行なのだろう…そんな考えが頭の中でグルグルと廻っている。

——魔法使いは世のために尽くす事そして正義なのですから!!

ふと、彼女に言った言葉を思い出した。

違う、全ての魔法使いがこれをなしているわけではない…

むしろ、犯罪を犯すものも多々いる。これらは無償奉仕で許されるが、見方を変えれば強制労働だ…

——見ず知らずの誰かを守るより、私の大切な人たちを守れるくらいならそれでいいんだし。

確かにその通りだ。赤の他人と自分にとっての大切な人を天秤にかけて大切な人を選ぶ。これが当たり前なんだろう。だけど、私はそれを嘲笑った。

正義に固執してしまい正義があればどんな強敵でも勝てるという妄想にとらわれていた。現実はそうではない…それで死んでしまったら正義の為に散ったのだから仕方ないという考えを持ってしまった。

——あなたは悪である闇の福音に味方をするというのですか!?

闇の福音。まさに悪の代名詞である彼女は英雄ナギ・スプリング

フィールドが呪いをかけられて此処で働いていると聞いた。本来は3年の契約なのにもう10年以上此処にいることに疑問を持たなかった。悪であるからここで一生過ごせばいいんだ。

そんな身勝手な考えを持ち、自分は正義だと自分をごまかし続けた。

そもそも、彼女はなぜ罪を犯したのか？

その理由も知らないで一方的に悪と決めつけていた。

吸血鬼だから、賞金首だから

彼女は人から吸血鬼になったと聞くがいったい何時、そしてなぜ吸血鬼になった？もしかして彼女は悪ではないのでは？

ああ、考えだしたらきりがありませんわ…

「…ね…高…高音!!」

ふと、顔を上げると、友人である英子がいた。

あれ、授業はどうしたんだっけ？

「英子、授業はやりましたっけ？」

「あなたまだ寝ぼけているの？もうとっくに終わってるわよ…」

周りを見ると、生徒たちが談笑していた。

「高音あなた最近ボーっとしているけど大丈夫？」

「少し悩み事がありましたね…」

「だったら早退して休んだ方がいいんじゃない？」

確かにこうも考え事で授業を潰すより、休んだ方がいいのかもしれない

ない。

「お言葉に甘えますわ。それじゃ保健室の方へ行ってきます」

そういつてわたくしはふらふらと保健室の方へ向かった。

「珍しいこともあるのね。高音があんなに悩むなんて…」

英子さん、それは私が直情バカってことですか？そう問たいけど体がだるい。風邪かもしれないね…

・
・
・

保健室の方で早退届をもらい先生に提出して、寮に戻ろうとしたら途中愛依と合流した。

「あれ、お姉さま？どうしたんですか？今の時間は授業のはずじゃあ…」

「ちょっとだるいから早退してきたのよ。それに最近授業が身につかないの…」

「やっぱり、あの夜の事ですか…」

愛依は思い出したのか体を抱きしめ震えてた。無理もないあの夜、愛依とナツメグは四肢を打ち抜かれてしまったのだから、幸い治療が適切に済んだため痕は残らなかったが二人にはトラウマものだっただろう…

「そうね…あれから何をしていたのかわからなくなっちゃったわ…」

私を否定した彼女はここの攻め込まれる原因が私たち魔法使いにあると言い放ち、私の最恐魔法を打ち破った。あの後、目覚めた時から自分の行動に疑問を持ち始めた。私たちがいるから攻め込まれる、ならいなくなってしまえば：

駄目だ。思考がどんどんネガティブになっていく。もうどうしていいかわからない：

「お姉さま。大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ。」

「あ、大丈夫よ愛依」

そうはいっているが思考はどんどん悪い方へ行ってしまう。

「お姉さま。一度ガンドルフィーニ先生に相談してみてはどうですか？」

確かに：私一人で悩んでも答えは出そうにない。ならば、師であるガンドルフィーニ先生に聞いてみるのもいいだろう：

「そうね。今度相談してみるわ」

そして、次の休日に相談することにした。

・
・
・

「最近自分の行動に疑問を持ってしまったか：」

若いうちにはよくあることだ。壁にぶつかりそして進むことに悩む。

そしてそれを導くのが大人の役目。

「しかし、できるかなあ…」

できることはやらないとな…

・
・
・

私と愛依とナツメグの三人は職員室で相談を受けることになった。

「今日はお時間をいただきありがとうございました。」

「そう硬くならなくてもいい。楽にしていってくれ」

そういつて私たちは席に着き、溜まっていたものを吐き出した。
何が正義で何が悪なのかを…そして闇の福音は本当に悪なのか…私
たちはこの地から離れるべきなのか…と

「君たちの言いたいことはわかるよ。私も似たようなことがあった
からね…」

その言葉に信じられないと思った。ガンドルフィーニ先生は大分烈
戦争には関わらなかったが幾つもの戦いを生き抜いた歴戦の魔法使
いとしてもそれなりの地位についているから

「まだ君たちくらいの頃私は『悪』を倒すことに躍起になっていた
んだ。それで周りが認めてくれる。そう思ってたがやってきたがある日
それを否定されたよ…」

なつかしむように語っていく先生に私たちは聞き逃さないように真

剣に聞いていた。

「ある村で賞金首を殺したときに『私たちの希望を殺して何が正義なんだ!!』と周りの村人に言われたよ。その賞金首を調べてみたらどこにも属さない治療魔法使いだっただ。必要な薬などを対価に貧しい村や医者にありつけない人々を治療して回っている立派な魔法使いみたいなお人だった。本国の上層部はこちらに所属するように言ったがその要求を突っぱねて賞金首になったらいい。」

その人の行いは間違いなく正義であつたと思つた。しかし、情報操作により悪に仕立て上げられて殺されてしまうなんて信じられなかつた。

「その事実気づいたとき、初めて自分の行動に疑問を持つたんだ。そのせいで仕事も集中できず、悩む日々ばかりだったんだ。」

まさに今の自分たちの状態だ。出口のない迷路を彷徨っている感じである。

「そんなある日、一人の女性が言ってくれたんだ。『悩むくらいなら行動を起こせ!!』って言われて、無理やり引っ張られてその人と一緒に簡単なボランティアとかをやったり、慈善活動をやったりと初心に帰つたような感じだったよ。彼女に正義とはなんなのかと聞いたら『うだうだ悩むのは性に合わないんだ。だから私はなるべく後悔をしないように生きていたい。失敗したとしても、それを糧にして同じ過ちを繰り返さないようにしたい』と答えてきたよ」

過ちを繰り返さないか…

「そうしているうちに彼女に引かれていつてね。コンビを組んで活

動するようになったんだ。その時に『お前の正義はなんだ？』って聞かれてね。『あなたを守ることが私の正義です』って言っちゃたんだよ。そしてその人と結婚して子供ができて『妻と子供の将来を守ること』それが今の私の信念であり正義になったんだ」

彼女は言っていた。『正義と対になるのは別の形の正義』その意味をようやく理解することが出来た。ガンドルフィーニ先生が話してくれたように『過ちを繰り返さないための正義』や『大切な者を守る正義』、そして人々を治し続けた賞金首も自らの正義に従い行動してきたのだろう。

同じ正義は存在しない…あったとしてもそれは借り物の正義なんだろう…

思えば私は、考える事を他の何かに委ねすぎていたのかも知れない。それが本国の唱える正義であつたり、誰かの命令であつたりとそんな不確かなものに振り回されている人形のようなのだ。

だけど、私は気づけた。だからやることが出来た。

「ありがとうございます。ガンドルフィーニ先生、おかげでこれから何をすべきかを見つけることが出来そうです」

いつもより足取りが軽い。迷っていたことに出口を見つけられたのかもしれない。

「君はこれからどうするんだい高音君」

一番の疑問を解消しましょう…

「エヴァンジェリンさんに話を聞きに行きたいと思います。彼女は

なぜ悪と呼ばれるようになったのか：それを見極めたいんです」

「お姉さまお供させていただきます！」

「やっぱりお姉さまはこう一直線に突っ走るのが似合ってますよ！」

そういつて私たちは事務室を後にした。

・
・
・
P r r r r r

「はい絡繰です。え？高音さん？今日は集会などはないはずですが
：はい、少々お待ちを」

なにやら茶々丸がこちらに来たが：それに高音？白花がぶち壊した
魔法使いじゃないか：報復でもするつもりなのか？

「マスター、関係者の高音・D・グッドマンさんが話を聞きたいか
らこちらに来ててもよろしいですかと言っていますけどどうしますか？」

向こうが指定した場所ではなく家にだと？それに話が聞きたい？何
か企んでいるのか？ええい、毒を食らわば皿までよ！

「いいだろう。話を聞きたいなら勝手に来るように言っておけ」
「了解しましたマスター。よろしいようです」

さて、何をたくらんでいるのやら：

・
・
・

「どうもお邪魔します」

私たちは話を聞くためにエヴァンジェリンの家に来た。

最初は断られると思ったがあっさりと招待してくれた事に驚いた。

「さて、発動媒体も持たずにこの闇の福音にいったい何を聞きたいんだ？」

向こうは警戒しているのか威圧感を出しながら迎えてきた。

まあ、今までの私たちの対応を考えれば当たり前だろうが：

「私たちは戦いに来たわけではありませんから武器は必要ありませんよ……」

そう、あくまで戦うことはないことを前提にしている。もしそうだったらこっちが全滅させられるだけだ。

「ふん、まあいい。それで聞きたいことはなんだ？」

「無礼を承知で聞きます。あなたはなぜ吸血鬼になったのですか？」

その言葉にエヴァンジェリンは驚いたような表情になって冷静に対応してきた。

「何故、そのようなことを聞く？」

「私たちはあなたを悪と決めつけて自己完結してきました。しかし、それでは逃げているだけなんだと思ひ話を聞きに来たんです。一方的に決めつけるのではなく、自分の目で、耳で確かめたかったです。」

こんなことが起きるとは予想していなかったのか困惑しているようにも見える。

私たちは彼女の対応を待つことにした。

「あれだけ打ちのめされて何か気づくことがあったのか？」

はいっと私は答えた。

「よからう、質問に答えてやる。私が真祖の吸血鬼になってしまったのは十歳の誕生日の時の話だ。」

そこからエヴァンジェリンの昔話が始まった。

「その前までは屋敷で不自由のない生活をしていた。しかし、誕生日の日に私が目を覚ましたと思ったら叔父上が私をこんな体に変えたんだ。しかもこの体にした理由が真祖の吸血鬼になる実験だったんだ。その身勝手さに私は激しい怒りを覚えたよ…それで腕を吹き飛ばすも叔父上には逃げられてしまったんだ。」

一息ついたときに愛依が質問をした。

「でも、それじゃあその人が真祖になっているんじゃないですか？」

確かにそうだ。実験が成功してしまったのならその男も不老不死の真祖になっているはずだろう。

「吹き飛ばした腕が持っていた本が実験の全てが載っていたんだ。逃げる時、それを拾うことが出来なくて、真祖化の実験に使う材料や分量がわからなくてできなかったんだろう。それ以外にも魔法についてなどが書いてあってそれを学んで魔法が使えるようになった

んだ。続けるぞ、しばらくして吸血鬼狩りのハンターが来たり、異端審問官がやってきたりと大変だったな。襲ってきた奴らは女、子供以外は殺した。殺さなければこっちがやられるからな……」

殺した：その言葉に顔色を変えてしまったが相手は殺意を持って襲ってきた。ならばそれは正当防衛ではないか。これが私たちが見ようとしてもしなかった真実の一つなのだろう。

「そうして、叔父上を見つけて殺した後は賞金につられてくるバカどもを殺したり、魔法を磨いたりとして生きてきたんだ。そうしているうちに600万ドルもの賞金を懸けられるようになってしまったというわけだ。」

話し終わったところには3人とも沈黙していた。

「自分たちが思い描いていた悪とは違ったことに落胆したか？」

私は首を横に振った。

「申し訳ありませんでした。エヴァンジェリンさん私たちは勘違いしていました。」

「こちらが話さなかったから知らないのは当たり前だ。それに人は異端を恐れるものだ」

経験者が語るとその言葉に重みがあることがわかる。

「それでも、知ろうともしないよりはましですわ!」

そうか、と満足そうに答えてそれ以来黙ってしまう。

真実を見てみれば私たちがいかに自分勝手に愚かであることがよくわかった。

彼女の最後に聞いた言葉『もう少し視野を広く見るべきだね』
確かにその通りだ。世間の情報だけでは真実にたどり着けないこともある。

ふと、何かを考え込んでいたナツメグが質問をしていた。

「そういえばエヴァンジェリンさんの呪いは解けないのですか？」

「ん？ ああ、この呪いはバカみたいに魔力を使っており通常の解呪方法じゃ解けないんだ。」

登校地獄ですか：サウザンドマスターが掛けた呪いで学校に通い続けるという妙な呪いでしたね。

ん？ この呪いって登校させるだけですよね：

まさか！？

「エヴァンジェリンさん！ 学園から出れなくなったのは封印されてからどれくらいたってからですか？」

「な！？ なんだいきなり、確か封印されてから3日くらいで出れなくなっただんだ。」

その言葉に私の予想は確信へと変わった。

「エヴァンジェリンさんここからは私の予想の話です。とりあえず聞いてください」

わかったと頷いてくれた。

「登校地獄は文字通り、登校させるだけの呪いです。ならなぜエヴァンジェリンさんは学校外へ出られないのか？それは別の呪いがかかっているからではないですか？」

みんながアッ！！と今わかったような感じになった。

「確かに学校外からでも通えるから閉じ込める必要はありませんね。」

「それだと組み込まれているのは学園結界の方ではないですか？それなら動きの制限もできるはずですよ！」

「待て、それなら魔力抑制も結界の方に使われているんじゃないか？」

確かに、その可能性は限りなく高い

「これを掛けたのはサウザンドマスターではなくて学園長が掛けたんじゃないですか？3日の間に学園結界に組み込まれていなかったけどその後結界に組み込みエヴァンジェリンの魔力を使って結界を強化した。この線が一番強いと思います！！」

冷静に考えればひどい話ですね：拘束具に抑制を強いられる。しかも、3年を超えても解除しないとは：

「あのくそ爺：報復してやろうか？しかし、いいのか？私にそのことを知られても：」

「別にいいですよ。私はただ想像したことを話しただけですから：それよりもその呪いは解呪専門の人なら溶けるのではないですか？」

その言葉に驚きを隠せないでいるエヴァンジェリンであった。

「なんだと！？しかし、この呪いは私でも解けないのだぞ」

そこは呪いなどに詳しいナツメグが解説してくれた。

「自分の呪いを解くのと他人の呪いを解くのでは難易度が段違いです。多分学園長が呼んだ人たちでも解呪できたのでしょう。だから、学園長の息がかかっていない人に頼めば何とかなるかもしれません」

しかし、あの人はあれでも関東魔法協会の長。それを対抗してまで賞金首を解呪しようなんて殊勝な人はいるだろうか…

「エヴァンジェリンさん、それなら白花さんに頼んでみてはどうですか？」

あの人は魔法だけでなく符術も使っていた。もしかしたら封印を解呪できるかもしれない…

「私がなんだって？」

入口の方を見ると、秋葉原白花さんがたっていた。

「なんだ？もしかして聞いていたのか？」

「実は割と最初の方からいたんだよね。でも、3人とも良い目してんじゃん、見違えたよ…」

彼女の見る目は以前と違い、うれしそうな様子だった。

「それはあなたのおかげでしょうね：あなたが指摘してくれたからここまで来れたのでしょう。それが無かったら私たちは気づけずにいたでしょうね…」

きつと気づけずにいただろう。そして、正義を免罪符にして殺しをしても罪悪感などみじんも感じず、命令をこなすだけの人形のような存在に成り果ててしまっただろう：

「気づけたなら大丈夫だろうに：それよりも封印の話だったね。解呪の符なら何回か作ったことがあるけど強力な呪いの解呪はやったことがないんだよね：だから成功するかはわからないよ」

「それでもいい。可能性があるなら試してみてくれ白花」

「なら、明日あたりに登校地獄だけを解呪してみるね。これは解いても問題ないから。」

「私たちに何か手伝えることはありますか？」

足手まといかもしれないけど、できることはしておいた方がいいだろう：

「今は特にないけど手を借りるかもしれないから解呪の時、同席してくれない？」

「わかりました。私たちはその日は開けておきますね」

そんなこんなで話し込んでいたら日が暮れてしまいました。by

高音

「そろそろお暇しますね」

「では、また今度」

「さようなら」

迷いや疑問が解けて清々しい気持ちだった。

「お前ら、呪いや話を聞いてくれたことを感謝する」

「別に礼を言われることなんてしてませんわ。今まではあなたを否定し続けたのですから、恨み言を言われてもおかしくないのですから…」

「それでもだ…真実に向き合い、光を見つけてくれたんだ。これくらい言っておくさ…また来るがいい。相談くらいには乗れるだろうしな」

「そうですね。茶々丸さんのお茶もおいしいですし、時々寄らせていただきますよ」

そういつて私たちは帰路に就いた…

・
・
・

「私をわかってくれるものがあるとはな…」

みんながいなくなってポツリと呟いた。

そうだな、封印が解けて外に行けるようになったらみんなでどこか行くのもいいな。その時が来たら誘ってみるか…

「人生、何が起こるかわからんな…」

第12話 正義の意味（後書き）

最近、もし白花などがくに行ったら…と考えることがあります。

リリなのとかISとか…

もし行ったらメダロットはデバイスやISの機体になるだろうな…

第13話 封印解除しましたが何か？（前書き）

原作までもう少しといったところです。

第13話 封印解除しましたが何か？

先日、エヴァからの依頼で登校地獄を解除することになったが、これは私の血を使わないといけないのかもしれない：しかし、血を飲むという事はその人の情報を得ることになるだろう。まあ、どうでもいいけどね。とりあえず、解呪符にあれを使うかもしれない：

そして、私たちは放課後にエヴァの別荘で作業をする事になった。

「とりあえず、解呪符を50枚ほど用意しておいたよ。普通のより強力なのだからこれに+αすればどうにかなると思う」

さすがにこんなに使わないと思うけど念のために多めに作っておい

た。

「用意しすぎじゃないか：」

大丈夫だ。問題ない（キリッ

「まあいい、その+αはお前の血を吸うことになる方がいいのか？」

「別にいいよ。少しでも魔力があった方がいいからね」

「それなら私たちの血を使えばよろしいのでは？」

封印の違和感を教えてくれた高音さんたち

「いや、いざという時のために温存しておいてちょうだい」

わかりましたわと言って後ろの方に下がる

「詳しく見てみたけど、この呪いは登校地獄と結界、魔力抑制の3種類の呪いがあって登校地獄と結界は二つで一つみたいになっているみたい。だから、これを解除すれば外に出られるね。魔力抑制の方は監視用だと思う、だからこっちはまだ解呪しないでおくけどいいかな？」

ていうかあの爺、面倒なのを掛けやがって、そして親父は約束したなら守れよダメ人間が…

「かまわんよ。別にすぐに答えを出す必要はないんだ。ゆっくり考えればいいさ…」

とりあえず、解呪符を貼ってみるが貼った瞬間バチツと電流のようなものが奔ったと思ったら一瞬で燃え尽きた。

「なるほど、これは強力な奴だね…それじゃあ、解呪を始めるよ。エヴァ血を吸ってもいいよ」

そういつて私はシャツを脱ぎ捨て首筋を差し出す。

「ブッ!! おまつ!! いきなり脱ぐな!!」

「えー、一々伸ばすと服が伸びるし、血で汚れるからこっちのがいいでしょ。」

ブラ? そんなもの必要ありませんよ。ある人は言いました。貧乳はステータスだ! 希少価値だ!! と…別に悔しくないんだからねチクショー!!!

「ぬう…それじゃあ飲ませてもらうぞ…」

そういつてエヴァが私の首元に近づいてくる。少し怖いな：

「だいじょぶだ。痛くしないよ：」

優しく語りかけてきたエヴァが背中に手をまわされ抱きしめられながら首元に牙を突き立てられた。チクツとした痛みがあったがそれ以降は体の中から吸われていくような感覚を覚えた。それも心地よい感じであった。

「ん、ちゅっ、んん、んく、はぁ：」

エヴァの髪からはなんか甘い香がしていた。香水でもつけているのかな？

「んく、チュパ、んく、くはぁ：」

息継ぎをするかのよう一度口を話してまた吸い始める。そんなにがつつかなくてもいいのに：

「はむ、ん、んむ、んく：」

なんか長いな：エヴァ正気を失ってないか？

「エヴァ意識はきちんと有る？あれば手を握って開いてみて」

その言葉を聞いて、背中に回した手を握って開いた。どうやら大丈夫のようだな：

「ん、くはぁ、はぁ、はぁ、なかなか美味であったぞ」

そいつはどうもさてと、解呪の儀式に移るとしますか…

「白花、お前は…」

「ん？どしたのエヴァ？」

一瞬何かを考えていたような表情になったがすぐに目をそらされた。

「いや、なんでもない。解呪の方を頼むぞ…」

「任せておいてよ。このくらいどうってことないんだから…多分」

そういつて12枚の儀式用の符を囲むように配置して影のゲートから鏡を取り出した。

ふと、3人の方を見ると、3人とも鼻から紅い物を噴出しており、高音と茶々丸以外気絶していた。

とりあえず起こしておくか…

「録画完了です」

「ちよつとこれは刺激が強すぎですわよ…」

サーセンWWいやゝ大事が無くてよかったよ。それと茶々丸ナイスださて、ここからが本番だ…

「その鏡はなんなんだ？」

「これは私の切り札の一つかな」

「綺麗ですね。発動媒体なのですか？」

それにも使えるけどこれの能力はすごいからな。防御に使えば大抵の攻撃を防ぐ最強の盾になりうるものだし…

「まあ、その使い方もできるけど力の増幅も可能だからねこれを使

って解呪符の力を増幅させて封印を解くよ。じゃあ、はじめますか…」

そういつて一息すって静かに唱えていく。

「出雲に神あり、審美確かに、魂に息吹を…」

鏡を頭上に上げてそこから光を放つ…その光景は何とも神秘的な雰囲気であった…

「山河水天に天照す、是自在にして禊の証…」

そして光が最高潮に達したとき鏡を地面に叩き付け、周りの十二の符が浮かび上がり陣を形成し、周りに鳥居が出現する…

「名を玉藻鎮目石、神宝宇迦の鏡なり！！」

準備は整った。これにより鎮目石のバックアップを受けて、解呪符の力を限界まで高めて使えば！

ポケットから魔法薬を取り出し、飲み干す。それによって、魔力が増幅させる。

しかし、それだけで終わりではない…

「呪層界・怨天祝奉！」

一回限りの増幅呪法をかけて準備完了。

「それじゃあ行くよエヴァ」

「いつでもいいぞ」

そして、解呪の儀式を開始する。

「我力を持って、彼の者を縛りつける悪しき呪いの鎖を今こそ断ち切らん：」

詠唱をすると、エヴァの体から二重にかけられた鎖と空に向かって伸びる糸が出現した。

それに強化された解呪符を押し当てると、バキンツと音を立てて、体を縛る鎖が砕け散っていった。

「これで解呪はできたと思うけどどうかな？」

「今はまだわからないがなんだか体が軽く感じる：多分成功だろうな」

「やりましたね！でも、私たちがいる意味はなかったんじゃないですか？」

備えあれば憂いなしってね

「もし、失敗による障害や暴走の時の後始末をまかせようと思ったのさ☆」

「ひどっ！！後始末ってひどっ！！：」

大事なことから二回言ったか。

あはははっと笑うけどそろそろ限界だ：

「それより白花聞きたいことが：」

「あ、ごめん、今無理・だわ：魔力・切れた・みた・い：」

「お、おい白花！！」

そこで私の意識は途絶えた。

・
・
・

「様子はどうなんだ？」

その後、白花は倒れ、別荘内の部屋に寝かしつけてある。

「急激に魔力を使ったことで意識を失っただけのようです。命に別状はなく、少ししたら目を覚ますでしょう」

ナツメグと呼ばれているこいつは回復系が得意で助かった。回復系は得意じゃないから正直、こいつの存在はありがたかった。

「それにしてもあれはすごかったですね…」

高音の従者の一人であるメイと呼ばれる従者が呟いた。

確かにあれはアーティファクトでもないのにとんでもない能力だったな…

「名称から検索してみました但し神宝『玉藻鎮目石』とは三種の神器の一つである八咫鏡の原型であり、天照の神体のようです。何故、彼女がそんなものを持っていたのでしょうか？」

茶々丸が解説してくれてあの鏡の正体もわかったが神宝か…

神宝の所持それだけでもとんでもない爆弾だ。これを欲する者もいるだろう。それにこいつは…

「どうしたんですか？エヴァンジェリンさん顔色が悪いですよ…」

考えに没頭して顔に出てしまったか…

こいつらなら話してもだいじょぶだろうな…

「血を吸うという事はそいつの魂の情報を見ることもできるんだ。

白花の血を吸ったときに秋葉原になる前の白花を見た」

「元は違ったんですか？」

「ああ、こいつは魔法使いの家系で才能が無くて、周りの勝手な言い分によって捨てられたんだと…」

まさか、白花が…

「そこで見たこいつの兄が…ネギ・スプリングフィールドという名の少年だったんだ」

「「「なっ!!!」」」

三人ともその言葉に動揺を隠せなかったようだ。

「待ってください。それじゃあまさか…」

「ああ、こいつの本当の名はハクカ、ハクカ・スプリングフィールド。英雄ナギ・スプリングフィールドが残した子の片割れだ」

・
・
・

それは幼いころの夢だった。

—— 白花は戦うよりも守ることがすごいんだから大丈夫!!

従姉妹の言葉に励まされた時の事だ、周りは非難していたがこの人は受け入れてくれた。

—— まったくあ奴らはガキに何を期待してんだかな！お前らはナギみたいなバカになるなよ！！

バカ親父に苦勞をかけられていた老人の言葉、酒を飲んでいた時に聞いたことだ。確かにあの鳥頭はバカだよな…私はならないけどネギはなるかもね…そこ嘘だ言うな…

—— 私たちが傷つくのなら、白花が治してよね！

活発そうな幼馴染に言われた一言がうれしかった。こんな私でも必要としてくれるんだから…

—— 大丈夫さ！みんなが悪く言っても僕は白花の味方だよ。だって僕は白花のお兄ちゃんなんだから！！

ああ、いつか会う日が来たら、言ってやろう…育毛剤はまだできていないんだ。と…あとは守られるだけなんて嫌だよ。だから一緒に肩を並べていこうよ兄さん…

そこで私の目が覚めた。

「知らない天井だ…」

いつも通りのネタを言って辺りを見回してみるとそこは別荘の中にある城の一室だった。

たしか、レーベンシュルト城だったかな…

「起きたか…」

扉が開いてエヴァがどこか神妙な顔もちでやってきた。

「ぶっ倒れちゃったか…」

「そうだ、大変だったんだぞ？ここまで運ぶのは」

ごめんと謝って、そのあとは沈黙してしまった。

「やっぱり見えたんだ…」

エヴァはああ、と答えた。

「だが、こうなる事がわかっていたんだろ？なら、問題ないんじゃないか？少なくとも私は英雄の娘だろうがなんだか知らないが秋葉原白花としか見ておらんよ」

ぶっきらぼうに言い放つその言葉に若干うれしさを感じた。

「ありがとう」

「気にするな、立てるか？」

うん、とエヴァの手を取ってそのまま引かれながら広間についた。

「あ、白花さんもう大丈夫なんですか？」

「あんまり無茶はしないでくださいね」

「座った方がいいですよ…」

入ってすぐに高音さんたちが声をかけてくれた。

「大丈夫よ、少しくらくらするけど立てないほどじゃないから」

「それでも、血を吸った後にあれだけの魔法を酷使したんだ。今は

意地を張らず甘えておけ…」

そうするか。と思い、おとなしく椅子に座った。

「今、茶々丸が暖かい物を作っているから食べて血を作っておけ」

「梅茶漬けですがどうでしょう」

「ん、ありがとう」

アツ、冷まさないとな…ん、美味い

「白花さん、食べながらでもいいですが、聞いてもいいですか」

大体質問の内容はわかっているんだよね…

「私の生まれと此処にいる経緯を聞きたいってなところかな」

はい、と頷いた。

そして、今までのことを話した。

少女説明中…

「もしかして、あそこまで正義を否定したのはこのことが原因なんですか？」

「それもあるけど、普通にそういうのが許せないだけさ」

むかつく奴はぶちのめす、ただそれだけのことだし

「そういえば、初めて会ったときは、封印した奴として私を見てい

たのか？」

やっぱりそこを聞いてくるか…そりゃそうかわざわざ目標が助けに来るなんておいしすぎて疑うだろうし…

「あれは偶然だ。夜道は物騒だからって竹刀を持って行っただけだし。強いて言うなら嫌な予感がしたから持って行ったかな」

「嫌な予感か…まあいい。それにしても殺したとおもった者が生きているとなれば又、殺しに来るだろうな」

その通りだ。だから、名を変えて身体を成長させてわからなくした。

「恐いですね…一歩間違えれば私たちもそのひとたちみたいな狂信者になっていたのでしょうね」

高音さんは今までの自分を思い出しながらポツリとつぶやいた。

「とりあえず、今日はもう解散という事でいいんじゃない？ 目的の解呪も済んだんだし」

「そうですね。エヴァンジェリン、今度町に行って買い物でもどうですか？」

「お姉さま、その前に学園長をごまかさないと…」

その辺の話は考えてある。

「それなら、まほネットに売ろうと思っていた解呪符をエヴァに取ってもらったら発動してしまって呪いが解けてしまったという事でいいだろう。また掛けると言ってきたら『ナギを呼んでかければいいだろう？ それ以外は認めん』っていえばいいんじゃない？」

「あくまで事故という事か、もうそれでいいだろう。なんかもう面

倒になった」

エヴァ、丸投げかよ…そういうばチャチャゼロも動けるようになったかな…

「そういえば、お前はまほネットで出品しているのか？」

「結構、儲かってありんす」

今でも好評で黒字をたたき出してるよ。セキュリティはナビでOK
！！電子精霊だろうとハッキングはできないZE☆

「ほんと、幅広くやっていますね…」

「符術に硬すぎる障壁さらに魔法とは違う力に神宝を使えて、神鳴流も使えるって言ってましたねそれに加えて商売とは…」

「鏡についてはあえて触れませんけど…」

その方がありがたい。まさか、神にもらったなんて言えないからな…
そして外に出た。

「私ことは言わないでね」

「わかってますよ。この事は誰にも話せないような内容ですし…」

それなら安心かな…今のこの人たちなら信じられるし。

そういえば、ナツメグが今の私の容体を説明してくれた。

「白花さん今日はもう帰ったらゆっくり休んだ方がいいですよ。それか、ここに泊まって休んだ方がいいですね。回復はしましたが油断しない方がいいですし…」

そういわれて私はエヴァの家にお世話になることになった。ナエ姉

に連絡も入れてこれで大丈夫だろう。

「それではお邪魔しました。」

そういつて高音さんたちは帰路についた。

「今日は助かったよ。まさか半場諦めていた封印が解けるなんてな」
喜んでいただけて何よりだよ

「元はといえばバカ親父のせいだし、当たり前のことをしたただけだよ」

「それでもだ。お前が来てからは日々の変化が楽しいよ」
「ああ、こんなにうれしそうにしているマスター最高です。」

そういいながら録画モードでこっちを撮っている。
どうしてこうなったのだろううちのナビコもこの子も…

「あゝ白花。もしよかったらまた一緒に寝ないか？」

これはエヴァなりに気を使っているのかな。
まあ、いいでしょう。

「喜んで、ご一緒させてもらうよ」

そう言ったらエヴァは目に見えて喜んでるように見えた。

「そうか！そうか！よしそれじゃあ、ゆっくりしていけ」
「無邪気に喜ぶマスターもいいですね。ハアハア」

茶々丸お前少し自重しろ：

だけどここの光景に思わず笑みが出てくる。

こんな毎日もいいなと思う今日この頃であった。

第13話 封印解除しましたが何か？（後書き）

やったね！ネギ君。解呪することが出来ないね

一応ネギ君には魔力抑制などを解いてもらう事になっています。

第14話 修理完了、後追加です。(前書き)

トモエ復活！後新キャラ追加です。

第14話 修理完了、後追加です。

「むう…」

今わしが唸っている理由はエヴァンジェリンの封印の一部が解けてしまったことだ。

なんでも、まほネットに売るための解呪符をうっかり触ったため解けちゃった☆との事らしい。

普通に考えたらふざけるな！！と言った感じだが、正義バカの一人の証言もあるようだし多分本当なのだろう…その子には黙ってもらうように言ったが…あっさり引き下がり追った。もしかしてグルか？しかし、あの正義バカが闇の福音に協力するとは思えんしのお…証言によればその解呪符は特注品で安くしても数百万はするくらいでもない解呪符らしい。それでも損害はないとかどれだけ儲かっているのじゃ…

また封印を掛けようにも『もう3年はとくに過ぎているんだ。そっちに従う理由はない』と突っぱねられるのがオチだろう…

「しかし、またこやつか…」

秋葉原 白花

電子精霊を駆使して彼女のまほネットのユーザーページから探ろうとするがセキュリティが固く、電子精霊すらもはねのけるといふ普通ではありえない事をしでかしている。

「どうにかして引き込めればいいんじゃないか…」

多分無理じゃろうけど…

はあ、この事が正義バカどもにばれたら大変じゃろうな…事実の隠ぺいに抑え付けにやららんから忙しくてたまらんわい…

・
・
・

朝になって隣を見てみたらエヴァがギュッと私を抱きしめていた。寝顔かわいいなあ…ほっぺたぷにぷに

「ん、朝か…」

まだ眠いのか目が半開きの状態で寝癖もいくつかある…

「おはよう、エヴァ」

「ああ、白花か。どうだ調子は…」

「バツチリだね。ゆっくりした甲斐があったね。それよりもそろそろ離してくれない」

その言葉を聞いてやっと今の状態に気付いてエヴァはあわてて離れた。

「あゝそのすまんつい抱き心地が良くてな／＼／」

うゝん、恥ずかしがっているエヴァもなかなか…

「恥ずかしがっているマスターは最高ですね！」

茶々丸お前何時の間に…

「朝食が出来ましたのでおこしに来たんですがお邪魔だったようですね」

そういつてごまかし、その場を後にした茶々丸だった…

「とりあえずさっさと朝食にありつけるとしますか」

「そうだな」

朝を抜くときついからな…

本日は白米に味噌汁、納豆に漬物、焼き魚といった和風な朝食でした。

そういえば最近パンやカロリーメイトばかりだったな…ん、おいし

「むぐむぐ、そういえばトモエの状態はどうなんだ？」

エヴァよ、食べながら話してくんなし、行儀悪いぞ…

「メダルの方は問題なくて、パーツももう治ったから復帰が可能だよ」

あ、この漬物おいしいな…

ついでにほかのパーツも作っちゃたんだよね。ナビコ？健在です。

「それに新しいメダロットが増えるよ」

さて朝食も済んで、クラスター内でトモエのパーツの修理も終わったことでトモエが復帰できました。やったね！！

「さて、気分はどうか？ トモエ」

「絶好調です。お嬢」

よしよし、これで目覚ましを掛けずに済むな…

「目覚ましはやりませんよ…」

何故ばれたし！？

「これくらいはお見通しですよ」

私の考えはお見通しか。日々成長しているなこの子は…

「そういえば今の状態はどう？」

「動作に問題はありません。ただ…」

なんだろう… トモエはなんだか不思議そうな表情になっていた。

「この機体に流れているのか… 何かの『力』を感じます」

「それは多分メダルの潜在的な力でメダフォースっていうんだ。暴走もその覚醒で起きたものだよ」

「メダフォース…」

リミッターも取り付けた。だから、暴走は起きないはずだ…

「それより、トモエ。新しい脚部パーツができたんだ。つけてみてくれ」

そういつて飛行型のパーツを転送した。

「この名は『ムシャバカマ・ハヤブサ』って言って高速飛行を可能にした一品だ。」

イメージ的にはレディブースターの脚部に袴（薄い装甲）をつけた感じである。

そして、脚部を付け替えて試運転をさせてみる。

「うおっと！？これは…バランスを取るのに苦労しますね飛行型は…」

浮かび上がったからすぐにふらついていたが徐々に安定していった。

「ヒヤッハー！！！！いいね！いいね！最高にハイって奴だ！！！！」

……！？

「イヤッホー！！今やこの大空は私イの物！さあ、お嬢。私オにひれ伏しな「雷の暴風」」うわらばッ！！」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ、普段はおとなしくまじめなトモエに飛行パーツをつけて飛ばしたと思ったらテンションが青天井にいつちまった。そんでムカついたからつい雷の暴風を食らわせちゃった。以下略…

「あれか、運転とかすると人格が変わるみたいな感じか…」

まあどうでもいいか…

脚部を元に戻して目が覚めるのを待ちますかね…

「すみません、なんか飛んだらテンションが上がっちゃって…」

良かった、元に戻った。

「ま、まあ次から気を付けるようにしよう。あ！そういうえば新しいメダルと機体が完成したんだ」

式体とも女型である。

「それじゃあ、私がその子たちの姉という事になるんですかね？」
「まあ、作られた順ならそうだね」

そうですか…と言ってなんだかうれしそうな感じがしている。

「それじゃあ、研究所の方に行くよ！」

「了解」

さてと、どんな子になるのやら…

「君がマスターかそれで私の名前は何というのだ？」

「君の名は煉だ。よろしくね」

うーん、なんかトモエと似ている感じかなこの子は…

「おいしい、名前を決めてぬえとかS y れにならんしょそれは…」

「はいはい落ち着いて、君はテンコ、これからよろしく頼むよメイ
ン盾」

黄金の鉄の塊でできた天人風のナイトですね、わかります。

そんな感じで二人？（式体）の名前を決めて、機体を転送した。

「まずこのFAM型には煉、君に入ってもらおう。そしてテンコ、君はこのNIT型に入ってもらおうよ」

そういつて、モニターを捜査して機体にメダルを入れる。
ちなみに外見はまんまです。（レンとてんこさん）

「む、これはちょっとバランスが…うわ!？」

「おっとっと、これくらいちよろいもんよっておいしい!？」

あ、二人ともこけたWWW

「大丈夫なのですか？この子たちは…」

「少し慣らせば大丈夫でしょう」

でもなんかそわそわしてるなトモエ…

「別に手助けしちゃいけないなんて言っていないよ。だからいってあげなさいトモエ」

「う、では、失礼します」

そういつてトモエは二人？（めんどくさいから二人で固定）の方へ向かっていく。うくん、命令もしていないのに心配か…これって自我ができてない？まあ、それはそれでうれしいけど…

「ほら、大丈夫？二人とも」

「ぬう、ありがたい姉上」

「ほう、経験が生きたなピーチを奢ってやろう」

そういつて、テンコはどこからともなく桃を取り出した。

「ありがと、それじゃあ二人とも私が手を引くからそれに合わせて歩いてみてね」

トモエは二人を起こして歩くことの指導している。

トモエって結構面倒見がいいんだな…新しい一面を発見したね。

「わ、私はこんなことしなくても大ジョブだし（照れ）」

「そういつて転んだのはどこの誰かな？」

「む牛ん」

論破されてるぞメイン盾…

しかし、これなら任せても大丈夫そうだな。

「お嬢、この子たちは私に任せてはお戻りください。学校の方も出ておかないと…」

ほんとうこういうところは誰に似たんだか…

「わかったよ。それじゃあ煉、テンコ。トモエの言う事をしっかり聞くんだよ。何かあったらナビに言えばいいからね…」

「わかったよ」

「h a i ! ! !」

よろしい。

「なんかお嬢がお母さんみたいですわね」

…トモエ一言余計だ。

・
・
・

クラスターから出て準備も済ましてエヴァたちと一緒に学校へ行った。

明日菜と木乃香に行きあったがやっぱり速すぎるだろう…
まだ余裕があるのになんでそんなに急いでるんだか…

「おゝす、白花にエヴァンジェリン、茶々丸、おはよう」

「おはよ、千雨」

途中千雨と行き会い、現状報告などをしながら教室へと向かった。

「そうか、やっとトモエが治ったか」

「それに二人追加だぜ」。煉とテンコっていうんだ。千雨も仲良くしてやってくれ」

千雨にも作ってやらないとなその方が賑やかで楽しいし、それに千雨に二人造ってあげればロボットができるしな…ぐへへ

「おい、なんだその気味の悪い笑みは…」

おっとつい顔に出てしまったようだな。

「そういえば白花。先日なナビコが『ナビちゃんには体はないんですか?』って聞いてきてな、そこんところはどうかんだ?」

ナビの体か：

ムシャハカマを作ってる時に造っちまおうと思って制作中なんだよね…

「そろそろ作ろうかなって思ってたとこだよ。デザインになんかリクエストある？」

「私は特にないが、ナビコが『一番良いデザインで頼む』ってさ」

ナビコよ…そのネタはどこから：

「ちなみにこのネタはN動だ」

あるの！？

此処でも神の影響が：

そんな事をしてたら教室へ到着。

「そういえば一限目なんだっけ？」

「えーと…英語だ。今日は高畑教諭いるんだっけ？」

そう、この英語の担当である高畑は、出張でいないことが多く、英語は自習になることが多い。

MGOで魔法使いとしての活動をするのはいいけどさ、そのことで生徒を放っておくのはどうかと思うぞ高畑教諭…どっちか一つに専念すればいいのに…

「今日はいるって聞いたよ。まったく出張多すぎだろ高畑先生は…」
「多分、裏の方の仕事で忙しいんでしょ。あれ、MGOに所属しているって話だし…」

「おいおい、生徒放っておいて正義の味方気取りの活動かよ…」

ちなみに認識阻害と遮音結界はしっかりかけてあります。

「まあ、本人のやりたいようにやればいいんじゃない？ 私たちには授業のことくらいしか影響ないし…」

もう居るか居ない関係ないってなかんじだしね、いいんちよがしっかり皆をまとめているし…

「あいつらはもう少し一般常識を知っておくべきだと思うんだが…」

言ってやるな千雨あんだけ叩いて気づかない奴はもう手遅れかもな…

「えーと今日は〴〵月の〴〵日だから白花君。次の英文を読んで訳してもらおうよ」

私の番か…えーと…：…なんでこれが教科書に載ってるし…

「I am the bone of my sword.
Steel is my body, and fire is
my blood.
I have created over a thousand
blades. (ry)」

これってさ…

「訳は『体は剣で出来ている。血潮は鉄、心は硝子。幾たびの戦場を超えて不敗(ry)ですね』

無限剣製ジャン！！誰だよこんなの教科書に載せた奴は：

「はい、あっているよ。ありがとうそれじゃあ…」

他にも「働きたくないでござる」や「俺、これが終わったらあいつに告白するんだ…」なんて訳もあるしどうなっているんだこの世界の教育機関は：

そんな疑問を残しながら授業は終わった。

そんなこんなで帰りのSHRまでカット

「ああ、白花君学園長が君を読んでるからSHR終わったら学園長室に行ってくれ」

あん？あの妖怪が一体何の用なんだ？封印か？それともまほネットの事かな？ま、協力の式文字は存在しないけどな…どうするか…学園長の所へ行って無駄な時間を過ごすか帰ってみみんなを誘って遊びに出るか…

「面倒だからバックれるか…」

「いやバックれないでくれないかな…」

っち、まだ嫌がったかこのロリコンメガネは：

「仕方ねえな、行つてやるよ」

「そうしてくれると助かるよ」

• どの口がそれを言うのか…強制したくせに：

・
「さて、ここに来てもらったのは君がエヴァの封印を解呪してしまったことじゃ」

「帰っていいですか？」

面倒なことしかないので速攻で言い出しておこう。

「却下じゃ。せめて事情の説明くらいはしてもらおうからのお」
「くそつたりい」

簡単に偽装報告を済ませました。学園長室にある読心結界？又は魔法は偽装思考で余裕でした。

「なるほどのお、こちらの報告と一致する内容じゃな」

そりゃそうだ、高音さんたちもうまく報告してくれて助かったよ。

「まほネットで出品していると聞いて調べてみたんじゃが特定できなくてのお」

「当たり前でしょう。そんな簡単に特定できたら個人情報保護法は必要ないでしょう」

電子精霊如きが意志を持ったセキュリティを突破できるわけないだろうが…

「せいぜい無駄な作業に時間を費やしててくださいな。では報告もしたことですし帰りますね。失礼しました」

向こうは泣き寝入りするしかないようだな…

ザマア W W W W W

「待つんじゃ、この事がばれたら正義狂いの奴らがエヴァを襲うかもしれないぞい。だからこのことは他言無用じゃぞい。」

彼女に勝てるような奴はこの学園にはいないだろうけど、向こうも職員や生徒を失うのは避けたいみたいだな：

「もともとそのつもりですよ。ばれたとしても呪いの方は結界外に出れるだけで魔力抑制は効いているという事にしてください。そういう魔法具も用意できますし：ああ、エヴァはきちんと報酬を用意してくれるなら働いてくれるそうです。ただし、こっちの事情を優先するですよ」

その言葉に向こうは安堵の表情になっていた。

まあ、公に封印解除ができる状態なら魔力抑制も外すのでしょうか：さてと、今度の休みにはエヴァたちと町で遊ぶのに誘っていいかな。

第14話 修理完了、後追加です。（後書き）

学園長はまだ高音のことを正義バカだと思っています。

第15話 彼女が憧れた一つの願い（前書き）

空白期のラストです。

第15話 彼女が憧れた一つの願い

本日はエヴァや千雨、高音さんたちと町の方へ出かけて、買い物をしたりしています。

ちなみにトモエは煉やテンコの面倒を見ているためお留守番
本当は京都あたりに連れて行きたかったんですが、長期休暇になつたら連れて行けとのことなんです。

「それにしてもエヴァンジェリンさんって京都が好きなんですか？」
「ああ、封印される前日本にいた時なんかで世話になったりしたところもあるからな」

「マスターはテレビの特集でもいろいろ見ていましたよね」

そんな感じで駄弁りながらゲーセンへと向かって行った。

「あ、○鼓の達人ですね…」

「ふっ…なら先ほどの話題に合わせて…」

「あっ…なら私もやるぞエヴァ」

エヴァと千雨がやるみたいだな…

○鼓の達人で京都の話題に合う曲ってあったっけ？

そしてエヴァが選んだ曲は…

『ウルキリバー？ Brave Sword, Braver Soul』

「これってステージの曲じゃん」

「いいだろ！別に…いい曲じゃないか…」

結果…二人ともミスなしのパーフェクト

「やり込んでるねーエヴァ、千雨」

「確かにいい曲でしたね。しかし、京都と関係ありましたか？」

原作のステージ知らないといけないよね…

「んじゃあ、次は私が曲を決めるぞ」

「なんでもOKだぞ、千雨」

「それじゃあ遠慮なく…」

『さいたま2000』

「なに！？まさかこの曲をやるだ！？」

「さあいくぞ！エヴァンジェリン譜面の記憶は十分か！！」

「やってやるさー！！」

ヒートアップしていく二人…しかし、おいて行かれる私たち

「あの二人はなぜあなのでしょう…」

「黙ってましようか高音さん…私たちは見守っているしかできませんし…」

「そうです。お姉さま、私たちはタイミングが合わなくて四苦八苦している姿を楽しみましょう」

「いや…それは駄目でしょう…」

佐倉さん…黒いです…

結果：千雨…叩けた率95%、エヴァ…ノルマギリギリ

「ぐぬお…まさかこの私が…」

「地位と権力にしがみついた結果がこれ…お前調子ブツこきすぎた結果だよ」

「すごいですねマスター！あんなのを打てるなんて…」

「悔しがっているマスターもなかなか…」

そういつて主人のorz姿を録画している茶々丸であった。

千雨はパンチングマシンでは100とか普通に出すんですねわかります。

「次は何をしますか？」

「Lovなんてどうでしょう」

そういつて佐倉さんは懷からカードを取り出す。どうやら多種族混合みたいだ

「甘いですねあなたたち…ここはボダブレでしょう！私の魔槍ヴェスパインが血に飢えていますわ！！」

意外なことに高音さんはボーダーブレイクをやり込んでいるのか…ヴェスパという事は狙撃兵？高音さんって突撃へ行ってイメージがあるんだけどな…

キング クリムゾン！！！！

佐倉さんはアルカナストーンを狙った戦法で勝利を収めた。ちなみにNewカードはおでん（オーディン）でした。

高音さんは某剣のように突撃していき見事な竹槍や先生の設置をしていたが、コアを狙われてしまい敗北…

そのあとテキトーに遊んでゲーセンを出た。

「いや〜楽しかった」

「白花：お前は私たちがやっているのを観戦してただけだろ…」
「失敬な！ナビコとガンダムVSをやったよ！負けたけど…」

スパコン級には勝てませんでした。

次に向かったのは映画館…え〜と今から見れそうで面白そうなのは…

極道モノのゾンビアクション『Mjmが如く』隻眼のヤクザがショットガンでゾンビを無双する映画らしい…

大人気魔法少女を麻帆良の学生が新たに作り上げた二次創作映画『魔法少女○リカルなのか？ファテは私の嫁！退いてヴィー○ちゃんそいつ殺せない！！』ヤンデレ物らしい

着ぐるみカンフーアクション『五重の塔・愛を取り戻せ』出演者が全員ネコなんだよね

一流レスラーになるための最大の試練『漢祭り・ASを切り開け！』どこかアレな臭いが漂う

「どれ見る？」

「私は『mjmが如く』だな。極道モノもおもしろそうだし」

「ゾンビアクションっていうのも気になりますから私はこれにします」

エヴァとナツメグは『m.j.mが如く』を見るようだ…

「それじゃあわたしは『リリカルなのか？』でも見るかな…いったい原作とどう違うのやら…」

「あっ！？マスターが見るなら私も見ます」

千雨、ナビコ組は『リリカルなのか？』を見ることにしてみたいだ。ちなみにナビ子は子供料金

「着ぐるみカンフーというのは興味がありますから私は『五重の塔』を見ますね」

「私もネコがカンフーという部分に興味があるからそっちにするよ」
「猫が出るならこれ一択ですね」

私と高音さん、茶々丸さんは『五重の塔』を見ることにした

「メイはどうしますか？」

「それじゃあ私はこの『漢祭り』を見ていますね」

佐倉さん、どこからともなく丸メガネを取り出して鼻息を荒くしているけど…

「まさか、あの迷作がここに合ったなんて…」

…一応聞かなかったことにしよう

各映画内容一部抜粋

『たとえこの身が滅ぼうと正義を貫くこの拳！命を燃やし試練を遂げる！守って見せよう純潔を！愛と正義の使者！グラン・バタフライ今宵も華麗に参上だっち！！』

『行くぞ——！！グラン・バタフライこのグラン・クエスチョンを打ち破れるか！？』

蝶の仮面をかぶり潜水艦を背負ったウホッ！いい男がはてなの仮面をつけ、食い倒れ人形を担いだ褐色の男に挑んでいく…

全員見終わって…

「すごかったですねエヴァンジェリンさん」

「ああ、特にラストのm.j.m対巨大ゾンビの戦いは胸が躍ったよ」

二人は満足しているようだ…

特にエヴァは友人と一緒にいるという事が無かったからかいつもよりもうれしそうな表情をしていた。

「まさかラストがなのフランク스가ヴィー〇に刺されるとは…もののっそい原作崩壊だった」

「あれも一つの愛の形なのでしょう…」

原作とは大違いの展開に驚きを隠せない千雨と一応合っている事を言うナビコであった。

「ニャン様と真央さんの抱きしめたシーンは泣けました…」

「しかし着ぐるみでもあそこまで動けるとは…」

「映画で見た限りではチャックなどが見当たりませんでしたから、本物ではないですか？」

「そこはプロだからじゃない？ネコ型ロボットじゃあるまいし」

高音さんは終わりの方では感動のあまり涙を流していた。

私と茶々丸はスムーズに動く猫の方が気になっていた。

「ふう……なかなか（バキューン！）な内容だったな…」

私は何も聞かなかった…

その後、みんなと合流して映画館を後にした…

昼食をとるために○ツクにて…

「そういえば白花……ムグムグ…お前の兄の…モシヤモシヤ…ネギなんだが…」

「マスター食べながらは行儀が悪いですよ」

ビツク○ツクを砲張りながら話しかけてくるエヴァを叱咤している茶々丸…

母親と子みたいだなあ…

「ング…ネットで検索してみたら『ネギきゅんを見守る会』というサイトがあつてな…そこを覗いてみたらさっきの魔法少女モノのハンマー持っている奴の服を着たネギがいたんだが…どう思う？」

「は?…」

一瞬言葉の意味が理解できなかった。

「それってもしかしてこれの事か？」

そういつて千雨が携帯を操作して件のサイトを見せてくれた。

「私のブログに並ぶ人気サイトで私も何度か覗いてたけど、この子
ちうのホームページかなりレベルの高いコスプレイヤーだと思ってたが…」

「多分、ネカネ姉さんのコーディネートの結果だろうな…サイトの存在も本人は知らない可能性が高いな…」

あの人…私がいた時も何度かコスプレさせようとさせてたし…

それにしてもカメラ目線以外の奴もあるが、盗撮か？見えそうで見えない画像もいくつかあるし…

しかし、ヴィー○の格好似合ってるな…他にも聖なる焰や日本一のツインテール魔神にメイド服…

キャラのコスは赤髪ばっかだな…しかもかわいいし…

「まあ、からかいのネタが増えたね」

「しかし、本当に可愛いですね…」

「私もこんな格好してみたいですね…」

茶々丸さんもコスプレに興味を持ったみたいだな…

「千雨…」

「任せておけ…最高の結果を残してやる。エヴァも込みで」

ククク…エヴァも巻き込んであんな恰好やそんな恰好を…

「まあいい…みんな食べ終わったしそろそろ出るか…」

「そだね、それじゃあ行こうか」

○ツクを出た後、千雨が布地を買いいたいといったため雑貨屋『コスプレ』に行った。

なんでもここは日用品のほかにも衣装やファンシーグッズなどコス以外にもさまざまなジャンルの商品が置いてあるらしい

ふと：エヴァがある一点に視線を向けていた

そこには○鼓の達人のマスコットキャラであるドン・和田とカツ・和田のぬいぐるみであった。

「エヴァ、あれが欲しいの？」

「う、いや：別に……」

恥ずかしいのか顔をそらしながら言うがチラチラぬいぐるみの方を見ている。

えゝと：セットで1200円か：

「これくらい買った上げるよ」

「う：しかしだな……」

「今日の主役はエヴァなんだし、これくらいいいよ」

とりあえずぬいぐるみを購入し、エヴァに渡す。

「ほい、どーぞ」

「ありがと……」

ぬいぐるみの入った紙袋を抱きしめながら頬を染めながらお礼を言ってくるエヴァを見ていたら鼻から紅い物が：

エヴァ：恐ろしい子！！

他のメンバーは千雨の布地のほか、クリップ買ったり、タオル買ったりなどでした…

日が暮れて暗くなり始めたところに私たちは帰路に着いた。

「しかし、あの闇の福音の意外な一面を見れましたね」

「なんていうか、とってもかわいかったです。」

「今度の夏コミのネタにしていいいですか？」

今まで敵対してきた存在の意外な一面にそれぞれの感想を口にした高音さん御一行…

だけど、佐倉さん自重しろ…

「それではわたくしたちの寮は別方向なのでここでお別れですね」

「今日はありがとうございました。楽しかったですよみなさん」

「エヴァ×茶々丸…いや、白花にするべきか…いつその事3（ドスッ！！アフウ…」

「ふざけすぎですわよ愛依…」

ついには高音さんが佐倉さんに腹パンして黙らせて、気絶させた…
気絶した佐倉さんは高音さんに背負われた。

「それでは失礼しますわ」

そういつて高音さんたちは寮へ帰っていった…

「それじゃあ私たちも帰るね」

「すまんが白花少し時間くれないか？話がある…」

何やらエヴァが私に用があるみたいだ…でもなんだろう…

「まあいいよ。千雨、ナエ姉には少し遅くなるって言うておいて」

「わかった。それじゃあまた明日な」

「さよ～なら」

千雨とナビコは寮へ帰っていった…

「すまん…時間を取らせて…」

「別にかまわないよ。それで話って？」

「なに…お前が来てから私の身の周りが様変わりしたなと思ってな…十五年近く続いた退屈な学園生活だったが今は充実しているんだ。お前が来たおかげでな…」

「私は私のやりたいようにやっただけだよ…」

「その結果がこんな私でも笑って過ごせる日々なんじゃないか。私は今日みたいな日々に憧れていたんだと思うんだ…友人と共に笑いあえる日々をな……」

友人とともに笑いあえる日々……か

「続けさせるさ…」

「白花？」

「少なくとも私がいる間は退屈させないよエヴァ…だからこれから楽しんでもいいよ」

「ふふ…そうか……なあ白花」

「なに？」

「ありがとう」

チュツ

! ? ! ? ! ? ! ?

えー!? 私キスされた?! マウストウマウス!? ん? 足元にあるこれ
って…仮契約の魔法陣?

「さっきの礼だ。後で複製カードを渡しておくよ」

いたずらな笑みを浮かべているエヴァの手に仮契約カードがあつた。

やれやれだね…

「いきなりとか：汚いなさすが吸血鬼汚い」
「汚くて結構。なんせ私は……」

――悪の魔法使いだからな……

第15話 彼女が憧れた一つの願い（後書き）

今回の映画のタイトルで元ネタがわかった人はいるかな？

はっきり言って映画のタイトルは趣味です！

次回キャラ設定を入れた後原作に入っていきます。
それではまた次回をお楽しみください。

キャラ設定？（前書き）

追加設定、メダロット組の設定です。

キャラ設定？

仮契約カード紹介

名前 ハクカ・スプリングフィールド

称号 打ち捨てられた探求者

アーティファクト 夢幻兵装

特性 希望 方位 中央

色調 白 星辰性 彗星

アーティファクト説明

持ち主の想像によってその姿を変えるアーティファクト。剣などの近接武装や銃などの遠距離武装にもなれる。大型のものや伝説級の物（f a t eの宝具など）に変化するのに時間がかかり、一度破壊されると同じものを出すには24時間必要である。なんか某正義の味方の投影に似た感じです

原作との違い

ネギ 女装癖に目覚める。コスプレイヤー、一般常識を持っている。
ナギに憧れていない。

エヴァンジェリン・AK・マグダウエル 白花と仮契約を結ぶ、封印の一部を解除

近衛木乃香 魔法の存在を知る 刹那と仮契約（主）

桜咲刹那 半妖であることを木乃香に告げる、木乃香と仮契約（アーティファクトは建御雷）

長谷川千雨 魔法の存在を知る

高音・D・グッドマン 正義狂いの解消

月詠（青山 月詠） 青山鶴子の弟子、現在は傭兵をしている、ネギま世界に無い力に目覚める

メダロット組設定。

名前 トモエ

機体名 トモエゴゼン

メダルの絵柄 刀と矢が交差している絵柄になっている。

装備パーツ一覧

頭部 SAM-01X ロイヤリティ ・装甲60・行動 打つ（そうび）・特性 スコープ

右腕 SAM-02X ラストハウコウ ・装甲40・行動 殴る・特性 ソード

左腕 SAM-03X クビウチボウ ・装甲40・行動 狙い撃ち・特性 デストロイ

脚部 SAM-04X サトリピース ・装甲50・移動タイプ 二脚

メダフォース 縦一闪、威力全開、????

忠義を尽くす女武者型メダロット。近接と遠隔両方をこなす万能型で、その強弓に射抜けぬものはなく、相手が行動した直後に当たればただでは済まないだろう。

備考 白花が作ったメダルの一つ、真面目な性格で白花のことをお嬢と呼び、行動を共にしているメダロット。身の回りのことをよく世話をしてくれる。ドール契約をしてメダフォースに目覚めるも暴走を起こし、現在は修理中である。

名前 ナビコ

機体名 ナビ・Commun

メダルの絵柄 原作のNaviの様に三枚の葉がある。

頭部 NAV-01NF リコレクト ・装甲70・行動 守る・

特性 索敵

右腕 NAV-02NF メモライズ ・装甲30・行動 応援・

特性 補助チャージ

左腕 NAV-03NF リメンバー ・装甲30・行動 特殊・

特性 継続リペア

脚部 NAV-04NF フリーダム ・装甲70・移動タイプ

二脚

メダチェンジ後

ドライブA 行動 特殊・特性 反射

ドライブB 行動 治す・特性 回復

ドライブC 行動 治す・特性 復活

・装甲200 ・移動タイプ 浮遊

メダフォース データ解析、回数アップ、????

かわいらしいマスコット系2等身案内嬢を模っており、様々なサポートを得意とする支援型。

変形すると背中に収納されているバインダー状のパーツを使い、4～5等身のナビゲーターに姿を変える。

備考 長谷川千雨が麻帆良に転校するときに渡し、以後は千雨をマスターとしている。性格はおっとりとしていておとなしそうな感じであるが千雨のコスプレなどを保存するのが趣味で若干？変態となっている。一応一般常識はあり、場所を考えて行動している…といいな…

千雨とドール契約を交わしており、メダフォースは時間をかけて覚醒させたため、暴走は起きない様に済ませた

名前 煉

絵柄 炎

属性 症状

性格 テクニク

所持熟練度 殴る・がむしやら・妨害

白花が作り上げたメダル一枚、毒舌家で遠慮がないが礼儀をわきまえているが実は姉に甘えていたお年頃である。白花にはそれなりになつてはいるが、どっちかというとトモエの方になつてい

る。
メダフォース 全体継続、推進アップ、????

機体名 アカレンジャ

頭部 F A M－R 0 1 イプレクイカ ・装甲40・行動 殴る（
装備）・特性 ブースター

右腕 F A M－R 0 2 ホットスポット ・装甲30・行動 殴る・
特性 ファイヤー

左腕 F A M－R 0 3 スピキュール ・装甲30・行動 がむし
やら・特性 ファイヤー

脚部 F A M－R 0 4 イクリプス ・装甲50・脚部タイプ二脚

F A M（使い魔）型の一体。情熱のアカレンジャその炎はすべてを
燃やし尽くす業火なり

性能 継続の症状で相手を苦しめることが可能な機体F A Mシリ
ーズはほかにもさまざまな特性の物を作るつもりです。

名前 テンコ

絵柄 盾を持った騎士

属性 防御？

性格 プロテクト

所持熟練度 守る・がむしゃら・狙い撃ち

白花が（ry 性格は傲慢そうな物言いでも矛盾したことを幾つか話すが、守ると決めたものは絶対守るといった頑固な一面もある。おれは不良だからよ：困っている人がいたら助けるし、きちんと敵から味方を守るのが一流のナイトなんだべ。

メダフォース 鉄壁防御、縦一閃

機体名 黄金の鉄の塊でできた天人

頭部N I T－E X 0 1 ウチョウテン ・装甲60・行動 守る・

特性 完全防御

右腕N I T－E X 0 2 ケーニツヒシールド ・装甲120・行動

守る・特性 防御

左腕N I T－E X 0 3 ヒソウノツルギ ・装甲40・がむしゃら

特性 ソード

脚部N I T－E X 0 4 トンズラ 装甲60 ・移動タイプ 二脚

メダチェンジ後

パワー変形

ドライブA ・行動 狙い撃ち・特性 ビーム

ドライブB ・行動 殴る・特性 ハンマー

ドライブC ・行動 がむしゃら・特性 サンダー

・装甲 280・移動タイプ 飛行

黄金の鉄の塊でできた天人が皮装備のジョブに後れを取るはずがない！

性能 メイン盾は碎けにいいと言わんばかりに防御を中心とした機体。だが彼女の怒りが有頂天メダチエンジになると鬼の攻撃力で相手を圧倒する。お前調子ぶっこき過ぎてた結果だよ？

名前 ナビ Navi

魔法球クラスターの管理人格

機体は現在制作中

ナビコのデータをもとに作り上げられたメダル。しかし、性格はまじめで、仕事をしっかりこなしている。

キャラ設定？（後書き）

さて、次回から原作をお楽しみください…

どれだけ崩壊しているかはわかりませんがね…

第16話 ネギ来訪…＋α

「卒業証書授与 ―この7年間よく頑張ったこれから――…」

魔法学校の卒業式

本来僕はこの壇上に登るはずじゃないのだが、周りの勝手な評価によりいくらか免除されて卒業証書を受け取る。

「メルディアナ魔法学校卒業生代表！ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

魔法の成績だってそうだ。実力的に考えて受け取るのはアーニヤのはずなのに…

あれは、まだ子供で居られたところだった。守るといったのに守れなかった妹のことで落ち込んでいる僕をぶん殴って励まされて今の僕がいる…

だけど、2年前アーニヤが消えた時は本当に参ったな…その数日後に10歳くらいになって帰ってきたけど…（現在は年齢詐称役でごまかしている）

「卒業おめでとう、ネギ」

「兄きおめでとうございやす！！」

ネカネ姉さんとアルベール・カモミールことカモくん
ちなみにカモ君はあることをして罪を清算させて、僕の使い魔として働いている。

あることはなんだって？それは去S「いわせねーよ！！」

「ネギ！あんたの課題はなんだった？私は日本で学生することになったけど…」

「ネギも同じような課題じゃないかしら…」

「あ！アーニヤにネカネ姉さんまだ見てないよ」

立派な魔法使いになるための修行地か・・・はつきり言って立派な魔法使いなんてどうでもいいんだけどな…永久石化の呪いの解呪のための研究ができるような場所が望ましいんだけどなあ……

「えーと（ヴォンあ、でたよ。『A Teacher in Japan』（日本の学校で教師をやること）』…」

………

なんだかビミョーな空気が漂い…

「「「はあ！！？」「」「」

思わずみんなで叫んでしまった。

でも、教師？学生の間違いじゃないの？十歳の子供にこんな課題だすなよ、爺ちゃん！！

「何かの間違いじゃないかしら？」

そ、そうよだね。間違い間違い…

「それじゃあ学園長室に行かないとね」

「あっ！？ネギ私も行くわ」

「あっ！？兄貴まってくだせえ！！」

もし本当なら鉄槌の騎士が爺ちゃんの所に来るかもな：

まったく…こんなの絶対おかしいよ！！！！

・
・
・

「いや、課題はそれであっておるよ」

この言葉は聞きたくなかった…orz

「爺ちゃん…こんな子供に教師なんて何考えているんですか。この
野郎…雷神の鉄槌喰らわせますよ？」
ギガントシュラク

「ネギ…本音が出ているわよ」

おっと、失礼。

「もう決まったことじゃ、立派な魔法使いになるためには頑張って
修行してくるしかないのう。安心せい、向こうの学園長はワシらの
友人じゃからな。ま、がんばりなさい」

それでもこれはひどすぎるんじゃないか？

ん？念話？

『それにのう……本来の課題なんてメガロメセンブリアでの教育だ
とかふざけた課題だったんじゃないだからこうするしかなかったのじゃ
よ。向こうはメガロの傘下ではあるがそこなら鍛えてくれそうな
人もいるのじゃ。無力な祖父を許してくれネギ・・・』

…！

そういう事か：

「わかりました。この課題しっかり取り組ませていただきます」

「まあ、校長。私がサポートをしてあげたりするんで安心してくだ
さい」

そんな頭脳労働よりも肉体労働のが得意でしょ：アーニャは：

「ネギ♪飛翔爆炎脚と獅子王波どっちがいい？」

「何故わかったし：」

戦略的撤退！！！！

それにしても日本か：エヴァンジェリンって人がいる国だったな：
封印解きにいかないと：

あっ！でも日本語の勉強もしなくちゃな：

・
・
・

そろそろ原作が始まる頃か：

どうも秋葉原 白花です。2－Aに在学しております。

2月。春も近くなってきましたが、まだまだ寒いですね：

「なあ、白花：今度の日曜空いてへん？」

そういつて話しかけてきたのは友人の近衛木乃香であった。

「どしたの？なんか用事？」

「なんでも、イギリスからの留学生と教育実習生を迎えに行っ
てほしいって爺ちゃんからお願いがあつてな。報酬ありで」

「のった」

報酬ありなら言ってもいいかな：

それにしても実習生はネギだとして留学生？

誰なんだろう：

「ほな、よろしゅうな。ちなみにメンバーはうちとアスナやで」
「了解、まかせなさい」

原作よりも計画的になってるけど成長したのかな？
さて、どこまで成長したのかなネギ兄：

・
・
・

日本に行くために飛行機に乗ったけど：耳鳴りがひどいな
まあ、最初と最後だけだったな：ひどかったのは：

「ほらネギ、指定した時間まであんまりないから急ぐわよ」

あ！ホントだ。これは観光している暇はなさそうだな。

「でも兄貴。一応、数日早く来たんだから急ぐ必要はないんじゃないかな
いっすか？」

「駄目なんだよカモ君。向こうに連絡入れて迎えをお願いしたって
言ってたから、その人たちに迷惑がかかるでしょ」

それにしても：

「どうしてアーニャは肉体強化しなくてそんなに早く走れるの？」

そう、今アーニャは肉体を魔法で強化していない状態で強化した状態のネギについてこられるのだ。

それに、年齢詐称役を解除して12歳くらいになっている。

「ヴェルダ임にいた時の修行の成果ね。これくらいどうってことないわ」

ヴェルダ임というのはアーニャが消えてから世話になっていた家がある世界らしい。

それが真実なのか、それとも妄言なのかは本人しかわからない。多分真実だろうけど…

「ッをついた。予定より15分早かったみたいね」

「まあ、今のうちに休んでおこうよアーニャ。あ！カモ君。認識障害もう切るから黙っててね」

「了解しやしたぜ。兄貴」

そういつてカモ君をカバンの中に入れておく…

ふう、これから教師になるのに遅刻なんてしたら恰好悪いしね。

ん、あのツインテールの人…

（ねエアーニャ。あの失恋の相が…）ゴニョゴニョ

（言うなよ！絶対にそのこと言うなよ！！）

そのフリはたしか話しておkという意味だったかな…

日本語は難しいよ…

「聞こえているわよ…このガキヤー！！！！」

うわ、声が大きかったか！とりあえず誤っておかないと

「す、すみません！占いでそう出ていたもので…」

僕はその場でジャパニーズDOG EZAをした。

額をこすり付けています。日本の本格的な謝罪は確か鉄板の上でやるんだっけ…

「う…ま、まあいいわ。世の中には言うて良いことと悪いことがあるから、そのところ気をつけなさいよ！ところであなたたち…この学園に何か用なの？」

「えーと、ここで人を待っているんですよ。向こうが言うには3人迎えを寄こすって」

その言葉を聞いて、ツインテールの人はなんか疑うようなまなざしで見てきた。

「えーと、もしかしてあんた達がイギリスの留学生と教育実習生？」

あれ？迎えの人は3人だって言ってたけど…

「ハイそうです。私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウアといいます。長いのでアーニヤと呼んでください。それで…」

「教育実習生のネギ・スプリングフィールドといいます。よろしくお願いします」

「あれ、でもあんたまだ子供じゃない！？」

まあ、普通に考えたらそこに気づきますよね…

「色々あるんです…」

「何か事情があるみたいね…まあ、詳しくは聞かないでおくわ。私は神楽坂 明日菜よ。よろしくね」

最初の方は怖い印象だったけどこの人いい人かもしれないな…

「「よろしくお願いします。明日菜さん」」

「よろしくね。そういえば…ほかの二人はもうすぐk」「ごめん遅くなっちゃった」ほら来たわよ」

あ、こっちに向かってきている二人の女性ですか
黒髪の人と…！？

「ごめん、ちよつと寝坊しちゃって」

「まったく…白花はトモエたちに起こしてもらわんとダメやな」
「ホントよね、普段は頭のいい優等生って感じだけど、寝起きの姿見たら、ないわーと思うわ」

この人はどこか似ていると思うてしまう。もしも生きていたならこんな姿なんだろうなと…

アーニヤも同じような考えになったのかこの人に目が離せないでいる。

「どうしたの？キミたち、そんなに見つめないでくれたまえ」

「ちよつとあんたたち、女子中学生が珍しいの？」

その言葉に我に帰りあわてて謝罪をする。

今回は普通ですよ…

「あ、すいません。つい…」

「知り合いに似ていたのよ。ごめんなさいね」

知り合い…確かに今となってはそうなるかな…

「まあいいよ。ところでアスナ留学生たちは「その子たちらしいよ」え!?!?まじで!」

いつまでもあの子と重ねるのは失礼だし、これから教師になるんだ…しっかりしろ!!

「本当です。この後学園長にあって…予定を決めるらしいんですが…」

「ちっこいのが実習生らしいわよ」

「若いのに大変だね。私は秋葉原 白花っていうんだ。よろしくね」

「うちは近衛 木乃香や。よろしくな」

「実習生のネギ・スプリングフィールドです。よろしく願いします」

「留学生のアンナ・ユーリエウナ・ココロウアって言います。アーニヤって呼んでください」

「んじゃ、自己紹介も終わったことだし…学園長室に行きましょう」

明日菜さんが案内しようと校舎の方に体を向けたら髪が鼻に…ハ…ハッ

「ハクチッ」

う…っ…ついくしゃみが出ちゃった。うわ、予想通り笑われちゃった。

•

・
・
どうやらネギはかなり成長しているみたいだね。
くしゃみの魔力暴走もないし、何より一般常識を持っている。当たり前前のことをきちんとできるのはいいことだな。

「…ダメだったら故郷に帰らねばならん…二度とチャンスはないが…その覚悟はできてるな。お主たち」

「「はい！」」

それにしてもネギだけじゃ無くてアーニヤまで来るとは…しかもなんか強化されてないか？魔力の量がネギや木乃香程じゃないけどかなりあるぞ…

「それでは、休み明けに教師の仕事をやってもらうかの。それまでは麻帆良を見てくるといいぞい。そうじゃ、アスナ君に木乃香、ネギ君とアンナ君を泊めてもらえんかのお。実はまだ住む部屋が決まっておらんのだじゃ」

「「えゝ！！！！」」

っていうかカモもいるとかだいぶ進んでるんじゃないか？この世界は…

「ちょっと待ってください！学園長アーニヤならともかく僕は男です。女性と相部屋なんてダメでしょうjk！！僕は変態という名の紳士ではありません！！」

ネギよ、前半はよかったが後半のセリフの知識を今すぐ抹消しろや…

「別にいいわよ。ふたり入っても問題ないし：あんた達なら歓迎するわよ」

「うちも歓迎するえ」

「う：では、失礼します」

「ありがとうございます」

ここら辺は原作通りか：明日菜の疑いは無さそうだな

「では、学園長：失礼しますね」

「うむ、ご苦労じゃったぞ」

その後、街に出かけてネギとアーニャに色々な店を紹介したり、ゲームセンターで遊んだり、楽しいひと時を過ごした。

「みなさん、今日はありがとうございました。やっぱり日本の漫画はいいですね」

「ええ、楽しかったですよ」

「年下なんだから少しは甘えてもいいんよ」

「だけど！教師の仕事の時はきちんとやりなさいよね」

「社会人としての自覚もしっかりね」

ネギは力強くはいっ！！と答えてくれた。

「よろしい。じゃあ私は先に帰らせてもらおうよ」

「はい、今日はありがとうございました」

「これからよろしく願いますね」

• そういつて私は一足早く帰路に着いた。

・

『ねえアーニャ、あの人は…』

『確かに似ているけど…確証がない以上まだ黙っておきなさい』

ハクカナのかな？あの子は…

…いつか話してくれればいいんだけど

第16話 ネギ来訪…+α（後書き）

やっと原作に入ることが出来ました。

アーニヤの異世界話は番外編ですつもりです。

第17話　ちよっぴり（？）変わった物語の始まり　（上）（前書き）

今回白花の出番はあまりありません。

しばらくはネギが主役です。

第17話　ちよっぴり(?)　変わった物語の始まり　(上)

さて、ネギ先生がこのクラス2-Aで教師をするみたいだな…
そして鳴滝姉妹と早乙女、美空がトラップを仕掛けているけど…
原作通りになるか、それとも成長しているのか気になるところだな…
さていったいどうなる事やら…

・
・
・

「教育実習生のネギ・スプリングフィールドと申します。まだまだ未熟ではありますがよろしくお願いします」

現在、僕は職員室にて自己紹介をしています。ネギ・スプリングフィールドです。

やっぱり子供が教師っておかしすぎるでしょうjk (常識的に考えて)

「では、ネギ先生これから頑張ってください。わからないことなどがあったら我々を頼ってください」

「ハイよろしく願います。新田先生」

学年主任の新田先生はベテランの雰囲気を感じる。

「じゃあ、ネギ先生。教室の方に行きましょうか」

「わかりました。しずな先生」

そういつて指導教員のしずな先生に案内してもらい、教室の方まで案内してもらっています。

それにしても麻帆良に行けるとは…父さんの頼み(尻拭い)をやら

なくちゃな…

エヴァンジェリンだっけ…見つけたら謝罪に説明に封印解除と…やることが多いなあ

とりあえず、カモ君用のペットの許可は後でしておかないと…

「ハイコレ、クラス名簿よ」

そういつてしずな先生から渡されたクラス名簿に…

『エヴァンジェリン・AK・マグダウエル』

もしかして父さんが言ってたのってこの子かな？それにしてもタカミチ、この『困ったときに相談しなさい』って…

本人は同意して書いたのかな？どちらにしても関係者ってことばらしてるじゃん…

この出席番号1番の人の1940…ってなんだろう…今から60年位前じゃん…

「ほら、ネギ先生教室に着いたわよ」

「あっ！ネギ。あんたが担任なんだ…」

そうしているうちに教室に着いたのだが、どうやらアーニヤもこのクラスみたいだ。

それにしてもドアの上に黒板消し…

「確かこれって日本の伝統なんだっけ？」

「新人が来たらまず最初に受ける洗礼の一つ『KOKUBANKESH I』！」

「いや…伝統じゃないからね。まったくあの子たちはやんちゃなんだから…」

あれ？違ったようだけど…まあいいか

「それで外す？」

「いや、ここは…全速前進だ☆!!」

思いつきりドアを開けると上から黒板消しが落ちてくるが…頭に落ちる前に側面を叩き壁の方へ飛ばす。

そこまではよかった…

黒板消しを避けて安心したのか軽い足取りで教室に入ったら、床に張ってあったロープに引っかかり、そこから連鎖してトラップの洗礼を受けてしまった。

—— 不覚…一瞬の油断が命取りってこういう事なんだ…（今の姿勢はorz）

よろけながらも教壇に立ち何事もなかったかのように自己紹介をした。

「えーと、今日からこのクラスでコスプレじゃなかった…英語を教えることになりました。ネギスプリングフィールドです。3学期の間ですがよろしくお願いします」

しばしの沈黙…

—— すべった？

「名前はさっき聞いたし：まず、出身地をお願い」

「僕たち二人ともイギリスのウェールズですよ」

周りからウェールズって何処？という声が多数上がっていたけれど、アーサー王を調べればわかると思います。

不老不死の骸骨みたいな変な生き物なんていませんよ？

「それじゃあ身長、体重、血液型は？」

「えーといくつだったけ？アーニャ：」

「知らないわよ：最近測ってなかったからねエ」

最近伸びてきてるからなあ：大体でいっか。

「多分140前後だと思います。体重は：最近測ってなかったんでわかりません。血液型はABです」

「私は150辺りね。体重は黙秘するわ。血液型はAよ」

「ナルホドね。それじゃあ趣味の方は？」

「古道具集めですね：後、（コスプレ専門誌の）読書です」

「修行に読書といったところかしら」

「はい、ありがとね」

なんかアーニャが言った修行という単語が出た瞬間、褐色の人：出席番号13番の古菲さんと糸目の人：出席番号21番の長瀬楓の目が輝いている気がしたけど気のせいかな？

「それじゃあ今の質問以外で聞きたいことは？」

「アンナ殿勝負しないでござるか？」

「アンナさん勝負するアル！！」

二人とも待ってましたと言わんばかりに声を張り上げて聞いてくる。

「別にかまいませんよ。忍者に格闘家ね…腕が鳴るわ…」

「それにアンナ殿拙者は忍者ではござらんよ」

楓さんは反論しているが口調ですでに忍者ですよ。あなた…

「私からもいいかな？」

「はい…えーと、早乙女さん」

「二人のことをネタにしたいかな？」

ネタ？何のことだろう…よくわからないけど…

「かm「自重しろ」ちょっ！？秋葉原さん！？」

「まだ先生が知らなくていい事です」

秋葉原さんは、何処から取り出した破裏扇で早乙女さん頭部を叩き、黙らせた。

知っておかないとまずい事だったかな…

「もういませんか？それならこのまま英語の授業に入りたいと思います」

「アンナさんはザジさんの後ろの席ですよ。あっザジさんというのは窓側の最後列にいる人の事ですから」

アーニャは出席番号31番のザジ・レイニーデイさんの後ろの席に着くことになったみたいだ。

「よろしくね。ザジさん」
(ぺこり)

アーニヤが席に着いたのを確認して授業を始めることにした。
だけど問題が発生した：

高い位置に書き込めない：

「先生これをどうぞ」

そういつてしずな先生から踏み台をいただき、授業を進めることが出来、その後、無事授業を終えることが出来た。え？消しゴム弾？喧嘩？そんなものはなかったZE☆

「ネギ先生、初の授業はどうでしたか？」

教室から出るとタカミチが声をかけてきた。もしかして見てた？

「高畑先生、身長が欲しいです：」

「あー、まあ、そのうち大きくなれるさ」

困惑した表情で答えるタカミチ：まあ、この身長だからヴィータちゃんに似合うんだけどね：複雑だ。

「あっ！！高畑先生こんにちは」

「やあ、アスナ君。彼の授業はどうだったかな？」

「特に問題なく進められました。まあ、あたしが付いているから大丈夫ですよ！！」

そうタカミチに熱演する明日菜さんを見ていて、タカミチに好意を持っているのがわかる。

—— 歳離れすぎじゃないかな…十代が三十代と付き合うってやばいんじゃない？

ちょうど近くにいた木乃香さんに聞いてみることにした。

（木乃香さん、もしかして明日菜さんってタカミチの事が…）

（その通りやで、ネギ君。じゃましたらあかんよ）

（わかってますよ。日本では恋路を邪魔したら馬にけられて地獄に落ちるって聞いてます）

（……まあおおむね合ってるな。地獄に落ちるかは知らんけど碌なこと起きへんから気を付けな）

そして僕はこの空間を後にした。

職員室に戻ろうとしたら、業務用の携帯から校内の施設の場所を把握しておきなさい。と新田主任から連絡があり、商店街や図書館島を見ておくことにした。

—— とりあえず図書館島の場所を覚えておこう。資料と化を使うのに利用すると思うし…

図書館島へ向かう途中、出席番号28番の宮崎のどかさんが視界を塞ぐほどの本を持って階段の端の方を降りてくるのを見かけた。しかも妙に足取りがおぼついている。

—— あれだけの本を持ってちゃあんな状態じゃ危ないな…

次の瞬間、宮崎さんは足を挫いて階段から落ちていく。

——あの高さじゃまずいだろ！仕方ない…な！！

懷から練習用の杖を取り出して風魔法で一瞬落下を止めて、何とか受け止める。

「だいじょぶですか！？宮崎さん」

「え？あ、先生…その…：…ありがとうございます」

「どうも…しかし、宮崎さん。あんな視界をふさぐほどの本を持っていくのはよしてください」

「あう…すいません。あれ？でもどうしてあんなになったんだっけ？いつもならパルやゆえに手伝ってもらうのに…あれ？」

…：…大方、連中が暗示系の魔法をかけて運ぶようにしたんだろう。

正義の魔法使い

大層な名前だけどその実態はとんでもないくらい腐った奴が多い…正義を免罪符にするような連中や自分が絶対正しい、という勘違いをした屑野郎…メルディアナにいたころも似たようなことがあったな。

階段で踏み外せて僕が助けるように仕掛けてヒーローにするような手口…ここでも健在かよ、まったく。

「あ…あんだ…：…」

「あ…：…」

やっべー見られちゃった。

弁解しようとしたら、襟をつかまれて人気のないところまで連れて行かれた。

ああ、これからどうなるのやら：

・
・
・

「えーと…」

なんだか、頭がボーっとする…とりあえずわかっていることは

1. 普段は持たないくらいの量の本を抱えていて、階段から落ちた。
2. 新任のネギ先生が助けてくれた。
3. 明日菜さんがネギ先生を連れ去った。

という事だった。

「とりあえずこの本どうしよう…」

また運ぶとなると同じようなことが起きかねないし…周りには人がいないし…仕方ない。携帯でパルゆえを呼んで頼もう。

「おや？のどか嬢じゃないか。どうしたんだこんなに本をぶちまけて」

声をした方を見ると図書館島で司書兼警備担当のロボットと聞いている、煉がいた。彼女とは友達で図書館島でよく話したりしている。

「本の返却しようとして図書館島に向かう途中、階段から落ちちゃって…」

「ナルホド…これだけの量を運ぶのは大変だろう…手伝うよ」

「ありがとうございます」

「なに、気にすることはないだろう。そういえばジョセフィーヌがお前に会いたがっていたぞ」

ジョセフィーヌというのは、図書館島に住んでいる飛龍で1年前、煉に用があつて探していた時、煉が知らない部屋に入っていくところを見て続けて入ってみたら龍がいました。それがジョセフィーヌの初めての出会い…

初めはものすごく驚いたけど、煉の仲介が入って触ったりなでたりしているうちに懐かれた。もちろん口外しないことにしている。これは私と煉の秘密である。

「そうですか。あの子って意外と甘えん坊なんですね。ドラゴンなのに」

「あれでも彼女は幼いんだよ、他と比べれば」

そんな話をしながら本の半分を持ち直して、半分を煉が持つてもらい図書館島へ返却に向かった。

第17話　ちよっぴり（？）変わった物語の始まり　（上）（後書き）

今回の補足設定

出席番号が1番ずつずれていますが、白花が入ったことでずれました。

メダロット達は、大学部のロボットとして働いています。

テンコとトモエは広域警備員、煉とナビコは図書館島司書兼警備員として働いています。

原作前にメダロットたちに色々な経験を積ませようという試みで各々の職に着くことにしました。

クーネルの飛龍ですが、人間で表せば10歳前後でのどかとは波長が合っているような感じで懐いています。ただし、部屋に侵入しようとするれば威嚇されます（吠えるだけ）。

のどかの認識はこんな生物ってまだいるんだな〜程度の認識です。

第18話 ちよっぴり(?) 変わった物語の始まり (下) (前書き)

なんかもうgggな感じになっちゃった…

第18話　ちょっぴり(?) 変わった物語の始まり　(下)

私こと神楽坂明日菜はつい先ほどありえない光景を目にした。

歓迎会の主役を呼ぶために新任の教育実習生のネギ先生を探していたら、知り合いの本屋ちゃんが階段から踏み外して落ちてくるのをネギ先生が受け止めたという事である。

これだけを聞いたら単にネギ先生が助けただけという事だけど…先生が懷から変な棒を取り出してそれを本屋ちゃんに突きつけたら…あら、不思議…一瞬だけ本屋ちゃんの落下が止まったではありませんか…

その光景を目にした私は思わずネギ先生を誘拐しちゃいました。

どうしよう…まあいつか。とりあえず尋問といこうかネギ先生…

「えーと、神楽坂さん一体何の用でしょう…」

「あんた…今のはいったいなんなのよ!!! 何あれ!? 超能力!?’」

「いえ、あれは…」

「その年で教育実習生ってのが少し怪しいと思ってたけど…現行犯で見たわ! さあ吐け!!! 吐くのよ!!!!」

ヤバイ…今までにない事だから興奮してテンションが青天井だ…だけど私は自重しない!!

「仕方ありませんね…」

やっと観念したか! さあ、じっくり聞かせて「お願いします!!」この事は他言無用にしてください!!!」って、土下座!?

「これがばれるといろいろ面倒なことになるんで見なかったことに

してもらえませんか…」

うわ、地面にこすり付けてるよこの子。なんかこっちが悪役みたいじゃない…

「わかった！わかったから！言わないから土下座はやめなさい！！
良心が痛むから！！！」

「ありがとうございます！！」

よほどばれたくないみたいね…

「はぁ…まったくあんた一体何なのよ…魔法使い？」

「いいえ、コスプレイヤーです」

「真面目に答えなさいよ。ていうか、なんでコスプレイヤーなのよ…」

「まあ（ホントでもあるけど）ジョークとして魔法使いなんです」

なんかボソツとつぶやいてたけどよく聞こえなかったわ。

それにしても魔法使いって…

「黙っていてほしい理由のうちの一つは魔法は秘蔵されるもので目撃されたら黙ってもらうように交渉する、もしくは記憶を消すなどの処理をしなくてはいけないんです」

「記憶ってずいぶんと物騒ね」

「一応言っておきますが、ファンタジー要素よりも命の危険のが多いですから魔法使いは…危険だからこそ秘蔵されているんです」

つまり、いま私は交渉されたってことか…

それにしても記憶を消すねェ…

「記憶うんぬんのあたりは気に入らないわね…」

「まあ、交渉せずに消したりする輩もいますからね。でも悪い事だけじゃありませんよ？精神崩壊するような出来事…誤って人を殺してしまった時などですね。その記憶を消してある程度ケアをして、戻すといったやり方にも使えます」

薬も過ぎれば毒にもなるって言うけど…似たようなものね…

「でも、なんでその魔法使いがここで教師やっているのよ？」

「修行です。魔法学校を卒業する時に卒業生は課題をもらい、その修行地で修業をするんです。ほかに聞きたいことは？」

うーん今の所はないかな…

「とりあえず無いわ…修行中ってことはあまり多くの魔法は使えないんじゃない？」

「そう思っていて構いませんが…よくわかりましたね」

「あれよ。ゲームで言うなら冒険に出たばかりの魔法使いか僧侶みたいなものでしょ」

覚えているのがメラやホイミくらいしかないのが基本だし…

「あっ！！そうだ！あんた一度教室に戻って頂戴」

「あっ…はい、わかりました。それでは、また後ほど」

そうやって私はコンビニで買い物をした後に教室の方へ戻った。

・
・
・

仕方がなかったとはいえバレてしまったか…あまり巻き込みたくない

いんだけどな……はあ
まあ…魔法なら結構使えるんだけどね…

それにしても明日菜さん、あんな速度で走れるなんて気の強化でもしているのかな？

まあ、それは後で考えるところでしょう。確か教室だったね…
さっさと向かうとしよう

『2—Aへようこそ？ネギ先生、アーニヤちゃん!!』

短時間でここまで準備するとは…みんな行動力あるね

「どうもありがとうございます」

「ありがとうね皆!!」

そういえばアーニヤに魔法ばれたことを言っておかないと…

(アーニヤ…クラスに一人に魔法ばれちゃった…)

(初日で!?!何やってるのよあんた!!!)

(ごめん…)

そこまで念話で会話していたら、さっき助けた宮崎さんがこちらの方へやってきた。

「あの——ネギ先生…えっと……さっきは…あの…助けていただきありがとうございますでした」

「どういたしまして、宮崎さん…けがはなかったですか？」

「はい…あ、これ…お礼です………図書券…」

「本屋がもうネギ先生にアタックしてるぞ——！！！」

そういつて図書券を渡した後、周りが騒ぎだしたり、委員長の雪広綾香さんから銅像をもらった。その後に明日菜さんがいいんりよさんをシヨタコン呼ばわりして喧嘩が始まり、賭けが始まって大騒ぎであつた。

（なるほどね…んで、宮崎さんにばれたの？）

（いや…助けている場面を見たのは今取っ組み合っている神楽坂明日菜さんだよ。宮崎さんは突然の出来事でわからなかったみたい）
（ふーん、とりあえず、後で私のことも言っておこうかしら…）

「やあ、ネギ君初日の授業お疲れ様だったね」

「なかなかの手際でしたよ。ネギ先生」

そういつてくれたのはタカミチとしずな先生だ。

「いえ…本職の人たちに比べればまだまだです」

「そりゃ一日で抜かれたら教師の立場が無いよ」

—— タカミチ…あなたがそれを言う資格ないと思うよ。出張多すぎワロタWWW

そんな事を考えていたら、明日菜さんがなにやら耳打ちしてきた。

（ねエ、ネギ。魔法で読心術とかできないかしら？）

タカミチの好きな人でも探ろうとしたいのかな？

（一応できますけど、無理ですね）

（え、どっちよ？）

（読心の魔法は使いこなせていないと簡単にレジストできる魔法なんです）

（簡単そうに見えるんだけどなあ）

（熟練の魔法使いや専用の道具じゃないと本人が読みたい内容以外の物を読んでしまうんですよ）

（残念…高畑先生がどう思っているかは無理か…）

すいませんね明日菜さん…タカミチも関係者だから読心ができてもレジストされてわかりそうにないから…

「そういえばネギ先生はどこで泊寝泊りおられるのですか？」

そんな事を考えていたらいいんちよさんが聞いてきた。

「明日菜さんと木乃香さんの部屋でアーニャと共にお世話になっています」

「なんか爺ちゃんが用意しとらんかったんやって」

「なん…だと…」

「生徒と相部屋だって？」

「うーん、もう少しインパクトが無いとネタにできないね」

やっぱり生徒と相部屋はまずいですよね…向こうが真面目に用意してくるとは思えませんが…

「その所どうなんですか？高畑先生」

「ああ、その件はまだみたいだよ。だからしばらくはお願いできるかな？アスナ君」

「大丈夫ですよ。二人とも礼儀正しいし、家事もできるみたいです

し」

「うちも平気やで、こんな子たちなら大歓迎や」

そんな事を話したりしたのちに解散となった。

「2－Aの皆さんはいつもあんな感じなのですか？」

「そやな、みんないつもあんな感じでお祭り騒ぎな感じや」

「あんた、これから大変だと思うわよくそれじゃお先に」

「あ、待ってゝな明日菜」

明日菜さんはいたずらっぽい笑みを浮かべて寮の方へ爆走していき、そのあとを追いかけていく木乃香さんであった。

「みんないい人たちだね」

「そうね、私も強敵ともに会えたから満足しているわ」

強敵ともって古菲さんと長瀬さんかな？

「まあ、あんたは教師の仕事しつかりやりなさいよ」

「わかってるよ。明日は職員会議もあるし、早めに起きないとね」

さて、この麻帆良ではどんな日々が送れるのかな…

できれば平和に過ごしていたいけど…無理だろうな…

第18話　ちよっぴり（？）変わった物語の始まり　（下）（後書き）

一応、原作のイベントは普通に起きますが、対応が違うのでその所をお楽しみください。

PV100,000記念 一狩り行こうZE!! (前書き)

今回はモンハンのような感じですよ

それにしても皆さん、お気に入り件数も100件を超えていました。
ここまで読んでくださり本当にありがとうございます。
これからもこの作品をよろしく願います。

PV100,000記念 一狩り行こうZE!!

えー最近出番がない秋葉原白花は今クラスターの下層エリアの集会所にいます。

ほかに、エヴァと茶々丸やトモエたちメダロット組、高音さんとゆかいな仲間たち、そして千雨たちである。

「本日集まってもらったのはこの大狩場で狩りをしてもらいます。何か質問は？」

「おい、白花：戦闘準備して来いって言うていたが：まさかただの狩りなのか？」

この狩りは普通じゃないよーエヴァ

「まあ、ただの狩りだけど、ここにいるほとんどは熊なんか軽々超える実力を持っているから：死にそうになったら強制的にここに帰るように係員が運んでくれるからね」

そういつて後ろの方に控えていたネコ型の獣人のアイルーを前に来させた。

ちなみに名前は三途と彼岸

「初めましてニャ。僕たちがみなさんが死にかけたらここに運ぶニャ」

「可愛い…」

「お持ち帰り…」

「解剖…」

なんか最後物騒なことが聞こえたけど：問題ないでしょ

「それで白花さんルールはどうするんですか？」

「最大パーティ4人までで目標を討伐して少ししたら転送されるようになってるから。それでもって討伐したモンスターの素材を使ってみんなに武器や防具が後日渡されるような感じで」

此処のモンスターの素材で作った武具は下手な魔法具より強力なんだよなあ

「今回は従者たちで分けることにしようと思うんだ」

「つまりは、私と茶々丸それに白花、高音は愛依とナツメグでいいとして、メダロット組はどうするんだ？」

「メダロット組は千雨の所で組んでもらうよ」

「なるほど、つまり私の所に煉とテンコが来るわけ」

そして出来上がったパーティは

エヴァンジェリン・茶々丸・白花・トモエ

高音・愛依・ナツメグ

千雨・ナビコ・煉・テンコ

『それではみなさん、くじを用意しましたので代表はくじを引いてください』

そういつてナビが箱に入ったくじを転送した。

「なら、最初は私がやりますね」

最初は高音さんがやるみたいだ。
高音さんはくじを引いて開けてみる…

「えーと、何々…岩竜狩猟、場所は火山ですね」

「なんですか、岩竜って？」

『説明いたします。岩竜というのはバサルモスの呼び名です。』

岩竜バサルモス…鎧竜グラビモスの幼生であり、火山地帯に生息しています。鉱石を主食にしており、平時は岩に擬態する等して外敵から身を守っています』

「鉱石というと石を食べているんですか？」

『まあ、そう考えてもらって構いません。そのためか…バサルモスの甲殻は岩のような頑丈差を持っています。攻撃手段は毒ガスを放出したり、突進したりですね。硬いと思うのでこの大樽爆弾をどうぞ』

そういつてナビはかなり大きめの樽を転送させた。中には火薬がたっぷり詰まっている危険物だ。

『簡単な衝撃だ爆発するので取扱には注意してください。ちなみにバサルモスの弱点部位は腹部で属性は水が有効です。ナツメグさんががんばってください』

「わ、私ですか!？」

「確かに水属性はナツメグが得意ですしね」

「私は火属性ですから、頑張ってください」

やったね、ナツメグさん! あなたが主役だよ!!

「さて、次は私か…」

次に千雨がくじを引き、それを開いた。

「溪谷でジンオウガか…」

「そういえば千雨の王刀の強化品もう少しで完成だったね」

千雨は何度かここにきて一緒にモンスターを狩っていたりしていたからすでに王刀ライキリがある。

今回のジンオウガで碧玉ができれば王牙刀【伏雷】にすることが出来るだろう…

「ジンオウガですか…私たちは機械ですから気を付けないといけませんね」

「黄金の鉄の塊でできたナイトが毛装備の龍に後れを取るはずがない!!!」

「となると、氷か…ナビ、腕を変えてくれないか？」

『了解…「FAM-007 ユメウツツ」「FAM-008 コチヨウ ノユメ」転送および交換します』

煉の両腕が光に包まれ、光が晴れた時には袖が白い装甲になった煉がいた。

FAMシリーズの試作品で極低温の衝撃を与えることが出来るフリーズ攻撃と混乱を可能にしたパーツであるが、今回は腕だけなので混乱は無し。属性的にはジンオウガに有効だろう…

「それじゃあ私は六花を転送してくれ」

『六花垂氷丸転送します』

そういつて千雨の前方に光が集まり、氷に包まれたような太刀が転送され、それを背負った。

「最後は私か…」

そういつてエヴァはくじに手を突っ込んで引いた。

「?おい白花、これWARNING!って書いてあるだけなんだが…なんだこれ?」

「それある意味大当たり…次にこの阿弥陀くじやって」

そして阿弥陀くじの結果、エヴァは雪山で狩りをする事になった。

「それで私は何を狩るのだ?」

「この世界で最強クラスのモンスターで、金獅子ラージャンっていうモンスターなんだ」

『ラージャンというのは巨大な猿のような体躯と、山羊の角のような振れた二本の角が横からつき出た頭部を持つモンスターで非情に凶暴な性格をしており、縄張りに入ってきた侵入者には徹底的に攻撃をしかけます。普段は黒い体なのですが激昂時に毛が逆立ち金色を帯びるため金獅子と呼ばれています。攻撃方法は殴るなど原始的なものが多いのですが雷球やビームの様なブレスを吐いたりしますので十分注意してください』

ラージャンとは戦った事があるけど…あれはマジでヤバイ!!

「なるほど、この世界で最強クラスか…最強の魔法使いであるこの

私にふさわしい相手という事だな」

「サイヤ人が相手となると全力でいかないとな」

「私たちはマスターのサポートに専念するとうとう」

「そうですね。攻撃はお嬢たちに任せるとしましょう」

『ちなみに弱点属性は氷です。激高時には回避に専念することをお勧めします』

「属性的には有利という事か…」

最恐VS最強か…まあ、勝って見せるさ…

『それではみなさんを各フィールドに転送します。なお、回復アイテムなどは向こうにある青い箱に入っているのものでそれを使ってください。使い方も一緒に入っているますし、私を呼んでくれればアドバイスをいたします。それでは、皆さん頑張ってください』

そして私たちは光に包まれ互いの狩場に転送された。

・
・
・

— 高音S —

「それにしても龍と闘う事になるとは…」

ナビさんから聞いてみましたが、バサルモスは飛龍種の中ではまだ弱い方らしいです。甲殻が頑丈なだけで体力が少なく、攻撃モーションも遅いとのことであるが、「あなた方だと苦戦するかもしれません…」とのことであった。

なにか苦戦する要素があるのでしょいか…

「準備できました。お姉さま」

「情報によると最初はエリア7の方にいるらしいですよ」

結構奥ですわね。まあ、大丈夫でしょう。

「それでは参りましょうか」

しかし、クーラードリンクというのは暑いところでは必須ですね。
このすっきりとした味わいは癖になりそうですわ…

やってきましたエリア7しかし…

「居ませんね…バサルモス」

すでにどこかへ移動してしまったのでしょうか…

「少し探してみましよう、どこか見落としているかもしれませんし」

「わかりました」

「了解です。お姉さま」

そして周辺を探索してみましたが、あったのは火薬草や龍殺しの実などであった。

「居ませんね」

ちょうど愛依が近くの岩に背を預けた時、その岩がうごめいていたことに気が付いた。

「愛依!!! 危ない!!!」
「つく!?!」

愛依はなんとかその場を飛びのき地中から岩竜の奇襲を回避した…

これがバサルモス…

岩のような外殻、つぶらな瞳、ゆらゆらと体を揺する動作…可愛い

「可愛いですね。あの子」

「何とかお持ち帰りしたいです」

「しかし、向こうは野生の生き物…捕まえる何てこと無理に『できますよ』っえ?」

『体力を減らして落とし穴か痺れ罠にかけて捕獲用麻醉玉をぶつければ捕獲という事でクリアできます』

…いいことを聞きましたわ

「これは捕獲一択ですね!!!」

「ヒャッハー!!! 可愛い子はお持ち帰りだ——!!!」

「みwwwwなwwwwぎwwwwっwwwwてwwwwきwwwwた——!!!
wwww」

なぜか怯えたように後ずさっています…もう遅い!!! 私たちに出会った不幸を呪いなさい!!!

•
•
•

— 千雨 S —

ジンオウガの居場所はナビコの索敵のおかげでエリア6にいることがわかり、戦闘に入ったが、ここで予想外の出来事が起きていた…

ジンオウガは既に帯電状態になっていたのだった…

ねーよ…なんでいきなり帯電状態なんだよ…私たちより前に何かと闘っていたのか？ここに来るまで変わったことなんざ、せいぜい天候が荒れたくらいなのに…っち、ついてねエ

「マスター！！連撃来ます！！」

「危ね！？」

ナビコの声に反応してジンオウガの雷を纏った左右の叩き付けを回避することが出来た…

「ハイスラァ！！」

「追撃のフリーズでダメージはさらに加速した…でいいのか？」

叩き付けたことによってできた隙にテンコはヒソウノツルギで切りつけ、煉は腕から発生させた氷柱を叩き付ける。

「oi 千鯨…俺の気のせいかもしれんが…あのキングベヒんモスもどきあんか弱ってぬえか？」

「何？」

テンコの言葉を聞き、ジンオウガをよく見るとまだ戦い始めて2時間程度しかたっていないが…すでに角は折れており、爪も欠けている…

—— 私たちの前に縄張り争うでも起きたのか？

「まあ、私たちには関係ないし：邪魔にならなければいい：さ！！」

六花で上段から斬り付け、突き、切り上げ、左側へ体重移動を掛けながら斬り払う。

反対側にいたテンコは剣と盾のコンボを入れトドメに踏み込んだ足を軸にして、体全体を回転させながら斬りつける。

正面で構えていた煉は、ほかの二人に合わせてフリーズ攻撃を繰り出す。

ジンオウガがなにやら腰だめを造り、回転攻撃を繰り出すが、すでに3人は離れ、回転攻撃を回避することが出来た。その動作の合間にナビコのヴァルキリーブレイズで肉質の柔らかい頭部や背中を打ち抜く。

4人の連携にジンオウガが怯み、その隙を逃さずに太刀に纏っていた気を開放してジンオウガに斬り払う。

「まだまだ！！」

さらに逆回転。そこから手首を使い、小さく素早い動作で式回、参回と切りつけ、最後に力一杯振り下ろす。

「イヤアアアッ！」

トドメに全身を振り回すようにして横一線に太刀を振りぬき、太刀

を鞘へと納める。

そして倒れるジンオウガ：小さく呻き動かなくなると、纏っていた雷光虫が霧散していった。

「ふう：私たちは勝ったがあいつらはどうかな？」

・
・
・

—— エヴァス ——

「闇の吹雪！！」

「万魔の槍！！」

全くなんだあのスーパーサイヤ人は！？

力だけでタカミチの豪殺居合拳を超えるは、砲撃とも思える雷球を吐き出してくるわ：

なるほど：伊達に最強と呼ばれているわけではないという事か

「ぶちぬけええ——！！」

「ミニガンでは歯が立ちません。マスター」

トモエが力を纏った（たしかメダフォースとか言ったか：）弓を放つが角にあたって弾かれる、茶々丸もミニガンをあまり効果はなかった。

—— ブオオオオオオオオオ！！！！

咆哮

ただそれだけで吹き飛ばされてしまうような錯覚に陥る…
最初の方は黒い身体だったが、今は黄金に輝く獅子と化していた…

金獅子ラージャン

説明で聞いた容姿だったが、今のこいつは悪魔にも見えるな…

圧倒的な力、全てを蹂躪するような凶暴性、

「断罪の剣!!」

—— グルアアアアア!!

奴の拳と断罪の剣がせめぎ合い、負けたのは私の方だった…そのまま私は壁に叩き付けられる。

ただの拳で断罪の剣を砕くとはな…
世界はまだまだ広いのだな…

とこんな時にそんな事を考えてしますのであった。

「エヴァ!!! 大丈夫か!？」

「マスター!!!」

大声で叫ぶな、頭に響くだろうが…

「うるさいぞふたりとも：トモエを見習え」

「この程度でくたばるとは思えませんでしたしね」

全くこいつは誰に似たのだからなんか生意気だな：

「この十数年私も腑抜けたものだな：

吸血鬼になってこんな戦いは何度かあったが、ここ最近は何の危機というのとはなかったからか少し鈍ったな：まったく平和なのはいい事なのだがたまにはこういう刺激もなくちゃな：

「感謝するぞ金獅子ラージャンよ。こんな楽しい闘争は久しぶりだ：私も本気で行かせてもらおうぞ！！」

こちらも最高の技で答えるでしょう：十年近くかけて作り上げたこの《闇の魔法》でな

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック来たれ氷精！大気に満ちよ！！」

―― ぶるああああああ！！！！

本能的に危険を感じたのか：ラージャンは四肢を踏ん張り、エヴァに向かって雷光を放つ

まだ詠唱が完成してないうちに叩くか：だがこちらは一人ではないのでな

「白花さん！マスターを」

「任せな！最強防壁！！」

茶々丸の号令で私の前方に立ち雷光ビームを防ぎきる…相変わらずの硬さだなこいつは…

それじゃあさっさと完成させるか!!

「白夜の国の凍土と氷河を!!凍る大地!!術式固定!!!!掌握!魔力充填!!術式兵装!!『白夜の氷姫!!』」

」

凍る大地を固定、解放し、その魔力を身に纏う…

「さてと…一気に行かせてもらおうぞ!!」

リミットギリギリまで逝ってやる…

「解放!断罪の剣!!」

再び発動した断罪の剣だが闇の魔法によって属性付加に加え、周囲の魔力を取り込みブーストした状態の魔法を発動させる。

「うおおおおお!!!!」

瞬動で一気に接近し、斬り付ける…

反撃しようと腕を振り回すが、ハクカが懷から何かを取り出すのを見て距離を置く

「閃光行くよ!!」

白花は何かを投げると次の瞬間、小さな破裂音と同時に目を灼き尽くさんばかりの閃光が放たれる。

—— グルアア・・・

その閃光でラージャンは視界を潰され暴れまわる。

暴れ回るうちに適当な方向へ突撃してきたラージャンが落とし穴に嵌った。

「ビンゴ!!」

「一気にたたみかけるぞ!!」

「フルチャージ!!」

「ヘビィボウガンでございます」

突然の出来事に対応できていないラージャンは落とし穴から出ようともがくが、強力な粘着性のネットが下半身に絡みつき脱出することが出来ない…

「左腕解放! 断罪の剣!! 右腕解放! 凍る大地!! 術式融合!!」
『罪裁く絶対零度の剣』!!」

エヴァは闇の魔法で纏っていた魔力を開放し剣と共に放つ
放たれた魔法によってラージャンの角は根元から叩き折られる…

「メダフォース『縦一閃』!!」

トモエはメダフォースが籠った斬撃を放ち、当たった瞬間、衝撃と
なってラージャンに襲いかかる。

「汚物は消毒です」

茶々丸はナビに転送を要請し、取り出したヘビィボウガン海造砲【

灰燼】で爆発系の弾丸を打ち続ける。

「『来たれ!』ビックバン・ソード・グラビティ!!」

白花のアーティファクト『夢幻兵装』によって呼び出した”女の子でもぶんぶん振り回せる巨大な剣”をコンプセプトにした刀身が黒一色で1メートル半はある剣、一撃なら最強の威力を持っているが、強度は最低ランク：一撃放てば絶対壊れるというロマンあふれる品物なのだ

「ぶっ飛べ——!!」

両手で握りしめた剣が、限界まで体をひねり、バネを最大限に生かしてグラビティがレーザーに直撃する。

鼓膜が破れそうな轟音と衝撃

そしてすぐ後に壁の方で何かが叩き付けられたような音が響く：そこには山の岩壁に貼り付けになったような状態のレーザーがあつた。

落とし穴からは飛んで行った方に千切れたネットがあつた：どうやら、落とし穴から壁まで飛んで行ったようだ：

「私たちの勝ちだな」

「最強の名に恥じない強敵だったさ」

そうつぶやき集会所に4人は集会場へと転送されるのであつた。

・
・
・

結果：高音Sはバサルモスを捕獲することに成功した：ただ、バサルモスはなんだか怯えたような感じだったが、何かあったのか？

千雨たちは無事シンオウガを討伐することに成功したが、溪谷近辺で何か起きているかもしれないと忠告を言い残した。ちなみに、ジンオウガから碧玉が取れたので強化することが出来るようになった。

そして私たちは、ラージャンの討伐に成功：壁に埋まっていたため転送が面倒だったとナビに小言を言われる始末：エヴァは今回の狩りに満足している様子だった。今回はソロで行きたいと言っていたが：まあ、大丈夫かな？最強の魔法使いだし：：：ていうか術式融合パクられた、どうでもいいけど

獲れた素材を使い、各々にできた武器を渡した。

高音たちは鉱石系の片手剣『オデッセイ』を作成し、それに呪文処理を施していた：無属性だから付加しやすかったとのことだ。

千雨は、武器を強化して『王牙刀【伏雷】』を作成：余った素材で『王弩ライカン』を作り、ナビコに装備させた。テンコはヒソウノツルギがあるから問題にいとこの事で煉は素手の方がやりやすいとの事だ。

そして私たちはエヴァに武器を提供することにした。鉄扇を使っていると聞いたので道具作成スキルにラージャンの素材を使い作ってみた。そしてできたのが『獅子鉄扇【狂乱】』雷属性を纏った鉄扇であり、発動媒体にも使うことが出来る代物だ。今度狩りに行くときは氷属性を付加できる奴：クシャルダオラ辺りを狩るとしますか：

そして、今回の狩りは幕を下ろした。

「結局出番無かったニヤ」b y 彼岸
「けが人が出ないのはいいことなのニヤ」b y 三途

PV100,000記念 一狩り行こうZE!! (後書き)

モンハンの描写って難しいですね。

オリジナル武器作っちゃいました。

獅子鉄扇【狂乱】

とりあえず盾のない片手剣でいいかな？

麻帆良祭で鉄扇使っていたしこれが合うかなと思い作っちゃいました。

反省も後悔もしていません

ステータスは

攻撃力350 属性値・雷300 防御力+5 会心率20%

という感じで出来ました。

切れ味の方は他のラージャン武器と同じくらいという事で…

それでは次回もお楽しみください。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・ココロウエの一日（前書き）

今回はアーニャしてんです。魔法関連は特にならない日常的な感じですよ。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・ココロウエの一日

「あら？ アンナじゃない…どうしたの？ こんな所で」

声が見る方を見るとそこには白い髪に赤い瞳…最近占いにはまっている預言者プラムがいた。

—— 久しぶりねプラム…

「もしかして、ようやく私の物になる決心がついたのかしら？」

—— いやいや…そっちが呼んだんでしょ？ まったく夢にまで手を出すなんて…

「あら、ばれちゃった…でも、あなたがいないと退屈なのよ」

「おお、プラムよそんなに退屈ならこの魔帝ロイヤルキングダーク3世が…」

突然乱入してきた、二メートルを超える筋肉男にむかって私は愛用しているライフルを、プラムはどこから取り出したバズーカでお見舞いする

—— お呼びじゃねえんだよ！！

「消え失せなさいゴミムシが！！」

「うわらば！！」

そうして、ただのアホ（魔帝ロイヤルキングダーク3世）は彼方へと消えていった。

「はあ…まったくあの恥知らずは……」

—— あれに関しては同情するわ…

「ありがと、それじゃあそろそろお目覚めの時間ね。またねアンナ」
—— ええ、身体には気を付けなさいよ

・
・
・

起床、現在5時半

まさか夢にまで干渉するなんて…さすがは魔王といったところかしら

「あつ、アーニャおはよう」

「おはようアーニャ」

「おはようネギ、木乃香…あれ、アスナは？」

今部屋にいないルームメイトの行方を聞くと…

「あゝ、アスナは新聞配達のアアルバイトしててな〜アーニャが起きる少し前に出たんよ。それよりアーニャごはんできてるで食べていい」

「わかったわ、食べ終わったらランニングにでも行こうかしら…」

「付き合うよアーニャ…僕も軽く運動したいし」

「時間は大丈夫なの？職員会議とかで早いんじゃない？」

「軽くだから大丈夫だよ」

そして朝食を食べて、ランニングに出かけた。ちなみに今日の朝食は白米に目玉焼き、その他もろもろ…

食後の運動にランニングをしている途中新聞配達をしている明日菜に行きあった。

「お！頑張ってるわねあんた達」

「おはよう明日菜」

「明日菜さん、お疲れ様です」

どうやらまだ新聞配達は終わっていないみたいでバッグにはまだいくつか新聞が残っていた。

「まだ終わってないからまた後でね」

「頑張ってるね明日菜…ネギ、そろそろ時間」

「そうだね、それじゃあ先に上がらせてもらおうよ」

そしてネギは寮の方へ、明日菜は商店街の方へ向かって行った。その後、少し走って寮へ戻り登校することにした。

そして教室にて…

「おはようザジさん」

＼（一、）

なんだか眠そうな表情であいさつしてくるザジさん…

この人は悪魔みたいだけど敵意はないみたいだし、敵対する必要はなさそうね…

「そういえばね、今朝プラムが夢に繋がってきたのよ」

Σ（。D。；）

「え？プラムとの関係？向こうが『私の物にならないか？』なんて迫ってくるのよ…」

Σ（□ 111）エェー

「いやね、ちょっと前に魔界にいてその時に気に入られちゃったみ

たいなんだけど、いったいどこが気に入ったのかしら…それよりザジさんって好きな芸能人っている？」

「プレネールさん…一択…」

「やっぱり？でもたまに出るアサギも面白いわよね」

「…確かに…曲…入ってるよ」

そういつてザジさんはI p o dを取り出し、イヤホンを差し出す。

『たなぼたチャンス♪』

「メタフォか、わたしはG o F i g h tが好きね」

「罪なバラも…いいよね」

「ふふ、そうね」

魔界のことを知っている人がいると話題が尽きないわ

そんな感じで話し込んでいるとH Rの時間が来てみんな席に着く。

・
・
・

「え〜とこの英文を…明日菜さん呼んでください」

「ちよっ！おま！？なんで私なのよ！！こういう時は日付と出席番号でしょ！！」

「思いつき目線そらしていたので指しました。わからなくていいですから、どうぞ」

一時間目の英語…英文を訳してもらうために指名されてしまった明日菜であった。

確かに、ネギがアスナの方を向いたら必死に目線そらしてたわね…それはもう首が90度を超える様な勢いで

「うゝ、わかったわよ。えっと訳すのよね…ジェイソンがチェーン

ソーを持って…友達斬って、わが世の春が来た？ジェイソンとその花は…えと…骨が…百本？えっと、その……………わかりません…」

「全く明日菜さんは英語もダメですわね」

「英語だけじゃなくて数学もダメだったよね…」

「というか保険以外駄目なんじゃない？」

アハハハハハハハハ

さすがにこれ、いじめレベルじゃない…

ていうかやばいわね、ネギはこういうのって…

「ちよつとみんなY「バンツ！！」遅かった…」

ネギは教団を叩き全員を黙らせる。

「みなさん…他人をバカにするのがそんなに楽しいですか？」

若干怒気が籠り、底冷えするような声に無表情で問いかけるネギ…
背後にはなんか某管理局の白い悪魔が見えるわね…

「人の失敗を笑うというのならあまり感心できませんね…確かに日常でちよつとした失敗で笑う事はあるかもしれませんが、でもそれは傷つけることはない悪ふざけのようなものですが、今のは完全に人をバカにしていましたよね？それに誰だって苦手なことはあるんです…」

静かに、だけど重くのしかかる言葉…

笑ってしまった人たちは既に蛇に睨まれた蛙の様に黙っているしかなかった。

「僕が言ったこと間違っていますか？ですが、些細なことで行き違
うことだってあるんですよ？だから…」

少し 頭 冷 や そ う か…

『すいませんでした——！！！！！！』

一部のメンバーを除き、全員がしっかりと謝った。

おい、それ何処の管理局の魔王様だよ…なんか長谷川さん苦笑いし
ているけど、元ネタわかったからかな…

「謝る相手は僕ではありませんよ？」

「明日菜さん…申し訳ありませんわ…」

「ごめんよー！アスナー！」

「うわーん！ごめんなさいー！」

うわ…すでに泣いている人もいるわね…まあ、ネギの魔王モードは
恐ろしすぎるしね…

以前、魔王モードになった時は、魔法学校で同じ学年で成績の悪い
子がいてその子がいじめを受けていたのよね…しかも、教師ま
で参加するくらいだから性質が悪いわ…それでネギが関係者を全員
粛清しちゃったのよね…鉄槌の騎士に変身して…

生徒は入院してうわ言のように『ハンマー怖い、ハンマー怖い』つ
てトラウマになって、教師はクビという結果になったのよね。そん
で、いじめを受けていた子と友達になって一緒に遊んだりしたわね
…あの子、元気かしら…

「もういいわよ…事実なんだし…」

「みなさん、反省してくださいね。傷つけるつもりのない一言でも傷つけてしまって自殺なんてこともあるんですから…」

『はい…』

その後は、重苦しい空気の中授業することになり、4時間目まで2
—Aはお通夜のように静まり返っており、新田先生も「いったい何が
あった…」とぼやくほどであった。

・
・
・

そして昼休み…惚れ薬騒動？あるわけないじゃん

中庭にて

「ちょっと悪乗りしすぎたアル」

「確かに…拙者たちも人のこと言えんで御座るからなあ」

「だったら少しは勉強した方がいいんじゃない？こんなことしてないで」

ちなみに今は古菲と楓と組み手をしている最中である。

二人もバカレンジャーと言われているからか、今回のことを重く受け止めたようだ…

「何か、もやもやしていて勉強する気にならないアル」

「それにしてもネギ殿は怖かったでござる」

「あれは魔王モードに入っただけからね…流血沙汰にならなくてよかったわ…」

「そこまででござるか…」

疑念があるからか、二人の攻撃は昨日の様なキレが無くたやすく見切ることが出来る、それを受け流し二人の腹部に掌底を打つ

「ほいっと、私の勝ち」

「アイヤ〜」

「やられたでござるな」

二人はあおむけに倒れ、そのまま寝っ転がりながら

「勉強は苦手ヨ」

「しかしなあ…」

「はあ、だったら私が見てあげるわよ。そのくらい」

「「本当アルか（でござるか）！！」」

「基本くらいなら教えられるから、頼ってもいいわよ。わからなかったところはネギ先生に聞けばいいでしょ」

「そうアルな…よし！こうなったら次の期末テストにはバカとは言わせないような点数を取ってやるヨ」

「拙者もこのままなら、こうこういって留年という可能性もあるでござるからな…今のうちにしっかりしておくでござる」

「さて、やる気も出たことだしもう一セットやる？」

「ストレス解消にもってこいネ！行くヨ、アーニャー！！」

「これが終わったら勉強教えてもらうでござるよ。アーニャ殿！！」

そして、二人は立ち上がり、再び組手を開始した。先ほどとは違い、晴れやかな表情で向かって行った。

第19話 アンナ・ユーリエウナ・ココロウエの一日（後書き）

補足設定

アーニャのレベルは大体、800辺りです。（ディスガイヤ基準で）
プラムはディスガイア2ポータブルのDLCで仲間になり、歳が近い
ためかアーニャとともに行動することが多く、人間の可能性に興味
を持った。

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…（前妻

ふははー！！ようやく出番です！最近出番が無くて主役（笑）状態になっていた私の出番がやってきましたよ！！え？さっさと始めろ？へいへい、わかりましたよ…それではどうぞ

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…

ようやく本編で出番がありました秋葉原白花です。突然ですが…

原作ブレイクしすぎワロタwww

アーニヤって炎系の魔法を得意としてそれを力押しといった感じのはずが、魔法と気なしの素の能力でも麻帆良四天王の二人に勝てるくらいとかどんだけ…

ネギ先生もいい方になっちゃったようだ。だけどあんな魔王の様な雰囲気出すとは…だけど、なんか抜けているところがある気がするんだけど…まあ、いっか。

そして、一番の驚きといえば…

バカレンジャーが勉強に力を入れているという事くらいかな…

すごいよ…この間の英語の小テストなんか古菲45点、楓52点、アスナ67点…他の二人はいつも通りで合った。

そのせいで刹那が新たにバカホワイトに就任しかけたのは置いといて…

今までにない高得点をたたき出して、勉強を教えていたいいんちよや木乃香たちは狂喜乱舞。朝倉に至っては「カンニングしたんじゃないか？」と疑うくらいだ。

そんな事で騒いでいたら新田先生がやってきたが、バカレンジャーが高得点をたたき出したという事を報告したら目頭を押さえていた

…そのあとすぐに説教されたのはご愛嬌

そんな事を思い出しながら昼休み

「それにしても、世の中何が起こるかわからないもんだね」

「どうしたんだ？突然」

「マスターおそらく先日のテストだと思います」

茶々丸に指摘され、あゝと納得した様子のエヴァ

「確かにあれは驚いたな…一瞬、坊やが魔法を使ったんじゃないか？
？って思うくらいだったよ」

原作なら使った疑いはあるけど、この世界のネギ先生はしっかりしているからなあ…

「ネギ先生といえば、茶々丸、今朝ネギ先生となに話してたの？」

「放課後にマスターに取り次いでもらえないか」との事でした。

「直接言わないのは」HRの後にすぐいなくなってしまっ取り次げなかったのも、クラスの方たちから私を通せば聞いてくれるのでは？」と、聞き、私経由で聞いてきたんです」

「一応、私の家に招待するつもりだが…いったい何の用なんだろうな」

「案外、呪いを解くために来たりして…」

もし、そうなら正式な解呪だから魔力抑制も解呪できるな。

「午後の授業ってなんだっけ？」

「今日は屋上で体育ですね…」

「私は適当に見学してるがな…」

適度に運動した方がいい気がするんだが…

・
・
・

体育はバレエをやるみたいです。

いつもと変わった点といえば体育の真田先生が風邪でお休みという事でネギ先生が監督の先生になったという事くらいですかね…

「あら、また会ったわねあんたたち…偶然ね」

そう思っていた時期が私にもありました。

なんかウルスラの制服を着た人たちがいるんですけど…

そういうえば、幾つか原作イベントが無かったから忘れてたけど、こういう事もあったっけ…それに、着替えの時に裕奈たちが高等部の人たちと場所取りでもめたって言ってたし…

「なんであんたたちがここにいるのよ!」

「私たちは自習だからレクリエーションでバレエをすることになったのよ」

「わ、私たちもバレエよ!!」

「あら…ダブっちゃったわね」

アホくさうどうせ、昼休みの仕返しとかその辺だろ…
バレエがしたかったらそっちの校舎ですればいいのに

「どうしました? みなさん…ってまたあなたたちですか…」

ネギ先生が遅れてやってくると、高等部の人たちを見ると顔をしか

めた。

「それで…何故、高等部の生徒が中等部の校舎にいるんですか？」

「それは…自習でバレーを……」

「なら、ウルスラの校舎ですればいいじゃない」

退屈だったし、正論を述べてみますか

「む、向こうの屋上が使えなかったのよ！」

「だそうですが？ネギ先生」

「少々お待ちを……」

そういつてネギ先生は携帯を取り出し、どこかへ連絡する。おそろく、ウルスラの高等部だろう…

「あ、シャークティ先生ですか？ネギです。実は、ウルスラの…」
「2－Aよネギ」どうも。高等部2－Aの生徒が自習でバレーをしに、中等部の校舎で来ているのですが…はい、確認お願いします」

いったん通話を切り、そのまま連絡を待つことにする。

数分後、着信が入り通話ボタンを押す。

「はい、どうでしたか？やはりですか…え？こちらに？はい、わかりました」

何やら予想外の事が起きたのか、少し驚いた表情になったネギ先生

「自習は事実でしたが、バレーをするなんて許可は出していないみたいです。加えて、ウルスラの屋上は使用可能との事です」

「これって立派な授業妨害ですよね。ネギ先生」

「そうですね。秋葉原さん…これなら停学もあり得なくはありませんね」

「「「「そ、そんな!?!?!」」」」

ウルスラの人たちは青ざめています。が自業自得でしょう。

明らかにこちらを妨害するつもりで来たのですからそれくらいの処罰は受けるでしょうね…普通なら

「ああ、後2—A委員長と新田先生がこちらに来るそうです。おとなしくお説教を受けた方がよろしいですよ」

その後、新田先生と委員長の高音さんが来て、ウルスラの人は新田先生に連行され、高根さんはこちらに謝罪をして帰っていった。

その後は普通にバレーをやって終了した。

・
・
・

放課後、エヴァの家にて…
ちなみに私は別室で盗み聞き中

「どうも、エヴァンジェリンさん」

「それで、先生話ってなんですか?」

ネギ先生は普段はナギの杖を持ち、エヴァの家に来たのだが…

「確認しますが…あなたはナギ・スプリングフィールドに封印されたエヴァンジェリンさんでいいんですか?」

「そうだが?…それでどうする?私を殺すか?」

いきなり物騒なこと言うなエヴァは…まあ殺す気なら私も参戦するけど…エヴァの味方として

茶々丸も懷に手を入れて、いつでも戦闘できるように待機していた。

「ち、違いますよ！実は父さんにあなたの解呪を頼まれているんです」

「父さん…という事はナギが！？死んだんじゃないのか？！」

「生きています。4年前に僕にこの杖を託して、封印を解除するようをお願いしてきました」

襲撃の時期が若干ずれているな…私の影響なのかな？

「そう…か、だが、遅かったよ」

「というと？」

「ナギの登校地獄はもう解呪してしまったのだ」

「まあ、十年近く遅れたんですから当たり前ですよね…」

「だが、あの爺に魔力抑制の呪いも受けてしまっただけで、正式に解呪したという事でその解呪の呪文をやってくれないか？」

「わかりました。登校地獄を解呪したら一緒に解除しちゃったという事でお願ひしますね」

そういつて杖を取り出して呪文を唱え始める。

「彼の者を縛る戒めの鎖よ…解けよ…解呪！！」

パキンッと碎ける音がして、エヴァから魔力があふれてくる。

「うむ、これであの花粉症やアレルギーに悩ませられる日々とはおさらばだな」

「真祖の吸血鬼なのに花粉症って…」

「魔力が落ちて身体能力が一般人並みになっていたのだよ…」

実際、花粉症になって茶々丸さんや高音さんに看病してもらったり、猫に障れなかったりといったことがあったなあ

「すいません、ダメ親父の性で、今度会ったらぶん殴っておきます」
「いいさ、こうして解呪してくれたんだし…ああ、ぶん殴る時は思いつきりで頼むぞ」

ずいぶんとバイオレンスなこと言っているけど…どうでもいいか、育児放棄した罰として受ければいいと思うし

「とりあえず、何か不調がありましたら連絡ください。ああ、これ僕の携帯のアドレスと番号です」

「ありがとな、先生…お礼と言ってはなんだが、魔法関連ならいくつかアドバイスしたりしてやる。それくらいのこととはさせろ」

「ありがとうございます。そういえば茶々丸さんってエヴァンジェリンさんの従者なんですか？いつも一緒にいますか…」

「ああ、そうだよ。従者はクラスにあと一人いるがわかるかな？」

「案外、白花さんだったりして」

「さあ……どうだろうな」

感がいいなネギ先生、当たりだよ。まったく…

「それでは、そろそろ失礼しますね」

「ああ、休日には気軽に来るといいよ」

「それでは、友人と一緒に来てみますね…では、体に気を付けて」
「さよなら、ネギ先生」

そういつて、ネギ先生は寮の方へと帰っていった。

「まったく、あの坊やはナギとは大違いだな…」

「ケケケ、確カニナ…鳶ガ鷹ヲ生ムンダナ」

「二人の親父の評価はどんなんだよ…」

「約束を忘れる大ばか者」

「斬リガイノアッタ奴」

さいですか。

「マスター、今日の夕食はどうします？」

「どうせなら外食にする？」

「そうだな…呪いが解けたお祝いという事で超包子にでも行くか」

「酒ガ飲メルナラドコデモイイゼ」

しかし、封印を解いたとなると正義バカどもが騒ぐだろうな…もしものはガングロ先生やシャークティ先生たちに協力要請するか…あの人たちは正義バカじゃないし、協力してくれればうれしいんだけどな…

第20話 年上は偉いと言ってるけど、それに見合う能力が無いとねエ…（後妻

補足設定

体育の真田先生

ぶっちゃけBASSARAの真田幸村

一般教員・既婚者・広域指導員

なんて設定も作っちゃいました。これは息抜きという事で許してください。

それにしてもエヴァの呪いを解呪しちゃったから騒ぎ出すでしょうね…まあ、撃退する戦力は十分にあるから大丈夫かな？

それにしても、期末テストの所、どうしよう…

第21話 期末テスト (上) (前書き)

なんか最近短い気がするな〜

第21話 期末テスト（上）

どうもネギです。

教師になって早数週間、他の先生に授業のことを聞いたり、小テストを作ったりと忙しい毎日ではありますが充実した日々を過ごしています。

そして、生徒たちは苦悩の表情を浮かべて、これを待ちわびているでしょう…

そう、期末テストです！

テスト2週間を切ったあたりから生徒たちはピリピリした雰囲気になり、図書館島を利用する人が増えてきています。うちのクラスの人たちも結構利用しているんですよ。

僕たち教師も期末テスト用の試験問題を作るために資料を確かめたり、授業の進み具合を報告し合ったりと割と多忙な日々を送っています。

しかし、僕はまだ実習生なので問題作成はしていません。代わりに生徒の授業でのアドバイスや試験範囲に合わせた授業をしていくことが今、僕にできること…

後は、生徒たちが頑張って点を取るかですね

2-Aは万年最下位だけど、今年はバカレンジャーと呼ばれた人たちも今では努力して小テストで結構いい点数を取っているのが最下位はないかもしれませんね。

しかし、油断してはいけませんね、僕もしっかり教えていけないと
……

・
・
・
学園長室

「ふむ、ネギ君も頑張っておる様じゃの」

「はい」

今、わしは指導教員のしずな先生にネギ君の評価を聞いておるところじゃ

評価はなかなかいい様じゃ。さすがは英雄の子といったところかの
：フォッフォッフォッ

「（恐怖の魔王と恐れられる反面）生徒からも慕われていて、授業内容も頑張っていますし、仕事の方も問題ありません」

「それ相応の努力をしているという事じゃろう」

何やらボソツと言っていたがよく聞こえなかったわい。

「この分なら指導教員としては十分合格点を出してもいいと思うのですが」

「フォフォ、そうかそうか。じゃが、もう一つ…彼には課題をクリアしてもらおうかの」

・
・
・

寮・大浴場「涼風」

「成績が悪かったらクラス解散で小学生まで戻る？」

トモエやナエ姉たちと寮での大浴場に入っていたら、バカレンジャーたちは何やらありえないことを話していた。

ちなみに、桜子の英単語野球拳は起きなかった。ていうか、発言すらしていなかった。魔王^{ネキ}の恐怖が根付いているみたいだな…下手なことをすればやられると…

朝倉辺りに話したら今度の新聞の一面を飾りそうな内容だな…義務教育はどうした、義務教育は…

「あら？なにやら面白そうな話してるじゃない」

「あ、白花」

「おいすゝ、んでクラスの解散だっけ？どんなことなん」

それから木乃香たちから聞いてみたが、麻帆良のクラスはクラス替えが無いにもかかわらず、次の期末で最下位を取ったクラスは解散するらしい。さらに、特に悪かった人は留年どころか小学生からやり直したとかなんとか…

「ねーよ」

「え！？でも、私たちずっと最下位だから…」

「たてえそうだとしでもあり得ないわね」

そこに、ナエ姉が話に参加してきた。

「いくら学園長が怒っていても、そんな事すればPTAが黙っていないでしょうね。前者のクラス解散はあるかもしれないけど、後者の留年や小学生からのやり直しなんてありえないわよ。留年は高校で赤点を撮ったりすればなっちゃうけど、小ゝ中学校の9年間は何

とかなるはずよ？」

普通に考えればそうなるはずだが…ここは普通じゃないからなあ…

「しかし、そうだとでも最下位になったらまずいかもしれませんか…クラスの解散は嫌ですし…やはりアレを…」

何やら、ブツブツと呟いているバカブラツクの夕映であったが…多分魔法の本の事だろう。

「どうしたの夕映？」

「勉強会でもするアルか？」

「拙者と古もだいぶできるようになったでござるし、夕映殿も参加するでござる」

本当に変わったな、バカレンジャーたち……

『もうバカとは言わせない』ってか

そう言えば、夕映とまき絵ってあまり勉強してないんだっけ…他の奴らを見ろよしっかり勉強してるぜ…

「いえ、そんな事じゃなくて図書館島を知っていますね？我ら、図書館島探検部の活動場所の」

そんな事ってなんだよ、そんな事って…明日菜と楓それに古菲は若干顔をしかめていたが、そんな事お構いなしに話を進める夕映

「その図書館島の最深部に読むだけで頭がよくなる魔法の本があるとのうわさです」

「ないわーwww」

「夕映ゝさすがにそれはないよ」

「そんなものに頼って取った点なんて価値が無いアル」

「古の言う通りでござるな。そんなものに意味などござらん」

「フルボッコにされました」

当たり前だ、バカ野郎…普通に考えればそんなもの存在するわけないだろう…

普通に考えればだけどな…

「まあ、皆さんが言った通り、そんなものはないでしょうね。せいぜい出来のいい参考書か過去のテストの資料とかその辺でしょう」

「そうね、そんな便利なものはないでしょうね。あったとしても何か代償があるんじゃないかしら…」

「代償ですか？」

ナエ姉がそう言い放つとのどかが反応した。

「ほら、ゲームとかでもあるじゃない。寿命と引き換えに修行での能力アップとか知識を得るために片目を潰したりとか」

前者はどこかの育成ゲームの葉だね。後者はオデン神話だね。

「まあ、安易な方に頼ることなかれてね」

「そういうおいしい話には大抵、裏があるからね」

そう言い残して私たちは大浴場を後にした。

・
・
・

「やはり、勉強なんて退屈なだけですな」

シャーペンを机に置き、椅子の背もたれに体を預ける。
こんな事をするよりも未知の探求をしていた方がずっと有意義ですね。

ここ最近図書館島でも新しい発見もないし、同じような作業の繰り返し……

退屈です……

高等部や大学部の人たちはもっと深いところまで行けるのがうらやましいですね……

………行きますか

・
・
・

「それでここは」

私たちバカレンジャーは風呂から上がった後、いいんちよの部屋の勉強会に参加していた。

ちなみに教師役はいいんちよとアーニヤ、白花、後息抜きにと超も手伝ってくれた。

まき絵も置いて行かれるのが嫌なようだったから、参加することにしたらしい。

「まったく、あなたたちは少し頑張ればここまで行けるじゃないですか……」

いいんちよ達が作成してくれた小テストの回答を見てそんな事を呟いていた。

「ホントね：特に明日菜なんかもうバッチリじゃない」

そう言って千鶴さんがテストを返すと10点中9点が当たっていた。

「むう、負けたアル」

「拙者も精進せねばなるまい」

「大丈夫ヨ、クーも楓もガンガン伸びてるしナ」

向こうは半分くらいが当たっていたみたいだ。

少し前の私ならこんなことしなかっただろうな：

でも、ネギがあそこまで言ってくれたし、いつまでもこのままじゃいけないなって思っていたいいんちよに頭下げて教えてもらってるんだよね。

そんな事を考えていたら夕映からメールが来た。

内容は図書館島に行かないか？との事だ。

諦めてなかったんだ、夕映

周りを見てみるとほかのバカレンジャー組も届いたらしい。

「私は遠慮しておくけど、ほかは？」

「そこまで困ってるわけじゃないから遠慮するネ」

「同じく」

「ちよっと興味あるけど、こうして教えてもらっているのに魔法の本に頼るのは気が引けるからパス」

そういつて断りのメールを送ると、これの前に一通のメールが届いていた。

『図書館島より連絡、諸事情により以下の書籍が必要になったので今日中に至急返却してください』

「人ならわれ総合基礎問題集」

「三重にすごい問題集」

「俺、この問題がわかったらあいつに告白するんだ…」

「首を吊って槍を刺してでも学力を上げる本 後編」

「そんな教育しかできないのなら理想を抱いたまま溺死しろ」

以上です』

ゲ……『人ならわれ』って私が借りている本じゃない…ていうか、もう閉館してるじゃない。

「なんでこんな時に…」

「あ、この死亡フラグ本、私ネ」

「『三重にすごい』って私の借りてるやつだ…」

「『そんな教育』は私だわ」

他のバカレンジャーと白花が借りている本をピンポイントに狙ったように返却要求…

作為的なものを感じるわ…

「いいんちょ、ごめん。今日は」

「わかりましたわ、とりあえず解散しますからさっさと本を返してきてください」

そう言って、私たちは部屋に戻って件の本を持ち図書館島へと向かった。

・
・
・

図書館島・入り口付近

図書館島の玄関は閉じたままで裏口から入ってくれとの事だった。裏の方へ行こうとしたら何やら言い争うような声を聞いた。

「駄目だよ夕映く危ないよ」

「大丈夫です。ちょっと深いところまで行くだけですから」

「そんなこと言って行方不明になったらどうするのよ!!」

何やら完全武装した夕映とのどか、ハルナがいた。

「何やってんのあんたら…」

「あ、白花。それにみんなも…」

「おや?もしかして図書館島に潜るのですか?」

「違うわよ。なんか本の返却の催促が来ただけ」

そういつて明日菜は持っていた携帯を三人に見せた。

「なるほど…では、途中までご一緒してもいいですか?」

「めんどいから好きにして…」

そういつて、裏口から入ったが司書の姿が見えなかったので書置きを残して本の場所を調べて返すことにした。

「さあ、目指すは魔法の本です！」

「えーと、私たちの返却場所は…と」

「ゲ、かなり奥アルナ」

「面倒でござる…」

はあ…前途多難だな、こりゃ

第21話 期末テスト (上) (後書き)

本のタイトルはネタに走りました。

原作と違って夕映以外は魔法の本に興味を示していません。
他の人たちが向かった理由は少し強引過ぎたかな…

第22話 期末テスト (下) (前書き)

次回から空白期だ…何、書こうかな…

第22話 期末テスト (下)

図書館島内部…1F

バカレンジャーが図書館島の魔法の本に食いつかなかったからか、なんか強引な理由で図書館島に行くことになりました。

—— 学園長あたりが仕込んだかな……

「どうしました白花さん」

「いや、なんでもない…」

やっぱりこの考え込むと顔に出ちゃう癖どうにかした方がいいかな？
それにしても、このバカブラック勉強する気ないんじゃないかな…
まあ、私にとってはどうでもいいけど

「それにしてもこの『人ならできる基礎問題集』の場所が地下29階なんて…ついてないわ…」

「かなり深い場所じゃね？それ」

「ちなみに魔法の本は地下30階辺りにあるそうです」

狙ったような場所に安置してあるな…魔法の本

とりあえず、私たちは向こうから許可貰っているけど、夕映って不法侵入じゃね？

…私には関係ないから見捨てるか

「それにしても、なんだってこんな時に返却しなきゃいけないアルカ」

「たまたまこの本を借りてしまったのが運の尽きという事にしておくでござるよ。古菲」

それにしてもこの図書館島はいつ見ても広すぎ十本多すぎワロタWWだよな…

夕映の説明によれば…学園創立と共に建設された巨大図書館で世界大戦中戦火を避けるべく世界各地から様々な貴重書が集められ、蔵書の増改築が繰り返された結果その讒謗を知る者はなくなっているらしい…

そんなこんなで話し込んでいたらB3階…

「そろそろトラップがあるので注意してください」

図書館にトラップなんて作るなよ…まったく…それにしても…

「どしたの？白ちゃん、難しそうな顔して…」

「いや、司書はどんな感じで仕事しているのかな…って思っただけだよ」

その言葉に”あゝ、確かに”とみんな納得したみたいだ。

こんだけのトラップに多すぎる蔵書から本を取りに来る図書委員は超人集団なのかもしれない。一般公開エリアでも、かなりの数の本があるしね。まあ、深部は魔法関係者が頑張ってるだけだと思うけどね…

「麻帆良の図書委員は化け物か?!」

「それ何処の紅い彗星?」

「そこ気を付けてです」

夕映が警告したが遅かったようだ

ふるえながらも進むまき絵が本棚と本棚をつなぐ板のあたりを通ろうとしたとき、床が開きそこから落ちそうになるが、リボンを本棚のでっぱりに巻き付け、難を逃れた。

「新体操部ってのはみんなああいうスキルがあるのかね」

「さあ?」

間接剣を持たせたらB A S A R Aの半兵衛の様な攻撃もできたりして…」

「それなら面白そうアルな」

何故ばれてるし…ていうか、古菲ってB A S A R A知ってるのかよ…

「拙者やアーニヤたちと一緒によくやっているでござるよ。ちなみにさつきから考えていることがダダ漏れでござるよ白花殿」

「さすがにあんな器用なまねはできないよ」

「頑張ればできそうなのは私だけかしら…」

「大丈夫だ明日菜…私もそう思うよ」

一撃かましてオモイガー

その後、様々な罠が図書館島探検部+αが待ち受けていた。

『ゆっくりして行ってね!!』『当店自慢の一口餃子でございマ―ス。ゆっくり食べていってね』

「落ちそうになった本棚を蹴ったら、本と一緒に変な饅頭みたいのが降ってきたネ!」

「ふむ…こし杏でござるか…お茶が欲しいでござるよ」

どこかの巫女と魔法使いの姿をした饅頭などが一緒に振ってきたが、魔法使いが出した一口餃子の中身があんこだったことに絶望した。

B y 白花

•
•
•
大体B20辺りまで来てみたが、何やら湖のフロアに来てしまったようだ

「見事なまでに水浸しだな」

「不思議と此処の本は水につけてもふやけないのです」

「ところで…あの背びれは何なの?」

まき絵が指さす方を見ると、なぜかそこには背びれがあった。

「とりあえずこちらに害はないみたいですし、無視しましょう」

「触らぬ神に祟りなしってね」

「誰かがこっそり飼っているのかもしれないアル」

「あれ?なんかこっち来てね?」

「とつとつとずらかるでござる!」

•
何を飼ってるんだよ図書館島…

・
道中本を戻しながら下りていき：

図書館島…B29

「よし、返却完了」

最後の『人なら（ry）』を返却し終えて地上の方へと戻ろうとする
と、夕映に止められた。

「ちょ！？どうせだったら魔法の本の方も手伝ってくださいよ！」
「めんどい」

確かに魔法の本が安置してあるB30まであと少しだけど、もう私
たちはこれ以上潜る必要はないんだけどね：

（白花、このまま放っておいたら魔法の本持ち出しかねないと思う
んだけど…）

（確かに、ああいうのってバレなきゃ大丈夫だろうって思うやつだろ
うし…）

一応、友人が犯罪者になるのは忍びないしねェ

「しゃゝねえな、ついてってやるよバカブラック」

「感謝するです」

面倒なことにならなきゃいいけど…

・
・

図書館島…B30

「なんぞ？これ」

目標の地下30階にて、見たものは…

二つの石像と魔法の本らしき本が台座に置かれていた。

「ラスボスの間みたいだね」

「なんで図書館にラスボスの間がある」

それらを確認したのか、夕映は本の方へと向かって行った。

「ふふふふ、これで期末テストも……」

「夕映ちゃん、勝手に持ち出しちゃ駄目だよ」

私以外のみんなが止めようと、夕映の方へ向かっていくと突然橋が開いて下の板みたいなのに落ちてしまった。

「大丈夫か？みんな」

「大丈夫です。白花さん、しかし、油断しました、トラップの可能性に気づけないとは…」

トラップ云々はお前が突っ走ったからだろ…

『フォッフォッフォ、この本が欲しければ…わしの質問に答えるのじゃー！！』

石像は本が安置されている台座の前に立ちふさがった。

「石像が動いた——！！」

「ていうか、これツイスターゲームってあるんだけど！」

「お、落ち着くアル、そうだこういう時は素数を数えれば…2, 3, 5, 7, 11, 13, 17, 19」

おろおろ、パニくってるパニくってる
ていうか、古菲、素数できたんだ…

『では、第一問「DIFFICULT」の日本語訳は？』

「そ、そんなのわかる訳が…」

「むずいね」

「むずいアルネ」

「むずいで御座るな」

「これをツイスターゲームの要領で踏むのかな？」

バカブラック以外は、解けたみたいだな。

そして、各々が文字盤を踏み正解したようだ。

『むう、まだまだ続くぞい。ちなみに手を別の所に付けたら失格じやからな。第二問「CUT」の日本語訳は？』

「斬るね」

「いや、切るでしょ」

「どう違うのですか？」

「漢字が違うじゃない」

メメタア

(ry

「あいたたたたこの体制はきついわ」

「アスナゝひざが、ひざが」

「問題に作為を感じるです…」

なんかもう、色々絡み合っていて悲鳴がすごいわ、行かなくてよかった」

『これで最後だぞい、「DISH」の日本語訳は?』

「お皿アル」

「明日菜さん、まき絵さんお願いします」

「え」と、「お」

「さ」

「「ら」」

何故か「ら」ではなく「る」を踏んでしまった明日菜とまき絵…
何かしやがったな…あの爺

「おさる?」

『フォッフォ、不正解じゃ!!』

そういつてハンマーを持っていた石像がゲーム版を叩き割ろうと振り下ろしてきた。

「ちょっとアスナ何やってるのよ!!」

「いや、ちょっとミスっちゃって…」

「ゴメン」

「ギャー!!ここを叩き割る気です」

「「／（＾o＾）／アル（でござる）」

「爆ぜろ」

そんな声が後ろから聞こえてきたと思ったら、ハンマーが爆発した。

「何やっているんだ？ マスター」

「お、煉じゃん、どうしてここに？」

「仕事だよ、この人の案内でね」

「授業の資料を取ってくるように言われてきました」

「ネギ先生チース」

煉と一緒にいたのはネギ先生の様だった。

「色々聞きたいことがありますが、先にあの石像を潰してから聞くとしましょう…」

何処からかゲートボールスティックのようなハンマーを取り出したネギ先生。

石像の方へ接近し、それで剣を持っていた石像に叩き付け、剣を破壊した。

「とりあえず、潰れろ…」

石像の肩辺りに飛び移り、ハンマーを大きく振りかぶり、頭部に叩き付け頭が胴体に埋まってしまっ、首なし状態になっていた。

もう一体の石像は煉が対応したみたいで、カード型爆弾をこれでもかと投げつけた後…

「……くたばれ」

そうつぶやいた瞬間、カードは一斉爆発して、石像は崩れ去っていた。

これで、原作みたいに地下で過ごす心配はなくなったわけだが…

「さて、みなさんちょっとOHANASHIを聞かせてもらいますよ」

今は目の前の魔王をどうするかだな…

・

その後は、外に出てお説教を喰らう羽目になった。

まあ、私たちは軽くお説教をされた程度で済んだけど、夕映は許可なしで入ったためかもう少し残るように言われたみたいだ。

次の日に、真っ白に燃え尽きている夕映の姿があった。

話しかけても反応はなく、ただ「ごめんなさい、ごめんなさい」と呟いているだけであった。

のどかがネギ先生に何かあったのかと聞いていたが：「何もありませんよ…そうなのも…ね」と黒い笑みを浮かべながらそう言っていた。

そんなこんなで試験をやって結果発表

「今回は最下位なんて言わせないわよ」

「大丈夫です。私だってやったんですから…赤点クラスを取ったら死にます。殺されます…ああ、チガウンデス、ネギセンセイ。ゴメンナサイ、ゴメンナサイ」

「とりあえず放っておくでござる」

「真面目にやってよかった」

バカレンジャーも今回までかな……

そう言えば、学園長は現在病院にて入院中……何でも、全身やけどと首のあたりをけがしたらしい。

「そろそろ結果発表ある」

「白花、あんたはどこのクラスにかけた？」

この麻帆良では、期末の成績が発表され、順位が付くことから学校公認の賭け事になっていた。

ちなみにかけるのは金じゃなくて食券……

「大穴一点張り……ウチのクラスに食券50枚って所だね」

「うちのクラスの倍率どのくらいだったっけ？」

「確か4〜5倍辺りだえ」

「ありがと木乃香、とにかく当たればすごい数になるわね」

「明日菜はどこ掛けたん」

「手堅くF組あたり？」

「いやいや、今回みんな結構頑張ってるんだし自分のクラスにかけるでしょう」

そんな感じで話していたら、モニターから順位が発表され始めた。そして、1年の成績発表が終わり、2年の成績が発表された。

『——では、第2学年のクラス成績をよい順に発表しましょう！第1位2年……え、マジで！？ツと失礼しました。第1位2年A組です！！平均点は89・6！まじで何があった！！』

その言葉にA組生徒は歓声を上げた。

「おっしゃー！！」

「掛けてよかったー！！」

「あれ？裕奈もかい」

「ハクカもうちのクラスにかけたんだ！いやーこれで食券長者だね
ハハハハ」

裕奈よ、そんなに騒いでいると……

「おい！裕奈たちはかなりの食券を手に入れたらしいぞ」

「よし、ゆくな！この喜びはクラスのみんなに分けてあげないとね
ー！！」

「よっしゃー！！今夜は高級焼き肉店J・o・j・o庵で宴会じゃーー
！！」

「コンナハズハー！！」

やっぱりね……まあ、こんなバカ騒ぎが2－Aの日常なんだよな……

「あ、白花さん」

「今日は、白花」

そんな事を考えていたら、ネギ先生とアーニヤがこちらに来ていた。

「1位取れましたね。先生」

「皆さんのおかげですよ。それでですね、トトカルチェで大勝ちしまして僕一人では使いきれないような量なのでお祝いという事で皆さんに奢ろうと思ってるんですよ」

「高級焼き肉店J・o・j・o庵っていうお店なのよ。それでクラスのみんなに連絡入れてくれないかしら……」

「わかりましたけど……いったいどのくらい掛けたいんですか？」

「ざっと70枚です」

私よりも多いや…しかし、もうみんなお祭り騒ぎだな…ウチのクラス
さて、次は吸血鬼事件だけど…いったいどうなるのかな…

オマケ

図書館島…地下

「それでね、うちの学年トップになったんだよ」

「すごいじゃないか、のどか。この調子で頑張っていきなさい」

どうも宮崎です。

みんなからは本屋って言われています。

いま私は煉と共に図書館島地下に住む生き物たちと戯れています。

動く饅頭（私が食べたのは粒あんだった）ゆっくりと湖に住んでいる
フアリエルちゃんに餌をあげたり、本を読んであげたりしています。

フアリエルちゃんなんか○F8のダンジョンのリヴァイアサンのよ
うな外見をしているけど、甘えん坊で私があると頬ずりなんかをし
てきます。

「しかし、のどかはモテモテだな」

「えへへ」

『ゆっくりして行ってね!!』

少しして、ネギ先生が食券長者になってクラスのみんなを奢るとの事だ。

「それじゃあ私は戻るね」

『もっとゆっくりして行ってよ…』

『キュー…』

「ごめんね、また遊びに来るからね」

『またゆっくりして行ってね!!』

『キュー!!』

そして、その場を後にしてJ・o・J・o庵に向かったのです。

第22話 期末テスト (下) (後書き)

のどか、奇妙な交友関係拡大。

地下で合宿？真面目なネギ先生なら出口見つけてさっさと帰還するでしょうね…

補足設定

ゆっくり

外見は東方キャラであって、なぜか図書館島に住みついている。偶にキモカワイイ？ネコとダンディな声のネコと結託して悪だくみを始めたりするが、基本的に無害：ゆっくりしていいってね！！

フアリエル

水竜の子供、アルビオレ・イマが偶然見つけた卵から孵った竜。アルビオレにはあまり懐いていない。水を操ることが出来、その気になれば大津波を発生することが出来る。ジョセフィーヌの部屋に水路がつながっていて、そちらの方でも交流がある。ちなみに性別はメス

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会（前書き）

メダロット4のお着替えイベントでは声出して笑いました。

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会

どこかのチャットルーム

薬味…ちわー^^

フ・アース…どうも、薬味さん。しばらく来てなかったけど、どうしました？

薬味…いやゝいろいろあったんですよフアさん

一気飲み…みなさんこんにちわゝ。あ、薬味さん久しぶりです。

薬味…こんにちわゝ一気飲みさん。

一気飲み…テストの後は羽伸ばしたいから来ました

薬味…テストというと期末テストですか…

一気飲み…こっちもテストあったけど全然できなかったorz

フ・アース…ドンマイ

薬味…テストの後ってなんかだるいですよねゝ

一気飲み…それに、幼馴染が春休みにどっかいくぞって騒いでいて大変なんですよ

フ・アース…幼馴染だど！？けしからん！！

薬味…まあまあ、どうせなら気分転換にみんな顔合わせしませんか？

一気飲み…つまりはオフ会？

フ・アース…いいですね

薬味…それでは、みなさん3日後は空いていますか？

フ・アース…ふむ、その日なら大丈夫だね

一気飲み…僕も大丈夫ですけど、どこで集まります？

薬味…どこか希望はありますか？

一気飲み…じゃあ、麻帆良の方にできた『ウサオちゃん喫茶』なん
てどうでしょう…あ、これ地図つxxxxxx.jp

フ・アース…おk

薬味…おk

薬味…それではまた…

フ・アース…じゃねー

一気飲み…それじゃオフ会で…

・
・
・

「ふう…」

顔の知らない人たちだけど、話し合えるっていいなあ…

「あら、ネギ何やってたの？」

「ただのチャットですよ。アスナさん」

「ネギ君で、チャットとかできたんや」

「はい、最初はお姉ちゃんのPC使わせてもらってやっていました」

最もそれを使っていて、どこかのサイトのショートカットがあってそれを見たら僕のコス姿が掲載されていたんだよね…

「それで、3日後にチャット仲間とオフ会することになったんでその日はご飯はいいです。木乃香さん」

「わかったえ。存分に楽しんできいや、ネギ君」

「あんた働いてばかりなんだし、しっかり息抜きしてきなさいよ」

確かに、教職についてから遊ぶ機会が無かったしな…

ここらで息抜きしていかないと…

「ところでネギ、おめかしは必要かしら？」

「いやいや、いきなり女装姿はないと思うよ、アーニャ」

「あら、残念」

こっちで女装するときは、アーニャに手伝ってもらわないとうまくできないんだよね…

さて、3日後が楽しみだ。

・
・
・

3日後

ウサオちゃん喫茶

とりあえず今日は普通の格好できました。いきなり女装姿で来るのもあれだし

「いらっしやいませ、おひとり様ですか？」

「予約していた薬味といいますか？」

「はい、5番テーブルでございます」

さてと、ほかは来ているかな…

そこには、コーヒーを飲んでいる白髪で無表情の少年と、ちょんまげの少年がいた。

「えーと、フ・アースさんと一気飲みさんですか？」

「そうですよ、ひょっとして薬味さんですか？」

「ええ」

二人とも早いな、一応約束の時間の15分前なんだけどね

「お二人はいつからこの店に？」

「いやー今日が楽しみで約束の時間の20分前に来てしまったんですよ、薬味さん」

「僕はすることが無かったから一気飲みさんよりも早く来てしまったんだよね」

20分前より早く来ていたんだフアさん…

「それまで何してたんですか？」

「普通にコーヒーを飲みながら待っていたよ、薬味君」

「でもフアさん、それ何杯目だよ僕が来てからもう2杯くらいおかわりしていたけど…」

「なに、たったの7杯だよ」

多?! ひょっとしてこの人カフェイン中毒? しかも「たったの」って…

「ちなみに君たちはこういうのを飲むのかい?」

「僕はコーヒーより紅茶ですね。香りを楽しみながら飲む…まあ、たまにミルクティーにもするけどね」

「緑茶ですね。あれを飲んだと落ち着く気がするんですよ」

「なるほど…人それぞれといった感じか…葉味さん、僕も紅茶を飲むときもあるんだが、君のおすすめはなんだい?」

「ストレート、せめて一口飲んでからミルクを入れたり、レモンにしたりした方がいいと思うよ。まあ、故郷ではほとんどの人がミルクなんだけど、ストレートもいいと思うんだ」

「てことは、葉味さんの故郷ってイギリスあたり?」

「黙秘しますよ」

故郷ウェールズのみんなはさ、ミルクティーこそ至高だとか言っているけど、ストレートやレモンも飲んでみろやあの味覚馬鹿どもが…

「とりあえず何か頼みましょうか」

「そうだね、そろそろ昼だし」

「ご注文をどうぞ」

そういつて1mくらいのウェイトレスがメニューを渡してきた。もしかしてメダロットなのかな…でもどうして喫茶店に?

胸部にはひらがなで「める」って書かれたプレートが付いていた。しかし、この『ウサオちゃんスペシャル』ってどんなんだろ…食後に頼むとするか

「僕は和風ハンバーグにライス大盛りで」

「それなら僕はカレーとサラダ」

「カツカレーうどん定食一つ」

……何それ？

メニューを見てみると、うどんの上にカツカレーが乗っており、お茶碗に山盛りのご飯とみそ汁が付いていた。こんなのであったんだ…

これはどう食べればいいんだ？

カレーうどんを食べながら、カツでご飯を食べるのか？

それとも、カツカレーうどんを食べた後に残り汁をご飯にかけて食べるのか？

一気飲みさん、これをどう食べるんだろう…

そんな事を考えていたら料理が来た

「お待ちせしましたー」

しばらくしてウェイトレスが、各々の料理を運んできた。

僕は、ハンバーグに大根おろし付きで大盛りごはん、みそ汁と漬物
フアさんは、カレーにサラダといったシンプルな感じであった
一気飲みさんは、メニュー通りにカツカレーうどんに大盛りごはん
とみそ汁だった

さあ食べるでしょうか…

•

・
ふう：なかなかの量だったな
それにしても、まさか飲みさんは、カツカレーうどん定食をあんな
食べ方をするとは：

「すごかったですね、飲みさんの食べっぷり」

「ああ、まさかあんな食べ方をするとは：」ゴキユツゴキユ

そう言いながら、コーヒーを飲み干すフアさん。

なんかこの人、逆○裁判のゴトー検事みたいだな：

「はぁーい、みんなおいしかったかしらー」

「あ、ユキエさんどうも久しぶりです」

会話に入ってきたのはこの店のマスターであるユキエさんだ。坊主
頭で口紅をしたナイスガイといった容姿だ。
どうも、一気飲みさんとは知り合いみたいで、麻帆良に来る前はよ
くユキエさんの喫茶店に行っていたらしい。

……彼女と

「あ、マスターこのウサオちゃんスペシャルお願いします」

「はいはーい、すぐ持ってくるわね」

そういつてユキエさんは厨房の方へ向かって行った。

「食後のデザートか：よく入るね」

「いやーおいしそうな物ならそれなりに入るからねー」

「結構おいしいよ、『ウサオちゃんスペシャル』」

一気飲みさんは美味しいと言っているけどどんなんだろう…
メニューには絵が無かったんだよね

「はーい、おまたせ」

お盆には大もりのパフェがあった
これは期待できそうだな…

「いただきます」

む、これは…

「おいしいです。このあまーい感じにキムチのピリリとした辛さが効いて、隠し味のキムチがパフェの甘さを引き立てていますね」
「うふふーこれはね、餡子とプリンとチョコとキャラメルとバナナとキムチのたーっぷりつまった甘辛い初恋の味なのよ」

それにしても初恋か…僕の初恋はアーニヤでいいのかな？でも、どっちかというところの面が強いのと思うんだよね

「それにしても、イツキちゃんの友達はかわいい子ばかりね」

「ありがとうございます」

「それでさ、食後にちよつと来てくれない？」

……まあこの後は特に予定が無いからいいかな？でも、ほかはどうだろう

「僕は構わないけど、二人はどうする？」

「別にかまわないよ」ゴキユツゴキユツ

「まあ、いつか」

まだ飲んでるよフアさん：

そして、食べ終わり、店の更衣室に案内された。

B G

M…おきがえちゅうヨ

「それで：君たちに似合うキャワイイ服があるんだけど！！」

そういつてユキエさんはフリフリの服を取り出してきた。

やはりそうか：なんとなくネカネ姉さんやアーニヤと似たような気配がしてたんだよな：

「「「そこまでよ！！」」」

更衣室の入り口あたりから、アーニヤと……誰？え〜と、その他大勢が乗り込んできた

「ネギのコーディネートだけは譲れないわ！！」

「フェイト様をいじれるのは私だけです！！」

「イツキのお着替えは私の役目よ！！」

アーニヤはわかるけど、ほかはどちらさん：

「暦何故ここに？」

「アリカ、どうしてここが！？」

どうやら二人の関係者みたいだね：

「なんだかおもしろそうな気配がしたのでついてきました」

「アタシを出し抜こうなんて百年早いわよイツキ（相手が女子かど

うか見ておきたかったのよ！！イッキは私の婿！！」

なんだかカオスな予感がしてきたんだけど…

初手にアーニヤが動き始めた

「それよりウサオさん」

「ユキエよ」

「ネギに似合うのは…この服よ！！」

そういつてアーニヤはハンガーから紅いワンピースを取り出した。

「やるわね……でも、負けない！！」

そういつてユキエさんは小道具なんかを入れるような引出しからリボンを取り出して髪に結びつけた。

「ウサオさん、ゴスロリ服有りますか？」

「G列のハンガーにあるわよ！それと私はユキエよ」

どうやら向こうも動き始めたみたいだ…ああ、フアさんいつまでコーヒー飲んでるんですか…

「落ち着くまで」ゴキユツゴキユ

一方、一気飲みさんは、メイド服に着替えさせられていく

「やっぱり、イッキはこの恰好が一番似合っているわよ」

「うれしくない…」

「何よ！男らしくないわね」

「なら、せめて男として扱ってくれよ！！」

ああ、この人はまだ一線を越えていないのか……

「飲みさん、この状況でありがたい言葉を聞かせてあげましょう」

「^?」

「激流に身を任せ同化しろ」

「嫌だ
〜
!!」

「初めは僕も嫌でしたけど、慣れればどうってことないですよ」

「慣れちゃ駄目でしょ!!」

「あきらめろ」ゴキユゴキユ

フアさん飲みすぎワロタ
W
W
W

そんなこんなで着替え終わってしまった。

僕は明日菜さんみたいに片方リボンで結ばれ、髪は三つ編みで後ろにまとめて、赤いワンピースを着た格好だ。何故か、さらしを付けていて、アーニヤいわく「チラリズムがたまらねエ!!」との事らしい……

フアさんは、逆十字の柄が入ったアシンメトリーのオーバースカートの付いた凝ったスカートに、黒と白の編み上げドレスに薄紫色のバラの飾りがついた黒のロングブーツを履いている。ヘッドドレスが付けばどこかの第1ドールのような容姿になっていただろうな……

一気飲みさんはメイド服で、ちょんまげを結ぶところがリボンになっ
ていて、フリル付のカチューシャまでついていた。

「シクシクシクシクシクシク…」

「人生諦めが肝心だよ」

「この程度の事でなくな…」ゴキユツゴキユ

お前はいつまで飲んでるんだよ…

そんな事を考えていたら、突然更衣室の扉が開いた。

「ユキエさん、メルの調子はどう…」

いきなりここへ来たのはうちのクラスの秋葉原白花さんだった。
白花さんは、なんだか生暖かい視線を僕の方へ向けた

「先生…：そういう趣味で…」

「えーと、これは…」

「黙っておきますよ、それでは失礼します…」

そういつて、白花さんはどこかへ行ってしまった…
まあ、女装もいいと思うからばれても別に問題ないけどね…

「大変だね」ゴキユツゴキユ

「いつまで飲んでるんだファさん」

第23話 薬味と運命と先行者のオフ会（後書き）

フェイトは重度のカフェイン中毒になりました。

ユキエに関しては4のユキエをイメージしてください。

アリカと一気は付き合っています。

ちなみにメルはM I D型メダロット「ロイヤルメイド」で、工学部の協力という事でここで働いています。

第24話 機械乙女が見る夢は… (上) (前書き)

遅くなって申し訳ありません。

ネタが尽きて考えていたら一週間近くたってしまいました。

第24話 機械乙女が見る夢は… (上)

これは絶対夢である。

私こと、トモエはお嬢の身のお世話が仕事である。

本日は、新入りのメルの様子を見に行ってきたらしいが、顔を真っ赤にして帰ってきた。

なにやら「あんなに可愛いとは／＼」とブツブツ言っていたが、何があったのだろう…

その後は、いつものように買い物をしたり、お風呂に入ったりして、就寝（私は休眠モードです）して、一日が終わったはずだが…

目が覚めたら人間になっていました。

ついでに言えば、今いる場所もどこかは知らない学校で、机に突っ伏していました。

状況確認…

この世界の情報…なぜかわかる。ISという兵器があり、女性にしか使えないため女尊男卑の世の中になってしまったらしい。

現在地…自分の生徒手帳を見つけ、ここはIS学園の1年1組

自己認識：名前 秋原 巴 身長160辺り、体重不明、髪と目の色は黒、出身国日本、髪は肩まである黒髪であった。

ISに関する知識：教科書読んで覚えるか

所持IS：無し、ただし、学校の方から訓練用ISである打鉄が使える

こんな所かな：

とりあえず、これは夢としておいていずれ起きると思うからそれまで目立たないように過ごすとするか：

気になる事といえば隣の人が男性くらいかな：

うん、問題なし

・
・
・

教師らしき人物が来て、HRが始まった。山田麻耶：逆から読んでもやまだまや

どうやら自己紹介のようだ。

私にとっては好都合だな、これでクラスの人たちの情報を得られるわけだし：

「それじゃあ、秋原さんからお願いしますね」

……って私は最初の方か。「あ」行だし

「えっと、秋原巴です。趣味は家事や読書、それに鍛錬ですね。一応、剣道と弓道をやっています。以下略：よろしくお願いします」

そして、席に座り次の人へと回っていった。

次は、噂の男性でISを起動させた織斑一夏だ。

なんかボケっとしてるようだし、聞いていないな…

ったく、起こってしまったことは仕方ないんだから、しっかりしとけよ……

「お前の番だよ、色男」

「へ？俺！？」

「ご、ごめんなさい、あの、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ。絶対ですよ！」

そういつて教壇から身を乗り出して両手を合わせてお願いポーズの山田教諭

畜生…でかいな、私は…少しはあるんだ…

……貧乳はステータスだ、希少価値なんだきつと

あれ、なんだろ・・・目から涙が……
オイル

「山田先生、落ち着けるように手に人書いて食べばいいじゃないですか？」

「あ、そうね、え〜と人って書いて…」

ジョークのつもりで言ったんだが…ずいぶんとあがり症なんだなこの先生

…ガス抜きさせるか

「ところで山田先生」

「あ、はい、なんでしょう」

「座布団は何枚ですか？」

クラスの大半は頭の上に？マークが出たような気がする。ネタを知っている人たちはオイオイといったような表情だった。

「すみません、座布団は出せません」

「そうですか…じゃあ、色男、お題は妖怪だ」

「え！？いきなり、えーと…父さん！妖怪が出たよ！！」

「なんか妖怪…か？」

「先言うなよ！」

「サーセンwww」

ガス抜きしすぎたかな…

そんな事を考えていたら、背後から敵意のようなものを感じ、回避行動をとろうとしたが…

パンツッ！！

乾いた音が響き渡り、私と織斑は痛む頭部を抑え、後ろを振り向くと黒髪の女性がいた。

「げえ！？関羽」

ガスッ！！

あ、今度は織斑が出席簿の角で叩かれた

「誰が三国志の武将だ。バカ者、さっさと自己紹介をしろ」

「はい…え」と、織斑一夏です。よろしく願います」

そこで一旦口を閉じる織斑…周りは黒髪の教員に目が行っている人がいくつがいるが、女子は男子に興味津々、その視線には『もっと喋ってよ』や『それだけじゃないよね』、『そんな事よりおうどん食べたい』的な意味が含まれていた。それから数十秒沈黙していた織斑は、ついに口を開き

「以上です!!」

ガタッ!!と、折原の発言に期待していた者たちはコントのごとく一斉に椅子からずり落ちた。趣味とか好きな者とかを喋ればいいのに…山田教諭も涙目の展開である。

もちろんツツコミも忘れてはいないようだ。織斑はもう一発黒髪の教師の一発を受け悶絶していた。

「もう少しましな事をしゃべらんかばか者が」

「いや、だって千冬姉」

「織斑先生と呼べ」

あ、もう一発くらってらあ…それにしても、織斑?こいつ(一夏)の親族か何かかな…

「先生。もう会議は終わられたんですか?」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

そういつて黒髪の先生は、山田教諭と会話を交わし、教壇へ立った。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者

に育てるのが仕事だ。

私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。

私の仕事は弱冠十五才を十六才までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

うわ、何たる暴君宣言

麻帆良の教師の中じゃこういうタイプはいなかったな…

そして、いったん静まり返ると、次の瞬間一気に騒ぎ出した

「キャー！！生千冬様よ」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」
「私、お姉様のためなら死ねます！」

以前、お嬢の弁当を届けた時に訪れた2－Aの雰囲気と似ているな
…最近は先生が変わって前より騒がしくなくなったなあ
っていうか、さっきからうるせえ

「毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ……私のクラスに
だけ集中させてるのか？」

しかし、紺だけ黄色い悲鳴を受けているとなると、有名人か何か
かな？

「養豚場の豚を見るような目で罵ってください！！」

「そして、いつの日かデレを見せてください！！」

「ハラショー！！」

テラカオス W W W W

さすがにそんな事したらやばいでしょ…
なんか一夏（織斑だと被るから名前で）は驚愕の表情だが、仲悪いのか？

そんなこんなで1限目終了し、休み時間へ

・
・
・

全く一夏を観察していたけど見ていて飽きないな
なぜ自分はここにいるのかとか思っていたように表情を変えていた
りと言った感じだった。

「だいじょぶなん？織斑君」

「え?! あ、えっと秋原さん？」

「いや、なんかスパスパぶっ叩かれていたようだったからねエ」

「あはは… まあ、だいじょうぶだよ」

「そか、それにしてもとっさのネタに反応できるとはねえ」

「滑っちゃまったけどな」

「確かにW W W W W」

そんな感じで他愛もない話をしていたらポニーテールの人がやってきた。

「一夏、ちょっと良いか？」

「あ、箒か？」

知り合いみたいだな…その後、言葉を交わして廊下の方へと向かって行き、休み時間は終わった。

「――であるからして、ISの基本的な運用は国家の認証が必要で

あり、枠内を逸脱したI S運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

とりあえず、内容は理解できるから助かったな。それにしても分厚かったな…参考書

お隣の一夏さんは顔をしかめ、教科書に穴が開くくらいガン見して冷や汗のようなものを流しているけど…わからないのか？

「織斑君、どこかわからないところがありますか？」

さすがにこんな態度をとってたら気づくだろーな

「えっと、聞いてもいいですか？」

「はい、そのために先生はいるんですから、それでどこがわからないんですか」

「全部わかりません」

え、全部？

山田教諭もこの衝撃的な一言にフリーズしちゃったみたいだね

「……織斑、入学前の参考書きちゃんと読んだか？」

今だフリーズ中の山田教諭に代わって、織斑教諭が聞くと：

「古い電話帳と間違えて捨てちゃいました」

スパン！

まーた出席簿の一撃を喰らってらあ…

「必読と書いてあっただろう馬鹿者が……」

「……すいません」

「再発行してやるから、一週間で覚えろ。いいな、返事は受け付けていないから」

うわゝあの分厚い参考書を一週間かい、大変だねエ
ま、自業自得って奴だね

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遙かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解が出来なくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

確かに、展開してなければわからないし、飛行可能と来ている。
都市部で奇襲なんてことも可能だろうな……もしくは自爆とか……
そんなこんなで授業終了

・

・

・

休み時間

「ちょっと、よろしくて」

なんだ？お嬢様口調の金髪ドリルがお隣さんに絡んできたみたいだ
けど……

もててるねエ織斑君

「何の用？」

「まあ、なんて返事ですの。私に声を掛けられるだけでも光栄ですよ。それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

態度からして良い所でなんだろうけど、絡む意味が分からないな

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

「私を知らない?!? あなたはどうなんですの!?!」

何故こちらに振るし…面倒事に巻き込まれた気がするんだが…
えーと、この金髪ドリルは………金髪…ドリル…金髪…ドリル
ドリルといえばグ○ンラガン

「カミヤ?」

「誰ですか…それは」

どっちかというとドリルはシモンか…いや、失敗失敗

「んで、誰?」

「まったく…私の事も知らないなんて非常識な…私はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして入試主席ですよ」

へえ、だから?

「ふん、所詮は極東の島国ですわね。このわたくしのことさえ知らないだなんて。本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける?」

「そうか。それはらっきーだなー(棒読み)」

「……馬鹿にしますの?」

そりゃ初対面でこんな態度で出られたら馬鹿にしたくもなるもんだよ

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

ああ、なるほど…女尊男卑主義なのかいけど、その考えはいいったいいつまで持つのかねエ

「入試って、あれか？ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は？」「すごいじゃないか織斑君」

試験の教官を倒せた人ってのはこのセルビナさん以外にもいたらしいから一応すごいと言っておこうか

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

だいぶヒートアップしているみたいだけど…

そりゃあ、試験管を倒した人なんて一人や二人いるんじゃないか？もしかしたらもっといたりして……

「まあ、落ち着きなさいよ、セルビナ・オレカッタさん」

「これが落ち着いていられますか！！後私はセシリア・オルコットで……キーンコーンカーンコーン

クッ、もう時間ですか……また後で来ますわ！逃げないことね、よくって!？」

訂正を加えたところに三時間目開始のチャイムがなり響き、セシリアはまるで三下が逃げる時のような台詞を残して席に戻って行った。

「テラ三下wwwwww」

「言ってやるな…ああいうのには関わらない方がいいしね」

「そだね、織斑君」

「一夏でいいよ、秋原さん」

「んじゃ、私も巴でいいし」

そんな感じに駄弁っていたら織斑先生が来た。

それにしてもさっきのセドリック・俺ツエーwwwさん、やっかい事を持ってきそうな気がするけど気のせいかな？ 気の性であってほしいなあ…

第24話 機械乙女が見る夢は… (上) (後書き)

下は明日投稿します。

第25話 機械乙女が見る夢は… (下) (前書き)

オリISあり

第25話 機械乙女が見る夢は… (下)

「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

今回は織斑教諭が担当みたいだな…

メダロットだったころなら症状やら変化やら特殊やら格闘、射撃、メダフォースといういろいろあったけど似たようなものなのかな？

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦の代表者を決めないといけないな」

代表者？学級委員みたいなものか…

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

やっぱりその方が面白そうだからか、一夏君が推薦されたみたいだね…

なんか呆然としていた一夏君だったが、やっと再起動して立ち上がった。

「お、俺!？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちよっ、ちよっ待った！俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。」

選ばれた以上は覚悟をしろ」

「ぐ：ならおれは秋原さんを推薦するぜ！」

「なんでだよ……」

私はISなんて持っていない一般人だぜ？モブなんだぜ？無茶いうなっつうの

「拒否権は？」

「無い、諦めろ。他は？」

オーマイガッ

全くめんどくさいことに巻き込まれちゃった
そんな事を考えていたら、甲高い声が鳴り響いた

「待ってください！納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩く音。

振り向くと、そこにはセシリア・オベリスクの姿があった。

「どしたの？オベリスクさん」

「さっきよりひどくなっていますか？私は巨神兵じゃありませんよ：つと、そんな事よりそのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

「ぜひとも味わってくれ、もしくは国に帰ればいいんじゃない？」

そういえばこんな迷言があったな

いやならやめてもいいんじゃないぞ。by マート

「な、なんですってー!!」

「無理に來ているならさっさと帰って風味をブツ飛ばした味氣のない料理でも食べてればいいじゃん」

「ありませんわね、実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります! わたくしはこのような島国までIS技術の修練に來ているのであって、サーカスをする氣は毛頭ございませんわ!」

これは、イギリスが日本にケンカ売っているのと同意義なのかな? もうぶん殴っていいよね? おk? 答えは聞いていないけどね…

「いいですか!? クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ! 大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

後進的って言っているけどISって日本の篠ノ之 束が作ったんじゃないかったけ?

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……!?!」

ナイス援護射撃だ。織斑君

「言ってやるな一夏君、英国人は紅茶にミルクを入れないと飲めない、野菜の風味を飛ばさないと食えない、焼くことしか能がない味覚バカなんだよ」

まあ、本当は食材本来の味を残さないほど加熱する調理法が他国人には好まれないからである。(wikiの一部抜粋)

その後、売り言葉に買い言葉といった感じになり、なんか知らないけど私と一夏に決闘を申し込まれて、一週間後に戦う事になった。

・
・
・
色々あって一週間後：

え？合間の事も書け？えーと、一夏が寮で放棄に撲殺されそうになっているところを笑いながら見物したり、先輩が「IS教えよっか？」って言ってきて箒と一夏が「お断りします（　ω　）。」ってやって、ポカーンとしている先輩にm9（＾Д＾）プギゃーしたくらいかな：

「それにしても、一夏のIS遅いね」

一夏のISは政府の方が専用機を用意してくれるとの事で、打鉄は私の分だけ持ってきていた。

「織斑先生、本当に大丈夫なんですか？もうすぐ開始ですよ？」

「あわてるな、大丈夫だろ……たぶん、きつと、」

「初期化や最適化処理とかはもう実践でするしかないか……」

言いよんどるところが信用できませんね：一夏ドンマイ

まあ、その点私のは軽く武装を追加した程度だから大丈夫だけどね追加した武装は弓矢セットで、矢には火薬のおまけつき。此方の任意のタイミングで起爆可能な一品だ

武装名は『首落とし』物騒な名前だよ：首どころか頭部がなくなるんじゃない？これ

「おっ！織斑君っ織斑kゲホゲホ…コヒューコヒュー…」

え？！何その呼吸音かなり危ない音じゃね？！

「山田先生、落ち着いてください。はい、深呼吸」

「は、はいっ。すくくはくく、すくくはくく」

「はい、そこで止めて」

止めるなよ！？ああ、山田教諭の顔色がどんどん蒼くなっていく…

「――っ！――！――！」

どのくらい耐えられるのだろうか…教師だからそれなりに持つか？

「ぶっはあく！まだなんですか？」

「目上の者に敬意を払え馬鹿者が！！」

スパァン！！

「オウフ」

自業自得だ一夏…

「それですねっ！来ました！織斑くんの専用IS！

「！？、やっと来たんですか！？」

「はい、後なんかついでに秋原さんの専用機も来ているんですよ」

Why?

「私に？」

「はい、なんか政府がついでにこの機体を押し付けようという話になったらしいんです」

押し付けるといって、とんでもない物かいわくつきのもののどっちかだな：

「私が先に相手することになってから一夏君は相手をしている間に第一移行を終わらせれば」

「巴は？」

「戦りながら設定する」

そして、機体を見してみる

それは、日本の鎧武者の様なものだった。

付属には一振りの日本刀と折りたたまれた弓だった。ただし、弓はアーチェリーのような器具が付いていなかった。

現実の私の体に近い感じであった。

「これの名前は？」

「えっと…『巴御前』です」

・
・
・

ISを纏い、ピットから飛び立つ：

しかし、私の元の人と同じ名前とは：

この機体は脚部に飛行機能（スラスタ等）が集中しているみたいで、胸部に防御機能、頭部にハイパーセンサーを搭載した機体で、機体のバランスを取るのに手こずる（下手すれば犬神家になるらしい）ためにお蔵入りした機体らしいが、ハヤブサで慣れているから

問題ない

「やっと来ましたね…」

そういえばもう向こうが出撃してから10分近くたっているな

セルゲイ（セシリアですよわ！！）セシリアのIS『ブルー・ティ
アーズ』は射撃を主体とした第3世代。BT兵器とかいうファンネ
ルもどきのデータをサンプリングするために開発された実験・試作
機だとか何とか…

「めんごめんご、業者の方が遅かったのと想定外の事態が起きただ
けさ」

「ま、まあいいですわ。最後のチャンスを上げましょう」

「いや、そういうの良から、別に勝てる戦いで賭けをするなんて
大人げないし」

「あなたは私より実力が上だと申したいんですか？」

「あら、そう聞こえたかいサーセンwww」

全く短期なのかセシリアは小刻みに震えているよ…

「もう許しませんわ！！落ちろカトンボ！！」

そう言って手に持っていた巨大なレーザーライフルの銃口をこちら
に構え、引き金を引く
どこのシロッコだよ…

そう思いながら、横へスライド移動するように体制を保ったままレ
ーザーを避ける

続けて、レーザーを打ってくるが、同じように横移動で避け続ける

「おお、怖い怖い」

[illegible]

あっはっは、第一移行が済むまで攻撃しないでやる
こうすれば、相手のエネルギーがなくなるかもしれんしな……まあ無理だけど

それに、ISが私の動きについてこれてない：ライフルだけならなんとかできるんだけど、向こうにはやっかいなものもあるしな
予想通り、ブルーティーズの目玉ともいえるBT兵器を展開してきた。

「行きなさい！ファン（げふんげふん、ブルーティアーズ！！）」

ファンネルって言おうとしたよこの人……

まあそうしている間に4機のBT兵器がこちらへ向かってきた。

さすがに4機の同時攻撃と本体の射撃となるとやばいかな……

そう思いながら避ける続け本体の攻撃も考慮すると多少被弾した。

しかし、避け続けているうちにBT操作中本体が行動していないのが判明した

とりあえず、次にBTを使用したら突っ込んでみるか……

「もう一度！」

「隙あり！！」

BTを射出した後、此方が打たれる前に切りつけようとするが、ミスしたな…残っていた部位もBT兵器とは…

「これで終わりです！！」

ブルーティアーズの下部から発射されるミサイルが迫りくる。

この距離じゃあ回避は無理か：機体が持つかねエ

そして炸裂するミサイル：巴のいた場所を中心に煙が立ち込める

「所詮はこんなものでしょう：まあ、頑張った方ですわ」

セシリアも勝利を確信し、BT兵器を下部に戻し、ピットへ戻ろうとする。

しかし、センサーから警告が入り、再びライフルを構える

「OK・・・」

煙の中から声が響く

「レッツパアライイイイイイイイイイイイイイイイイ！！！！」

煙が晴れた時、鎧が肌に吸い付くようになり、ところどころ見えていたISスーツが鎧で完全に見えなくなっていた。腰に携えていた弓も上成節と下成節が展開され身丈ほどの弓になっていた。

直後に初期化と最適化が終了したことを告げる画面が表示された。

「まさか、あなたは第一移行していなかったんですか？！」

「なじむ！実になじむぞこの機体！！」

「って、聞いてますかあなたは！？」

「ハッハー！！最高にハイっ！！て奴だ！！ふははははははは」

セシリアは巴の変貌に手を止めていたが、我に返りライフルの引き金をひき、レーザーを放つ

「無駄ァ!!」

放たれたレーザーを腰に携えていた刀《奉公》で切り払う

「なら、ブルーティーズ!!」

B T兵器を巴の周囲に展開して一斉射撃をしようとするが…

「装甲射出!!」

B Tが攻撃するよりも早く全身の装甲が射出され白装束を纏った状態になり、射出された装甲がB Tは撃ち落としてく。

突然の出来事に対応できず、動けないでいるセシリアに弓を引き絞る。

「JackPot!!」

放たれた矢はセシリアに直撃し、爆発を起こす。

そして、終了の合図のブザーが鳴り響いた。

そして、視界が真っ白になっていった…

・
・
・

目を開けるといつもの低めの目線とお嬢の部屋の光景…

設計図や書類で散らかっている机

いつものPS〇とゲームソフト

そして、寝坊助なお嬢

日時を確認してみるが、休眠モードから寝て設定した7時に起きたみたいだ。

向こうで一週間が、こちらでは数時間か……せめて、一夏VSセシリアの勝負も見ておきたかったな

あれは一体なんだったのだろう……無意識に私は人になることを望んでいたのだろうか……

まあ、どうでもいいことだな。一夏たちには悪いがこの機体からだが私で、お嬢の傍が私の居場所なんだから……

さて…

「お嬢、朝ですよ」

今日も生きていこう・・・

?
?
?
?
?
?
?

なんか真っ白な空間

「ふむ、白花ちゃん子は面白いな」

おっす、
I
am
a
God

白花を転生させた女神だよ。最近、惑星シリーズに嵌ってて今の格好はメダウラスなんだよね。

さんだゝ

最近退屈で夢の観測をしていたら、異世界に行っているものがあつ

てびっくりしたよ。

それにしても異世界か…

「そう言えば、白花ちゃんの所ってもう少し進めばお祭りがあったっけ？」

確か、麻帆良祭だったかな

……よし、その時になったら行って来よう。

「そうと決まれば、早めに有給取らないとねえ、ミストラル？有給貰いに行くわよ」

従者も一緒に誘わないとね

ああ、その時が楽しみだ……

第25話 機械乙女が見る夢は… (下) (後書き)

一応設定

巴御前の単一仕様能力『力』フオース

搭乗者に合った力を引き出し、様々な超常現象を発生させることが出来る。(様はメダフオース)

第26話 戦前の日常（前書き）

バイトのことなどで遅くなりました。
申し訳ありません。

第26話 戦前の日常

夕日の砂浜…そこでは紅い髪のを追いかける少女の姿があった。

「あはははは〜待て〜ナギ〜」

「ハッハッハ〜捕まえてみやがれ〜」

少女ことエヴァは杖を振り、氷の矢を赤い髪の男、ナギに放ち、ナギはそれを雷の矢で相殺していく…

「さっさと当たれや！この鳥頭がー！！！！」

「しつけえんだよ！！吸血鬼！！」

氷と雷で辺りは焼け野原と氷柱が生えている程度の事だった
そんな感じで辺りを破壊しながら移動していったが、ナギの足元が突然抜けてネギとニンニクが入った落とし穴に嵌った。

「んな！？俺が掘った落とし穴だと！？」

「こんなこともあるのかと用意しておいたのだよ…さあ、小便は済ませたか？神様にお祈りは？穴の底でガタガタ震えて命乞いをする準備はOK？」

「あー、すまん。エヴァンジェリン俺が悪かっただから止めてくれないか…」

「だが断る。『おわる世界』！！」

「アッー！！」

落とし穴を中心にナギの氷像が出来上がり、ゴングが鳴り響いた。

『やりました！エヴァンジェリン選手の終わる世界が決まったー！

！これにより第1回積年の恨みを晴らそう杯の王者になったのは：
：エヴァンジェリン・AK・マグダウエル選手に決まりました！
！
』

ワー！！

実況の勝利宣言でギャラリーはここぞとばかりに騒ぎ出した。

「そこまでだ！！」

しかし、フードをかぶった人物が乱入してきた。

「なんだ…貴様は、こっちは勝利の余韻に浸っているというのに無
粋な奴だな」

「ふふふ、ナギごときに勝ったからと言って良い気になるなよ…奴
は四天王の中で最弱の存在よ」

「貴様…何者だ？」

「私の名はネギ・スプリングフィールド、」

「さあ行くぞ！ネギ！！」

「さあこいエヴァンジェリン実は私は一回刺されただけで死ぬぞ！
！」

こうして恨みを晴らそう杯最後の戦いが始まる…

ご愛読ありがとうございました

・
・
・

「ぶっはあー！！」

……ひどい夢を見た

目が覚めて最初に思ったことはそれだった。

なんだあの打ち切りマンガみたいな展開は…確か昨日やっていたアニメの内容みたいだな。確か、ソードマスターポテト…いやトマトだったか？微妙に配役を変えてあったけど…：…だけど『積年の恨みを晴らそう杯』ってなんだよオイ…ああ、もう考え出したらきりがない…

一体何時だ？

…午前3時か

微妙な時間に起きてしまったな…

寝直すか…

そして、再び布団をかぶって寝ようとする则携帯が鳴った

誰だ？こんな時間に…

ピッ！『おお、エヴァ夜遅くにすm「死ぬ」ふお！？』プツ…ツーツーツー

ったく、ふざけた爺だな。今日も学校なんだからこんな時間に電話なんかするなよボケが…

そして数十秒後に再び携帯が鳴り始めた。

「要件言っさささと終わらせろ爺」
『ネギ君と闘ってくれんか』

ネギと？ああ、英雄の息子に私を倒したという実践と実戦の経験を積ませようという魂胆か

「一つ聞いておく：別に血を吸い尽くしてもいいんだよね？」

『ふお！？嫌、さすがにそこまでは…』

まあ、そこまでするつもりはないが、

「なら、こちらの要求を飲んでもらうぞ」

『どんなものかの？』

「なに、簡単なことだ。私を卒業後、自由にしてくれればそれでいい。ああ、今のクラスはきちんと過ごすから安心しろ」

そのまま就職という手もあるな……それとも、進学してみるというのもいいかな…

いや、また旅に出るというのも…

『ぬう・・・わかった。登校地獄ももう無いしそれくらいならいいじゃろ』

「交渉成立だな。それじゃあ、桜通りの吸血鬼の噂に乗じて事件を起こすから噂の方を頼むぞ」

そして通話を切り、ベッドに寝転がりネギとの対決のことを考える。

あいつ自身も強く、並の相手なら負けはしないだろうな……だが、あいつの全力は見たことが無い。ちょうど戦ってみたかったし、いいタイミングで連絡してくれたなあ爺。

とりあえず、朝になったら連絡を入れておくか。

・
・
・

教室

「3年！A組」

『ネギ先生——————っ！！！！！』

「少しポリリュームを下げなさいあなたたちは…」

どうも、白花です。3年になり新学期早々テンションMAXのクラスに苦笑する今日この頃……
それにしても朝からエヴァはなんか上機嫌なんだよね。何かいいことあったか？と聞いてみるとネギと決闘をするらしい。その際には私も同行してくれとの事だ。

しかし、決闘で上機嫌とはエヴァって実はバトルマニアなのかねエ…

「それでは身体測定なのでしずな先生お願いしますね」

「はい、任せてくださいな。それじゃあ皆、体操着に着替えて保健室よ」

そして、保健室

…あまり育ってなかったorz

エヴァの方も盗み見てみたがやはり変わらないみたいだ。本人はどうでもよさそうな表情だったが…そこらへんは不老の身にしかわからない苦悩があるのだろう…

待っている間は柿崎やハルナたちが桜通りの吸血鬼の噂で盛り上がり、鳴滝姉妹のペツタンコ宣言、吸血鬼は吸血生物疑惑、いいんちよの体重を量っているときに桜子が体重計を押して若干重くしたりと大騒ぎだった。

ちなみに千雨は若干育っていた。どこが？言わせんな妬ましい

「先生――！大変や！まき絵が、まき絵が」

「まき絵がどうしたの！？」

廊下から亜子が保健室の方へやってきてクラスのみんなは下着姿のまま廊下に出ていた。

こいつら恥じらう気持ち持っていないんじゃないか？と思う今日この頃…

その後、まき絵を保健室のベッドに寝かせてネギ教諭がジト目でエヴァの方を見ていた。

エヴァはというと苦笑を浮かべていた。

どうやら二人は念話で会話しているみたいだったので聞いてみると…

『無関係な人を巻き込まないでくださいよエヴァンジェリンさん』

『すまん、爺が桜通りの吸血鬼に偶然会い、戦闘をしたという事にしなければいけないらしい。そのためにこういう演出をしないといけないみたいなんだ。ああ、佐々木は少し吸っただけで眷属にはしていないから安心しろ』

『…お互い面倒な思惑に巻き込まれましたね』

『まったくだな』

『はあ…』

もうバレてらあ…

しかし、学園の方もネギを英雄にしたいがために最強の魔法使いに挑ませるのかい…

『とりあえず今夜桜通りに来た人を襲うからその時に勝負だ』
『最強の魔法使いにどこまで行けるかわかりませんが、全力で行かせていただきます』

ネギの方もやる気満々か：

これは久しぶりに楽しめる戦いになりそうな予感だな。

そう言えば明日菜とかはどうするんだろ。参戦するのかな？
しかし、最近はある子も桜通りのあたりを警備してたから来るかな…

第26話 戦前の日常（後書き）

今回は短めです。

次回の戦いには白花以外の乱入者もいますのでお楽しみを：

第27話 真夜中の闘争

桜通り

どうも最近影が薄い気がする秋葉原白花です。

現在私と茶々丸は桜通りの周辺に人払いと近くにいた生徒の思考誘導をしていた。

桜が咲き乱れる通り道：

昼間は生徒たちでにぎわうこの通りも今は人一人いない道であったがそこに生徒の一人である宮崎のどかがいた。

「こわくない♪こわくないです♪こわくないっしたらこわくない♪」

恐怖心を紛らわせようと何やら変な歌を歌っているようだ。

桜通りの吸血鬼の噂を聞き怯えているようだ。

「っひ」

ビュウっと風が当たり、何か視線のようなものを感じたのか辺りを見回し、街頭の上に立つマントを羽織り、帽子で顔が見えないが人がいた。

「28番宮崎のどか。悪いがその血を分けてもらおうよ」

とりあえずネギ先生と打ち合わせした通りならここで乱入し、学園長の思惑通りの展開を演出するらしい。

「待てやコラ！！僕の生徒に手を出すたぁいい度胸じゃね…じゃな

くて何してるんですか!!」

……なんか素の口調がアレだなネギ先生。893?

エヴァの方も少し驚いたように呆けていたが、すぐに持ち直してネギ先生が放った戒めの矢を防ぎ初対面のように装う

「この素様爺までの魔力：10歳にしてこの力：さすがは奴の息子ではあるな」

「あ、あなたはクラスのエヴァンジェリンさん!? なぜこんなことを」

「世の中には言い魔法使いと悪い魔法使いがいるのだよ。氷結武装解除!」

エヴァは魔法役を投擲して、武装解除をした結果ネギ先生は障壁を張り服の片腕まで氷砕け散ったのだが、気絶して近くに倒れていたのどこにまで武装解除の余波が行ってしまい、制服が砕け散って素っ裸にってしまった。

(おいいゝ!! エヴァンジェリンさん何やってんだよテメー!!)
(す、すまん! 回避させるのを忘れていた)

表情には出てはいないが、さすがのネギ先生も生徒を素っ裸にされては平常ではいられないみたいだ。

そのあとエヴァは逃走して明日菜と木乃香がやってきた。ネギはのどかのことを任せてエヴァを追いかけたみたいだ。

もうしばらくしたら、私と茶々丸が呼び出されるだろう。茶々丸は従者契約をしていないのか先にエヴァの所へ向かった。私は得物である竹刀の状態を確認したり、包帯を巻いたり、準備運動をしたりして待っていたら念話が来た。

（白花、出番だ。召喚するぞ）

（了解。いつでもいいよ）

「召喚！！！！秋葉原白花！！！」

エヴァの声がしたと同時に足元に魔法陣が展開され、エヴァの前方に召喚される。茶々丸も此方に飛んできて、私たちはネギ先生と相対した。

「悪いが、従者を召喚させてもらったよネギ先生。紹介しよう私のパートナー3－A出席番号11番絡繰茶々丸と出席番号1番秋葉原白化だ。二人とも私の従者だよ」

「どうも」

「よろしくねネギ先生」

しかし、ネギ先生は予想通りといった表情で笑っていた

「まさか、予想が当たるとは……勘も馬鹿にはできませんね」

「さて、どうするネギ先生？こちらは3人そちらは1人数ではこちらが有利だが？」

「……そうですね。僕だけなら……ですがね」

そう言ってネギ先生は懷から1枚のカードを取り出した。あれは……仮契約カード？！

「なら、僕も従者を召喚させていただきますよ……召喚！！！！ネギの従者アンナ・ユーリエウナ・ココロウエ！！！」

そして、ネギセンセイの前方に魔法陣が展開され、そこからアーニャが出現した。

「最強の魔法使いと闘えるなんて…これほどうれしい事はないわ。さあネギ準備はできてるでしょうね？」

「もちろん、それでは行きますよエヴァンジェリンさん!!」

ネギ先生もゲートボールハンマーを召喚して戦闘準備が整ったみたいだ。

「エヴァ、私はアーニャと闘っているよ」

「ああ、茶々丸は私と一緒に坊やの相手をする。白花負けるなよ」
「頑張ってください白花さん」

「あいよ、それじゃやりますか!」

そして、アーニャに向かって突進し、ネギとの距離を離す。

・
・
・
「っふ!」

地上に降りて、先制攻撃を仕掛ける白花、上段から放たれる縦切りを炎のように赤い手甲を付けた腕により阻まれる。

「それがアーティファクト？」

「まあね、イフリースの手甲って言って下手な手甲よりも頑丈よ」

—— それ以外の効果は秘密という事かい

そう思いながら、ドールズレギオンを出現させる。アーニャは接近戦を得意としそうなので遠距離の銃士と補助の衛生兵を中心に展開する。隊の構成は盾兵2、銃士3、衛生兵2という感じだ。

「いっぱい出したわね、ならこれはどうかしら？残像拳！」

高速で突っ込んでくるアーニヤを銃士は発砲して迎撃するが、打ち抜いたアーニヤは残像でさらに横移動を加えて計5人まで増えたみたいだった。ここまで高速で移動されるとどれが本物かはわからない。

―― なら…

「全部叩けばOK！！魔法の矢52矢！！！」

迫ってくる残像に惑わされながらも魔法の矢全ての残像に当てる。しかし、本物はいなかった。

背後に気配を感じ後ろに向かず盾兵で防御させてみてアーニヤが放ったアッパーを何とか防ぐことが出来た。

「頑丈な盾ね。普通の魔族ならあの一撃でつぶせるんだけど……」

「そんな一撃出すなっつゝの」

つまり、私は普通じゃないってことなのか？まあ普通じゃないけどさ…

「けど、周りのは潰せたみたいね」

周囲の人形を見ると、銃士の人形腹部に風穴が開いていた。

―― いつの間に…

「さっきのアッパーを放つ前に魔法の矢を打っただけよ。ただし、それなりに強化された一撃だから障壁ごとぶち抜いちゃったわ」

人形には一応障壁が展開されていて中級魔法（白き雷や奈落の焰）くらいなら防げるはずだが…それを打ち抜くほどの魔法の矢とは…おそらくアーティファクトの効果かな？

「そのアーティファクトの効果って炎系の魔法の強化？」

「少しだけ正解よ。まあこれには対炎屋やATK屋も結構つけているから」

後半の事はよくわからないが通常魔法で中級以上とは…

「ふう…なら、人形たちを出していても速攻でやられるってな感じか」

「どうだかね。その盾を持っているのは別としてほかなら一撃で仕留める自信はあるわよ」

そしてすべての人形を戻して、竹刀を再び構えた。

何やらアーニヤが竹刀をまじまじと見ているが…どうしたのだろう

「その竹刀結構大事に扱っているのね」

「もう小学生くらいから使っているからね。結構愛着がある品だよ」

「そうよね。大好き屋が付くくらいなもの」

よくわからないが、使い込んでいることが向こうはこの竹刀を使いこんでいるという事がわかってるみたいだ。

「さて、白花あなたの剣の腕前、見せてもらおうわよ」

「見るどころか昇天しないように気を付けなよ…いくぞ」

拳を合わせ構えを取るアーニヤ、対して白花は腰のあたりに両手で

竹刀を持ち

そして拳と剣の応酬が始まる。

先に仕掛けたのはアーニヤの方だった。魔力を纏った拳が白花の顔面に迫るが、頭を横にそらし紙一重の所で避ける。続けて腹部に掌底を放つが掌底を放たれると同時に後ろに下がりギリギリのところ躲して腕が伸びきった状態で止まっているアーニヤの頭部に面を入れる、アーニヤは痛む凸を我慢しながら足払いをするが、白花はその場で飛び腹部に蹴りを放ち距離が空く。

「何その避け方…未来予知でもしているわけ？」

「なんとなくここに来るなあと思って避けているだけだけど？」

「ありえないわね…：…なら！」

アーニヤは後方へ飛び退き、拳に魔力を集中させる：

「これならどうかしら？獅子王波！！！」

白花は迫りくる魔力の放流を切り裂いた

「んな？！あれを斬るですって！！？」

「隙あり、堕ちろ天幕！花散る天幕！！！！」
ロサ・イクトウス

空中にいるアーニヤに向かって一閃

獅子王波が斬られるという予想外の事態を処理しきれなくて防御が遅れてしまった。

「ぐぐぐ、負けたあ…ああ、もう悔しい」

「アーニヤもなかなか強かったよ。また暇なときに戦ってみようや」

「その時は私の勝利を飾って見せるわよ。コノヤロー」

地面に大の字で倒れるアーニャを見下ろしながら微笑む。
そこへエヴァから撤退するといった念話が来た。向こうも終わったのかな？

「それじゃあ私は帰る」「ハイスラァー!!」「うお!?!」

その場から立ち去ろうとしたら、いきなり1mほどの何かが斬りかかってきた。

「俺は噂が気になり急ぎよ桜通りの周辺を警備していたら何やら喧嘩をしているような物音を聞きつけ服すら装備していない貧弱一般人たちが襲われネギとアウスナが犯人を追ったらしく」「はやくきてーはやくきてー」と泣き叫んでいるでメイン盾の到着を待ち望んでいるヌギ達のために俺はとんずらを使って普通なら付かない時」

「やっと着いたのか…遅い…」

「きたwwwメイン盾(笑) きたwww」

「もう終わっているわよ」

「……………」

一応言っておく…テンコは広域指導員で麻帆良の治安を守っているメイン盾なのである。

「んじゃ、アーニャ私たちは帰りましょ」

「そうね、それよりその竹刀強化してみない？」

「何? くぎでの打ち込むの?」

「いや、そのままで強化できる方法が……」

「Oi みうs ミス お前らせっかく駆けつけたのにその態度はあんもりでしょう!?! 他に何か言う事はないのか? ; ; ;」

納得いかないといった感じで突っかかってくるテンコだが：

「アーニヤ、今の言葉聞こえた？」

「聞こえない、何か言ったの？私のログには何もないわね」

こうして魔法使いVS吸血鬼の第一幕は降りた。何故第一なんだって？だってそうしないとネタが：（ゲフンゲフン、なんかエヴァの方は明日菜の乱入で決着がつかなかったらしい。次に戦う時は大停電のときみたいだ。それでは次の戦いに向けて：ロボトルファイト
|!!!|

「たしかにハブるのは勝手だけどそれなりの扱い方があるでしょう；
」

テンコさんドンマイいつか出番があるよ

「チクシヨウお前らはバカだ：」

第27話 真夜中の闘争（後書き）

テンコさんごめんなさい

これは陰陽を見ていて思いついたネタでついやってしまいました。

最近、白花の竹刀をメイン装備にしようかなと思う今日この頃でした。

ネギとエヴァの戦いは次回書こうかと思っています。

第28話 それぞれの事後報告（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

第28話 それぞれの事後報告

白花 In エヴァ宅

昨夜の決闘の後に私たちはエヴァの家に泊まり互いの相手の事を話し合っていた。

エヴァの話によるとネギ先生は戒めの矢で茶々丸の動きを封じエヴァと一対一の状況を作り上げ、体術で対応したらしい。詠唱する暇も与えないほどの猛攻だったが、無詠唱や合気道を駆使して闘っていたらしく、関節を決めた時に明日菜が乱入して飛び蹴りを喰らい、ヘッドスライディングする羽目に……と茶々丸の動画はここまでだった。

「まったく…なんなんだ！神楽坂明日菜のあれは?!」

「ああ、落ち着いてくださいマスター。それにしても見事なヘッドスライディングでした」

「うっさい黙れ、このボケロボがこの、巻いてやる」

「ああ、マスターそんなに巻かれると」

テンプレ乙

「やっぱりこれって魔法無力化体質?」

「はああ、だろうな。しかし、なぜ神楽坂はこんな能力を?」

「まあ明日菜の戸籍とか学園長やらタカミチやらが関わっている時点で怪しいし、何よりネギと同室にしたという事は巻き込む気満々だったんだろうな。ただし、学園長の誤算といえばネギがしっかりしていたという事くらいかな」

「ケケケ、完璧クロジャネエカ」

「そうだな……裏で無力化体質で有名といえば黄昏の姫御子だが…

…まさかな」

「そうなる」と明日菜さんはオスティアの姫様になりますね。それよりマスターそろそろ出ないと遅刻しますよ」

時計の方を見てみるとすでに8時を過ぎていた。

「それじゃあ行こうか」

「そだね。んじゃ、この話はまた後で」

「オウ、イッテラッシャイ」

「行ってきますね姉さん。では、行きましょう。白花さん、マスター」

ちなみにテンコにはぬらりひょんに頼まれたと言っておき引いてもらった。

・
・
・

明日菜 in 寮の部屋

まったく：昨夜ネギが桜通りの吸血鬼と闘っていて、そこへ乱入した見たらクラスのエヴァンジェリンさんと茶々丸さんだった。そのあとはネギとエヴァちゃんが黙っちゃって一言言葉を交わした後に帰っちゃったんだよね。でもそのあとネギに言われた言葉が：

「空気読んでください…」

だったのよね。まったく失礼しちゃうわ
んで：事情を聞いたらエヴァちゃんってなんかすごい魔法使いでネギと闘うように誰かに依頼されたらしいのよ

「結局のところエヴァちゃんって頼まれて動いてるわけでしょ？それなら依頼した人をぶっ倒せば良いんじゃない？」

我ながら名案だ。映画や漫画でもよく黒幕を倒せばOKみたいな感じでしょ。

「残念ながら依頼人は学園長あたりでしょうから無理でしょうね」
「mjd？」

あの学園長が！？そんなことを…うん、なんかしそうな感じがするわね

「エヴァンジェリンさんとの関係は向こうには知られていないので今回の件は『実戦形式の訓練』ということになります。向こうはエヴァンジェリンさんを倒したという功績を付けたいみたいです」
「何ですよ？」

こんな子供（見た目は）に決闘をさせて何しようとしているのよ学園長は…

「色々あるんですよ…ところでアスナさんはどうするんですか？」
「そりゃネギのこと心配だしネギの味方として付こうと思うんだけど…」

「それが高畑先生と敵対することになっててもですか？」

！？

「どういう事！？」

「文字通りです。向こうが望まない展開になる…例えば僕が負けそうになって何らかの手を使い乱入した場合、ぼくはタカミチをぶっ

倒しますよ」

さらっとそんな事を言い放つネギ。なんだろう、高畑先生に何か恨みでもあるのかな？

「でも、助けに来てくれるんじゃない？」

「これを仕組んだのは学園側なんですよ。そんな助けいりません。むしろ邪魔です」

「邪魔って……」

「まあそうなったとしてもタカミチを合法的にボコせるからいいんだけどね。ウケケケケケケケ」

なんぞっ！？ウケケケってどんな笑い方よ……

こうして私は同居人の知りたくもない一面を知ってしまった丸

「んで、結局のところエヴァちゃんたちの対抗策ってあるの？」

「アニキ使いたくない手ですが従者の方を襲撃するという手もあるんでさすが……」

「却下」

「ですよー」

大将を打つ前に周りから潰すのね。確かに有効な手段だけど

「でもネギの命も危ないんじゃない？　だったら少しくらいは……」

「だからといって生徒を傷つけるようなまねはしたくないですよ。

それに茶々丸さんや白花さんの一日の行動を観察してみれば明日菜さんの考えも変わると思いますよ？」

「どういう意味よ？」

「カモ君。何か起きた時のために今度の休日明日菜さんと一緒にい

てくれない？」

「わかりやした。それよりそろそろ時間ですぜ兄貴」

そう言ってカモミールが時計を指す。

「それじゃあこの話はまた今度で：行ってきます」

「行ってらっしゃい。また教室でね」

そう言ってネギはカバンを持って学校の方へ向かって行った。

「ネギってなんか変わっているわね」

「今さらですぜ姉さん」

普通にオコジョと会話している私も大差ないかな？

それにしてもなんで学園長はネギを戦わせようとしているんだろ？
高畑先生もそれを黙認しているのかしら：大好きな高畑先生でもさすがに見逃せないわ。あれ？そう言えば私ってなんで高畑先生のこ
と好きなんだっけ？

えっと、私は渋いおじさんが好きだ。何故？一緒にいると暖かいよ
うな気持になる。

だけど、そう思い始めたのはいつだっけ？タカミチと生活している
とき？いや、もっと前だった気がする。

いったい何時の事なのかしら：

わからない：多分大切なことなんだけど

「姉さん？どうしやしたぼうっとして」

カモミールの言葉に我に返る

言いようのない不安を残しつつも何でもないと返しておく：

・

・
・
タカミチ in 学園長室

どうやら明日菜ちゃんはネギ君と協力してエヴァに対抗するようになったみたいだ。これでネギ君の戦力も上がるだろう。

「どうやら、こちらの思惑通りに進んでいるみたいじゃの」

「ええ、仮契約こそまだですが協力するみたいです。この調子で木乃香ちゃんたちと仮契約していけばいいんですがね」

「そうじゃの、契約してくれるなら木乃香も安泰じゃい」

そう、そして生まれるのだ、新たな英雄が：これはその第一歩だ。明日菜ちゃんも平和に生きるために喜んで協力してくれるだろうな。

「もしもの時のために頼んだぞい高畑君」

「任せてください学園長。未来の英雄のために頑張りましょう」

第28話 それぞれの事後報告（後書き）

次回は茶々丸尾行などを書こうかと思っています。

ちなみにうちのタカミチはネギを英雄に仕立て上げようと無駄な努力をしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3202v/>

魔法先生ネギま 魔法と転生だ！メダロット

2011年10月11日07時00分発行